(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第65集

荒砥洗橋遺跡
荒砥宮西遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本　文　編》

1989

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
98-
NO.5033
平成10年5月13日
01-353
408
1(7)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第85集

荒砥洗橋遺跡
荒砥宮西遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本　文　編》

1 9 8 9

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

赤城山麓南面地域一帯は古代東国の王者であった上毛野氏の根拠地であり、国史跡前二子、中二子、後二子の3前方後円墳はその存在を物語るモニュメントであります。この地域に君臨した覇者を経済的に支えたのが赤城山南麓地帯の開析谷に水田を形成し台地上に集落を営んだ農民でありました。

今日その伝統を受け継ぐ農民が農業基盤整備事業として土地改良をすることは、古墳時代の先人が営々と築きあげて以来現在まで守り伝えられてきた財産をより効率的に運営しようとする英断といえましょう。この行為により地下に永年の間埋没していた先人の遺産が消滅することとなるので、埋蔵文化財の記録保存が行われることとなり、群馬県埋蔵文化財調査事業団により昭和55年～56年にかけて発掘調査が行われました。

調査の結果墨書土器、烙印の検出などがあり、あづまエビスと蔑まされた地域に豊かな文字文化が存在し確実な生活があったことが判明しました。また、自然との調和を図りながら開発を進めてきた様子も確かめられました。

調査の実施に当たりまして群馬県農政部、城南土地改良区を初めとする関係各位のご尽力、ご指導に感謝すると共に直接調査に当たった関係者の労をねぎらいます。

終わりに本報告によりまして、県民の皆様に、より謎多き古代東国社会の究明が多少なりとも前進し、生涯学習の場で、郷土学習資料として役立てられることがありますれば幸いであります。

平成元年1月25日

群馬県教育委員会

教育長　千木良　覚

例　　言

1　本書は1980（昭和55）年度の県営圃場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書である。

2　遺跡の所在地は下記の通りである。

荒砥洗橋遺跡……前橋市二之宮町字洗橋1436番地他

荒砥宮西遺跡……前橋市二之宮町字中里1145～1147番地

3　発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県農政部及び群馬県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当者及び調査期間は下記の通りである。

荒砥洗橋遺跡　担当者　細野雅男（群馬県埋蔵文化財調査事業団　第３課長）

期　間　1981（昭和56）年１月19日～３月７日

荒砥宮西遺跡　担当者　能登　健（群馬県教育委員会文化財保護課）

西田健彦（群馬県教育委員会文化財保護課）

期　間　1980（昭和55）年12月17日～1981（昭和56）年２月25日

4　調査時の事業団組織は下記の通りである。

管理・指導　小林起久治、沢井良之助、井上唯雄、近藤平志

事務担当　国定　均、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木統子

5　本書作成のための整理作業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託を受け、1988（昭和63）年４月１日から1989（平成元）年３月31日まで実施した。

6　本書作成時の事業団組織及び担当者は以下の通りである。

管理・指導　白石保三郎、松本浩一、田口紀雄、上原啓巳、住谷　進、巾　隆之

事務担当　調査時の職員の他に、笠原秀樹、小林昌嗣、吉田有光、今井もと子、松井美智子、小野沢春美

編　　集　徳江秀夫が担当し、鹿沼敏子（事業団嘱託員）がこれを補佐した。

文章執筆　Ⅰ－１を細野雅男（群馬県教育委員会社会教育課）が分担執筆した。その他は徳江による。

図版作成　鹿沼敏子、山崎由紀枝、桑原恵美子、宮沢房子、久保田菊江、西沢智代（群馬県埋蔵文化財調査事業団）　株式会社　測研

遺構写真　細野雅男、能登　健、西田健彦、たつみ写真スタジオ

遺物写真　佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団　技師）

遺物の　関　邦一（　〃　〃　）

科学的処理　北爪健二（　〃　嘱託員）

小村浩一（　〃　）

7　遺物の石材同定は飯島静雄氏（群馬地質研究会）の手をわずらわせた。

8　土器の墨書の判読については平川　南氏（国立歴史民族博物館）にお願いした。

9　荒砥洗橋遺跡９号住居出土の烙印のＸ線解析については小林重夫氏（群馬県工業試験場）・永嶋正春氏（国立歴史民族博物館）にお願いした。また、両氏からは構造等についての御助言を得た。

10　出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11　本書の作成にあたり、下記の諸氏、機関から御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表します。
内田憲治、斎藤孝正、鹿田雄三、西田健彦、能登　健、前沢和之、前原　豊、城南土地改良区
（50音順、　敬称略）

12　調査にあたって、地元の方々には作業に従事していただくとともに多くの便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

凡　　例

1　調査においては、圃場整備事業の工事用基準杭を準用し、調査範囲内に5×5mのグリッドを設定した。東西方向をアルファベッドで、南北方向をアラビア数字で呼称した。各グリッドの名称は、荒砥洗橋遺跡ではその北西隅を、荒砥宮西遺跡では南西隅をあてた。また、荒砥洗橋遺跡の付図の中に国家座標上の位置を記載した。

2　本書における遺構番号は原則として調査中に付されたものをそのまま使用したため欠番が生じている。

3　遺構の挿図中で使用した方位は座標北である。

4　遺構及び遺物の挿図の縮尺率は各図中に表示した。他と縮尺の異なるものについては、随時その縮尺を付しておいた。

5　住居の説明の中で記した方位は、住居の竈の付設された壁に直行する軸線の方向を採用した。

6　挿図中のスクリントーンは次のことを表す。

灰釉陶器　　黒色処理

その他のスクリントーンは随時その使用箇所に説明を付した。

7　1図は、建設省国土地理院発行の20万分の1地形図（長野・宇都宮）、5図は同発行の2万5千分の1の地形図（大胡）を使用した。6・148図は前橋市発行の2千5百分の1現形図（No57・58・65・66）を使用した。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
表 目 次
写真目次
I　発掘調査と遺跡の概要
1　調査に至る経緯 …… 3
2　遺跡の位置と地形 …… 4
3　周辺の遺跡 …… 6
II　荒砥洗橋遺跡の調査
1　調査の方法 …… 11
2　遺跡の基本層序 …… 11
3　調査された遺構 …… 12
(1)　竪穴住居 …… 12
(2)　掘立柱建物 ……100
(3)　柱穴列 ……105
(4)　井　　戸 ……107
(5)　浅間B水田 ……109
(6)　土　　坑 ……110
(7)　溝 ……114
(8)　遺構外の出土遺物 ……118
III　荒砥宮西遺跡の調査
1　調査の方法 ……123
2　遺跡の基本層序 ……123
3　調査された遺構 ……124
(1)　竪穴住居 ……124
(2)　井　　戸 ……144
(3)　土　　坑 ……144
(4)　溝 ……146
(5)　遺構外の出土遺物 ……148
IV　成果と問題点
1　出土土器について ……149
2　荒砥洗橋遺跡の集落変遷 ……162
3　荒砥洗橋遺跡出土の文字資料の様相 ……165
引用及び参考文献 ……170

挿 図 目 次

1図 荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡の位置…… 3
2図 遺跡周辺の地形区分…… 5
3図 古墳時代後期の遺跡分布…… 7
4図 奈良・平安時代の遺跡分布…… 7
5図 周辺の遺跡分布…… 10
6図 荒砥洗橋遺跡の発掘調査範囲…… 11
7図 遺跡の基本層序…… 12
8図 1号住居とその出土遺物…… 13
9図 2号住居とその出土遺物…… 14
10図 3号住居…… 14
11図 5号住居とその出土遺物…… 15
12図 4号住居出土遺物…… 16
13図 4号住居…… 17
14図 6号住居とその出土遺物…… 18
15図 7号住居とその出土遺物…… 19
16図 8号住居とその出土遺物…… 19
17図 9号住居…… 20
18図 9号住居出土遺物…… 21
19図 10号住居とその出土遺物…… 22
20図 11号住居とその出土遺物…… 23
21図 12号住居とその出土遺物…… 24
22図 13号住居…… 24
23図 13号住居出土遺物…… 25
24図 14号住居とその出土遺物…… 25
25図 15号住居とその出土遺物…… 26
26図 16号住居とその出土遺物…… 27
27図 17号住居とその出土遺物…… 28
28図 18号住居とその出土遺物…… 29
29図 19号住居とその出土遺物…… 30
30図 20号住居とその出土遺物…… 31
31図 21号住居…… 31
32図 21号住居出土遺物…… 32
33図 22号住居とその出土遺物…… 33
34図 23号住居…… 34
35図 24号住居…… 34
36図 24号住居出土遺物…… 35
37図 25号住居とその出土遺物…… 36
38図 26号住居とその出土遺物…… 37
39図 27号住居とその出土遺物…… 38
40図 28号住居とその出土遺物…… 39
41図 29号住居とその出土遺物…… 39
42図 30号住居とその出土遺物…… 40
43図 31号住居とその出土遺物…… 40
44図 32号住居とその出土遺物…… 41
45図 33号住居…… 42
46図 34号住居とその出土遺物…… 42
47図 35号住居…… 43
48図 35号住居出土遺物…… 44
49図 36号住居出土遺物…… 44
50図 36号住居…… 45
51図 37号住居とその出土遺物…… 46
52図 38号住居とその出土遺物…… 47
53図 39号住居とその出土遺物…… 48
54図 39号住居出土遺物…… 49
55図 40号住居とその出土遺物…… 49
56図 41号住居出土遺物…… 50
57図 41号住居…… 51
58図 42号住居…… 52
59図 42号住居出土遺物…… 53
60図 43号住居出土遺物…… 53
61図 43号住居…… 54
62図 44号住居とその出土遺物…… 55
63図 46号住居とその出土遺物…… 56
64図 47号住居とその出土遺物…… 57
65図 48号住居とその出土遺物…… 58
66図 49号住居とその出土遺物…… 58
67図 50号住居とその出土遺物…… 59
68図 51号住居とその出土遺物…… 60
69図 52号住居とその出土遺物…… 61
70図 57号住居…… 61
71図 53号住居とその出土遺物…… 62
72図 55号住居とその出土遺物…… 63
73図 56号住居とその出土遺物…… 64
74図 58号住居とその出土遺物…… 65
75図 59号住居とその出土遺物…… 65
76図 60・61号住居と61号住居出土遺物…… 66
77図 62号住居とその出土遺物…… 67
78図 63号住居とその出土遺物…… 68
79図 64号住居とその出土遺物…… 69
80図 65号住居…… 70
81図 65号住居出土遺物…… 71
82図 66号住居とその出土遺物…… 72
83図 67号住居とその出土遺物…… 73
84図 68号住居…… 74
85図 68号住居出土遺物…… 75
86図 69号住居とその出土遺物…… 76
87図 70号住居…… 77
88図 71号住居…… 77
89図 70・71号住居出土遺物…… 78
90図 72号住居とその出土遺物…… 78
91図 73号住居とその出土遺物…… 79
92図 73号住居出土遺物…… 80
93図 74号住居出土遺物…… 80
94図 74号住居出土遺物…… 81
95図 74号住居…… 82
96図 75号住居…… 83
97図 75号住居出土遺物…… 84
98図 76号住居とその出土遺物…… 85

99図　77号住居……85
100図　77号住居出土遺物……86
101図　78号住居……86
102図　78号住居出土遺物……87
103図　79号住居……87
104図　80号住居……87
105図　81号住居とその出土遺物……88
106図　82号住居とその出土遺物……89
107図　83号住居……90
108図　83号住居出土遺物……91
109図　84号住居とその出土遺物……92
110図　85号住居……93
111図　85号住居出土遺物……94
112図　86号住居とその出土遺物……94
113図　87号住居……95
114図　88号住居……95
115図　87・88号住居出土遺物……96
116図　93号住居とその出土遺物……96
117図　90号住居とその出土遺物……97
118図　92号住居とその出土遺物……97
119図　91号住居……98
120図　91号住居出土遺物……99
121図　1号掘立柱建物とその出土遺物……100
122図　2号掘立柱建物……101
123図　3号掘立柱建物とその出土遺物……102
124図　4号掘立柱建物とその出土遺物……103
125図　5号掘立柱建物……104
126図　1号柱穴列……105
127図　2号柱穴列……106
128図　3号柱穴列……106
129図　4号柱穴列……106
130図　5号柱穴列……106
131図　1号井戸……107
132図　2号井戸……108
133図　3号井戸……108
134図　1～3号井戸出土遺物……108
135図　基本層序……109
136図　周辺の浅間B埋没水田……109
137図　1～6号土坑……111
138図　7～11号土坑……112
139図　12～17号土坑……113
140図　18号土坑……114
141図　3・8・14号土坑出土遺物……114
142図　1・5号溝出土遺物……115
143図　1・2号溝……116
144図　3～5号溝……117
145図　遺構外の出土遺物……118
146図　荒砥洗橋遺跡の遺構……119・120
147図　遺跡の基本層序……123
148図　荒砥宮西遺跡の発掘調査範囲……123
149図　荒砥宮西遺跡の遺構……124
150図　1号住居とその出土遺物……125
151図　2号住居出土遺物……125
152図　2号住居とその出土遺物……126
153図　3・4号住居と3号住居出土遺物……127
154図　5号住居とその出土遺物……128
155図　5号住居出土遺物……129
156図　6号住居……129
157図　7号住居……129
158図　7号住居出土遺物……130
159図　9号住居……130
160図　9号住居出土遺物……131
161図　9号住居出土遺物……132
162図　10・23号住居とその出土遺物……132
163図　8号住居とその出土遺物……133
164図　8号住居出土遺物……134
165図　11・24号住居と11号住居出土遺物……134
166図　14号住居とその出土遺物……135
167図　16号住居とその出土遺物……135
168図　15号住居とその出土遺物……136
169図　15号住居出土遺物……137
170図　12号住居とその出土遺物……138
171図　13号住居とその出土遺物……139
172図　17号住居とその出土遺物……140
173図　18号住居とその出土遺物……141
174図　19号住居とその出土遺物……141
175図　20号住居とその出土遺物……142
176図　21号住居とその出土遺物……143
177図　22号住居とその出土遺物……143
178図　1号井戸……144
179図　1号土坑……144
180図　2～10号土坑……145
181図　1・2号土坑出土遺物……145
182図　1号溝……146
183図　2号溝……146
184図　3号溝……147
185図　4号溝……147
186図　1・2・4号溝出土遺物……147
187図　遺構外の出土遺物……148
188図　出土土器の変遷（1）……150
189図　出土土器の変遷（2）……151
190図　出土土器の変遷（3）……152
191図　出土土器の変遷（4）……153
192図　出土土器の変遷（5）……154
193図　出土土器の変遷（6）……154
194図　出土土器の変遷（7）……157
195図　出土土器の変遷（8）……159
196図　出土土器の変遷（9）……160
197図　居住域の変換（1）……162
198図　居住域の変換（2）……163
199図　文字資料出土の周辺遺跡……165
200図　荒砥洗橋遺跡出土の文字資料……167

表　目　次

1表　周辺遺跡の概要……8
2表　洗橋遺跡土坑一覧……110
3表　宮西遺跡土坑一覧……144
4表　荒砥洗橋遺跡出土の墨書土器一覧……167
5表　焔印一覧……169

写　真　目　次

荒砥洗橋遺跡

PL　1－1　遺跡の遠景
PL　1－2　遺跡の調査状況
PL　1－3　土層の状況
PL　1－4　調査風景
PL　2－1　1号住居
PL　2－2　2号住居
PL　2－3　3号住居
PL　2－4　4号住居
PL　2－5　5～7号住居
PL　2－6　8号住居
PL　2－7　9号住居
PL　2－8　10号住居
PL　3－1　11号住居
PL　3－2　12号住居
PL　3－3　13号住居
PL　3－4　14号住居
PL　3－5　15号住居
PL　3－6　16号住居
PL　3－7　17・18号住居
PL　3－8　18号住居竈
PL　4－1　19号住居
PL　4－2　20号住居
PL　4－3　21号住居
PL　4－4　21号住居遺物出土状況（5・7～11）
PL　4－5　22号住居
PL　4－6　24号住居
PL　4－7　23・81号住居
PL　4－8　25号住居
PL　5－1　25～28号住居
PL　5－2　26号住居竈
PL　5－3　27号住居竈
PL　5－4　29号住居
PL　5－5　30号住居
PL　6－1　31～37号住居
PL　6－2　31号住居
PL　6－3　32号住居
PL　6－4　33号住居
PL　6－5　34号住居
PL　7－1　35号住居
PL　7－2　36号住居
PL　7－3　38号住居
PL　7－4　38号住居竈
PL　7－5　39号住居
PL　7－6　39号住居竈
PL　7－7　39号住居遺物出土状況（2・16）
PL　7－8　39号住居遺物出土状況（1・3・15）
PL　8－1　40号住居
PL　8－2　40号住居竈
PL　8－3　41号住居
PL　8－4　41号住居竈
PL　8－5　41号住居遺物出土状況（1・3・4・10）
PL　8－6　42号住居
PL　8－7　43号住居
PL　8－8　43号住居竈
PL　9－1　43～47・90号住居
PL　9－2　44号住居
PL　9－3　44号住居竈
PL　9－4　46号住居
PL　9－5　46号住居竈
PL　10－1　48号住居
PL　10－2　49号住居
PL　10－3　50号住居
PL　10－4　51号住居
PL　10－5　52号住居
PL　10－6　53号住居
PL　10－7　55号住居
PL　10－8　56・57号住居
PL　11－1　58・59号住居
PL　11－2　58号住居遺物出土状況（1）
PL　11－3　63・64号住居
PL　11－4　64号住居竈
PL　11－5　60・61号住居
PL　11－6　62号住居
PL　11－7　65号住居
PL　11－8　65号住居竈
PL　12－1　66号住居
PL　12－2　66号住居竈
PL　12－3　67号住居
PL　12－4　67号住居遺物出土状況（1・3）
PL　12－5　68号住居
PL　12－6　68号住居竈遺物出土状況（14・16～18）
PL　12－7　68号住居竈とその周辺

PL 12－8 68号住居竈とその周辺
PL 13－1 69号住居
PL 13－2 70・71号住居
PL 13－3 70号住居竈
PL 13－4 71号住居竈
PL 13－5 72号住居
PL 13－6 72号住居遺物出土状況（1～4）
PL 13－7 73号住居
PL 13－8 73号住居竈
PL 14－1 74号住居
PL 14－2 74号住居竈
PL 14－3 74号住居炭化材出土状況
PL 14－4 74号住居遺物出土状況（2）
PL 14－5 74号住居遺物出土状況（12）
PL 14－6 74号住居遺物出土状況（1）
PL 14－7 74号住居遺物出土状況（8・11）
PL 14－8 74号住居遺物出土状況（13）
PL 15－1 75・76号住居
PL 15－2 75号住居竈
PL 15－3 75号住居遺物出土状況
（8・9・12・13・15）
PL 15－4 75号住居遺物出土状況（11）
PL 15－5 75号住居堆況土状況
PL 15－6 78・79号住居
PL 15－7 77号住居
PL 15－8 77号住居竈
PL 16－1 82号住居
PL 16－2 82号住居竈
PL 16－3 83号住居
PL 16－4 83号住居竈
PL 16－5 83号住居遺物出土状況（3・7）
PL 16－6 83号住居遺物出土状況（2・5・6）
PL 16－7 84号住居
PL 16－8 84号住居遺物出土状況（3・13）
PL 17－1 86号住居
PL 17－2 86号住居遺物出土状況（2）
PL 17－3 85号住居
PL 17－4 85号住居竈
PL 17－5 85号住居遺物出土状況（13）
PL 17－6 87・88号住居
PL 17－7 87号住居遺物出土状況（1・3）
PL 17－8 88号住居竈
PL 18－1 91号住居
PL 18－2 91号住居遺物出土状況（10）
PL 18－3 92号住居
PL 18－4 92号住居炭化材出土状況
PL 18－5 92号住居床下土壙遺物出土状況（2）
PL 18－6 93号住居
PL 18－7 93号住居遺物出土状況（3・5）
PL 18－8 93号住居遺物出土状況（1）
PL 19－1 1号掘立柱建物
PL 19－2 2号掘立柱建物
PL 19－3 4号掘立柱建物、4号柱穴列
PL 19－4 5号掘立柱建物
PL 19－5 2・3号掘立柱建物、1号柱穴列
PL 19－6 2号柱穴列
PL 19－7 3・4号柱穴列
PL 19－8 5号柱穴列
PL 20－1 浅間B水田
PL 20－2 浅間B水田
PL 20－3 浅間B水田
PL 20－4 遺構外の出土遺物
PL 20－5 遺構外の出土遺物（1・3～5）
PL 21－1 1号井戸
PL 21－2 3号井戸、2号土壙
PL 21－3 2号井戸、8号土壙
PL 21－4 8号土壙遺物出土状況（1・2）
PL 21－5 1号土壙
PL 21－6 4号土壙
PL 21－7 13号土壙
PL 21－8 16号土壙
PL 22－1 3号溝とその周辺
PL 22－2 1号溝
PL 22－3 2号溝
PL 22－4 5号溝
PL 22－5 3号溝
PL 22－6 4号溝
PL 23 1・2・4号住居出土遺物
PL 24 5・6・8・9号住居出土遺物
PL 25 10・11・13・14・16～18号住居出土遺物
PL 26 19～22号住居出土遺物
PL 27 24～29号住居出土遺物
PL 28 30・32・34～37号住居出土遺物
PL 29 38～40号住居出土遺物
PL 30 41～44号住居出土遺物
PL 31 46～48・50～52・55・56号住居出土遺物
PL 32 58・59・61・64～66号住居出土遺物
PL 33 67～70号住居出土遺物
PL 34 72・73・75号住居出土遺物
PL 35 74・77号住居出土遺物
PL 36 78・81～84号住居出土遺物
PL 37 85～88・90・91号住居出土遺物
PL 38 92・93号住居、2・3号井戸、8・14号土壙出土遺物
PL 39 1号溝、遺構外の出土遺物
PL 40－1 墨書土器 9号住居2（外面）
PL 40－2 35号住居2（外面）
PL 40－3 10号住居1（内面）
PL 40－4 13号住居1（外面）
PL 40－5 35号住居2（内面）
PL 40－6 35号住居3（外面）
PL 40－7 35号住居3（内面）
PL 40－8 35号住居1（外面）
PL 40－9 9号住居1（外面）

ＰＬ　40－10　13号住居１（内面）
ＰＬ　40－11　35号住居４（外面）
ＰＬ　40－12　９号住居１（内面）
ＰＬ　41－１　墨書土器　92号住居２（外面）
ＰＬ　41－２　13号住居２（外面）
ＰＬ　41－３　13号住居２（内面）
ＰＬ　41－４　14号住居２（外面）
ＰＬ　41－５　14号住居２（内面）
ＰＬ　41－６　24号住居11（外面）
ＰＬ　41－７　37号住居１（外面）
ＰＬ　41－８　32号住居２（内面）
ＰＬ　41－９　６号住居１（外面）
ＰＬ　41－10　61号住居３（外面）
ＰＬ　41－11　42号住居４（内面）
ＰＬ　41－12　34号住居１（外面）
ＰＬ　41－13　47号住居１（外面）
ＰＬ　41－14　47号住居２（外面）
ＰＬ　41－15　19号住居３（外面）
ＰＬ　42　９号住居出土烙印Ｘ線解析写真

荒砥宮西遺跡

ＰＬ　43－１　１号住居
ＰＬ　43－２　２～４号住居
ＰＬ　43－３　２号住居竈
ＰＬ　43－４　３号住居竈
ＰＬ　43－５　５号住居
ＰＬ　43－６　５号住居竈
ＰＬ　43－７　６号住居、３号溝
ＰＬ　43－８　７号住居、３号溝
ＰＬ　44－１　調査の状況
ＰＬ　44－２　８号住居
ＰＬ　44－３　８号住居竈
ＰＬ　44－４　８号住居自然円礫出土状況
ＰＬ　44－５　９号住居
ＰＬ　44－６　９号住居竈
ＰＬ　44－７　９号住居竈
ＰＬ　45－１　10・23号住居
ＰＬ　45－２　10号住居竈
ＰＬ　45－３　11・24号住居
ＰＬ　45－４　11号住居竈
ＰＬ　45－５　13号住居
ＰＬ　45－６　13号住居遺物出土状況（６）
ＰＬ　45－７　12号住居
ＰＬ　45－８　14号住居
ＰＬ　46－１　15・16号住居
ＰＬ　46－２　15号住居竈
ＰＬ　46－３　16号住居竈
ＰＬ　46－４　17号住居
ＰＬ　46－５　17号住居竈
ＰＬ　47－１　19号住居
ＰＬ　47－２　19号住居
ＰＬ　47－３　20号住居竈
ＰＬ　47－４　19～21号住居とその周辺
ＰＬ　47－５　21号住居
ＰＬ　47－６　21号住居竈
ＰＬ　47－７　４号溝
ＰＬ　47－８　６号溝
ＰＬ　48　１～３号住居出土遺物
ＰＬ　49　５・７・８号住居出土遺物
ＰＬ　50　９・10号住居出土遺物
ＰＬ　51　11～13・15～17号住居出土遺物
ＰＬ　52　19～23号住居、４・６号溝、遺構外の出土遺物

荒砥洗橋遺跡

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1　調査に至る経緯

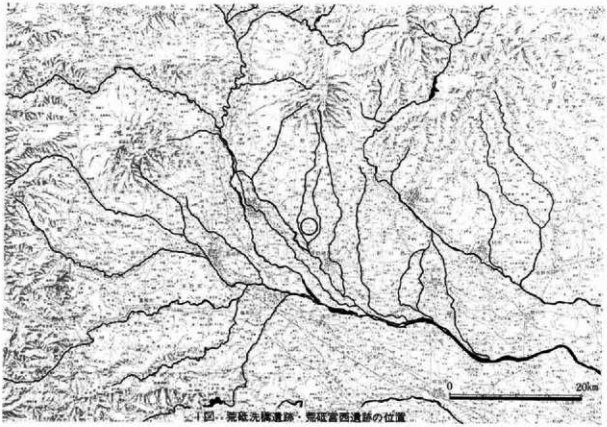
ここに報告する荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡は、群馬県前橋市の東部、旧荒砥村地域で実施された県営圃場整備事業の実施に伴って発掘調査が行われたものである。

本県における圃場整備事業は、1975（昭和50）年に策定された「群馬県新総合計画」に基づく農用地総合整備事業の一環である。この総合計画に伴い、前橋市荒砥南部地域においても県営圃場事業が、1981（昭和56）年まで実施された。総事業量は約749ヘクタールにもおよび県下でも有数の事業であった。

当該地域は米麦・養蚕あるいは畜産といった農村地域であったが、事業の施行により農業生産力の一段の向上とともに、一部開通をした国道17号線（上武道路）や工業団地、住宅団地等の建設により様相に大きな変革がもたらされることが予想される。

圃場整備事業対象地内には、国指定の荒砥三、二子古墳や女堀遺跡などの周知の遺跡が多数存在し、考古学的に著名であり重要な地域とされていた。1974（昭和49）年度から圃場整備事業が実施されるにあたり、県農政部と県教育委員会との間で、文化財保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地が圃場整備事業の対象除外区域に設定不可能であり、かつ、事業の実施により埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前の発掘調査を実施することとなった。これらの地域における埋蔵文化財の発掘調査は、原則として、新たに計画される道・水路や低・台地の切土部分を対象とすることが合意された。

1974（昭和49）年度以来、荒砥前原遺跡、荒砥二



1図　荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡の位置

之堰遺跡、女堀遺跡等多くの遺跡が調査され、多大な成果が得られている。更に分布調査による遺物の発見などから、当該地域は一大遺跡地帯であることが想定された。なお、発掘調査は県営の圃場整備事業であるため、県教育委員会が実施してきたが、1978（昭和53）年度以降は当埋蔵文化財調査事業団が調査を担当した。

1980（昭和55）年度における荒砥南部地区の圃場整備事業は、飯土井町、二之宮町、上増田町、今井町を中心に約92ヘクタールを対象とするものであった。当該年度の発掘調査は5月から9月まで飯土井町所在の荒砥二之堰遺跡で実施されたあと11月から2月まで二之宮町所在の荒砥島原・荒砥天之宮・荒砥洗橋・荒砥宮西の各遺跡で行われた。当初の調査対象面積は5遺跡を合わせて約15,000㎡であったが、事業者側の工事変更等により、対象面積が増大し、荒砥二之堰遺跡は約15,000㎡に、二之宮町所在の4遺跡の合計は34,000㎡となった。このような中、調査は困難を極めたが、事業団では調査体制の強化を図り、荒砥宮西遺跡については同年近接して位置する宮川遺跡の調査を実施していた県教育委員会の指導を仰ぐとともに調査について応援を受け、記録保存の徹底に努めた。

荒砥洗橋遺跡は荒砥地域を南流する宮川の右岸に位置し、微高地上に営まれた桑園地帯であった。分布調査の結果、一帯に遺物の散布が確認され、遺跡の存在が想定されていたが、圃場整備事業の実施に伴い切土による水田化が図られ、調査の必要性が生じたものである。荒砥宮西遺跡は宮川の左岸、台地上に位置し、道路の新設に伴って調査を実施したものである。

荒砥洗橋遺跡の調査は1981（昭和56年）1月19日から3月7日まで実施し、調査面積7,860㎡であった。荒砥宮西遺跡の調査は1980（昭和55）年12月17日から1981（昭和56）年2月25日まで実施し、調査面積は850㎡であった。

2　遺跡の位置と地形

荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡は、前橋市の南東部、二之宮町に位置し、ＪＲ両毛線の駒形駅から東に約2㎞の距離にある。

両遺跡は、群馬県の県央東部に位置する赤城山南麓端部に立地している。赤城山（最高峰、黒檜山、標高1,828m）は、第三紀世の複合成層火山でその山体は広大な裾野地形を形成している。南麓では標高500m前後に山地帯から丘陵性の台地への地形変換点がみられ、200m以下の地域は比高差の少ない低台地となっている。また、その末端は旧利根川の崖線で区切られその氾濫原であった沖積地に接している。

荒砥南部地域は、赤城山南麓の端部にあたり、山麓を流下する荒砥川、神沢川、桂川などの河川や台地端部からの湧水により樹枝状の開析がすすみ、台地と沖積地が複雑に入り組む地形が形成されている。

両遺跡周辺の基盤層は赤城山起源の泥流層である。地表面はローム台地の原形面、砂壌土からなる微高地のほかに沖積地に分類される。ローム台地は下部ローム以上をのせる古いもので板鼻黄色軽石層（ＹＰ）、板鼻褐色軽石層（ＢＰ）、八崎軽石層（ＨＰ）などのテフラが堆積している。ローム台地に付随するように存在する微高地は、赤城山の山体が降雨災害などによって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。飯土井町の飯土井二本松遺跡では微高地を形成する砂壌土層下に上部ロームの堆積と縄文時代早期の遺物包含層が確認されており、この砂壌土性の微高地が完新世になってから形成されたことが明らかになっている。

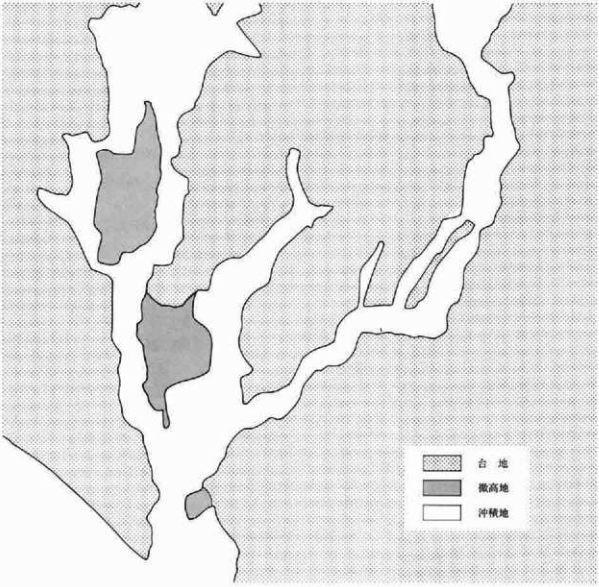
沖積地では浅間Ｂ、榛名山二ッ岳噴出火山灰（ＦＡ）、浅間Ｃなどのテフラの堆積が確認され、水田遺構調査の際の重要な指標となっている。

荒砥洗橋遺跡は宮川の右岸に位置する。宮川は利根川の第3次河川で流域長約5㎞を測る。遺跡の南

1.5kmで荒砥川に合流している。流域の沖積地や隣接する台地・微高地には鶴谷遺跡群や荒砥大日塚遺跡、柳久保遺跡群をはじめとした多くの遺跡が存在する。遺跡は二次堆積の砂壌土の堆積により形成された島状の微高地上にある。標高は84～86mを測り、南側に向かって緩やかに低くなる。今回の調査区域は微高地の中程、東側の沖積地に面する部分である。遺構は縁辺を中心に調査区域全体から検出された。竪穴住居は古墳時代後期から平安時代にかけてのものが3ブロックに集中して構築されていた。二之宮洗橋遺跡の調査で微高地の南端からほぼ同時期の竪穴住居が検出されており、微高地の全域に集落が展開していたことが想定できる。

遺跡の西側の沖積地は湧水の侵食により形成されたものと考えられ、中位に2箇所、小支谷がある。南側のそれからは二之宮洗橋遺跡、二之宮谷地遺跡で浅間B下から水田が検出されている。

荒砥宮西遺跡は宮川の左岸、洗橋遺跡に対峙する位置にある。南延するローム台地は幅が狭く、西側は宮川の流下する沖積地、東側は宮西遺跡の北東に谷頭を持つ沖積地に面している。調査区域は台地のほぼ中央にあたり、標高85m前後を測る。古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居24軒を検出した。



2図　遺跡周辺の地形区分

3　周辺の遺跡

荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡の位置する前橋市の東南部、荒砥地域には荒砥三、二子古墳をはじめとした周知の遺跡が多数存在し、考古学上、重要な地域とされていた。近年の圃場整備事業、上武道路を始めとした各種開発事業に伴って、各時代を通じて重要な遺構・遺物が検出され、新知見が得られるとともに、遺跡間相互の関係などの研究も進められつつある。ここでは本遺跡の遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境をまとめておきたい。

先土器時代　開発の進行とともに赤城山南麓における遺跡数も徐々に増加している。荒口町荒砥北三木堂遺跡ではソフトローム層から尖頭器製作址１ブロックが検出された。

縄文時代　縄文時代の遺跡は多数確認されているが多時期にわたり継続する遺跡は少ない。その立地はいずれの時期も沖積地や湧水池を臨む台地や微高地上である。草創期、早期の土器も多数が出土しているが荒砥上ノ坊遺跡を除き包含層からの出土である。前期、諸磯期と中期、加曽利E期の遺跡の検出例は顕著であるが中・小規模の集落構成である。

弥生時代　荒砥島原遺跡や荒砥前原遺跡、荒口前原遺跡で中期後半の住居が検出されている。いずれの遺跡も沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地しており、この時期には居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が出現していたと考えられる。

古墳時代　前期の集落は弥生時代後期の遺跡立地を引き継いでいるとおもわれ、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔をおいて集落が形成されていることが指摘されている。これらの集落は、台地縁辺に立地し、中小河川や沖積地の谷頭からの湧水に依拠した生産域を維持していたと思われる。二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡では浅間Cに埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡のG区、微高地上では浅間Cを鋤き込んだ畠が確認されている。

この時期の集落には近接して周溝墓が築造される場合が多く、普遍的といいえる状況である。堤東遺跡、中山A遺跡、東原B遺跡では前方後方形周溝墓が検出されている。このような集落の傾向に対し、この時期の土器は複雑な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器・樽式土器はこの時期まで残存し土師器と共伴する。

前期の集落のうちの多くは中・後期に継続する「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変化させながら継続する。それとともに新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や下触牛伏遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された溜井の掘削にみられる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡の方形区画遺構は５世紀後半から６世紀にかけての首長層の居宅と考えられるが、このような遺構の存在は古墳にみられる被葬者の多層性が居住施設にも現れたものと思われる。

上記のように、荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は、他地域に比して遜色がないが現在のところ前期古墳は知られていない。前橋市天神山古墳や伊勢崎市華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。後期になると前二子古墳に代表される前方後円墳が数基ずつ築造されるとともに小地域ごとに円墳の築造が認められる。６世紀の後半から７世紀の小古墳は群集化が進むとともに荒砥北三木堂遺跡や荒砥北原遺跡、荒砥下押切Ⅱ遺跡のように１～数基の散在した状態も認められるようになる。

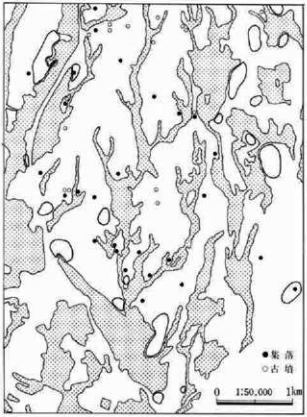
奈良・平安時代　古墳時代に出現した「第一次新開集落」は「伝統集落」化し、居住域は台地全体を有

効に利用するようになる。水田開発は更に進行したと思われる。1108（天仁元）年に降下した浅間Bで埋没した水田の検出状況からは荒砥地域の沖積地の大部分が12世紀の初頭には開発されていたことが看取できる。荒砥諏訪西遺跡では微高地上まで水田化している。

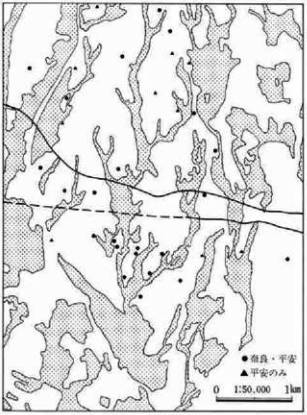
荒砥地域は、古代、勢多郡に属しており、群馬駅と佐位駅をつなぐ東山道駅路の通過ルートは今回調査した両遺跡に極めて近接していると推定されている。今井道上・道下遺跡では8世紀後半以前と推定できる東西112mの二重の溝による区画があり、内面に大型の掘立柱建物が検出されている。上西原遺跡では、8世紀末から9世紀末の間機能したと思われる55×45mの区画の内部に礎石を有する基壇建物が検出され、瓦、瓦塔、塑像、墨書土器などの遺物が出土しており、寺院としての性格が考えられている。両遺跡から東方向に0.7kmに位置する赤城神社は延喜式神名帳記載の大社である。

標高96m付近には女堀の遺構が残存する。女堀は12世紀の中葉、淵名荘の再開発を目的として開削されたとされる大農業用水である。

中世以降　中世の城郭としては大室城、元大室城、今井城、赤石城、新土塚城などがあげられる。また、荒砥北三木堂遺跡や北山遺跡、宮下遺跡で多数の墓壙が調査されている。また、近世の遺構としては二之宮宮東遺跡で屋敷や池が検出されたのをはじめとして多くの遺跡で井戸や溝などが確認されている。



3図　古墳時代後期の遺跡分布



4図　奈良・平安時代の遺跡分布

註

1　用語の使用については能登健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」「新里村の遺跡」新里村教育委員会1984の中でおこなわれている定義に従っている。

2　小島敦子「初期農耕集落の立地条件とその背景―地形復元を前提にした遺跡分布の分析―」「群馬県史研究24　群馬県史編さん委員会1986

3　「昭和62年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」群馬県埋蔵文化財調査事業団1987

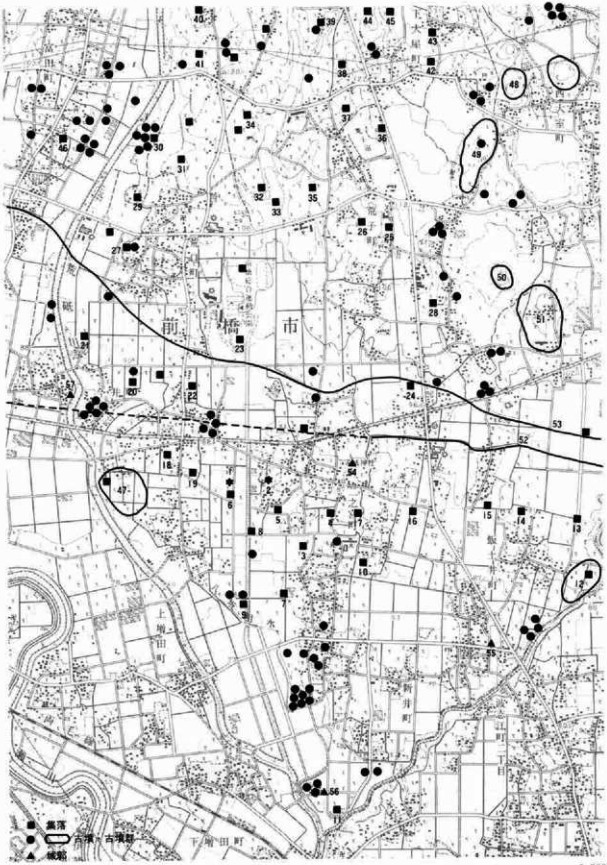
1表　周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	先土器	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生 中	弥生 後	古墳 前 住	古墳 前 墓	古墳 中 住	古墳 中 墓	古墳 後 住	古墳 後 墓	奈 住	平 住	中世	近世	その他の遺構
1	荒砥浅橋遺跡														○		○	○□		○	
2	荒砥宮西遺跡														○		○	○			
3	荒砥天之宮遺跡			●●●●					●				○		○		○	○□			溜井、溝
4	二之宮宮下西遺跡														○		○	○			縄文土坑、中近世墓坑・土坑・溝
5	二之宮千足遺跡			●								⊠		□		□	○	○□	○		中世墓坑
6	二之宮洗橋遺跡														○		○	○			
7	荒砥島原遺跡								○		○□		○		○		○	○□			
8	宮川遺跡								○		○	⊠?			○○		○	○□			
9	宮原遺跡										○					○					
10	荒砥青柳遺跡														○		○	○			
11	荒砥前原遺跡			●○●					○○		○										祭祀
12	荒砥二之堰遺跡			○○○							○□				○○						
13	飯土井二本松遺跡			●●●●							○						○	○			縄文陥穴、中近世溝・土坑
14	飯土井中央遺跡	●		●●											○				○	○	縄文陥穴、道路状遺構
15	飯土井上組遺跡										○		○					○			古墳時代溝
16	二之宮宮東遺跡			●														○□	○	○	縄文土坑、小鍛冶、B下畠
17	二之宮宮下東遺跡											⊠			○		○	○□			縄文陥穴、中世溝・土坑
18	今井道上道下遺跡	●		●●●●							○			○	○		○	○	○	○	小鍛冶、道路状遺跡、中・近世溝
19	二之宮谷地遺跡	●		●●											●	□	○	○□			溜井、特殊井戸、近世墓坑
20	荒砥北三木堂遺跡	●		●	○	○					○⊡				○○		○	○			中世墓坑
21	荒砥北原遺跡			⑦	○○●						□		○		○						縄文土坑、B上畠
22	荒砥大日堰遺跡									○					○		○	○□			
23	鶴ヶ谷道路群								○		○		○		○		○	○			
24	荒砥上ノ坊遺跡			○							○□		○		○		○	○			C下畠、B上畠
25	荒砥下押切Ⅰ・Ⅱ遺跡														○○		○	○			
26	荒砥中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡										○				○			○□			小鍛冶、BC下溝
27	荒口前原遺跡								○									○			
28	荒砥荒子遺跡												○		○		○	○□			居宅
29	荒砥宮田遺跡			○							○□		○		○○		○	○⊡	○	○	土坑、溝、墓坑
30	荒砥諏訪西遺跡										○		○		○			○□	○	○	土坑、溝、C下畠
31	荒砥諏訪遺跡										□										B下溝
32	柳久保道路群	●		●●							○		○		○○		○	○			縄文陥穴
33	柳久保水田遺跡																	□			
34	大久保遺跡														○		○	○			
35	頭無遺跡								○						○			○			
36	堤東遺跡										□							○			小鍛冶
37	川竜笛戸遺跡										⊡							○			
38	上西原遺跡																○	○			基壇建物
39	向原遺跡															○	○	○			
40	丸山遺跡										○⊡		○		○						居宅
41	北原遺跡										○⊡		○		○			○			
42	北田下遺跡												○					○			溝、土坑
43	中畑遺跡																	○			溝、土坑
44	村主遺跡										○				○		○	○			溝、土坑、井戸、江戸炭窯
45	中山B遺跡										○				○			○			縄文陥穴、溝、土坑、井戸
46	宮下遺跡			○					○		○			○	○○		○	○			中世墓坑、寺院
47	今井神社古墳群												○		○			○			
48	伊勢山古墳群														○						
49	阿久山古墳群														○						
50	丸山古墳群														○						
51	天神山古墳群														○						
52	東山道駅路																				
53	女堰																				
54	二之宮赤城神社																				
55	赤石城																		○		
56	新土塚城																		○		
57	今井城																		○		

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表わす。
●は遺物存在を表わす。
古墳の項、墓の□は方形周溝墓、⊡は円形周溝墓、○は古墳を表わす。
古墳の項、生の⊠は後閑C下の水田の存在を表わす。

遺　跡　の　概　要
本報告の遺跡 本報告の遺跡 古墳時代中期から平安時代に至る居住域である。 荒蛭天之宮遺跡の北側に位置する。同一台地上にあり一遺跡として掌握できる可能性が強い。 二之宮宮下西遺跡と西接する神横地では、浅間C軽石埋没水田以降浅間B軽石堆積以後までの7期の水田が検出された。 荒蛭洗堰遺跡の南側に位置する。旧河川の埋没土中から木製品・墨書土器が出土している。 宮川に接する微高地にある。弥生から古墳時代前期に集落の形成がはじまる。古墳後期に南側は古墳群になり、集落は北側に移る。 古墳時代前期以降平安時代まで居住域として継続する。 宮川右岸、台地上に展開する。古墳時代前期の居住域は後期になり墓域に変化する。 台地内部まで居住域が拡大している。 荒蛭川と神沢川の合流点の台地上にある。弥生時代の住居からは東関東や東海東部の土器の影響がみられる。 神沢川右岸に位置する。古墳後期の小規模な居住域はその後群集墳が形成され短期間で墓域化している。 古墳時代前期の住居は1軒で、奈良・平安時代に居住域として展開する。 古墳時代の住居は2軒である。 二之宮宮東遺跡と接する地点からは旧河川の流路が検出された。台地上は浅間B降下時には水田化されていた。 本遺跡の東側の神横地の北延上に位置する。FA降下以降7期の水田が検出された。 古墳時代中期が不明確であるが前期から平安時代まで継続して居住域であったと思われる。 古墳時代以降の居住域である。道路状遺構は平安、鎌倉、江戸の各時代のものが検出された。 古墳時代後期以降居住域が縮減する。水田は浅間B軽石下とB水田より下層でFA降下後の2枚を確認した。 古墳時代を中心とする居住域である。 荒蛭川左岸の台地上に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓が4基検出された。 宮川の沖積地を臨む台地上にある。3地点で調査が実施された。弥生時代後期以降居住域が継続か。 宮川の沖積地を臨む舌状台地上にある。弥生時代以降の居住域である。 古墳時代前期以降の居住域が縮閉する。奈良・平安時代に台地内部にも住居の占地は拡大する。 古墳は一基だけで存在している。 沖積地を臨む台地上にあり、古墳時代前期から平安時代の居住域である。 弥生時代中期の住居を検出した。 古墳時代の屋宅と考えられる方形区画遺構の規模は東西59m以上、南北43m以上を測る。柵列の巡る区画内には2軒の竪穴住居がある。 荒蛭川左岸の台地とそれに接する沖積地に展開する。居住域としては古墳時代前期以降平安時代に至るまで継続している。 微高地上に位置する。古墳時代前期以来の居住域の一部は後期になり墓域化する。微高地上でありながら平安時代に水田化された。 台地上の2地点から方形周溝墓群を検出した。 宮川の沖積地を臨む舌状台地上に展開する。 宮川の沖積地にあたる。 宮川左岸の台地上にあり古墳時代以降居住域が継続している。 古墳後期以降居住域となるか。 古墳時代前期に築造された3基の方形周溝墓のうち1基は全長25mの前方後方型を呈する。 平安時代の住居を検出している。北側の上西原遺跡と同一台地上にあり遺構の内容から同一遺跡の可能性が強い。 奈良時代の方形区画遺構とそのなかに基礎を有する建物遺構を検出した。布目瓦、瓦塔片、塑像などの遺物を出土した。 宮川の沖積地を臨む台地上に位置する。 荒蛭川左岸に位置する。屋宅と考えられる方形区画遺構は36×29mの規模で内部に古墳時代中期の竪穴住居6軒が築造されていた。 丸山遺跡に南接する。検出された住居は古墳時代の各期のものが主体である。 西側に沖積地を臨む。平安時代を中心にしている。 住居を2軒検出した。 古墳時代後期からか縮減である。 狭小な沖積地をはさみ村主遺跡と対峙する。 荒蛭川右岸の台地上に展開する。弥生時代後期以降の居住域である。一部は古墳後期に墓域になっている。 今井神社古墳の周辺には円墳が群集し、「上毛古墳綜覧」には27基が登載されている。 伊勢山古墳は横穴式石室を主体部にもつ前方後円墳である。 阿久山古墳は全長28mの横穴式石室をもつ前方後円墳である。周辺には円墳が群集、「上毛古墳綜覧」には6基が登載されている。

群馬と佐位の駅を結ぶ間が荒蛭地域を通過していると思われる。金坂清則氏の所見を地図上に復元した。
前橋市上泉町付近の田利根川を取水点として終点の東村国定まで幅15～20m、深さ3～7mで開削されたが未完成に終わっている。
創建は平安時代にさかのぼると考えられている。社域をめぐる堀が残り、境内には塔の忍礎とそれを取り巻く敷石の敷石がある。
高さ4mの土塁をめぐらせた本丸とその西側に腰曲輪をもっていた。
東西150m、南北200mの規模をもち本丸、二の丸、三の丸が存在した。
荒蛭川右岸に位置し、その支流との間に構築されている。



5図　周辺の遺跡分布

II　荒砥洗橋遺跡の調査

1　調査の方法

本遺跡の調査は新たな水田開削に伴うものであることはI－1で記したとおりである。切土工事対象地域は事前の分布調査で広範囲にわたり土器片が採集されていた地点である。このことから対象地域の大型掘削重機による試掘調査を実施した。その結果、耕作土の下、灰白色土の面で住居及び溝と思われる遺構の存在を確認した。同様の遺構は対象地域全域に分布していることが想定できた。また、縄文時代などの遺物包含層は確認されなかった。

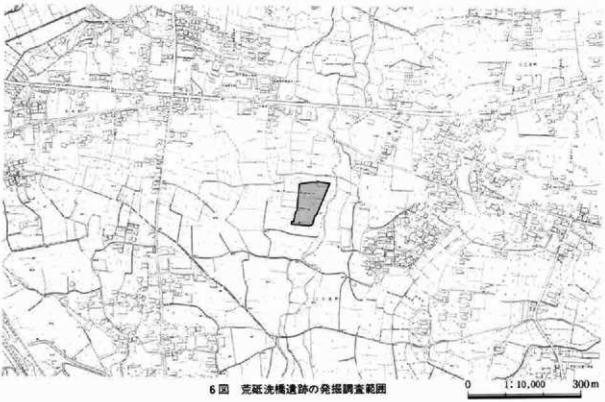
上記のような試掘調査の結果から、大型掘削重機により現在の耕作土である暗黒褐色土層を除去し、灰白色土の面で遺構の確認をおこなった。

遺構の測量にあたり、調査区域全域に5×5mの方眼を設定すると共に方眼の位置を国家座標上にプロットした。グリッドは調査区域の北西に基点を設けその点をA－1と規定した。グリッドは東西軸にアルファベッドを付し、西側からA・B・C～R・Sと呼称した。南北軸にはアラビア数字を付し、北側から1・2・3と呼称した。各グリッドの呼称は5m方眼の北西隅を以てそのグリッドの名称とした。

2　遺跡の基本層序

調査区域はその大半がロームの二次堆積である砂壌土性の微高地にあたるが、東側の一部は隣接する宮川によって形成されたと想定される沖積地に分類できる。微高地の標高は84～85m、沖積地では84mであった。それぞれの土層は以下のとおりである。

微高地　調査時点での地目は桑園であった。耕作による土壌攪乱は下位におよび、遺構の確認は古墳時代から近世に至るまで、灰白色土の上面、一面であった。

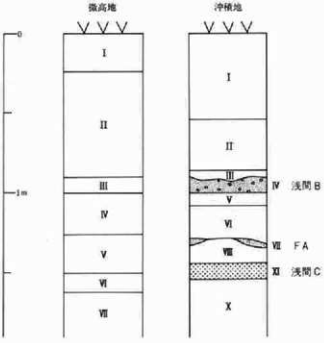


6図　荒砥洗橋遺跡の発掘調査範囲

I 層　暗黒褐色土である。現在の耕作土である。浅間Aを含んだ砂質土である。
II 層　灰白色土である。粒子の細かい砂層で鉄分凝集が認められる。部分的に小円礫が多く含まれている。竪穴住居、掘立柱建物、井戸その他すべての遺構の確認面である。
III 層　灰色土である。
IV 層　灰黒色土である。
V 層　灰色砂層である。
VI 層　灰色砂利層である。1号井戸の壁面で確認できる。透水層である。
VII 層　灰色砂層である。ピンク色をおびている。非常に粒子が細かい砂である。

沖積地　現在の地目は水田と一部桑園であった。

I 層　明灰褐色土で浅間A、浅間Bを多量に含み、締まった土層である。現在の耕作土である。
II 層　暗灰褐色土である。
III 層　灰褐色土である。
IV 層　浅間Bの純層である。上層にはブロック状にアッシュが残存している。厚さは10～15cmである。
V 層　黒色の粘質土である。鉄分凝集が認められる。水田の耕作土と考えられる。
VI 層　灰色の粘質土である。FPあるいはFAに伴う軽石を含んでいる。鉄分凝集が認められる。
VII 層　FA。ブロックに残存していた。
VIII 層　黒色の粘質土である。浅間Cを少量含み、鉄分凝集がわずかに認められる。
IX 層　浅間Cが堆積している。黒色に汚れている。
X 層　黒色の粘質土で、非常に締まっている。



7図　遺跡の基本層序

3　調査された遺構

今回の発掘調査によって古墳時代から近世・近代にかけての遺構が検出された。調査面積は7,860㎡である。

竪穴住居は古墳時代後期、奈良時代、平安時代の各期にわたり、合計90軒である。その他に掘立柱建物5棟、柱穴列5基、奈良時代の1基を含む井戸3基、土坑18基、溝5条が検出された。

沖積地では浅間Bの直下から水田と考えられる面を検出した。調査面積は326㎡である。

この他に遺構に直接伴わない遺物として縄文時代の土器3片、打製石斧1点などが出土した。また、微高地上、住居などの確認面の下層には微地形があり、その堆積土の中から古墳時代前期の土器が多数出土した。

調査で得ることのできた資料は60×37×15cmの遺物収納箱に25箱であり、本報告のなかで資料化し本文中に掲載したものは607点である。資料の内訳は土器593点、鉄器7点、石器7点である。

(1)　竪穴住居

検出された住居の総数は90軒である。時期別に分けると古墳時代後期24軒、奈良時代23軒、平安時代前半29軒、時期不明14軒である。古墳時代の住居は他の時期に比較して規模が大きく、調査区域内に点在している。奈良時代のものは調査区域全域に分布する。重複している例が多数ある。平安時代のものは微高地の東側縁辺に広がっている。

遺物としては全時代を通して杯・甕が多く出土しているが、その他に平安時代の住居から出土した灰釉陶器、奈良・平安時代の土器に記された墨書などが特記できる。また、鉄製品、砥石の出土もあった。

1　号　住　居

位　置　D－4　　**写　真**　PL2

形　状　南北に長軸を有する矩形である。南壁は中央部分が彎曲して入り込む。規模は、3.56×2.98m、残存壁高は、25～28cmを測った。

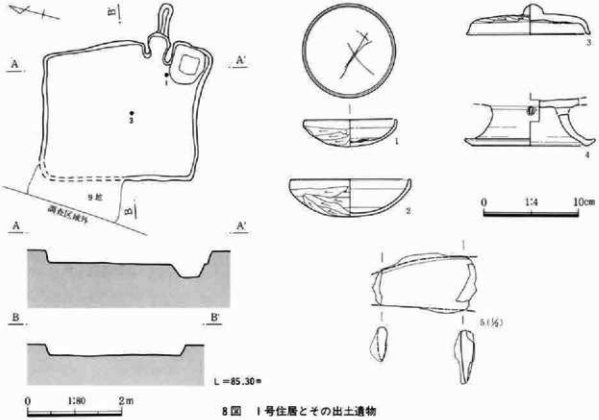
面　積　推定9.8㎡　　**方　位**　N71°30′E

竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、一部、壁面を掘り込んでいる。左右の袖部は不良であるが残存する。焚口部には皿状の掘り込みがある。煙道部は、燃焼部と4cmの段差をもってほぼ水平に屋外に延びる。幅24cmで長さ64cmにわたり残存していた。

貯蔵穴　竈の右側、住居の南東隅にある。隅丸の矩形を呈し、規模は、上端で87×70cm、深さ28cmを測る。

遺　物　竈の右袖の手前から杯（1）が破片で出土している。床面中央、床直で蓋（3）が出土している。埋没土中から鉄製鎌（5）の残片が出土した。（観P3　写PL23）

備　考　西壁の北半は9号土坑と重複して削平されている。



8図　1号住居とその出土遺物

2　号　住　居

位　置　I－1　　**写　真**　PL2

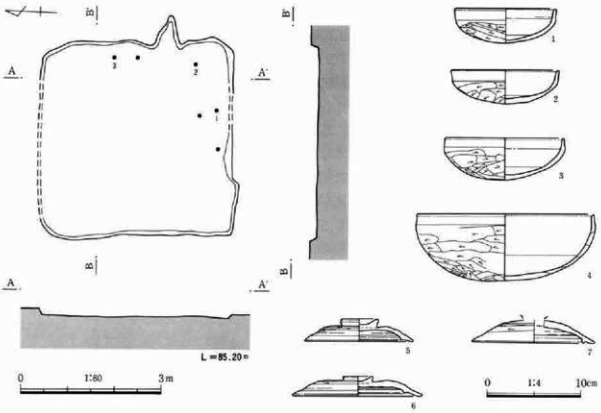
形　状　東西方向に長軸を有するがほぼ方形に近い形状である。北壁の大半は削平され未検出である。規模は、南北4.15m、東西4.12mを測る。残存壁高は8～16cmであった。

面　積　推定17.2㎡　　**方　位**　N87°30′E

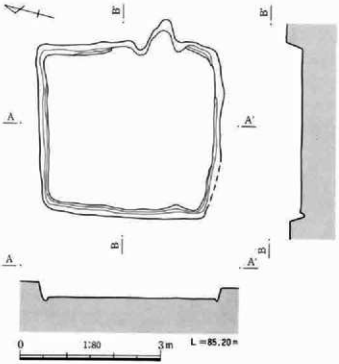
竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。奥側は徐々に細くなり煙道部に続いている。袖部は崩壊していた。

床　面　地山には多量の礫が含まれていた。

遺　物　竈の右側床面から杯（2）が、南壁寄りから杯（1）から出土した。（観P4　写PL23）



9図　2号住居とその出土遺物



10図　3号住居

3 号 住 居

位　置　K－1　**写　真**　PL2

形　状　南北に長軸をもつが方形に近い矩形を呈する。規模は、南北3.85m、東西3.75mを測る。残存壁高は、25～42cmであった。

面　積　14.2m²　**方　位**　N78°E

周　溝　全周をしていた可能性が強いが南・西壁で一部未検出な場所があった。上幅は7cm前後、深さは6cm前後であった。

竈　東壁中央から南側寄りに構築されている。燃焼部は住居内から一部壁面を掘り込んで作られており、左右の袖部の一部が残存している。煙道部は削平されていた。

遺　物　埋没土中も含め全く出土しなかった。

5 号 住 居

位 置　O－3　　**写 真**　PL2

形 状　南北4.00m、東西3.81mを測り、南北に長軸を有する矩形を呈する。竈右側の壁面は崩壊したのか立ち上がりの傾斜が緩やかである。残存壁高は、23～36cmである。

面 積　推定14.2㎡　　**方 位**　N87°E

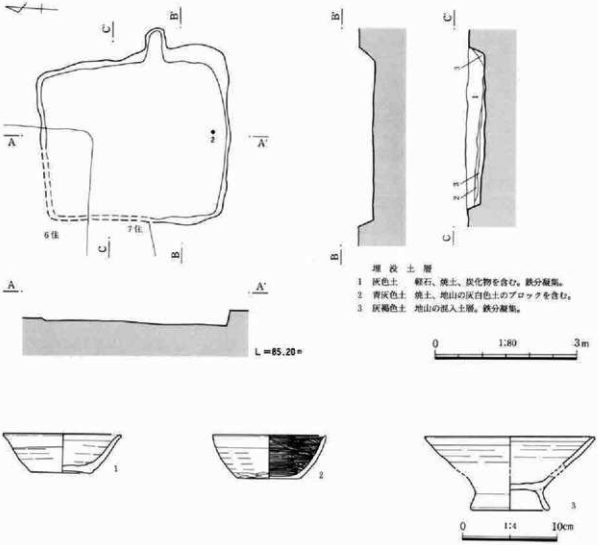
埋没土　中間に灰褐色の地山が崩壊した土層を挟み、灰色土と青灰色土の2層が堆積している。

竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されているが焚口部の幅は41cmと狭い。

床 面　北東隅がやや高くなっている。

遺 物　出土量は少量である。杯（2）は床面から3cm離れて出土している。（観P5　写PL24）

備 考　周溝、柱穴、貯蔵穴などは検出されなかった。6・7号住居と重複する。調査時における埋没土の観察から7号住居、5号住居、6号住居の順番に構築されたことが判明している。



11図　5号住居とその出土遺物

4 号 住 居

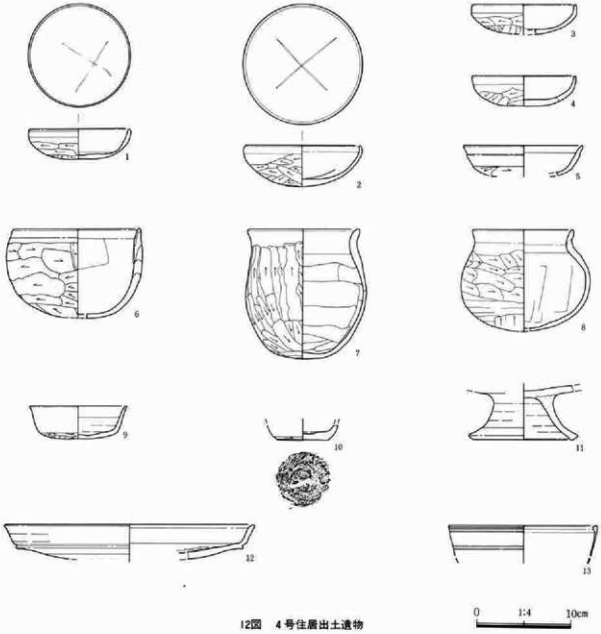
位　置　L－2　　**写　真**　PL2

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は各辺の中央を測点とすると、南北5.04m、東西4.42mを測る。竈の右側は、東側に96cm程張り出している。残存壁高は良好で44～52cmであった。

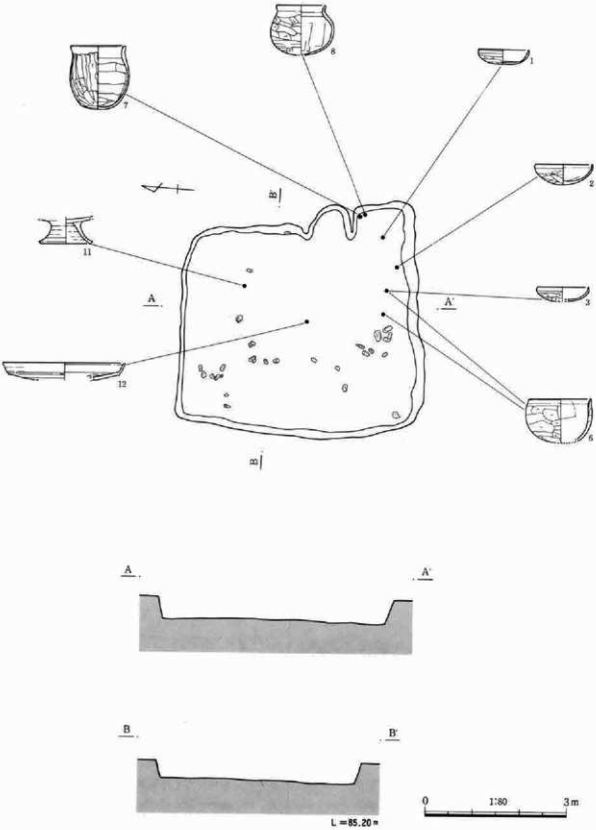
面　積　22.7㎡　　**方　位**　N88°30′E

竈　東壁中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は下幅65cm程の広さで住居壁面を掘り込んで構築されている。袖部の崩壊は著しく、大半が残存していなかった。

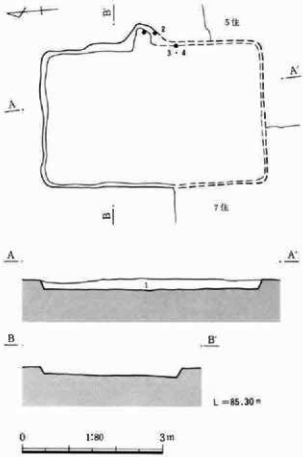
遺　物　竈右袖の外側からは甕（7・8）が重なって出土した。また、その手前の床面から杯（1）が、南壁際の床面、あるいは床面近くから杯（2・3）、鉢（6）が出土している。埋没土中からは佐波理鍋（13）が出土した。その他に自然円礫が20個余り出土している。（観P4・5　写PL23）



12図　4号住居出土遺物



13図　4号住居



6 号 住 居

位　置　O－2　　**写　真**　PL2

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、南側の半分は5・7号住居と重複しており、壁面の検出は困難であった。規模は、東西2.92mを測った。南北はセクションで4.72mを確認した。

面　積　推定14.4m²　　**方　位**　S88°E

埋没土　灰褐色土が堆積している。

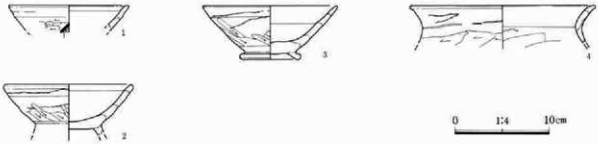
竈　東壁の中央からやや北側に位置するか。燃焼部は住居壁外に構築されており、袖部の有無は確認できなかった。

遺　物　竈燃焼部から高台付椀（2）が、竈右側からは高台付椀（3）、甕（4）が出土した。また、埋没土中から墨書の記された杯（1）が出土している。（観P3　写PL24）

備　考　5・7号住居を切って構築されている。

埋 没 土 層

1　灰褐色土　軽石、焼土を含む。鉄分凝集が認められ、締まっている。



14図　6号住居とその出土遺物

7 号 住 居

位　置　O－2　　**写　真**　PL2

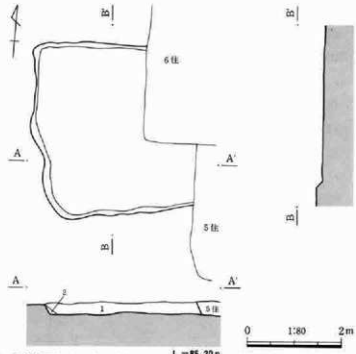
形　状　5・6号住居との重複により東壁が削平されていた。竈も東壁に構築されていたが検出できなかった。規模は、南北3.71m、東西3.05m以上を測る。残存壁高は15～17cmであった。

埋没土　壁際に青灰色の砂質土が認められるがその他は黒みのある灰褐色土により埋没している。

床　面　地山には小円礫が多く含まれており、壁・床面はこれを掘り込んで構築されている。

遺　物　床面からの遺物の出土は無かった。（観P6）

備　考　5・6号住居により切られている。



埋没土層
1　青灰色土　白色細石が斑跡り状に含まれる。鉄分凝集が認められ、締まっている。
2　灰色みのある黒褐色土

15図　7号住居とその出土遺物

8 号 住 居

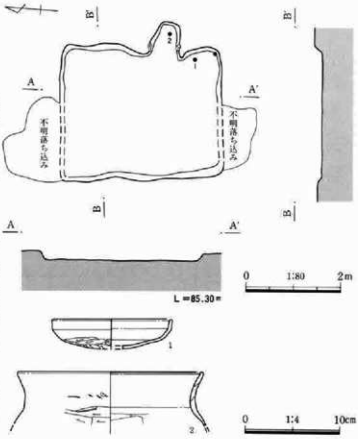
位 置　N－1　**写 真**　PL2

形 状　南北に長軸を有する矩形を呈していたが、南・北両壁の西側半分は性格不明の落ち込みにより削平を受けている。規模は、南北3.50m、東西2.90mを測る。残存壁高は15cm前後であった。

面 積　推定9.7m²　**方 位**　N86°E

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居壁面を掘り込んで構築されており、奥寄りの幅がやや狭くなる。袖部は一部が残存していた。そのやや奥側に入ったところに自然円礫が据えられ、竈壁面の補強がなされていた。

遺 物　竈燃焼部から甕（2）が、竈右側の床面から杯（1）の破片が出土している。（観P 6　写PL24）



16図　8号住居とその出土遺物

9 号 住 居

位　置　Q－2　　**写　真**　PL2

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。西壁の大半と東壁の竈右側は重複住居の関係から検出できなかった。規模は、南北4.40mを測り、東西3.55mを推定できる。残存壁高は20～26cmである。

面　積　推定15.5m²　　**方　位**　S89°E

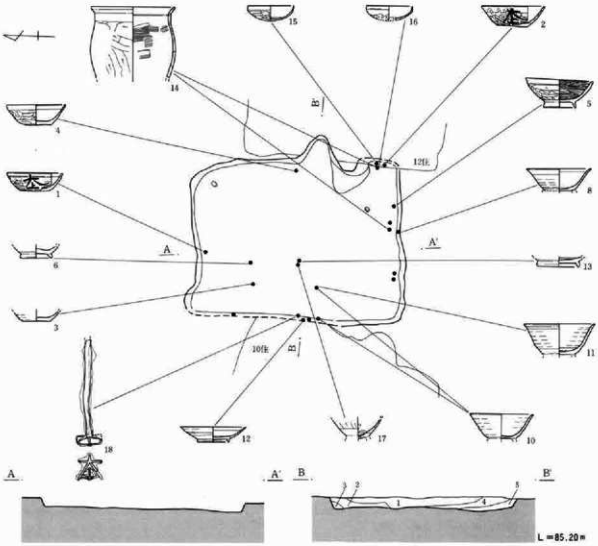
埋没土　灰褐色土が堆積している。

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は壁面を掘り込んで構築されている。袖部の存在は判然としないが右側は緩やかな高まりが残っていた。

遺　物　多数が出土している。床面から出土したものには、高台付椀(10・11)、灰釉陶器高台付椀(13)、甕（14）がある。杯（1・2）は墨書が記されている。杯（3）は底部の内外面に刻書が認められる。また、西壁際から鉄製の烙印（18）が出土した。

（観P6・7　写PL24）

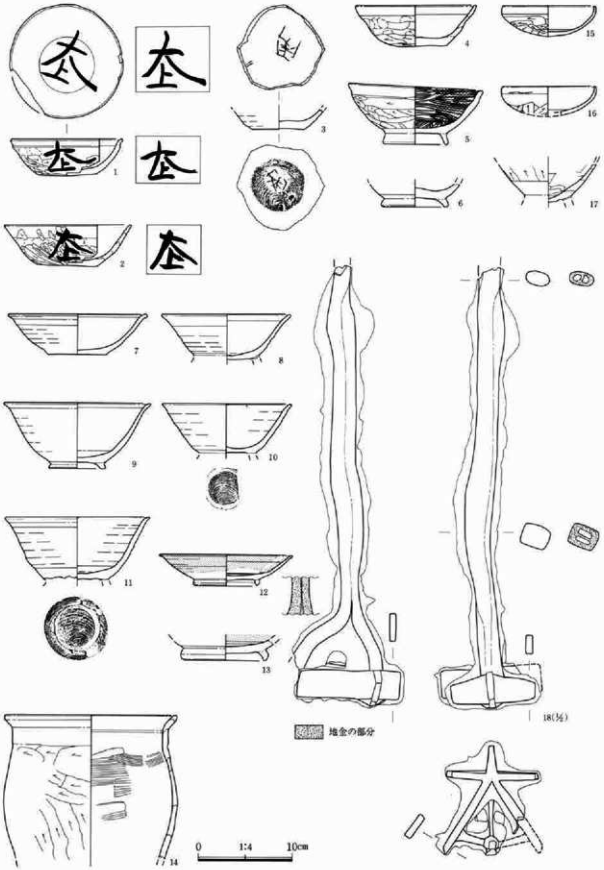
備　考　10・12号住居と重複する。いずれの住居よりも新しい。



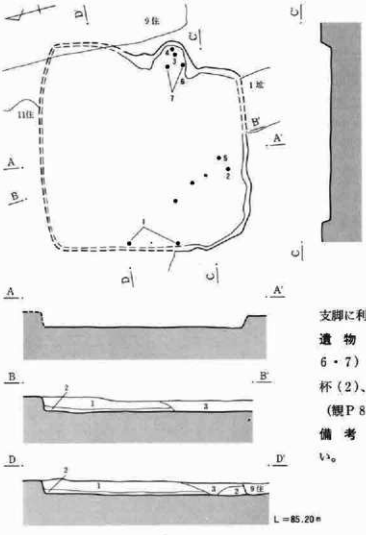
埋 没 土 層

1　灰褐色土　焼土、炭化物を含み、軽石が斑降り状に入る。
2　灰褐色土　鉄分凝集。地山の灰白色砂質土のブロックを含む。
3　暗茶褐色土　白色軽石を含む。
4　灰褐色土　鉄分凝集。焼土を含む。
5　竈埋没土　灰、焼土、炭化物の混土層である。

17図　9号住居



18図　9号住居出土遺物



10 号 住 居

位 置 P－2　**写 真** PL2

形 状 やや隅丸の矩形を呈していたと思われるが北側半分は11号住居との重複により範囲の確定はできない。東西3.93mを測る。南壁の残存壁高は22cmである。また、南壁は1号土坑により削平される。

面 積 推定18.0m²　**方 位** S80°E

埋没土 灰色土が堆積している。

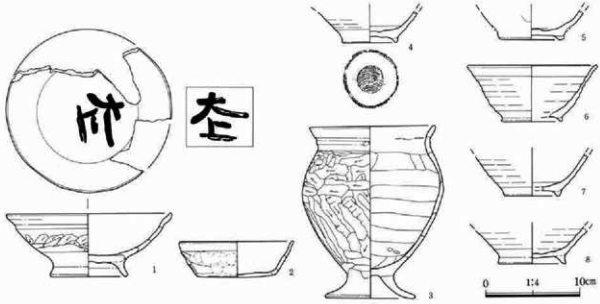
竈 東壁に位置する。燃焼部は壁面を掘り込んで構築されている。焚口部の左右には袖部が有り、その基部が残存していた。燃焼部から出土した台付甕（3）は支脚に利用されていた可能性がある。

遺 物 竈燃焼部からは先の甕の他に高台付椀（4・6・7）が出土している。

杯（2）、高台付椀（1）も床面からの出土である。（観P 8　写PL25）

備 考 11号住居よりも新しく、9号住居よりも古い。

	埋 設 土	層
1	灰茶褐色土	白色軽石が斑降り状に入る。鉄分凝集が顕著に認められる。
2	青灰色土	白色軽石が斑降り状に入る。焼土も含まれる。
3	灰色土	混入物は2と同様である。



19図　10号住居とその出土遺物

11 号 住 居

位　置　P－1　　**写　真**　PL3

形　状　10号住居や東壁に重複する10号土坑との関係から、形状を確定することは困難であるが、南北に長軸を有する矩形で、北壁が張り出している。規模は、南北5.48m、東西4.39mを測る。張り出し部分は、長さ2.28m、幅0.62mである。

方　位　N64°E

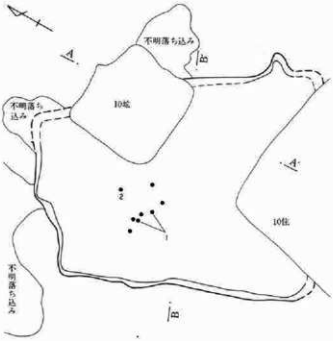
埋没土　灰色土が堆積している。

竈　東壁、住居の南東隅に構築されている。残存状態は不良であったが、燃焼部の一部を検出することができた。

遺　物　床面の中央からやや西側寄りにかけて杯（2）、甕（1）が出土した。

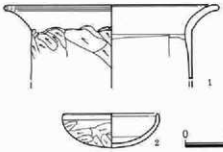
（観P 8　写PL25）

備　考　10号住居により切られている。



埋 設 土 層

1　青灰色土　白色軽石が縞状に入る。焼土も含まれ、鉄分凝集が認められる。



20図　11号住居とその出土遺物

12 号 住 居

位　置　R－2　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。各辺、各隅は整然とした形状である。規模は、南北4.33m、東西2.94mを測る。残存壁高は25～33cmであった。

面　積　12.8m²　　**方　位**　S86°E

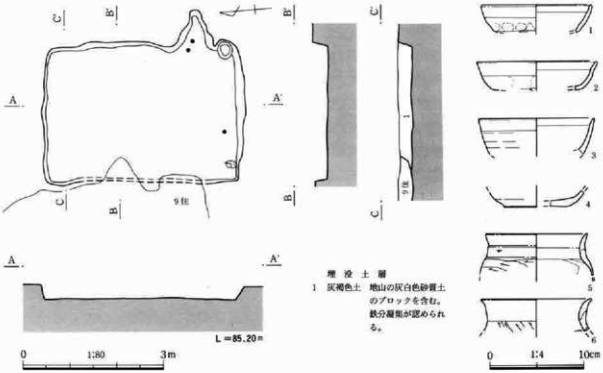
埋没土　灰褐色土が堆積していた。

竈　東壁中央から南側寄り、住居の南東隅近くに構築されている。燃焼部は住居壁面を掘り込んで作られ、奥は幅を狭め煙道へ移行している。

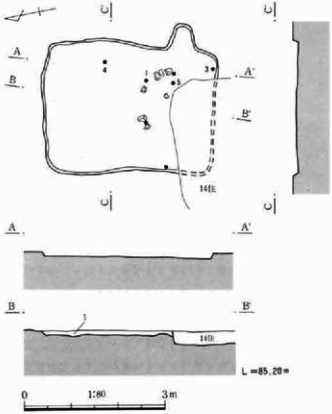
貯蔵穴　住居南東隅に径38×32cm、深さ12cmのピットがあり、貯蔵穴の可能性が強い。

遺　物　竈燃焼部内から小破片が出土したが資料化できなかった。埋没土中から杯、甕の小破片が出土している。（観P 9）

備　考　西壁は9号住居により切られる。



21図　12号住居とその出土遺物



22図　13号住居

13 号 住 居

位　置　R－2　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は、南北3.60m、東西2.88mを測る。削平が著しく残存壁高は10cm前後であった。

面　積　推定10.3㎡　**方　位**　S74°E

埋没土　黒褐色土が堆積していた。

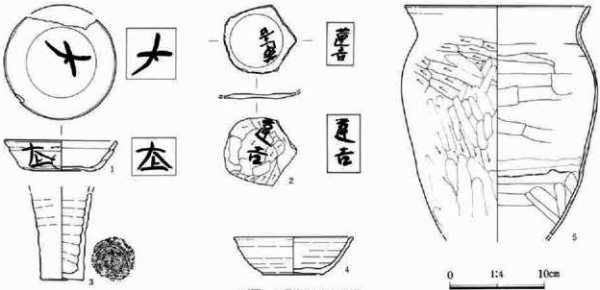
竈　東壁、南東隅近くに構築されている。燃焼部は住居壁面を掘り込んで作られている。

遺　物　竈左前の床面から墨書の記された杯（1）が出土している。南東隅の床面からは壺（3）が出土した。埋没土から墨書の記された杯の底部（2）が出土している。

（図P9　写PL25）

備　考　南壁の大半は14号住居により削平されている。竈前の床面から9個体の自然円礫が出土した。

埋没土層
1　黒褐色土　白色軽石を含む砂質土である。



23図　13号住居出土遺物

14 号 住 居

位　置　R－2　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形で、四隅はやや丸みをおびている。規模は、南北3.69m、東西2.83mを測る。残存壁高は良好な南東隅で31cmを測った。

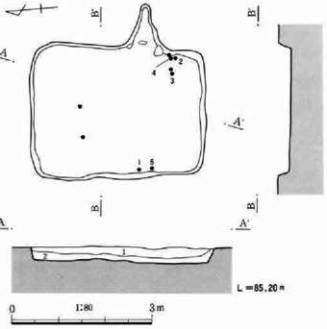
面　積　10.6㎡　　**方　位**　S85°E

埋没土　黒褐色土が堆積している。

竈　東壁中央からやや南側に位置する。

遺　物　床面から高台付椀（1）や甕（5）、台付甕（4）が出土しているが、完形品は無かった。竈右側から出土した杯（2）には墨書が記されている。（観P10　写PL25）

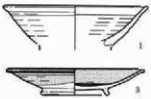
備　考　13･15号住居を切って構築されている。12号住居とも重複関係にある。

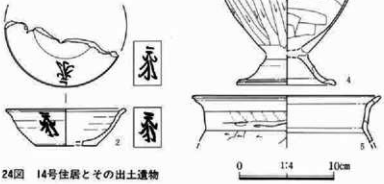


埋 没 土 層

1　黒褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土を含む。

2　黒褐色土　1よりも色調が明るい。





24図　14号住居とその出土遺物

15 号 住 居

位　置　R－3　　**写　真**　PL3

形　状　南北5.32m、東西5.28mとほぼ正方形に近い形状を呈する。残存壁高は11～20cmを測った。南・西壁のそれぞれ2箇所、突出する部分がある。

面　積　推定27.5m²　　**方　位**　N25°W

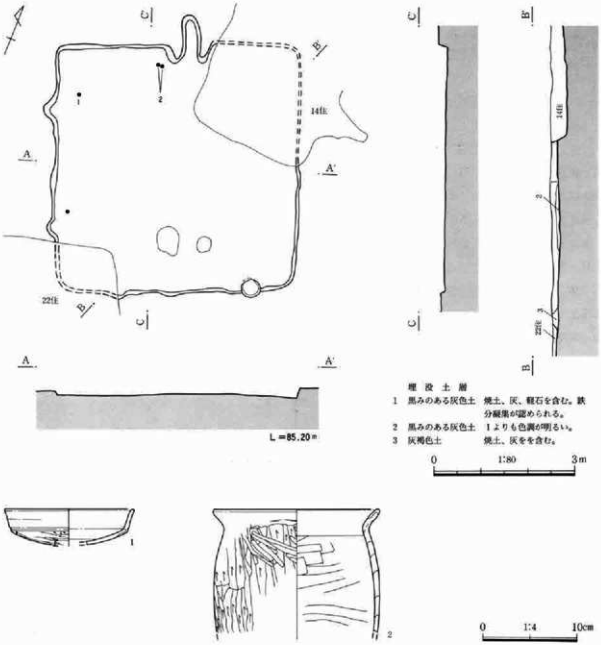
埋没土　灰褐色土、灰黒色土に分層できる。

柱　穴　南壁、南東隅寄りにあり、その可能性がある。径40cm、深さ38cmを測る。

竈　北壁に位置し、中央からやや東側寄りにある。燃焼部は住居内に袖部を構築して作られている。幅が狭く、そのまま壁外の煙道に続いている。

遺　物　竈の左手前、床面から甕（2）が出土している。（図P10）

備　考　14・22号住居と重複関係にあり、北東・南西隅は削平されている。



25図　15号住居とその出土遺物

16 号 住 居

位　置　A−26　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが北壁の東半分は張り出している。南西隅は調査区域外に及んでいる。規模は、南北3.95m、東西3.52mを測った。張り出し部の規模は、南北0.95m、東西2.06mである。残存壁高は29〜34cmを測った。

面　積　推定15.9m²　　**方　位**　N62°E

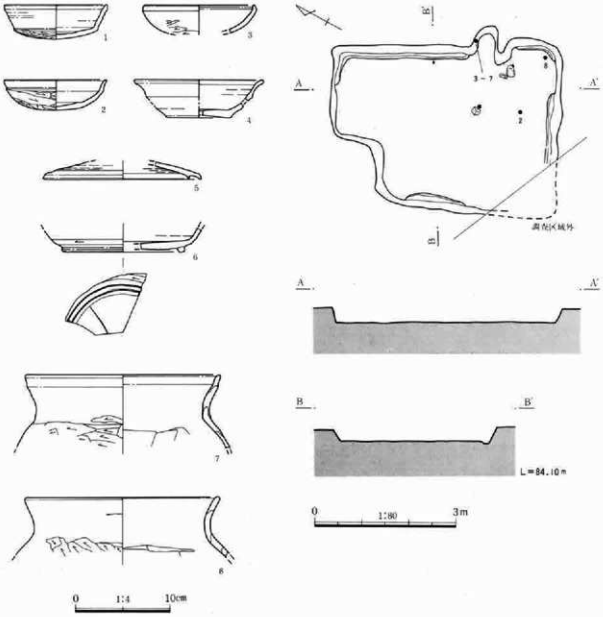
周　溝　部分的に確認した。東壁際と北東隅、南・西壁際の一部である。下幅6〜10cm、深さ1〜3cmであった。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は、住居の壁内から一部壁面を掘り込んで構築されている。右側の袖部は短く残っており、左袖もその痕跡が認められた。火床面には炭化物が堆積していた。

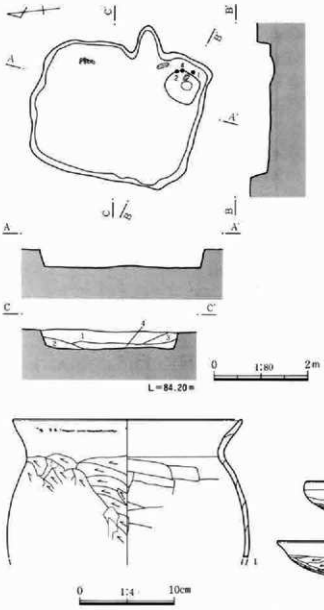
床　面　竈の手前はやや踏み固められていた。

遺　物　小破片が出土している。

（観P11　写PL25）



26図　16号住居とその出土遺物



27図　17号住居とその出土遺物

17 号 住 居

位　置　C－24　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形である。四隅は丸みをおびている。規模は、南北2.84m、東西2.49mを測る。残存壁高は33～39cmである。

面　積　9.7m²　　**方　位**　S71°E

埋没土　灰黒褐色土、灰色土に分層される。

竈　東壁中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は壁内から一部壁面を掘り込んで構築されている。袖部は住居内に短く残存していた。

貯蔵穴　竈の右側、住居の南東隅に位置する。径71×62cmの円形を呈し、深さ7cmの皿状の掘り込みである。

遺　物　貯蔵穴内から杯（2・4）、甕（1）が出土している。（観P11　写PL25）

備　考　重複する18号住居の壁面を削平している。

埋 没 土 層

1　灰黒褐色土　軽石、焼土、炭化物を含む。
2　灰色土　焼土、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。
3　灰褐色土　焼土、灰を多量に含む。
4　灰色土　2と同様の混入物が含まれる。

18 号 住 居

位　置　C－24　　**写　真**　PL3

形　状　南北に長軸を有する矩形で各隅は整美な形状であるが、南壁の一部は不自然に内側へ入り込んでいる。規模は、南北6.63m、東西5.89mを測る。削平が進み、残存壁高は良好な北壁でも8～12cmであった。

面　積　38.0m²　　**方　位**　S88°E

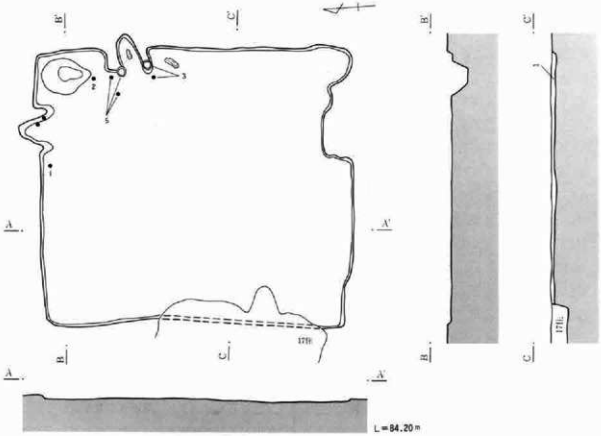
埋没土　暗褐色土が堆積していた。

竈　北壁、東壁の2箇所にあり、いずれも北東隅寄りに位置する。両者とも袖部が残存しているが北壁のほうが古いものと思われる。北壁の竈は燃焼部を住居内に置き、一部壁面を掘り込んで構築されている。東壁の竈も同様の構造で、住居内に延びる左右の袖部の先端には甕が倒立して置かれ、補強材にされていた。

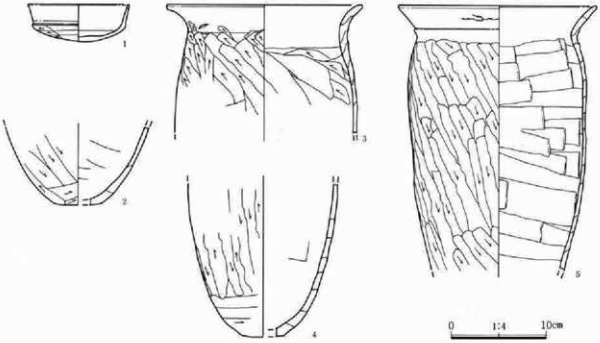
貯蔵穴　北東隅に位置する。不整円形で上面の規模は105×72cm、深さ36cmを測った。

遺　物　床面からの出土は無かった。量的にも少量で北壁の竈の左側から杯（1）が、貯蔵穴に接して甕（2）が出土している。（観P12　写PL25）

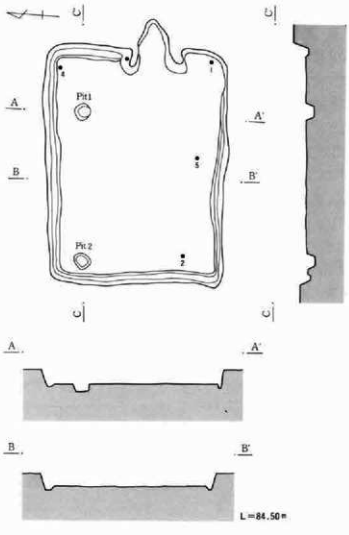
備　考　西壁は17号住居により削平を受けている。



埋設土層
1　暗褐色土　焼土、地山の灰白色砂質土を少量含む。



28図　18号住居とその出土遺物



19 号 住 居

位　置　C－20　**写　真**　PL4

形　状　東西に長軸を有する縦長の矩形である。東側の隅はやや丸みをおびるが全体に整然とした形状である。規模は東西5.07m、南北3.89mを測る。残存壁高は16～39cmである。

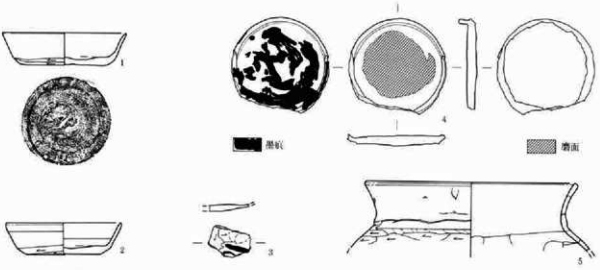
面　積　19.0m²　**方　位**　N85°30′E

周　溝　竈の右側を除いて確認できた。下幅8～12cm。深さは2～9cmで8cm前後が多かった。

柱　穴　2本検出できたが掘削深度が浅く、位置的にもやや疑問が残る。規模はPit 1が径35cm、深さ17cm。Pit 2が径35×32cm、深さ15cmである。

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居壁内から一部壁面を掘り込んで構築され、煙道部の基部に移行する。袖部の残存は悪いが住居内に40cm程が延びていた。

遺　物　出土遺物は少量である。北東隅から高台付杯の転用硯（4）が出土した。また、埋没土中から墨書の記された杯（3）が出土している。（観P12　写PL26）



29図　19号住居とその出土遺物

20 号 住 居

位 置　C−21　　**写 真**　PL4

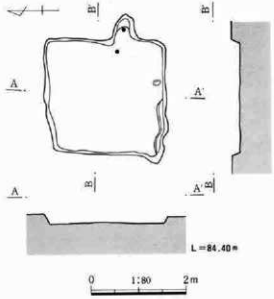
形 状　南北2.52m、東西2.44mと正方形に近い形状を呈する。南西隅の乱れはピット状の遺構が重複したためと思われる。残存壁高は16〜21cmである。

面 積　6.4㎡　　**方 位**　S88°E

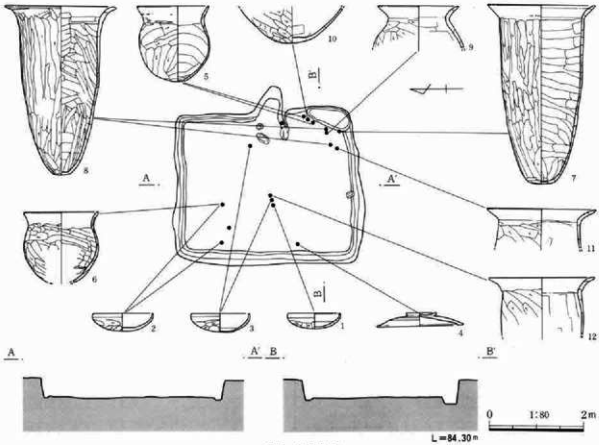
周 溝　南壁の西側半分で検出できたが不明瞭であった。深さは3cm程であった。

竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。

遺 物　竈の燃焼部内から甕の破片が、また、竈の手前から杯の破片が出土しているが資料化はできなかった。(観P10　写PL26)



30図　20号住居とその出土遺物



31図　21号住居

21 号 住 居

位　置　D−23　　**写　真**　PL 4

形　状　南北に長軸を有する矩形である。四隅は整然としている。規模は、南北3.87m、東西3.32mを測る。残存壁高は36〜41cmである。

面　積　12.8m²　　**方　位**　N89°E

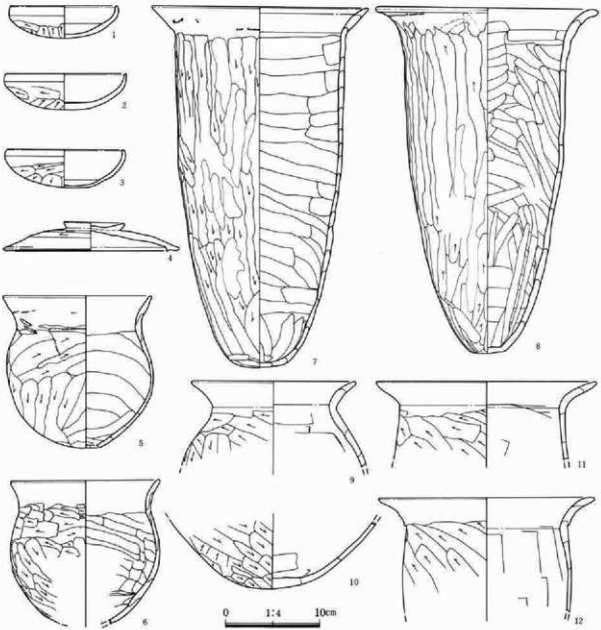
周　溝　竈の右側を除いて全周する。幅は12cm前後、深さ3〜6cmである。

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居内から一部壁面を掘り込んで構築されている。住居内に延びる左右の袖部の先端には自然礫が据えられている。また、焚口部前にも円礫が認められ、これも竈構築材に用いられていた可能性が強い。

貯蔵穴　竈の右側、住居の南東隅に不整形で、皿状の掘り込みがある。深さは16cmである。

遺　物　南東隅に集中していた。甕（5〜8）は貯蔵穴の上端にかかって出土している。竈の左手前の床面からは杯（3）が、西壁際の床面からは蓋（4）が出土している。(観P13　写PL26)

備　考　南東隅近くで2号溝と重複する。



32図　21号住居出土遺物

22 号 住 居

位　置　R－4　　**写　真**　PL4

形　状　埋没土の確認が難しく、壁面の検出に困難を極めた。南北3.57m、東西3.56mを測る。南壁の残存壁高は66cmである。

面　積　推定11.8m²　**方　位**　N75°E

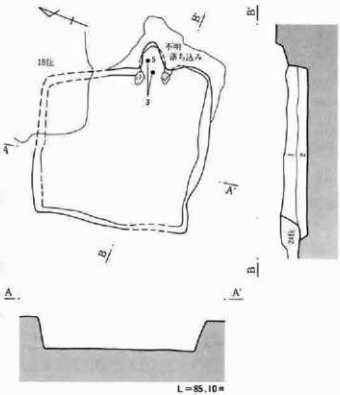
埋没土　灰色土が堆積していた。

竈　東壁に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込むもので、上半を打ち欠いた自然円礫が袖部の補強に据えられていた。

床　面　竈の前はやや踏み固められていた。

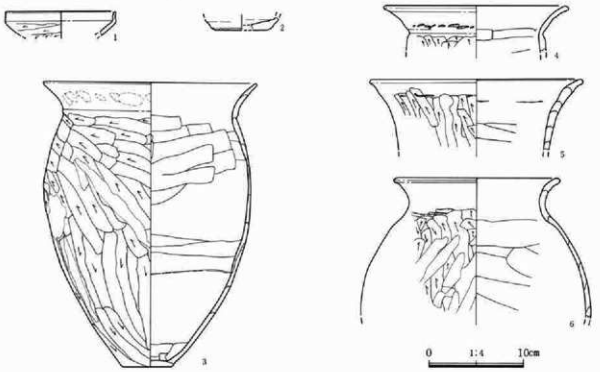
遺　物　竈燃焼部の埋没土中から甕が2個体（3・5）出土している。（観P14　写PL26）

備　考　15号住居を切り込んでいるが、一方の西壁は24号住居により削平されている。

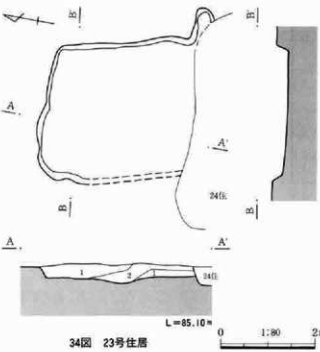


埋　没　土　層
1　灰白色土　軽石、地山の灰白色砂質土を多量に含む。
2　黒褐色土　軽石、地山の灰白色砂質土、焼土を含む。

0　1:80　3m



33図　22号住居とその出土遺物



34図　23号住居

23 号 住 居

位　置　Q－3　　**写　真**　PL 4

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈していたか。規模は、南北5.34m以上、東西2.90mを測ったが不明瞭な点が多い。

方　位　N80°E

埋没土　中間に黒褐色土を挟み上下に灰白色土が堆積していた。

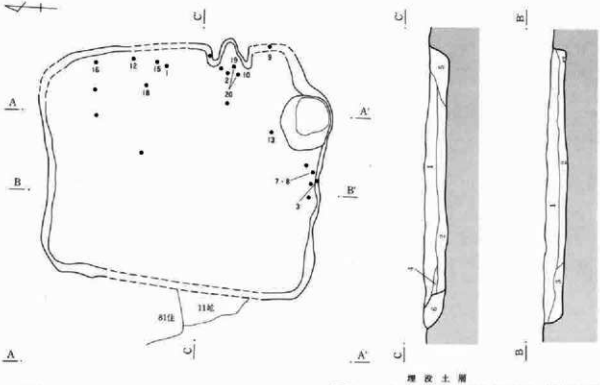
竈　東壁に構築されている。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで作られている。

備　考　遺物は全く出土していない。22・81号住居と重複関係にある。新旧関係は不明瞭である。

埋 没 土 層

1　灰白色土　地山の灰白色砂質土を多量に含む。

2　黒褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土を含む。



35図　24号住居

埋 没 土 層

1　青灰色土　軽石、焼土を含む。鉄分凝集が認められる。

2　青灰色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土を含む。

3　灰白色砂質土　地山の灰白色砂質土を多量に含む。

4　青灰色土　1と同様の混入物である。1よりも色調が明るい。

5　青灰色土　炭化物、焼土、灰を多量に含む。

6　性格不明の落ち込みの埋没土

24 号 住 居

位 置　Q－4　　**写 真**　PL4

形 状　南北に長軸を有する矩形を呈すると考えられるが、東壁の検出が困難であったため不明瞭な点が残る。規模は、南北5.79m、東西4.50mが推定される。残存壁高は良好な北東隅で44cmを測った。

面 積　推定26.2m²　　**方 位**　S86°E

埋没土　青灰色土が堆積していた。

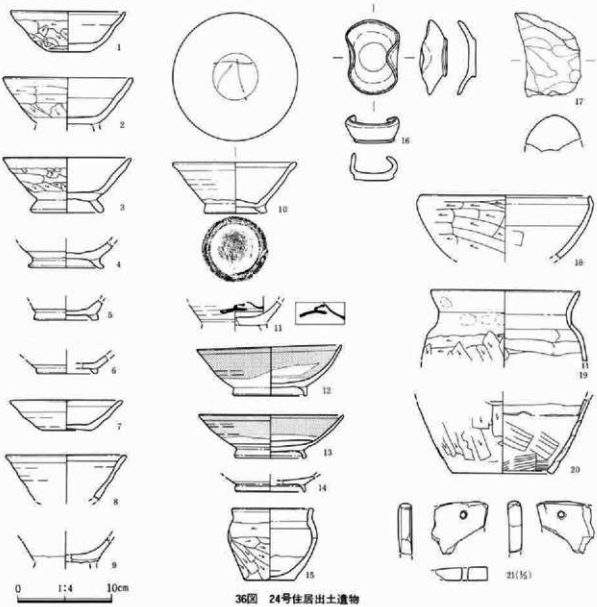
竈　東壁の中央から南側寄りに位置していた。燃焼部は住居内から一部壁面を掘り込んで作られており、左右の袖部が短く残存していた。

貯蔵穴　竈の右側、南壁の南東隅寄りに位置する。上端の径116×105cm、深さ51cmの不整円形の掘り込みである。

遺 物　竈燃焼部内から杯（2）、高台付椀（10）や甕（19）が出土している。（10）には墨書が記されている。その他に杯（7）、椀（8）、高台付椀（9）などが床面から出土している。埋没土中から墨書の記された高台付椀（11）、砥石（21）、土製の支脚（17）などが検出されている。

（観P14・15　写PL27）

備 考　22・23・81号住居と重複するが、いずれの住居よりも新しく構築されたものと思われる。また、西壁は11号土坑を掘り込んでいる。



36図　24号住居出土遺物

25 号 住 居

位　置　P－5　　**写　真**　PL4・5

形　状　南北に長軸を有する矩形である。四隅はやや丸みをおびるが全体に整然とした形状である。規模は、南北4.71m、東西4.11mを測る。残存壁高は、25～38cmである。

面　積　推定20.3m²　　**方　位**　S79°30′E

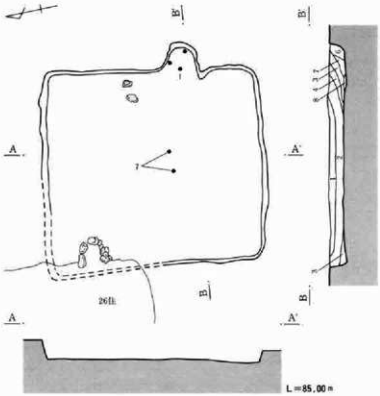
埋没土　青灰色土が堆積していた。混入物により分層できる。

竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで作られている。右側の袖部の痕跡が残存していた。

遺　物　竈燃焼部内から高台付椀（1）が、床面の中央から甕（7）の破片が出土している。

（観P16　写PL27）

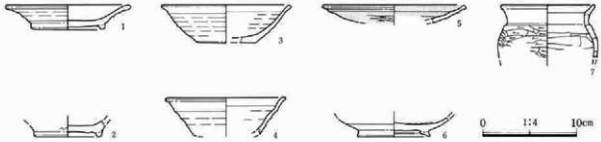
備　考　北西隅は26号住居により削平を受けている。



堆 積 土 層

1　青灰色土　地山の灰白色砂質ブロック、焼土を含む。
2　青灰色土　地山の灰白色砂質ブロック、焼土、炭化物を含む。
3　青灰色土　地山の灰白色砂質ブロックを多量に含む。
4　青灰色土　焼土、灰を含む。
5　青灰色土　焼土、灰を多量に含み、更に炭化物も含む。
6　焼土ブロック　灰を含む。
7　青灰色土　焼土、灰を含む。
8　灰層　焼土、炭化物を含む。（4～8は竈の埋没土である）

0　1:80　3m



37図　25号住居とその出土遺物

26 号 住 居

位　置　O－4　　**写　真**　PL5

形　状　南北に長軸を有するが正方形に近い矩形を呈すると思われる。他の重複住居の埋没土を確認面としたため、壁面の検出は東壁、南壁の一部に止まった。規模は、セクションで確認した。南北4.00m、東西3.81m前後と推定できる。南西隅の残存壁面は26cmである。

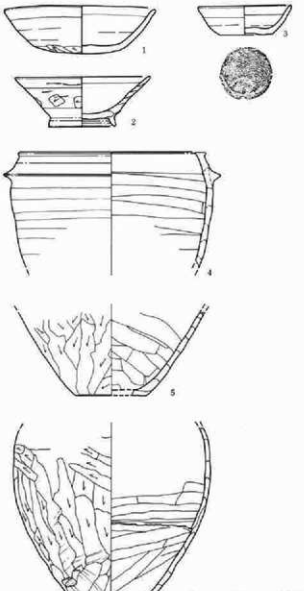
面　積　推定16.1m²　　**方　位**　S80°30′E

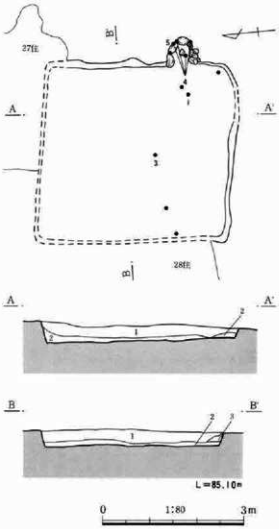
埋没土　黒褐色土と青灰色土に分層できる。

竈　東壁の中央から南側寄り、南東隅近くに位置する。燃焼部は住居壁外に構築されている。壁体は7個の自然円礫により石組されている。火床には小円礫を据え、支脚としている。壁体の礫、支脚とも火熱のため器面が脆弱になっていた。

遺　物　竈の石組の間から羽釜（4）が出土している。竈の構築材に用いられたか。竈の手前、床面から椀（1）が出土している。(観P16・17　写PL27)

備　考　25・27・28号の各住居と重複するがいずれの住居よりも後から構築されている。





埋 没 土 層

1　黒褐色土　軽石、焼土を含む。鉄分凝集が認められる。

2　青灰色土　地山の灰白色砂質土のブロック、炭化物を含む。鉄分凝集が認められる。

3　青灰色土　灰白色砂質土のブロックを含む。

38図　26号住居とその出土遺物

27 号 住 居

位　置　O－4　　**写　真**　PL5

形　状　東西に長軸を有する縦長の矩形を呈する。南壁、西壁の大半は26号住居との重複により削平されている。規模は、東西2.93m、南北2.68mを測った。残存壁高は38cmである。

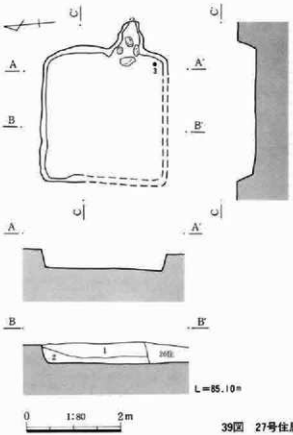
面　積　推定8.3㎡　　**方　位**　S84°E

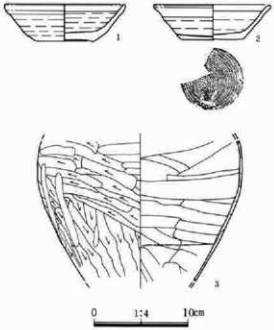
埋没土　灰白色の砂層と黒褐色土に分層できる。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込み、奥側はその幅を狭め煙道に移行する。焚口部の左右には自然円礫を袖石として据え、補強をしている。焚口部前の礫は袖部の２個の礫の上に渡されていた可能性が強い。燃焼部内の礫は支脚と考えられる。

遺　物　住居の南東隅から甕（３）胴部破片が出土している。(観P17　写PL27)

備　考　28号住居を削平し、26号住居により削平されている。





埋 没 土 層
1　黒褐色土　焼土を含む。鉄分凝集が認められる。
2　青灰色土　地山の灰白色砂質土のブロックを含む。

39図　27号住居とその出土遺物

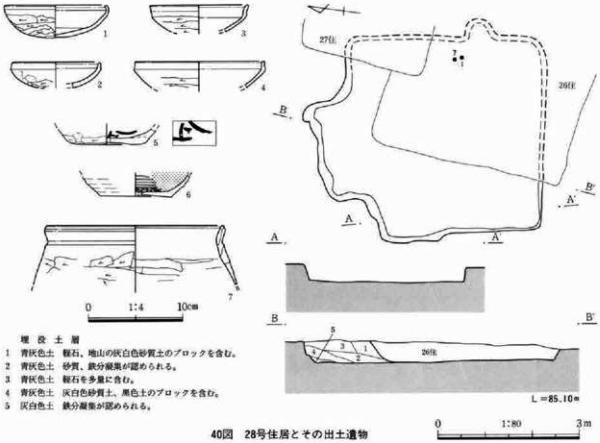
28 号 住 居

位　置　O－4　　**写　真**　PL5

形　状　北壁に張り出しを持つ矩形を呈すると思われるが、東・南壁は26・27号住居により削平されている。規模は、南北3.47m、東西4.20m以上を測る。張り出し部分の規模は、幅2.18m、長さ0.88mである。竈は東壁に構築されており、26号住居の床面調査時に燃焼部の痕跡が確認できた。

埋没土　青灰色土が堆積している。

遺　物　竈手前から杯（1）、甕（7）が出土している。また、埋没土中から墨書の記された杯（5）が出土している。(観P17　写PL27)



埋 設 土 層
1　青灰色土　軽石、地山の灰白色砂質土のブロックを含む。
2　青灰色土　砂質、鉄分凝集が認められる。
3　青灰色土　軽石を多量に含む。
4　青灰色土　灰白色砂質土、黒色土のブロックを含む。
5　灰白色土　鉄分凝集が認められる。

40図　28号住居とその出土遺物

29 号 住 居

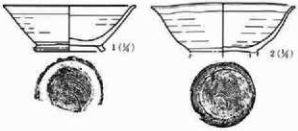
位 置　O－5　　**写 真**　PL5

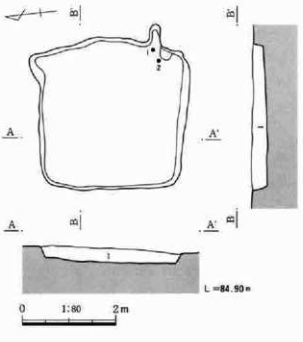
形 状　東西3.18m、南北3.17mの正方形に近い矩形を呈する。四隅はやや丸みを持っている。残存壁高は22～32cmである。

面 積　9.8m²　　**方 位**　S79°E

竈　東壁、南東隅近くに位置する。住居壁面への掘り込みは幅20cmと狭く、これが煙道であるとすれば、燃焼部は住居壁内にその主体があったと考えられる。袖部の右側にはその痕跡が残っていた。

遺 物　竈の燃焼部内から高台付椀（1・2）が出土している。（観P18　写PL27）





埋 設 土 層
1　灰黒褐色土　灰白色砂質土のブロックを多量に含む。鉄分凝集が認められる。

41図　29号住居とその出土遺物

30 号 住 居

位　置　N－3　　**写　真**　PL5

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈すると思われるが1号溝との重複により南壁及び北壁の西半分は削平されている。規模は、南北4.60m、東西3.51mを測る。残存壁高は25cm前後である。

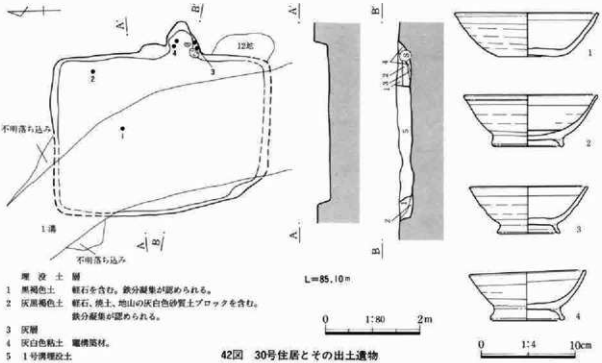
面　積　推定15.6㎡　**方　位**　S88°E

埋没土　黒褐色土が堆積している。

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居壁面を掘り込んで構築されている。右側袖部は自然円礫を据えて補強している。

遺　物　竈燃焼部から高台付椀（3・4）が出土している。(図P18　写PL28)

備　考　南東隅には12号土坑が重複している。



埋 没 土 層
1　黒褐色土　軽石を含む。鉄分凝集が認められる。
2　灰黒褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。鉄分凝集が認められる。
3　灰層
4　灰白色粘土　竈構築材。
5　1号溝埋没土

42図　30号住居とその出土遺物

31 号 住 居

位　置　N－6　　**写　真**　PL6

形　状　東西に長軸を有する縦長の矩形で、1号溝との重複により北壁の東半分が削平されている。規模は、東西2.40m、南北2.03mを測る。残存壁高は7～21cmであった。

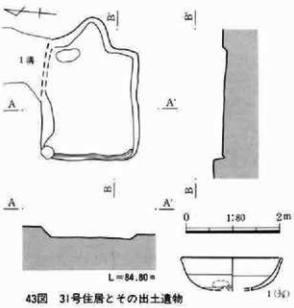
面　積　推定5.4㎡　**方　位**　N85°30′E

周　溝　西壁際で確認できた。下幅2～5cm、深さ4cm程であった。

竈　東壁の中央に位置する。燃焼部は住居壁面を掘り込み構築されている。

遺　物　埋没土中から杯(1)の破片が出土しただけである。(図P18)

備　考　竈の左前と住居北西隅にピットが重複している。



43図　31号住居とその出土遺物

32 号 住 居

位　置　M－5　　**写　真**　PL6

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。各壁とも外側に弧を描いて張り出す。特に南壁、竈の右側のそれは顕著である。規模は、南北4.37m、東西3.32mを測る。残存壁高は、22～32cmであった。

面　積　14.3m²　　**方　位**　S72°E

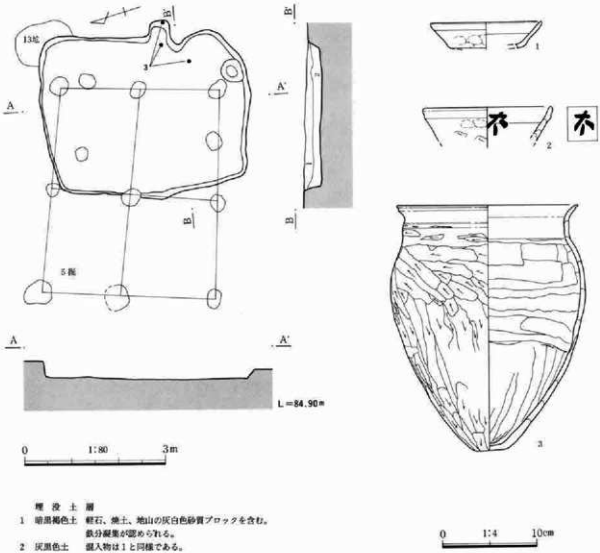
埋没土　黒みをおびる暗褐色土と黒みをおびる灰色土に分層できる。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居内から一部、住居の壁面を掘り込んで構築され、右側の袖部の一部が残存していた。焚口部から燃焼部にかけては深さ11cmの皿状の掘り方があり、そこから竈右手前に炭化物の層が広がっていた。

遺　物　竈燃焼部から甕（3）が出土、竈右前の床面から出土した破片と接合した。埋没土中から墨書の記された杯（2）が出土している。

（縦P21　写PL28）

備　考　33・34号住居と重複し、両住居を切っている。5号掘立柱建物の柱穴と重複する。その他にも径30cm弱のピットが3本重複している。

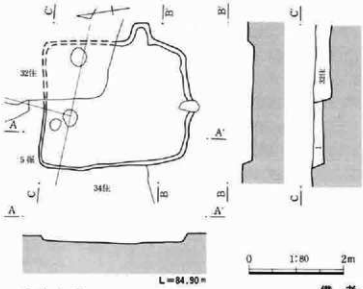


埋 没 土 層

1　暗黒褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質ブロックを含む。鉄分凝集が認められる。

2　灰黒色土　混入物は1と同様である。

44図　32号住居とその出土遺物



埋 没 土 層
1　灰黒色土　軽石、焼土、炭化物、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。鉄分凝集が認められる。

45図　33号住居

33 号 住 居

位　置　M－6　　**写　真**　PL6

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。北東隅は32号住居により削平されている。規模は、南北3.13m、東西2.64mを測る。残存壁高は、13～16cmである。

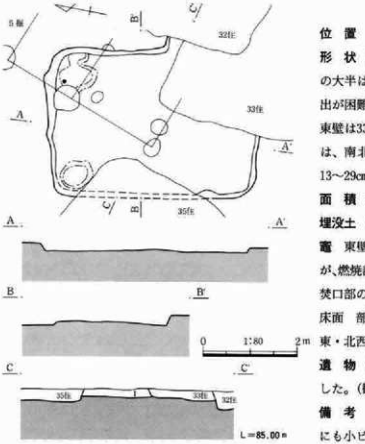
面　積　推定8.4m²　**方　位**　S80°E

埋没土　黒灰色土層が堆積していた。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。住居の壁面を掘り込んで構築されているが、幅は38cmと狭いものであった。

遺　物　遺物は全く出土しなかった。

備　考　32・34号住居と重複する。34・33・32号住居の順番で構築されている。また、5号掘立柱建物の柱穴とも重複している。



埋 没 土 層
1　灰黒色土　軽石、焼土、炭化物、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。鉄分凝集が認められる。

46図　34号住居とその出土遺物

34 号 住 居

位　置　L－5　　**写　真**　PL6

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、西壁の大半は、35号住居の埋没土を確認面としたため検出が困難であった。また、南東隅を中心とする南壁、東壁は33号住居の構築により削平されている。規模は、南北4.35m、東西3.15mを測る。残存壁高は13～29cmである。

面　積　推定14.1m²　**方　位**　N79°E

埋没土　灰色みのある黒色土が堆積していた。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置しているが、燃焼部左側の壁面の一部を検出しただけである。焚口部の前には炭化物が広がっていた。

床面　部分的にやや踏み固められている。また、北東・北西の両隅には床下土坑がある。

遺　物　埋没土から墨書の記された杯（1）が出土した。（観P18　写PL28）

備　考　5号掘立柱建物の柱穴が重複する。その他にも小ピットが重複していた。

・35号住居

位　置　L－6　　**写　真**　PL6・7

形　状　正方形に近い形状を呈するが歪んでいる。各壁面とも多少の起伏がある。南北5.19m、東西5.17mが最大値である。壁面は削平が著しく、良好な南西隅で19cmを測った。

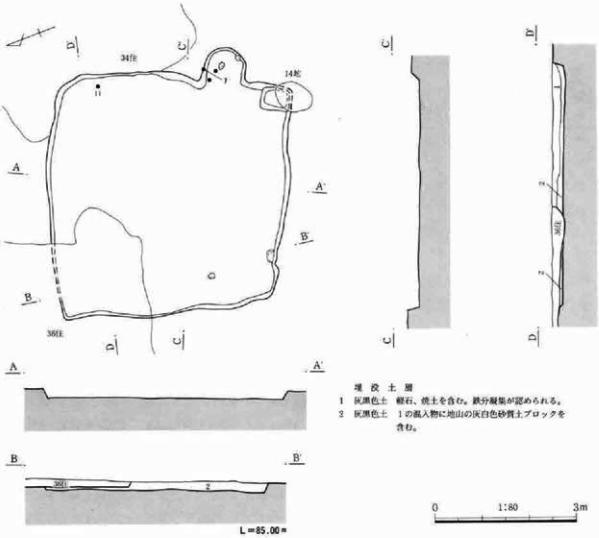
面　積　25.1m²　　**方　位**　S68°30′E

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築され、焚口部の幅は、75cmと広い。火床面には自然円礫が据えられ、支脚となっていた。左右の袖部はわずかにその痕跡が認められた。

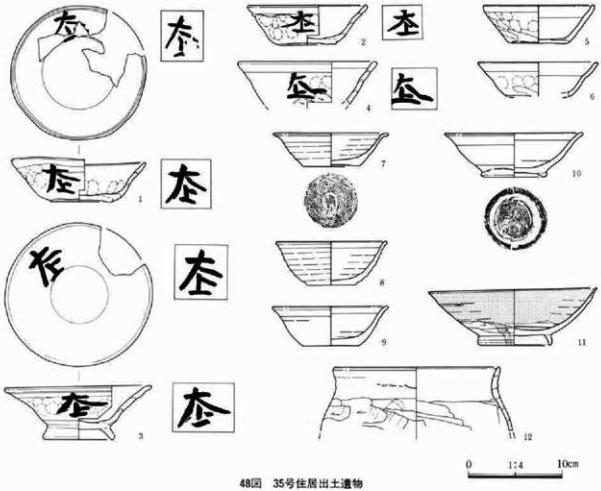
貯蔵穴　南東隅に位置する。57×45cm程の矩形を呈していたと考えられる。深さは、7cmであった。埋没土中から墨書を記した杯（1・2）、高台付椀（3）が出土している。また、14号土坑と重複しており、土坑埋没土中からは、本来は、本住居に所属していたと考えられる遺物が出土している。

遺　物　竈燃焼部内から甕の破片が出土した。埋没土中から墨書の記された杯（4）が出土している。（観P19　写PL28）

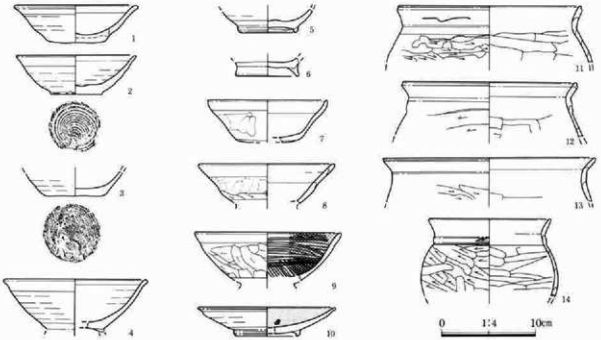
備　考　重複関係は本住居の後に34・36号住居が構築されている。



47図　35号住居



48図　35号住居出土遺物



49図　36号住居出土遺物

36 号 住 居

位 置　K－5　　**写 真**　PL6・7

形 状　東西に長軸を有する矩形を呈するが、北壁は中位で外側に屈曲して大きく張り出す。規模は、東西5.00m、南北の最大値は4.45mである。残存壁高は、8～21cmを測った。

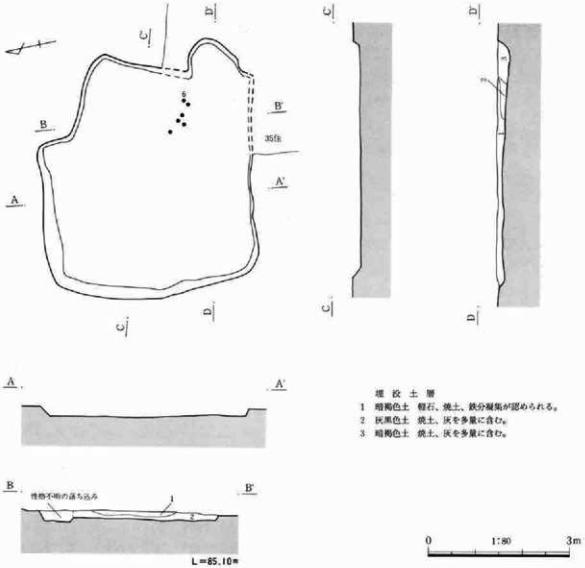
面 積　20.4㎡　　**方 位**　S74°30′E

埋没土　やや赤みのある暗褐色土と灰黒色土に分層できる。

竈　東壁に構築されている。燃焼部は住居の壁面を掘り込み作られており、焚口部の幅が広い。

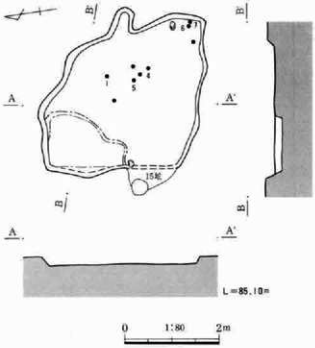
遺 物　竈の左手前、床面から高台付椀（6）が出土している。（観P20　写PL28）

備 考　竈の周辺は、35号住居の埋没土を削平して構築されていたため、壁面の検出が困難であった。また、形状の不整形な点は、2軒の住居が重複した結果と考えることもできようか。



埋 没 土 層
1　暗褐色土　軽石、焼土、鉄分凝集が認められる。
2　灰黒色土　焼土、灰を多量に含む。
3　暗褐色土　焼土、灰を多量に含む。

50図　36号住居



37 号 住 居

位 置 J－5　　**写 真** PL6

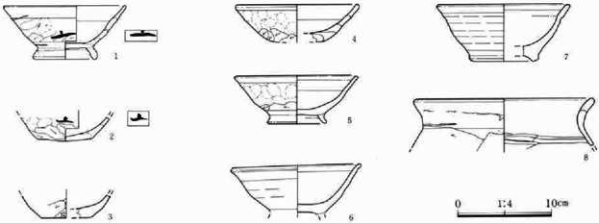
形 状 東壁に竈を有しており、矩形を基本とすると思われるが、南壁に比較して北壁が短く、全体に不整形な形状である。

面 積 推定9.8㎡　　**方 位** S73°30′E

竈 東壁の中央からやや北側寄りに位置する。住居の壁面を掘り込んで構築されているが、下幅は36cmと狭く、燃焼部の一部は住居内にあったと考えられる。

遺 物 竈の手前と南東隅から出土しているが、床面からの出土は高台付椀（6）のみでその他の杯、高台付椀は3～6cm程床面から離れて出土している。（観P21　写PL28）

備 考 西側際北半の掘り込みは床下土坑の可能性がある。



51図　37号住居とその出土遺物

38 号 住 居

位 置 I－8　　**写 真** PL7

形 状 南北に長軸を有するが比較的正方形に近い形状を呈する。南西隅は丸みをおび、鈍角になっている。規模は、南北4.53m、東西4.24mを測る。残存壁高は19～29cmである。

面 積 18.6㎡　　**方 位** N60°E

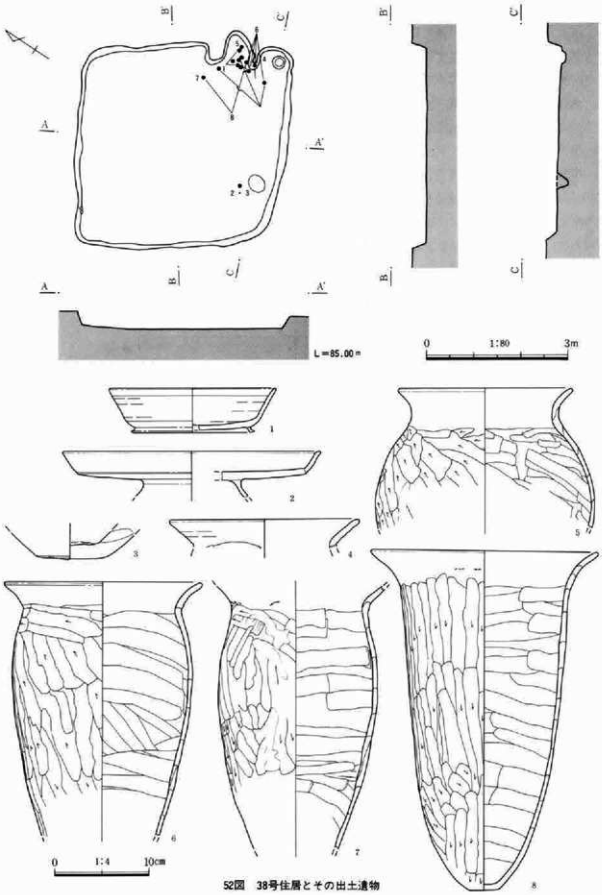
竈 東壁、南東隅寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、一部住居の壁面を掘り込んでいる。袖部は崩壊が著しいが左右とも残存していた。

貯蔵穴 南東隅にある。径26cm、深さ7cmである。

床 面 全体にやや踏み固められていた。

遺 物 竈燃焼部とその周辺から出土している。高台付杯（1）、甕（4～8）などがある。（観P22　写PL29）

備 考 南西隅に径35×32cm、深さ23cmのピットがある。住居との関係は不明である。



52図　38号住居とその出土遺物

39 号 住 居

位　置　I－9　　**写　真**　PL7

形　状　東西に長軸を有する縦長の矩形を呈する。東壁、竈の北側は緩やかな立ち上がりをなす。規模は、東西5.28m、南北4.46mである。残存壁高は38～59cmを測った。

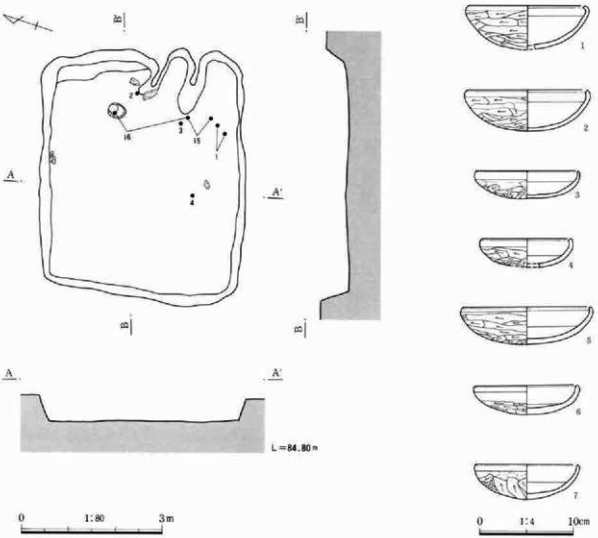
面　積　22.0m²　　**方　位**　N71°30′E

竈　東壁中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、左右の袖部が延びている。軸線は住居の軸線の方向と大きく異なり、S86°Eであった。奥壁は斜めに立ち上がり煙道に続くと思われる。火床面には炭化物が広がっていた。

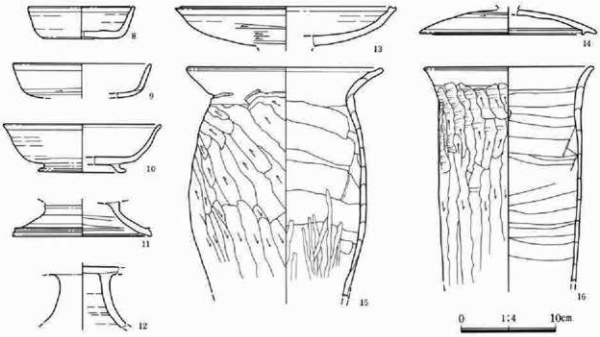
遺　物　竈左袖部の先端からは杯（2）が、右袖部の先端からは甕（15）が潰れた状態で出土している。竈の右脇から杯（1）が出土しているがいずれも床面から数cm離れて出土している。また、杯(4)、甕（16）は床面以下からの出土である。

（観P22・23　写PL29）

備　考　竈左袖部の先端とその左側から長軸25～40cmの自然礫が出土している。竈の構築材の可能性も考えられる。



53図　39号住居とその出土遺物



54図　39号住居出土遺物

40 号 住 居

位 置　J－10　　**写 真**　PL8

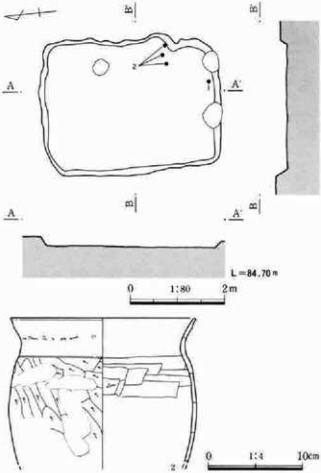
形 状　南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は、南北3.83m、東西2.89mを測る。残存壁高は、14～20cmである。

面 積　10.5m²　　**方 位**　S85°E

竈　形状は判然としなかったが東壁、南東隅近くの壁面が弱く彎曲しており、ここに燃焼部が位置していたと思われる。火床面は皿状に掘り込まれ、炭化物の堆積が認められた。

遺 物　竈燃焼部から甕（2）が出土した。（縦P24　写PL29）

備 考　3箇所でピットが重複している。南東隅のそれは径46cm、深さ19cmで貯蔵穴の可能性もあるが不明瞭である。



55図　40号住居とその出土遺物

41 号 住 居

位　置　K－8　　**写　真**　PL8

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、南東隅及び南壁東半分は42号住居により削平されている。規模は、南北3.90m、東西3.47mを測る。残存壁高は、23～30cmである。

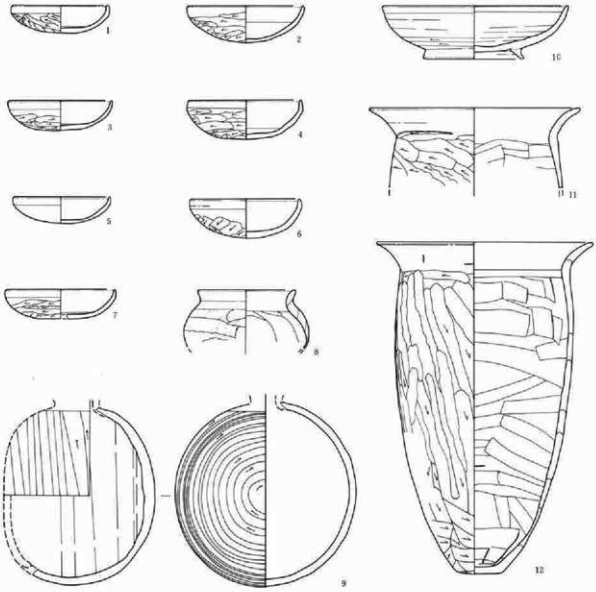
面　積　推定13.5m²

埋没土　青灰色土が堆積していた。

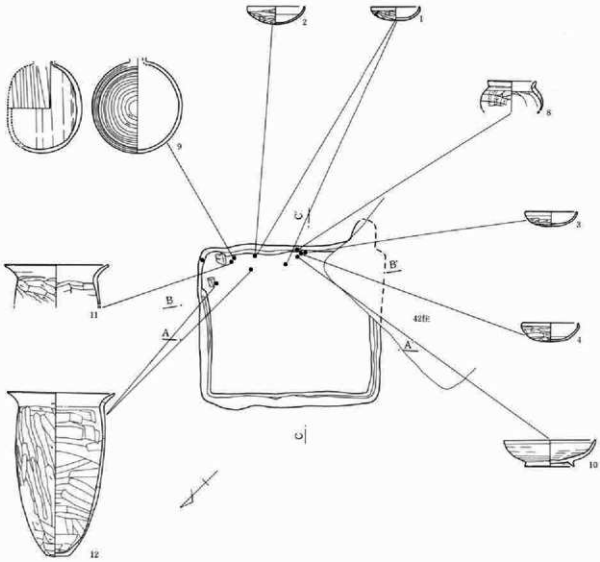
周　溝　全周していた可能性もあるが東壁・北壁の一部は未検出であった。断面はV字形に近い形状である。幅は5～7cm、深さ7～11cmである。

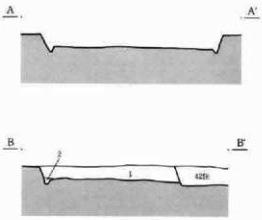
竈　判然としなかった。一つには42号住居との重複により削平された可能性がある。もう一つには北東隅の床面に2個の礫があり、周辺に土器が集中していた。これらの礫が竈の袖石であった可能性も考えられる。

遺　物　北東隅近くから甕（12）が出土、瓶（9）は甕（11）に重なって出土した。杯（1・2）は床面出土、杯（3・4）、高台付杯（10）は床面から4～6cm離れての出土である。(観P24・25　写PL30)



56図　41号住居出土遺物





堆　積　土　層

1　青灰色土　砂質である。礫石、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。

2　灰色土　周溝の埋土。

0　1:80　3m

57図　41号住居

42 号 住 居

位　置　K－8　　**写　真**　PL8

形　状　東西に長軸を有する矩形を呈すると思われるが、東壁は他の住居と重複し大半が検出できなかった。竈の左右をはじめ壁面は乱れている。規模は、東西3.98m、南北3.78mを測った。残存壁高は29～45cmである。

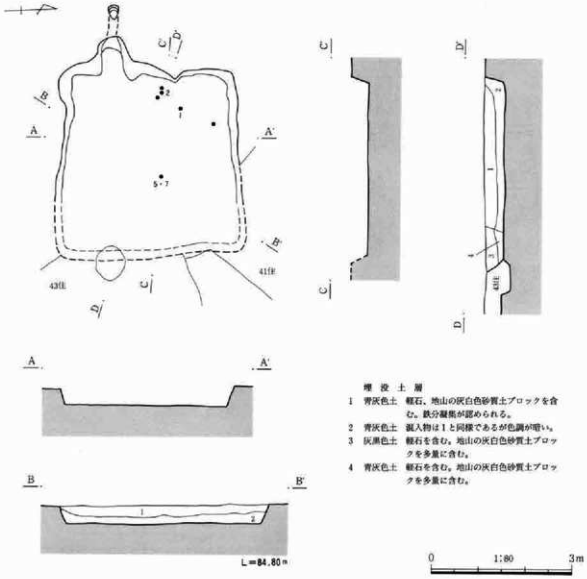
面　積　推定16.0m²　　**方　位**　N87°W

埋没土　青灰色土が堆積していた。色調により二層に分層できる。

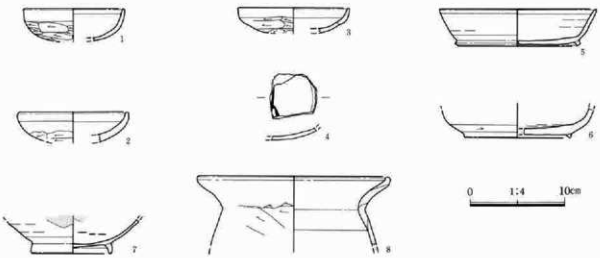
竈　西壁、南西隅近くに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。奥壁は斜面をなして煙道に移行する。煙道は約50cm続き、径20cmの煙出し孔に達する。比高差は27cmである。

遺　物　竈の右手前の床面から杯の破片（2）が出土している。埋没土中から墨書の記された杯の底部（4）が出土している。(観P25　写PL30)

備　考　41・43号住居と重複している。



58図　42号住居



59図　42号住居出土遺物

43 号 住 居

位　置　L－9　　**写　真**　PL8・9

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、他住居との重複が著しく、西壁をはじめとして検出できなかった部分が多かった。規模は、南北6.31mを測る。東西は5.26mを推定できる。残存壁高は良好な北東隅で39cmであった。

面　積　32.8m²　　**方　位**　N25°W

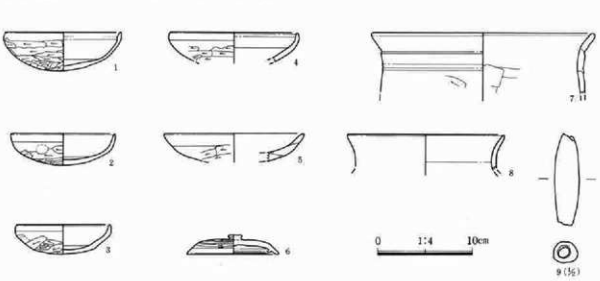
竈　北壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は住居内にあり左右の袖部が延びていたが崩壊は著しかった。最終火床面は奥側が高くなり斜面を形成していた。

貯蔵穴　北東隅に位置する。径78×56cm、深さ13cmであった。

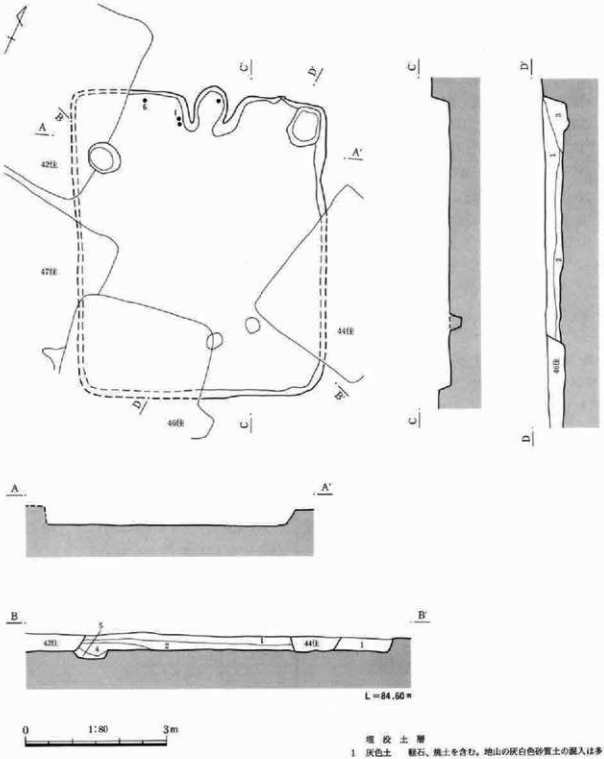
遺　物　竈燃焼部内から甕の破片が出土した。また、竈左袖部に接して杯（1）が、竈左側の壁際から須恵器の蓋（6）が出土している。その他に、埋没土中から土錘（9）が出土している。

（観P26　写PL30）

備　考　42・44・46・47号住居と重複する。46・47号住居は本住居よりも後出である。北西隅には径74×62cm、深さ19cmのピットがある。



60図　43号住居出土遺物



	堆	積 土 層
1	灰色土	軽石、焼土を含む。地山の灰白色砂質土の混入は多量である。鉄分凝集が認められる。
2	灰色土	1と同様の混入物の他に黒色土のブロックを含む。
3	灰黒色土	軽石、地山の灰白色砂質土を含む。
4	青灰色土	混入物は3と同様である。(3・4は別の遺構の埋戻土か)
5	青灰色土	軽石、焼土、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。

61図　43号住居

44 号 住 居

位　置　M－9　　**写　真**　PL9

形　状　南北に長軸を有する矩形で、各隅とも整美な形状を呈していたと思われる。南・西壁は、43号住居の埋没土を確認面としたためその検出が困難であった。規模は、南3.43m、東西2.64mを測る。残存壁高は良好な北東隅で40cmであった。

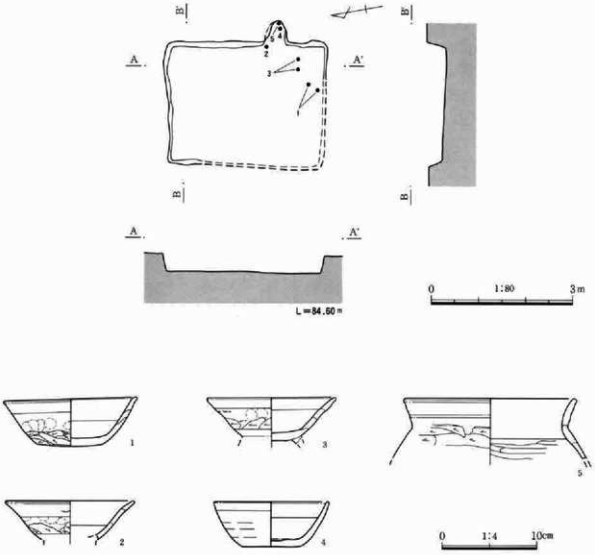
面　積　推定9.8m²　　**方　位**　S74°E

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。竈左側の壁面は下端が上端よりも入り込んでオーバーハングしている。

遺　物　竈の手前と南壁際に集中する。竈燃焼部からは杯（4）と甕（5）が出土している。高台付椀（2・3）は床面からの出土である。

（図P26・27　写PL30）

備　考　43・48号住居と重複する。



62図　44号住居とその出土遺物

46 号 住 居

位　置　L－9　　**写　真**　PL9

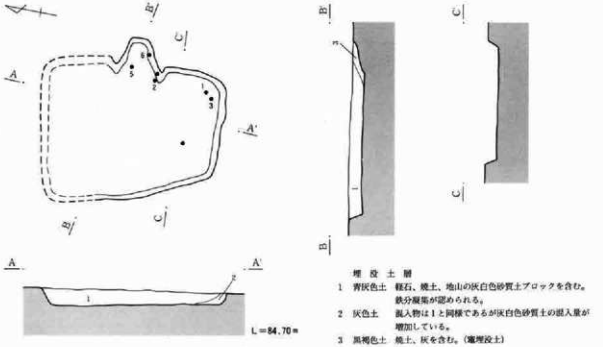
形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、他住居との重複関係から壁面は南側の半分を検出した。規模は、東西の最大値が3.04mである。南北はセクションで3.67mを測った。残存壁高は20cmである。

面　積　10.9m²　　**方　位**　N87°E

竈　竈は東壁のほぼ中央に位置すると思われる。燃焼部は住居内から一部壁面を掘り込んで構築されている。袖部は崩壊が著しく、構築材に用いられていた灰色の粘土が周辺に広がっていた。

遺　物　竈燃焼部内から甕（5・6）の破片が出土、右袖部の際から杯（2）が出土している。南東隅の杯（1・3）は床面からである。（観P27　写PL31）

備　考　43・47・90号住居と重複する。



63図　46号住居とその出土遺物

47 号 住 居

位　置　K－9　　**写　真**　PL9

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈するが、東壁、竈の左側は43・46号住居の埋没土を確認面としたため検出できなかった。規模は、南北4.59m、東西3.56mを測る。残存壁高は良好な北東隅で41cmであった。

面　積　推定16.6m²　　**方　位**　S83°E

埋没土　黒みのある黒褐色土、灰色土が堆積しており、3層に分層できる。

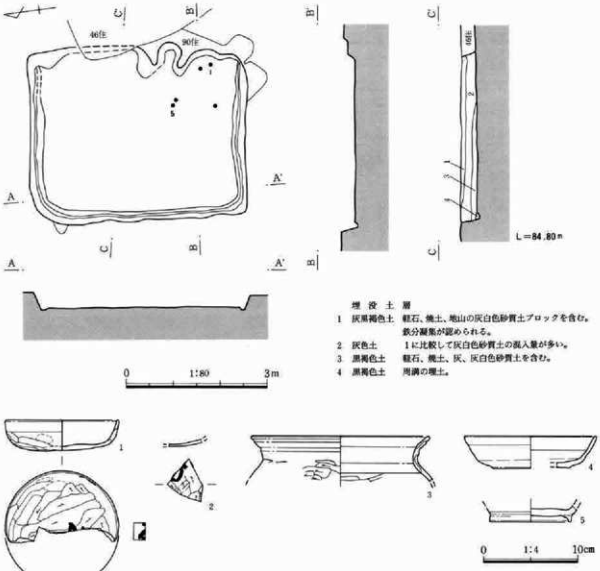
周　溝　東壁を除いて確認できた。幅は、上幅12～15cm、下幅5cm前後で、深さは3～6cmであった。

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、一部は壁面を掘り込んでいる。両側の袖部が延びているが残存状態は悪い。焚口部には径60cmの皿状の掘り込みがあり、炭化物が広がっていた。

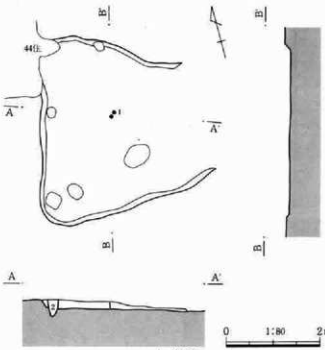
遺　物　杯（1）は南東隅の床面から3cm離れた出土であるが墨書が記されている。埋没土中からも墨書の記された杯（2）の破片が出土している。

（観P28　写PL31）

備　考　46・90号住居のいずれもが本住居より新しい時期に構築されている。



64図　47号住居とその出土遺物



48 号 住 居

位　置　M－9　　**写　真**　PL10

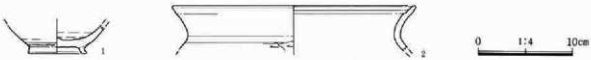
形　状　削平が著しく全体形状を把握することはできなかった。確認できた形状は、西壁を底辺とする台形状で、西壁の規模は4.03mであった。

埋没土　灰黒色土が堆積していた。

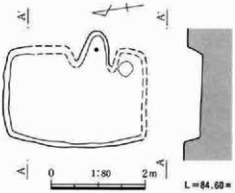
遺　物　床面の中央から高台付椀（1）が出土している。(観P28　写PL31)

備　考　北西隅は44号住居の削平を受けている。小ピットが5本重複しているが住居との関係は不明である。

埋 没 土 層
1　灰黒色土　軽石、地土を含む。鉄分凝集が認められる。
2　ピットの埋没土



65図　48号住居とその出土遺物



49 号 住 居

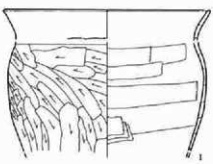
位　置　K－10　　**写　真**　PL10

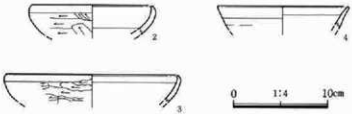
形　状　東壁に竈を持ち、南北に長軸を有する小矩形と考えられる。50・51号住居との重複により竈と北・西壁の一部を確認したのみに止まった。規模は、東西2.02mを測る。南北は2.20m程を推定できる。

面　積　推定6.2m²　　**方　位**　S80°E

竈　判然としない点もあるが、燃焼部は住居内にあり、一部住居の壁面を掘り込んで構築されていると思われる。火床面には炭化物の層が広がっていた。

遺　物　埋没土中から杯・甕の破片が出土した。(観P27)





66図　49号住居とその出土遺物

50 号 住 居

位 置　L－10　　**写 真**　PL10

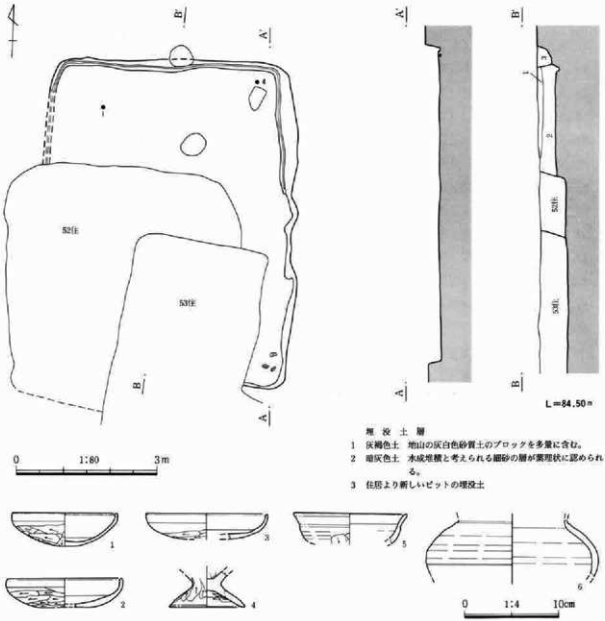
形 状　周辺の住居との重複により判然としないが南北に長軸を有する矩形を呈していたと思われる。南・西壁の大半は検出できなかった。また、竈の位置も確認できなかった。規模は、南北6.78m、東西5.28mを測る。残存壁高は27～37cmである。

埋没土　灰褐色土と暗灰色土に分層できる。

周 溝　北壁及び東・西壁際の一部に確認できた。幅は上幅が8cm前後、下幅が2～3cmである。深さは3～6cmであった。

遺 物　北東隅の床面から台付甕（4）の破片が出土している。（観P29　写PL31）

備 考　調査時点では2軒の住居として確認していたが、明確な分割が困難であったため、今回は単体として報告するものである。また、埋没土の下層、暗灰色土中には細砂が葉理状に堆積しているが、調査の所見では、これは遺跡が洪水等に見舞われたことを示唆する可能性があること指摘している。



67図　50号住居とその出土遺物

51 号 住 居

位　置　K−11　　**写　真**　PL10

形　状　周辺の住居や4号溝との重複により全体形状を把握することはできなかった。竈の構築された西壁と南西隅の周辺を検出した。整美な形状が想定できる。南北の規模は49号住居により切られており限界が確認できないが5.00m以上を測る。残存壁高は43〜47cmと良好であった。

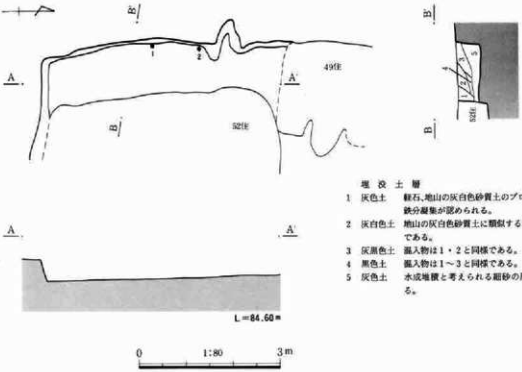
方　位　N90°E

埋没土　灰色土と黒色土及びその中間層と細分できた。軽石、地山の灰白色砂質土を多く含む。

竈　西壁に位置する。燃焼部は住居内にあり一部住居の壁面を掘り込んで構築されており、奥壁は細くなり煙道へと移行している。袖部は崩壊が著しいが左袖は住居内にその痕跡を残していた。

遺　物　杯が出土しているが床面からのものは無かった。(観P29　写PL31)

備　考　49・50・52号住居、4号溝と重複する。



埋 没 土 層

1　灰色土　軽石、地山の灰白色砂質土のブロックを含む。鉄分凝集が認められる。

2　灰白色土　地山の灰白色砂質土に類似するが粒子が微細である。

3　灰黒色土　混入物は1・2と同様である。

4　黒色土　混入物は1〜3と同様である。

5　灰色土　水成堆積と考えられる細砂の層が認められる。

68図　51号住居とその出土遺物

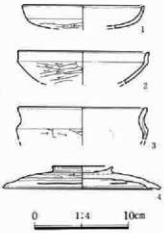
52 号 住 居

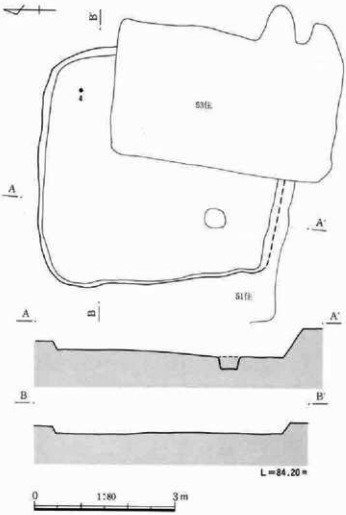
位　置　L−11　　**写　真**　PL10

形　状　隅丸の矩形を呈する。53号住居との重複により南東隅が削平されたため、全体の形状を把握することはできなかったが南北5.35m、東西5.13mを測る。残存壁高は20cm前後であった。

遺　物　北東隅の床面から蓋（4）が出土している。（観P28　写PL31）

備　考　50・51・53号住居、4号溝と重複する。50・51号住居よりも新しい時期の構築と考えられる。





69図　52号住居とその出土遺物

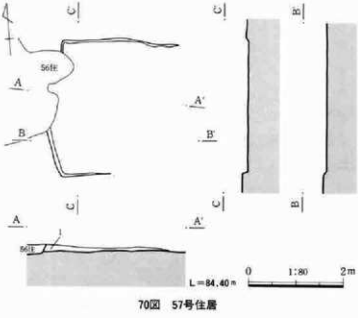
57 号 住 居

位　置　M−11　　**写　真**　PL10

形　状　56号住居の東側にあったが、削平著しく全体の形状を確定するには至らなかった。南北2.82m、東西2.52m以上であった。

埋没土　灰白色土が堆積していた。

遺　物　遺物は全く出土しなかった。



70図　57号住居

埋 没 土 層

1　灰白色土　軽石、地山の灰白色砂質土ブロックを含む。鉄分凝集が認められる。

53 号 住 居

位　置　L－11　　**写　真**　PL10

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。北・西壁の大半は52号住居の埋没土を掘り込んで構築されており、住居の規模はセクションで確認した。東壁は竈の右側が若干張り出している。床面の規模は、南北4.46m、東西2.54mを測った。残存壁高は南壁が良好で46～57cmであった。

面　積　推定15.0m²　　**方　位**　S81°E

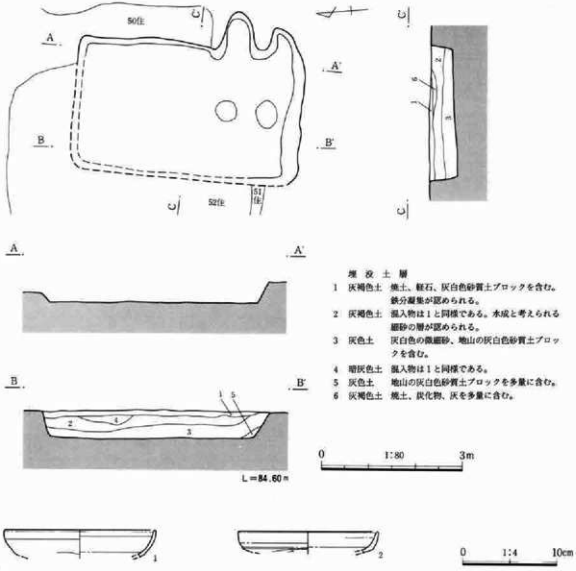
埋没土　灰褐色土、灰色土が堆積、3層に分層できる。調査所見ではこれらの埋没土が洪水等水流の影響を受けて堆積した可能性を指摘している。

竈　東壁、南東隅寄りに位置する。燃焼部は焚口部を住居内に置き、住居の壁面を掘り込んで構築されている。

床　面　竈の手前はやや踏み固められていた。

遺　物　床面からの出土は無く、埋没土中から杯の破片が出土している。(図P30)

備　考　住居内に２本の小ピットがあるが住居との関係は掌握できなかった。



71図　53号住居とその出土遺物

55 号 住 居

位　置　M—10　　**写　真**　PL10

形　状　56号住居との重複により南西隅が削平されている。北壁に長軸をもつ矩形を呈するが、南壁は乱れている。規模は、南北4.50m、東西4.26mを測る。削平が著しく、残存壁高は8～15cmである。

面　積　推定19.0m²　　**方　位**　N36°W

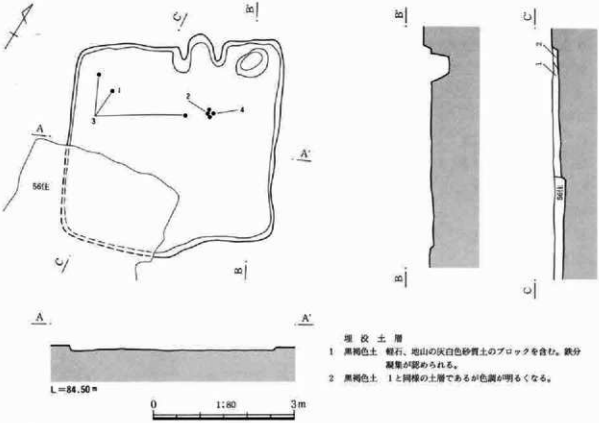
埋没土　黒褐色土が堆積していた。色調により2層に分類できる。

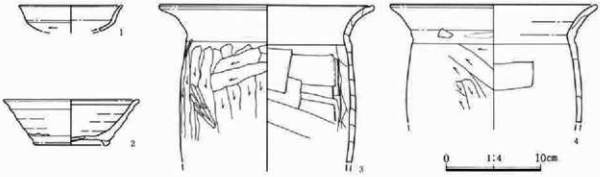
竈　北壁の中央からやや東側に位置する。燃焼部は住居内にあり左右の袖部が延びている。残存状態は不良であった。

貯蔵穴　竈の右側、北東隅に位置する。楕円形に近い円形で、径76×53cm、深さ38cmを測った。

遺　物　竈の手前から高台付椀（2）、甕（4）が、北西隅から杯（1）が出土した。甕（3）は北西隅と竈手前の破片が接合した。（観P30　写PL31）

備　考　56号住居によって切られている。





72図　55号住居とその出土遺物

56 号 住 居

位　置　M−11　　**写　真**　PL10

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は、南北4.40m、東西3.20mを測る。残存壁高は、15〜23cmであった。

面　積　14.9m²　　**方　位**　N78°W

埋没土　暗灰褐色土が堆積していた。

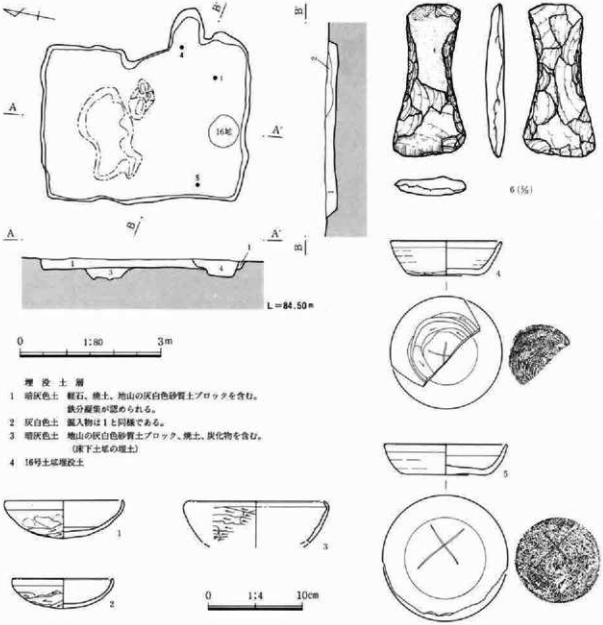
竈　東壁、南東隅寄りに位置している。燃焼部は住居壁面を掘り込んで構築されている。燃焼部とその手前には皿状の掘り込みがある。

床　面　全体にやや踏み固められている。床面の中央、やや北側に床下土坑が認められた。

遺　物　竈燃焼部から杯（4）が、南東隅の床面から杯（1）が出土している。杯（4・5）の底部外面には筆により「X」の刻書が施されている。埋没土中から打製石斧（6）が出土している。

（観P31　写PL31）

備　考　55・57号住居を切っている。南壁際に16号土坑が重複している。



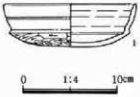
73図　56号住居とその出土遺物

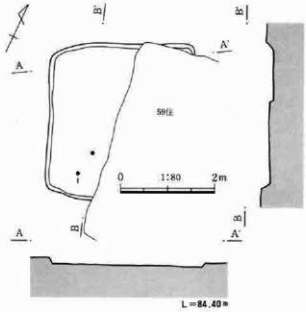
58 号 住 居

位　置　M−12　　**写　真**　PL11

形　状　東側は59号住居により削平され、全体形状を把握することはできなかった。南北に長軸を有するが正方形に近い形状を呈していたと思われる。竈は東壁に構築され、削平を受けたものと考えられる。

遺　物　南西隅、床面から6cm離れて杯（1）が出土している。（観P32　写PL32）





74図　58号住居とその出土遺物

59 号 住 居

位　置　M−12　　**写　真**　PL11

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。規模は、南北4.50m、東西3.32mを測る。残存壁高は5〜18cmである。

面　積　15.5m²　　**方　位**　N99°E

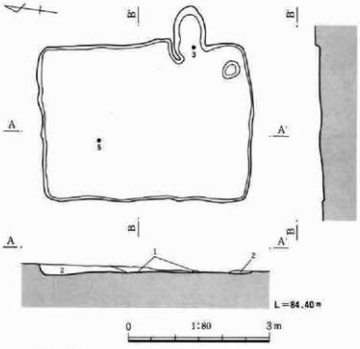
埋没土　灰色土層が堆積していた。

竈　東壁、南東隅近くに位置する。燃焼部は住居内から住居壁面を掘り込んで構築されている。左右の袖部は残存状態が不良である。火床面は焚口部より若干低くなり、炭化物が散見された。

貯蔵穴　南東隅に位置する。径39×32cm、深さ15cmであった。

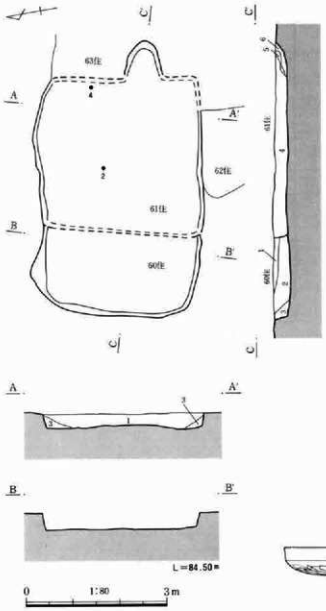
遺　物　竈燃焼部内から杯（3）が、床面中央、やや北側から蓋（5）が出土している。（観P31　写PL32）

備　考　58号住居を削平して構築されている。



埋 没 土 層
1　灰色砂質土　鉄分凝集が認められる。
2　灰色土　礫石、地山の灰白色砂質土ブロックが含まれる。

75図　59号住居とその出土遺物



埋没土層　60号住居
1　灰色土　軽石、地山の灰白色砂質土・黒褐色土のブロックを含む。鉄分凝集が認められる。
2　灰色土　1と同様の混入物の他に焼土を含む。1よりも色調が明るくなる。
3　灰色土　1と同様の混入物を含む。色調は暗くなる。

埋没土層　61号住居
1　灰色土　地山の灰白色砂質土ブロックを多量に含む。軽石、焼土、黒褐色土のブロックも含まれる。
2　焼土層　灰を含む。(2・3は竈の埋没土である)
3　灰層　焼土を多量に含む。

60 号 住 居

位　置　I−12　　**写　真**　PL11

形　状　東側は61号住居により削平されており全体形状を把握することはできなかった。南北の規模は3.35mを測る。西壁の残存壁高は33〜37cmである。

埋没土　灰色土層が堆積している。

遺　物　全く出土しなかった。

61 号 住 居

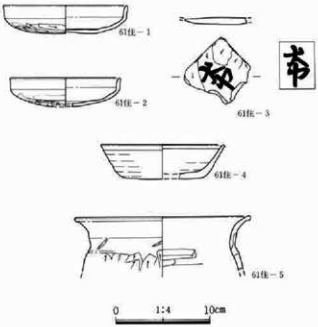
位　置　K−12　　**写　真**　PL11

形　状　他住居との重複により東西の両壁は検出できずセクションで確認した。竈の位置からすると正方形に近い矩形を呈していたと考えられる。規模は、東西3.53mを測り、南北3.20m程を推定できる。

面　積　推定11.8m²　**方　位**　S80°E

遺　物　床面から杯（2・4）が出土、埋没土中から墨書の記された杯（3）が出土した。（観P32　写PL32）

備　考　60・62・63号住居と重複する。いずれの住居よりも新しいと考えられる。



76図　60・61号住居と61号住居出土遺物

62 号 住 居

位 置　K−13　　**写 真**　PL11

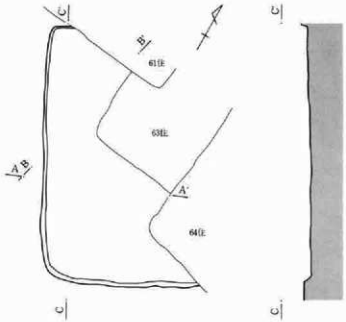
形 状　61・63・64号住居との重複により全体形状を把握することはできなかった。南北の規模は5.48m、東西は3.36m以上を測る。残存壁高は14〜19cmである。

埋没土　灰色土が堆積、3層に分層できた。

遺 物　少量が埋没土中から出土した。

(観P32)

備 考　重複するいずれの住居よりも古い時期の構築と考えられる。

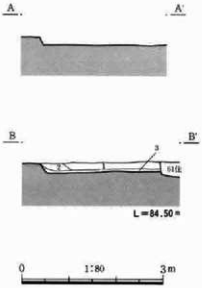


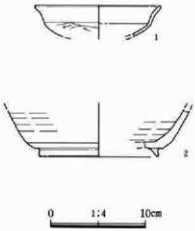
埋 没 土 層

1　暗灰色土　軽石、地山の灰白色砂質土を含む。鉄分凝集が認められる。

2　灰黒色土　混入物は1と同様である。

3　灰色土　混入物は1・2と同様である。





77図　62号住居とその出土遺物

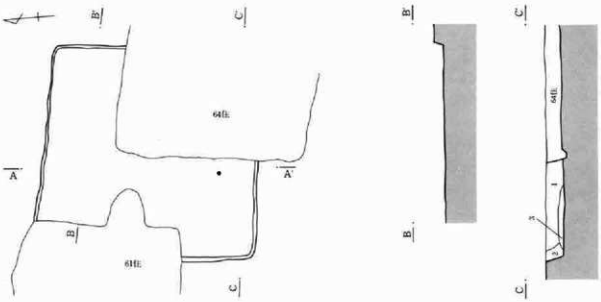
63 号 住 居

位　置　K−13　　**写　真**　PL11

形　状　61・64号住居と重複、削平を受けたため北東・南西の二隅とその周辺を検出したに止まった。規模は、南北4.58m、東西4.56mを測り、ほぼ正方形に近い矩形で整美な形状を呈していたと思われる。

埋没土　灰色土が堆積していた。

遺　物　埋没土中から杯・甕の破片が出土している。（観P30）

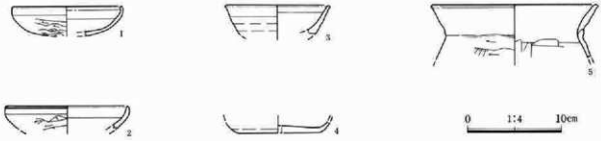


埋 没 土 層

1　灰黒色土　軽石、地山の灰白色砂質土を多量に含む。鉄分凝集が認められる。

2　灰黒色土　軽石を含み、灰白色砂質土を多量に含む。

3　灰色土　混入物の状態は2と同様である。



78図　63号住居とその出土遺物

64 号 住 居

位　置　L－13　　**写　真**　PL11

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。整った形状であるが竈の右側はやや内側に入り込んでいる。規模は、南北4.16m、東西3.42mを測る。残存壁高は良好な東側で34cmである。

面　積　14.0㎡　　**方　位**　S76°E

埋没土　灰色土が堆積していた。

周　溝　竈の周辺を除いて確認した。北壁際と西壁際の北半分は広く、上幅16cm、下幅10cmであったがその他は上幅10cm以下であった。深さは6～9cmである。

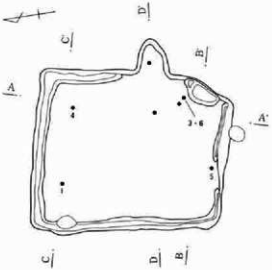
竈　東壁中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。火床面から焚口部にかけては炭化物、灰が散見された。

貯蔵穴　竈の右側に位置する。径82×38cm、深さ31cmの不整形を呈する。

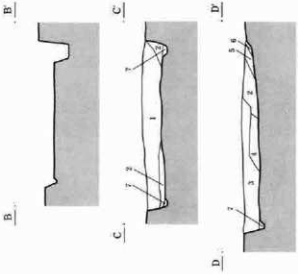
遺　物　竈の燃焼部内から甕の破片が出土した。北西隅の床面から杯（1）が出土した。

（観P33　写PL32）

備　考　重複する62・63号住居を削平する。

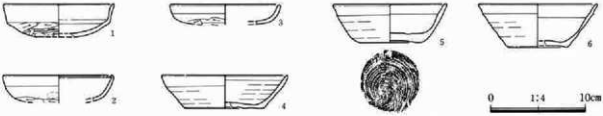


0　1:80　3m



堆 積 土 層

1　灰色土　軽石、地山の灰白色砂質土ブロックを含み、黒色土が縞状に横に入る。鉄分凝集が認められる。
2　暗灰色土　軽石を含む。鉄分凝集が認められる。
3　灰色土　軽石、炭化物、地山の灰白色砂質土ブロックを多量に含む。
4　灰色土　軽石、焼土を含み、地山の灰白色砂質土ブロックを多量に含む。鉄分凝集が認められる。
5　暗灰色土　焼土、灰を多量に含む。（5・6は竈埋没土）
6　暗灰色土　焼土を含む。
7　暗灰色土　周溝の埋土。



0　1:4　10cm

79図　64号住居とその出土遺物

65 号 住 居

位　置　E－18　　**写　真**　PL11

形　状　東西に長軸を有するが正方形に近い形状である。各壁面とも直線的に延び整美な形状である。規模は、東西5.58m、南北5.46mを測る。残存壁高は、20～30cmである。

面　積　30.3㎡　　**方　位**　N 9°W

周　溝　全周する。南東隅をはじめ部分的に乱れているが上幅8～10cm、下幅4～7cm、深さ4・5cmであった。

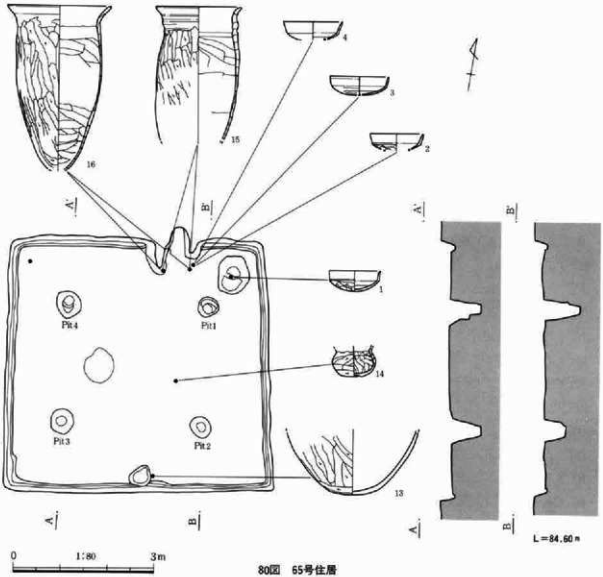
柱　穴　主柱穴と思われる4本を確認した。Pit 1は、径41×38cm、深さ80cm。Pit 2は、径45×40cm、深さ48cm。Pit 3は、51×47cm、深さ70cm。Pit 4は、径54cm、深さ66cmであった。また、南壁際の中央に径43×36cm、深さ21cmのピットがある。

竈　北壁の中央からやや東側に位置する。燃焼部は住居内にあり左右の袖部が延びていたが残存状態は不良である。両袖とも甕を補強材に据えていた。

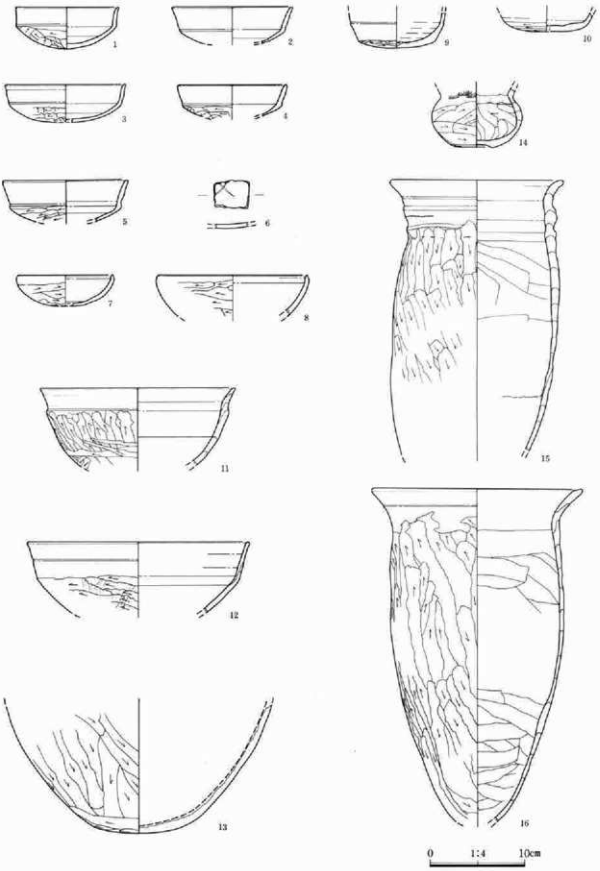
貯蔵穴　竈の右側、北東隅に位置する。原形は矩形を呈していたと思われるが、現状では80×65cmの不整円形である。底面は二段になり北側が低く、深さ60cm、南側は16cmであった。南側から杯（1）が出土している。

遺　物　床面の中央、やや南側から坩（14）が出土している。（観P34・35　写PL32）

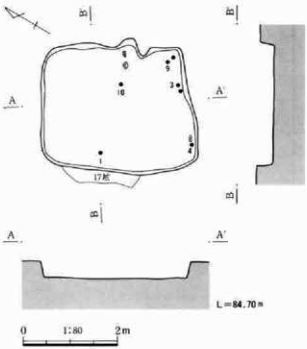
備　考　床面の中央、やや北側に小ピットがある。



80図　65号住居



81図　65号住居出土遺物



66 号 住 居

位 置 G−17　　**写 真** PL12

形 状 南北に長軸を有する矩形であるが、東壁に比較して西壁がやや長い。隅は丸みをおびている。南北の規模は西側で3.31m、東側で3.00mである。東西は2.69mである。残存壁高は33〜37cmを測った。

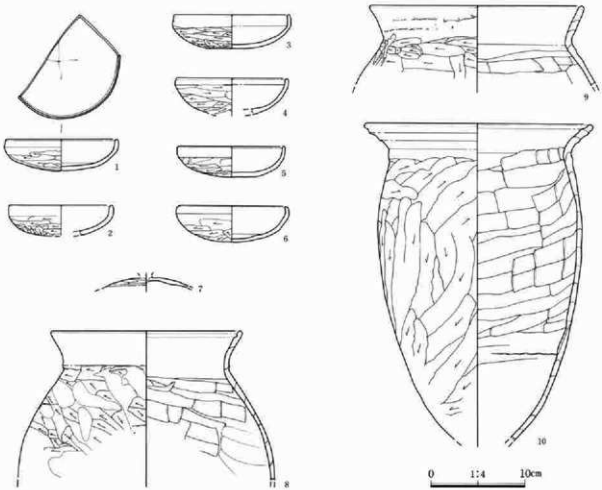
面 積 8.3m²　　**方 位** N57°E

竈 東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居内にあるが崩壊が著しく、両側の袖部もその大半が存在しない。火床面に支脚として自然円礫が据えられている。

遺 物 竈焚口部前に甕（10）が倒壊している。杯（1・4）は床面からの出土である。

（観P35　写PL32）

備 考 西壁には17号土坑が重複する。



82図　66号住居とその出土遺物

67 号 住 居

位 置　E−20　　**写 真**　PL12

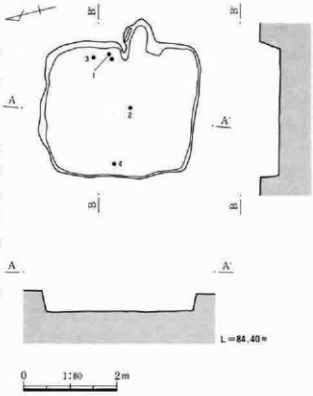
形 状　南北に長軸を有する矩形を呈する。四隅はやや丸みをおびている。規模は、南北3.28m、東西2.87mを測る。残存壁高は36〜47cmである。

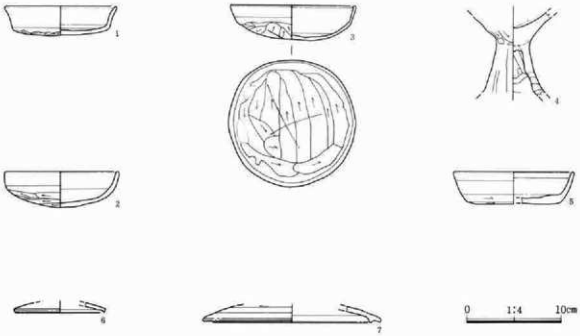
面 積　9.1㎡　　**方 位**　S74°E

竈　東壁中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居内から、一部壁面を掘り込んで構築されている。火床面は皿状にくぼんでいる。住居内には左右の袖部が延びるがその残存状態は不良である。竈の左壁はテラス状の段を有しているが、これは掘りかたの可能性がある。

遺 物　竈の左側から杯（1・3）が出土している。床面中央からは杯（2）が出土している。

（観P33　写PL33）





83図　67号住居とその出土遺物

68 号 住 居

位　置　H−19　　**写　真**　PL12

形　状　東西4.06m、南北4.01mを測り、正方形に近い形状を呈する。残存壁高は22〜29cmである。北東隅は3号溝の掘削により削平されている。

面　積　16.6㎡　　**方　位**　N14°W

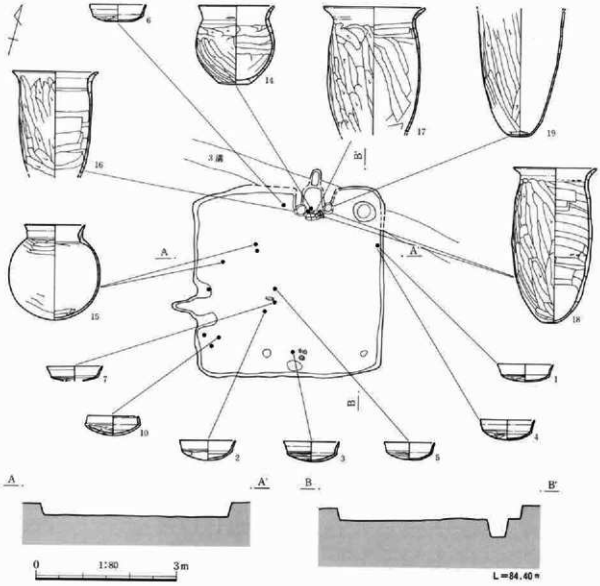
竈　北・西壁の2箇所に構築されている。両者ともに袖部が残存しており前後関係が判然としない点もあるが北壁の竈が新しいものであろうか。西側の竈は西壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、筒状の煙道が住居壁外に延びている。北側の竈は3号溝により破壊されている。住居内に左右の袖部が延び、左側には甕（16）、右側には甕（18・19）が据えられていた。焚口部の甕（17）も竈構築材の可能性がある。住居外に煙道が延びている。

貯蔵穴　北東隅に位置する。円形で径52×43cm、深さ38cmを測る。

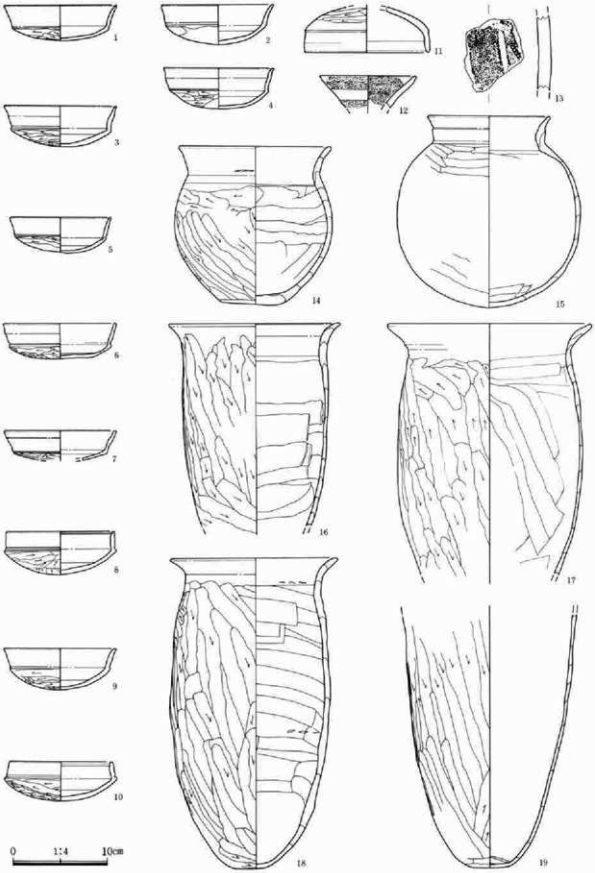
遺　物　北側の竈の燃焼部内から甕（14）が、竈左脇の床面から杯（6）が出土している。南壁際の杯（3）は床面からの出土である。また、埋没土中から縄文土器（13）の破片が出土している。

（図P36・37　写PL33）

備　考　南壁際に小ピットが3本ある。



84図　68号住居



85図　68号住居出土遺物

69 号 住 居

位　置　I－20　　**写　真**　PL13

形　状　東西に長軸を有する縦長矩形である。北・西壁は弧状にやや張り出す。東壁は竈の左右で大きく食い違う。竈の左側、北東隅は東側に62cm程張り出している。規模は、東西が2.47～3.20m、南北2.32mを測った。残存壁高は17～32cmである。

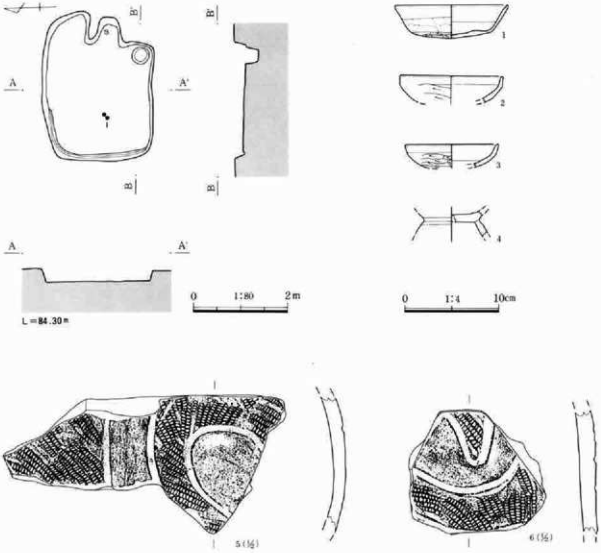
面　積　6.9m²　　**方　位**　S88°E

周　溝　西壁際と北壁の西側部分で確認できた。幅は上幅6cm、下幅2cm前後で、深さ2cmである。

竈　東壁中央にある。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。袖部分の残存状態は劣悪である。燃焼部には支脚として自然円礫が据えられている。

貯蔵穴　竈の右側、南東隅にある。円形で径38cm、深さ23cmを測る。

遺　物　出土量は少量で、中央のやや西側寄りから杯（1）が床面から6cm離れて出土している。埋没土中からは縄文土器（5・6）が2片出土している。（縄P37　写PL33）



86図　69号住居とその出土遺物

70 号 住 居

位 置　H−21　　**写 真**　PL13

形 状　正方形に近い形状を呈すると思われるが、南壁は71号住居の埋没土を掘り込んで構築されていたためセクションでの確認に止まった。規模は、東西3.06m、南北3.03mを測った。残存壁高は9～16cmである。

面 積　推定9.0m²　　**方 位**　S86°E

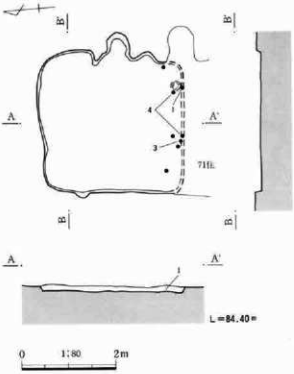
竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築され、左右の袖部が短く残っている。燃焼部内には炭化物が若干散見された。

床 面　竈の前を中心にやや踏み固められていた。

遺 物　南壁寄りから杯（1）、壺（4）、甕（3）が出土している。(観P38　写PL33)

備 考　南側の71号住居を削平して構築されている。

埋 設 土 層
1　灰褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土を含む。



87図　70号住居

71 号 住 居

位 置　H−21　　**写 真**　PL13

形 状　70号住居との重複により北側は削平され全体形状を把握することはできなかった。東西の規模は2.95m、南北1.85m以上を測る。残存壁高は15cmである。

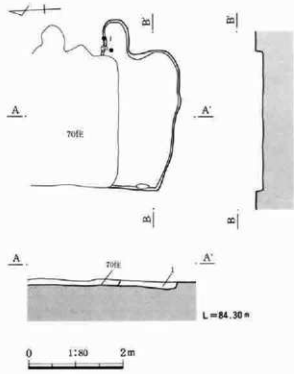
方 位　S85°E

埋没土　灰褐色土が堆積していた。

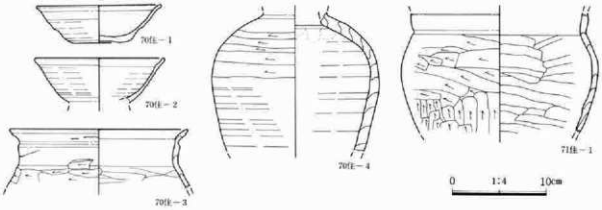
竈　東壁に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込み構築されている。右壁前には粘土の堆積が確認でき袖部が存在していた可能性が高い。火床面には炭化物が多く認められ、焚口部前にも広範囲に広がっていた。

遺 物　竈燃焼部から甕（1）の破片が出土した。(観P37)

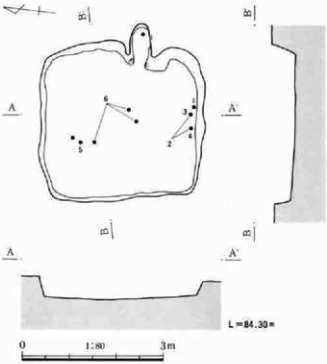
埋 設 土 層
1　灰褐色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土を含む。
　　70号住居の埋没土と比較して色調が明るい。



88図　71号住居



89図　70・71号住居出土遺物



72 号 住 居

位　置　F－22　　**写　真**　PL13

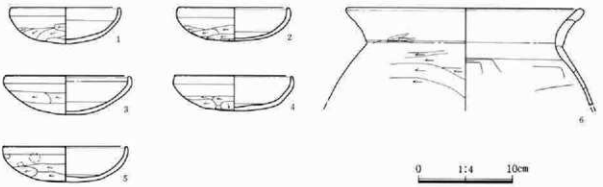
形　状　南北に長軸を有するがほぼ正方形に近い形状を呈する。東側の二隅に顕著であるがやや丸みを持つ。また、東壁は他の壁に比較して斜めに立ち上がる。規模は南北3.49m、東西3.39mである。残存壁高は37～48cmである。

面　積　11.1m²　　**方　位**　N86°30′E

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁際から住居壁面を掘り込んで構築されている。袖部は崩壊が著しいが左右のそれが住居内に延びていた。

床　面　地山には小円礫が多数含まれている。

遺　物　南壁際の中央から杯（1～4）が出土している。（観P38　写PL34）



90図　72号住居とその出土遺物

73 号 住 居

位　置　G−22　**写　真**　PL13

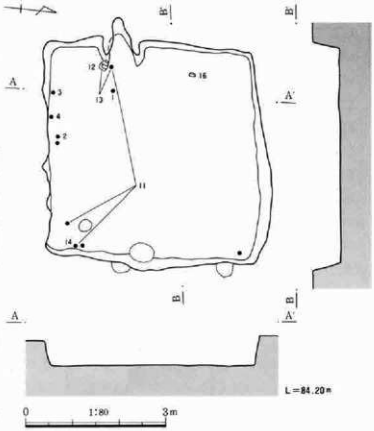
形　状　東西4.83m、南北4.41mを測る縦長の矩形である。南壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い状態である。

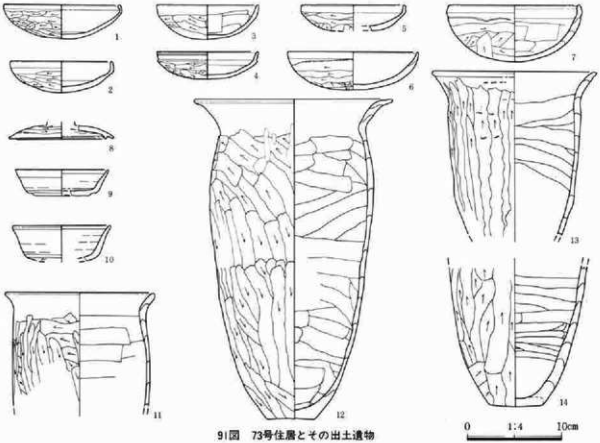
面　積　21.8m²　**方　位**　S85°W

竈　西壁、南西隅寄りに位置する。燃焼部は住居の壁際にあり左右の袖部が延びている。左袖部には甕（12）が倒立して置かれており、補強材となっていた。火床面からは炭化物が少量散見された。奥壁は斜めに立ち上がり煙道部に移行している。

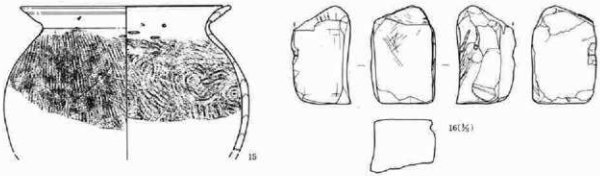
遺　物　南壁際の床面から杯（2〜4）が、竈の右側の床面から砥石（16）が出土している。（観P38・39　写PL34）

備　考　東壁際に2箇所、壁と重複して2箇所小ピットが検出された。住居の施設の可能性がある。





91図　73号住居とその出土遺物



92図　73号住居出土遺物

74 号 住 居

位　置　H−22　　**写　真**　PL14

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。南東隅は丸みをおび、南壁が東側に開いている。その他の3隅は整然としている。規模は、南北4.22〜4.81m、東西3.21mを測る。残存状態は悪く、壁高は9〜14cmである。

面　積　15.5m²　　**方　位**　S86°30′E

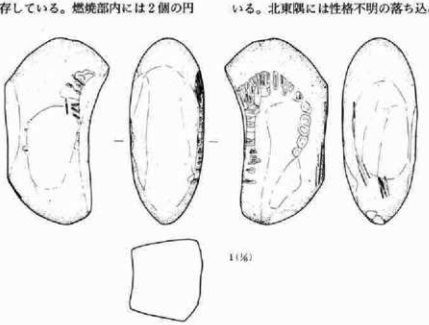
竈　東壁に位置し、並列する2基を検出した。調査の所見では北側の竈が先出である。この第一次竈は北東隅寄りに位置し、住居の壁面を掘り込んで構築されている。第二次竈は南東隅寄りに位置し、こちらも住居の壁面を掘り込んで構築されている。左右の短い袖部が残存している。燃焼部内には2個の円礫が置かれており支脚と思われる。

貯蔵穴　南東隅に径23cm、深さ17cmのピットがあり、その可能性が強い。

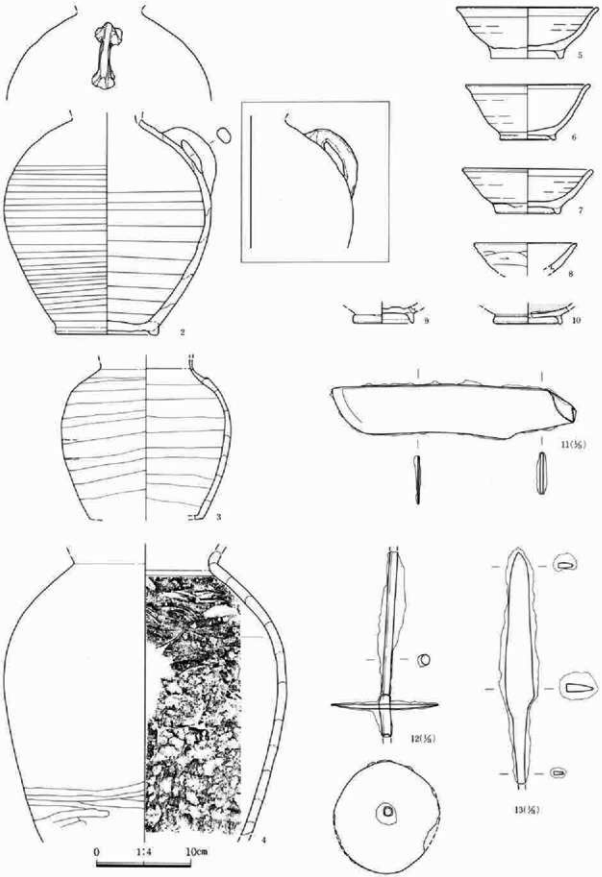
遺　物　把手付壺（2）、壺（3・4）が破片の状態で広範囲から出土している。高台付椀（5・6）は床面からの出土であるが$\frac{1}{2}$あるいは$\frac{1}{4}$である。南壁際からは大型の荒砥石（1）が出土した。鉄製品では第二次竈左脇から鎌(11)が、北壁際から刀子(13)が、西壁際から紡錘車（12）が出土している。

（観P40　写PL35）

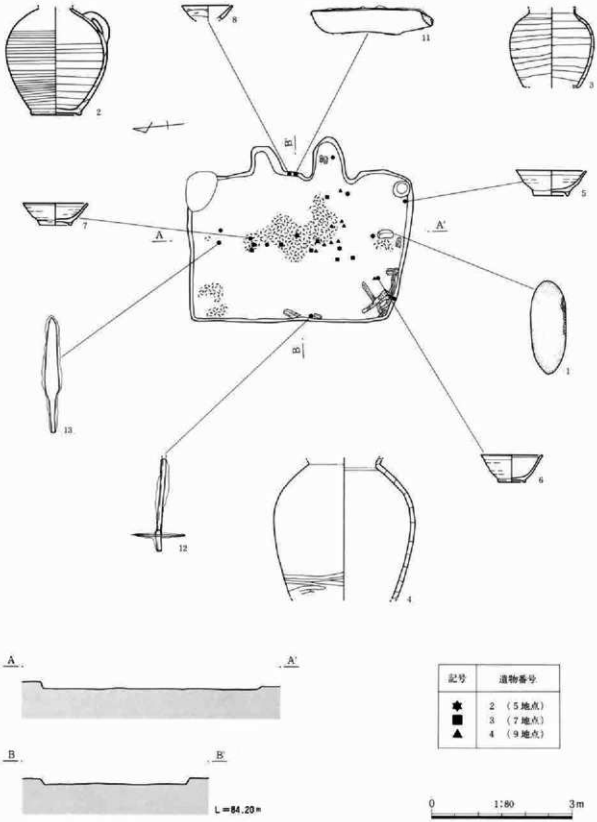
備　考　本住居は焼失住居である。床面一面に炭化物が広がり、壁際には炭化材が多く認められた。出土土器も二次火熱のため表面が赤化、脆弱になっている。北東隅には性格不明の落ち込みがある。



93図　74号住居出土遺物



94図　74号住居出土遺物



95図　74号住居

75 号 住 居

位　置　F－24　　**写　真**　PL15

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。南北3.46m、東西3.02mを測る。西壁は76号住居との重複で一部分が乱れているがその他は整美な形状である。残存壁高は15～21cmである。

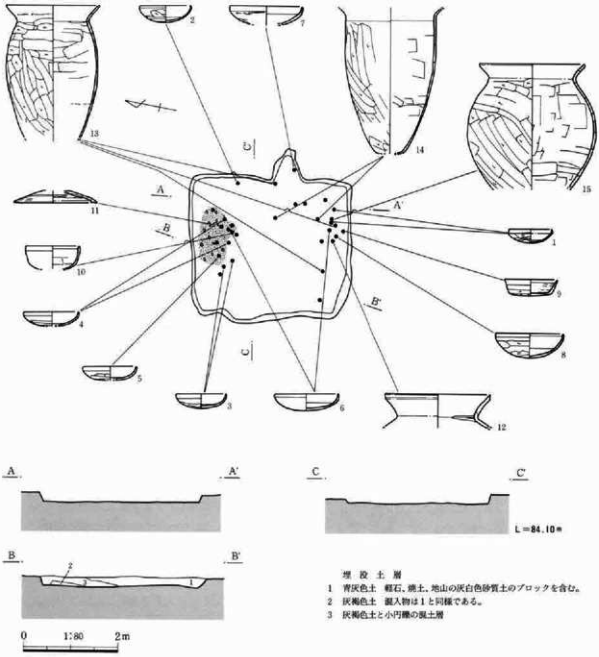
面　積　10.4m²　　**方　位**　N83°E

埋没土　青灰色土、灰褐色土が堆積している。

竈　東壁中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。奥壁には煙道部への移行部分が残る。焚口部の左側には甕(14)があり、袖部の補強材になっていた可能性が強い。

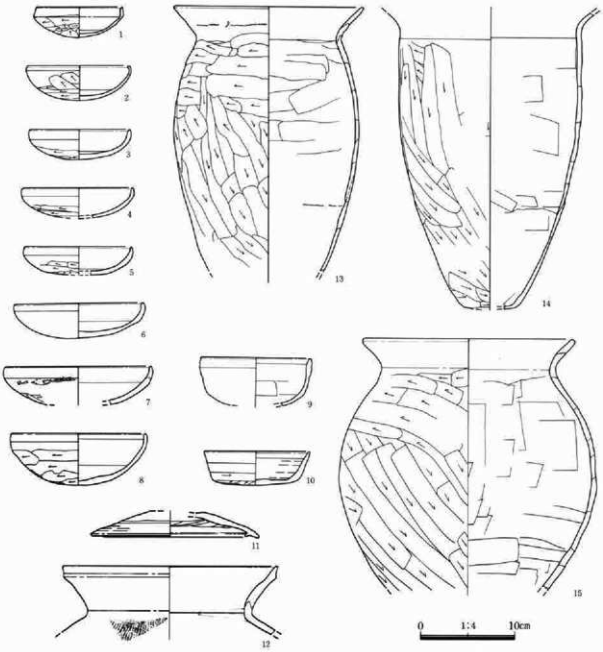
遺　物　杯、甕が床面の広範囲から出土している。杯（1・4・6・8・10）は完形に近いものでいずれも床面からの出土である。(観P42・43　写PL34)

備　考　北壁近くの120×70cmの範囲には径5cm前後の小円礫が多く含まれた土層が厚さ5cm程堆積していた。周辺から土器が多く出土している。



埋設土層
1　青灰色土　軽石、焼土、地山の灰白色砂質土のブロックを含む。
2　灰褐色土　混入物は1と同様である。
3　灰褐色土と小円礫の混土層

96図　75号住居



97図　75号住居出土遺物

76 号 住 居

位 置　F—24　　**写 真**　PL15

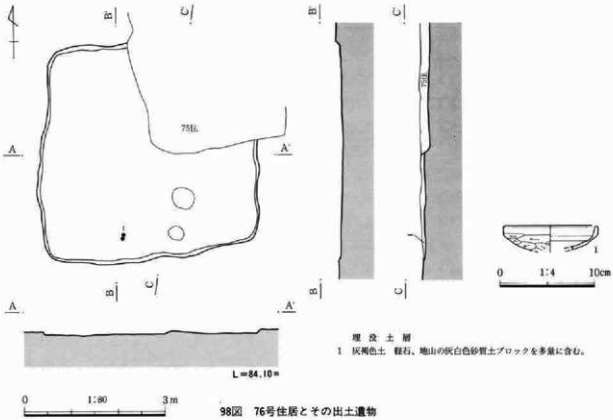
形 状　東西4.73m、南北4.63mの矩形を呈する。南東隅は南側にやや開いている。北・東壁の北東隅寄りの半分は76号住居との重複により欠失おり、竈もこの部分に構築されていたと考えられる。

埋没土　灰褐色土が堆積していた。

床 面　中央には南北方向に3～5cmの弱い段差がついている。

遺 物　床面中央の南壁際から杯（1）が出土している。（観P41）

備 考　床面の中央、南壁際に小ピットが2本ある。住居との関係は把握できなかった。



98図　76号住居とその出土遺物

77 号 住 居

位　置　G－25　　**写　真**　PL15

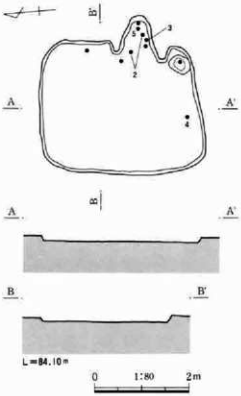
形　状　東西に長軸を有する矩形で隅丸を呈する。東壁は竈の左右でやや食い違っている。規模は、南北3.41m、東西2.77mを測る。残存壁高は10～14cmである。

面　積　9.3㎡　　**方　位**　S86°30′E

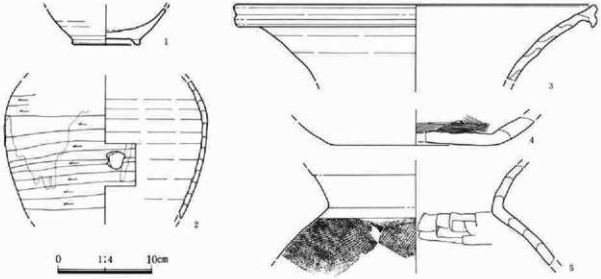
竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁際から一部壁面を掘り込んで構築されている。奥側に徐々に狭くなり煙道部へ続いている。袖部は崩壊が著しいが左右とも住居内に延びていた。火床面には炭化物が散見された。

貯蔵穴　南東隅に位置する。円形で径45×35cm、深さ28cmである。

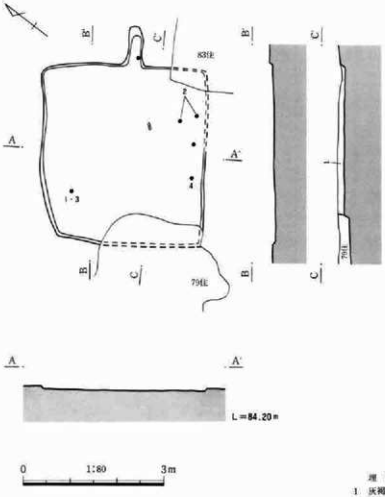
遺　物　竈の燃焼部内から壺（2）、甕（3・5）の破片が出土している。（概P41　写PL35）



99図　77号住居



100図　77号住居出土遺物



101図　78号住居

78 号 住 居

位　置　I—22　**写　真**　PL15

形　状　竈の軸線と直交する方向を南北方向と規定すれば南北3.53m、東西3.81mを測る。西壁の南半分は79号住居との重複により欠失している。削平が著しく残存壁高は4～8cmであった。

面　積　推定13.3m²

方　位　N56°E

埋没土　灰褐色土が堆積していた。

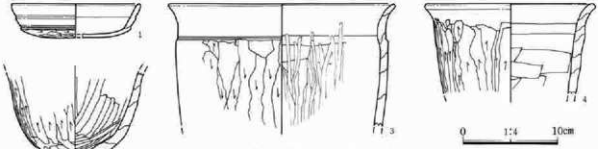
竈　東壁の中央に位置する。崩壊が著しく形状が判然としない。住居の壁面に対する掘り込みは幅30cmと狭く煙道部と考えられ、燃焼部は住居内に構築されていたと思われる。

遺　物　杯、甕などが出土したがいずれも破片である。(観P41　写PL36)

備　考　79・83号住居と重複している。79号住居には切られている。

埋 没 土 層

1　灰褐色土　地山の灰白色砂質土を多量に、軽石を少量含む。鉄分凝集が認められる。



102図　78号住居出土遺物

79 号 住 居

位　置　I－23　　**写　真**　PL15

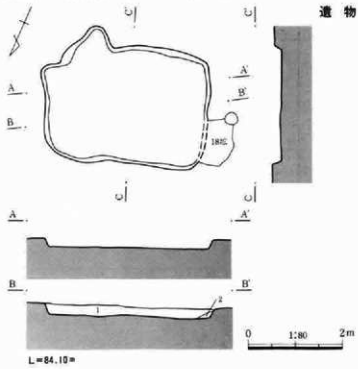
形　状　東西に長軸を有する矩形で四隅はやや丸みを有する。東西3.46m、南北2.59mを測る。残存壁高は10～20cmである。

面　積　推定8.5m²　　**方　位**　S21°30′E

竈　南壁、南東隅寄りに位置する。燃焼部は住居壁面を掘り込んで構築されている。左側の形状がやや乱れている。

遺　物　全く出土していない。

備　考　78号住居、18号土坑と重複する。



堆 積 土 層

1　灰褐色土　軽石、地山の灰白色砂質土を含む。鉄分凝集が認められる。

2　灰白色土　混入物は1と同様である。やや粘性をおびる。

103図　79号住居

80 号 住 居

位　置　M－4

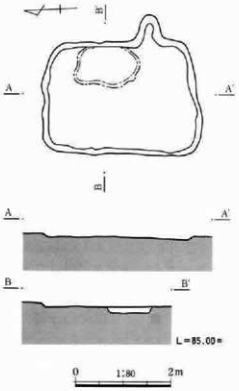
形　状　南北に長軸を有する隅丸矩形を呈し、南北3.24m、東西2.37mを測る。残存壁高は6～7cmである。

面　積　7.7m²　　**方　位**　S86°E

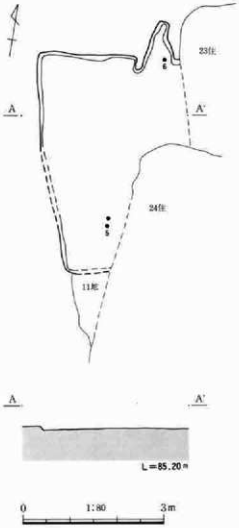
竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築されているが、幅は狭く20cm前後である。

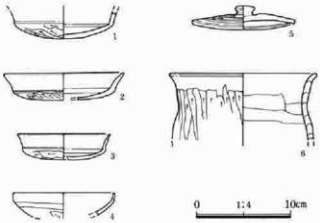
床　面　竈の左前に径128×96cmの楕円形に近い掘り込みがある。床下土坑と考えられる。

遺　物　全く出土していない。



104図　80号住居





105図　81号住居とその出土遺物

81 号 住 居

位　置　P－3　　**写　真**　PL4

形　状　北壁に竈を有する矩形を呈すると思われるが23・24号住居との重複により北西隅を中心とした四分の一程の検出に止まった。規模は、南北4.50m、東西の残存長3.64mを測る。残存壁高は5cm前後である。　　**方　位**　N13°W

竈　北壁に位置し、燃焼部は住居の壁際から住居壁面を掘り込んで構築されている。煙道部も一部を検出、幅10cm前後である。

遺　物　竈燃焼部内から甕（6）が、南西隅から蓋（5）が出土している。（観P43　写PL36）

82 号 住 居

位　置　I－25　　**写　真**　PL16

形　状　正方形に近い矩形を呈するが南壁はやや長い。規模は南北5.41m、東西5.36～5.64mを測る。残存壁高は36～54cmである。

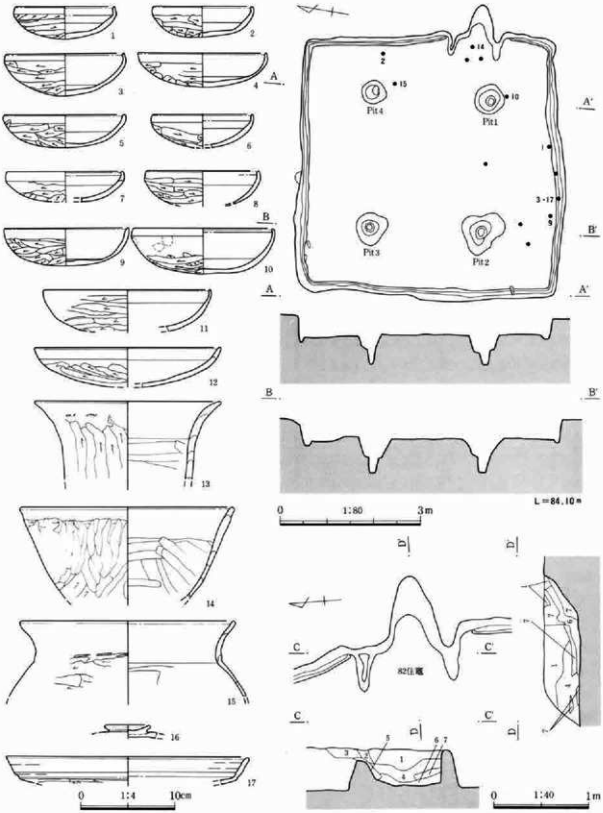
面　積　30.0m²　　**方　位**　N83°30′E

周　溝　全周する。上幅8～16cm、下幅4～8cm、深さ2～8cmである。

柱　穴　主柱穴と考えられる4本を検出した。個々に中段をもつ掘り方で、Pit 3はその形状が乱れている。規模は以下のとおりである。Pit 1は、径62×59cm、深さ62cm。Pit 2は、中段の径が52×37cm、深さ71cm。Pit 3は、径65×62cm、深さ78cm。Pit 4は、径52cm、深さ59cmである。

竈　東壁、南東隅寄りに位置する。燃焼部は住居内に構築されている。幅広く、左右の袖部が延びている。奥壁の一部は住居の壁面を掘り込み、斜めに立ち上がり、煙道部に移行している。

遺　物　竈燃焼部内から鉢（14）の破片が、Pit 1の脇の床面から杯（10）が出土した。また、杯（1・3・9・17）は周溝内で床面と同様の高さから出土している。（観P43・44　写PL36）



埋　没　土　層

1	灰褐色土	軽石、焼土を含む。	4	灰色土	軽石、焼土を含む。
2	黒褐色土	軽石、灰白色砂質土を含む。	5	灰色粘土	竈の袖部が崩落したものである。
3	灰白色砂質土	地山が崩落して混入か。	6	灰層	焼土、炭化物を含む。
			7	焼土層	固く締まっている。

106図　82号住居とその出土遺物

83 号 住 居

位　置　J－22　　**写　真**　PL16

形　状　東西に長軸を有する縦長矩形である。整美な形状であるが東側の二隅はやや丸みをおびている。南西隅の周辺は84号住居により削平されている。規模は、東西6.18m、南北5.68mを測る。残存壁高は13～21cmである。

面　積　35.5m²　　**方　位**　N32°W

埋没土　灰褐色土と灰色土に分層できる。

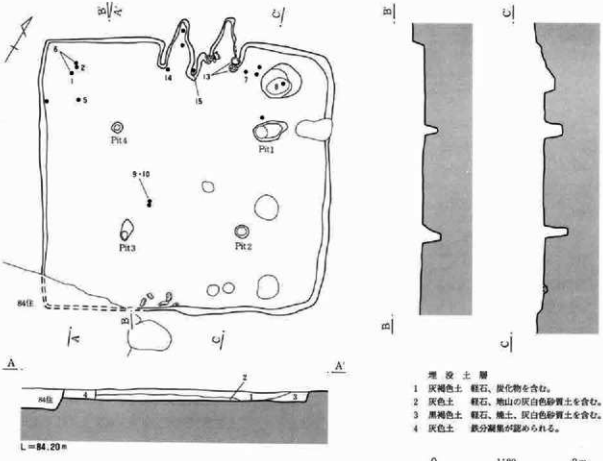
柱　穴　主柱穴と考えられる4本を検出した。Pit 1と3は上端の形状が崩れて変形している。規模は、Pit 1が径38cm、深さ39cm。Pit 2が28cm、深さ60cm。Pit 3が43×18cm、深さ42cm。Pit 4が21cm、深さ34cmである。

竈　北壁にあり2基が併設されていた。調査の所見では西側のものが古く、東側のものが新しい構築と判断されている。西側の竈は北壁の中央に位置し燃焼部は住居の壁内にある。煙道部は住居壁面を掘り込み50cm程が壁外に延びている。左右の袖部が残存していたが甕（14・15）は竈補強材の可能性がある。東側の竈も燃焼部を住居の壁内に構築し、煙道部が住居壁外に延びる形態である。袖部は西側に比較して短く、両先端とも甕が補強材として据えられていた。

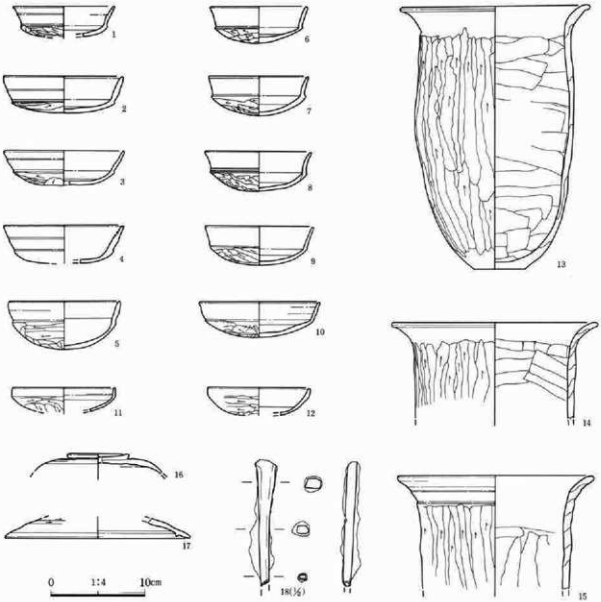
貯蔵穴　北東隅、竈の右側に位置する。上端の東側は崩れていた。径63cmの円形で深さ30cmを測った。底面から杯（8）が出土した。

遺　物　東側竈の右側と北西隅からまとまって出土した。埋没土中から鉄製の釘（18）が出土した。（観P46・47　写PL36）

備　考　78・84号住居と重複する。両住居よりも古い時期の構築である。柱穴の他に小ピットが多く重複している。



107図　83号住居



108図　83号住居出土遺物

84 号 住 居

位　置　K−24　　**写　真**　PL16

形　状　南北に長軸を有する矩形である。南壁の東側半分がやや膨らむが全体に整美な形状を呈する。北東隅は1号柱穴列と重複する。南北5.01m、東西4.45mを測った。残存壁高は33〜40cmである。

面　積　21.8m²　　**方　位**　N81°E

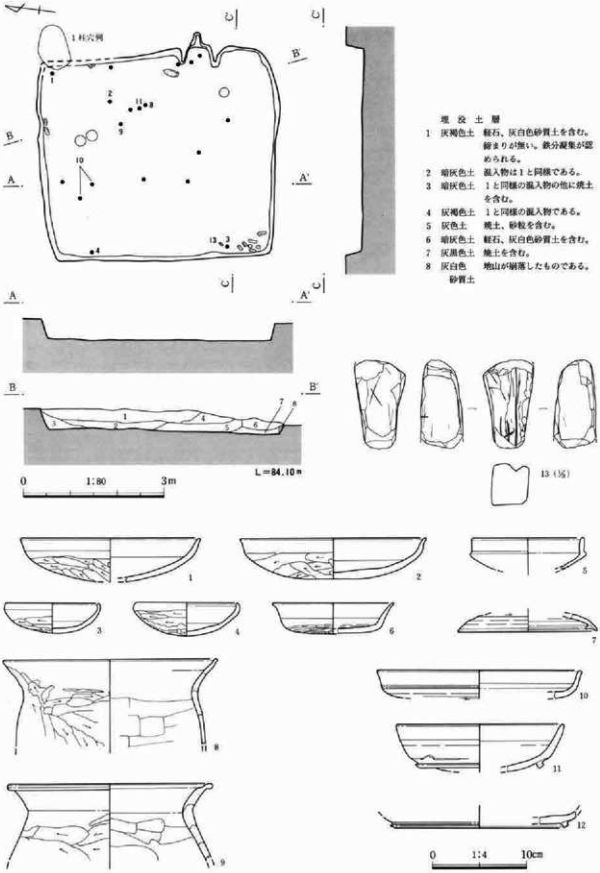
埋没土　灰褐色土をはじめ8層に分層できた。

竈　東壁、中央から南東隅寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、左右の袖部が延びていたが崩壊が著しかった。火床面には炭化物が散見された。煙道部は燃焼部から一段高く位置していた。

遺　物　床面からのものは破片が多かった。西壁際、南西隅近くから砥石（13）が出土している。

（観P45　写PL36）

備　考　床面の3箇所に小ピットが重複する。また、南西隅などから、長軸20cm前後の自然円礫が9個出土している。



109図　84号住居とその出土遺物

85 号 住 居

位　置　L－25　　**写　真**　PL17

形　状　東西5.90m、南北5.80mを測り、東西に長軸を有するがほぼ正方形に近い矩形を呈する。残存壁高は11～21cmである。

面　積　35.0m²　　**方　位**　N63°E

周　溝　西壁下と南壁の中央の一部に認められた。幅は上幅が10～13cm、下幅5～10cmを測る。深さは4～6cmである。

柱　穴　主柱穴と考えられる4本を検出した。Pit 1は2号掘立柱建物の柱穴により削平されている。残存径は15cm、深さ15cm。(床面からの深さは60cmを推定できる) Pit 2は2本が重複しており、径50×38cm、深さ14cmを測った。Pit 3は径32×29cm、深さ25cmである。底面の北側が一段低くなっている。Pit 4も削平をうけて変形している。残存径は24×18cm、深さ32cmを測った。

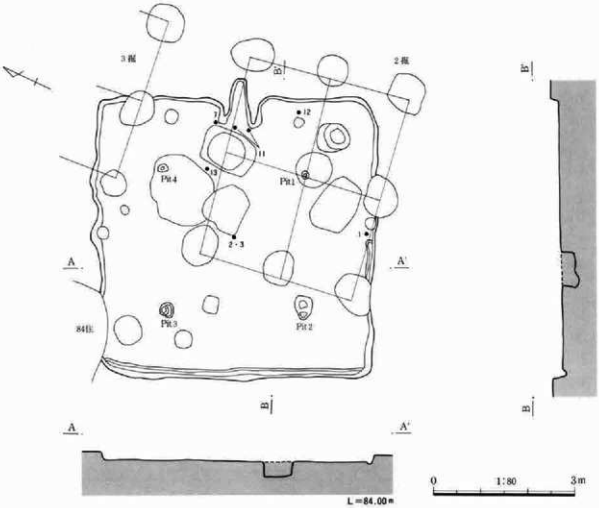
竈　東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は住居内に作られ幅が狭いものである。煙道部は住居壁面を掘り込んで壁外部に延びている。

貯蔵穴　竈の右側、南東隅に位置する。円形であるが北壁は崩壊している。径61×51cm、深さ40cmを測った。

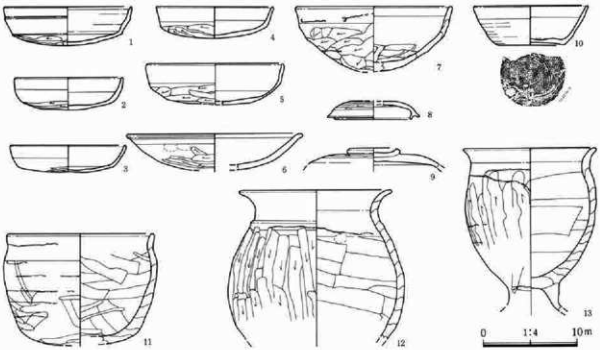
床　面　全体にやや踏み固められている。

遺　物　竈焚口部からは甕 (11) が、竈左袖前からは鉢 (7) が出土している。甕 (12)、台付甕 (13) は床面からの出土である。(観P48　写PL37)

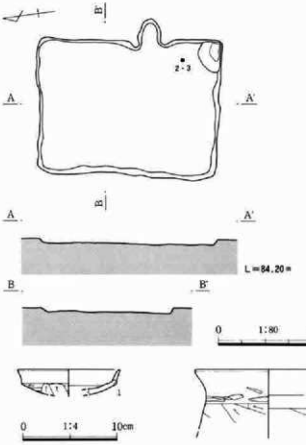
備　考　84号住居、2・3号掘立柱建物と重複している。その他にも性格不明の小ピットが重複している。



110図　85号住居



111図　85号住居出土遺物



86 号 住 居

位　置　K−21　　**写　真**　PL17

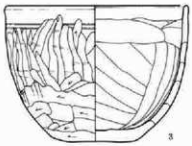
形　状　南北に長軸を有する矩形である。各辺とも整美な形状である。規模は、南北3.77m、東西3.00mである。残存壁高は7～11cmである。

面　積　11.2m²　　**方　位**　S82°30′E

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居壁面を掘り込んでおり、左右の短い袖部が残存していた。火床面には炭化物が散見された。

貯蔵穴　南東隅に不整形の掘り込みがある。深さは12cmを測った。

遺　物　竈の右手前から甕（2・3）が出土している。（観P47　写PL37）



112図　86号住居とその出土遺物

87 号 住 居

位　置　L−21　　**写　真**　PL17

形　状　東西に長軸を有する縦長矩形を呈すると思われるが、東壁を88号住居により削平され全体形状を把握することはできなかった。南北の規模は2.61m、東西は3.55m以上を測る。残存壁高は14〜20cmである。

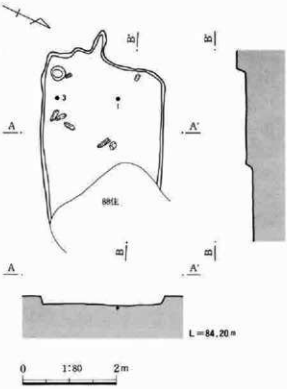
方　位　S82°30′W

竈　西壁の中央からやや北側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあったか。煙道部は住居壁面を狭く掘り込んで壁外に延びる。

貯蔵穴　南西隅に径30cm、深さ19cmのピットがありこれがその可能性がある。

遺　物　竈右手前の床面から杯（1）が出土している。(観P47　写PL37)

備　考　床面から炭化材が出土しており本住居が焼失住居の可能性も考えられる。また、床面から長軸20〜35cmの自然円礫が5個出土している。



113図　87号住居

88 号 住 居

位　置　M−21　　**写　真**　PL−17

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。四隅はやや丸みをおびている。規模は、南北3.08m、東西2.44mを測る。残存壁高は32〜36cmである。

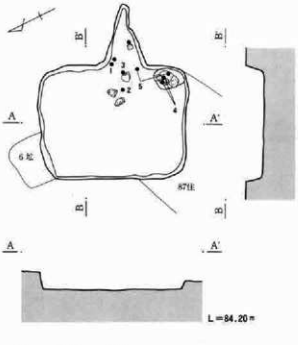
面　積　8.0㎡　　**方　位**　S61°30′E

竈　東壁の中央に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築され、細長い煙道部に続いている。燃焼部の中央やや右壁寄りに小円礫を利用した支脚が据えられている。

貯蔵穴　南東隅に位置する。径45cmの不整円形で深さ42cmである。3個の円礫に混じって甕（4・5）の破片が出土している。

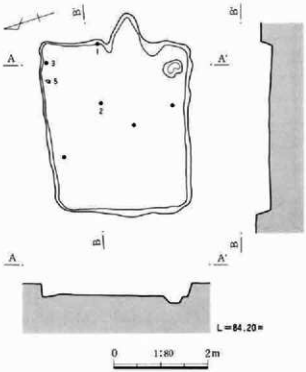
遺　物　竈焚口部左側から杯（1）が、その右前から高台付椀（3）、竈前の床面から高台付椀（2）が出土した。焚口部右側から出土した甕（5）は貯蔵穴出土の破片と接合した。(観P49　写PL37)

備　考　北西隅に6号土坑と重複している。



114図　88号住居

115図　87・88号住居出土遺物



93 号 住 居

位　置　O－11　　**写　真**　PL18

形　状　東西に長軸を有する縦長矩形である。東西3.67m、南北3.20mを測る。残存壁高は25～31cmである。

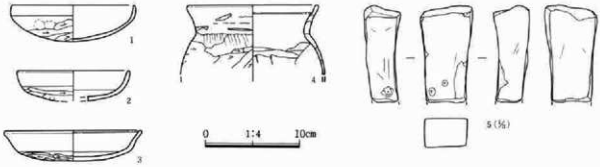
面　積　11.3m²　　**方　位**　S74°E

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居の壁際にあり一部住居の壁面を掘り込んで構築されている。左右の袖部が短く残存していた。

貯蔵穴　南東隅に位置する。径40cmの不整円形を呈する。深さは14cmである。

遺　物　竈の左側から杯（1）が、北東隅、床面から5cm離れて砥石（5）が出土している。

（観P51　写PL38）



116図　93号住居とその出土遺物

90 号 住 居

位　置　L−10　　**写　真**　PL9

形　状　43・46・47号住居と重複関係にある。東壁の竈及び南東隅の一部を検出したに止まった。竈は住居の壁面を掘り込んで燃焼部を設置するものであるが煙道部は既に削平されていた。

方　位　S53°E

遺　物　竈燃焼部内から高台付椀（1・2）、台付甕（3）が出土した。（観P50　写PL37）

92 号 住 居

位　置　O−10　　**写　真**　PL18

形　状　南北に長軸を有する矩形を呈する。四隅は丸みをおびている。南北3.70m、東西3.28mを測る。残存壁高は16〜22cmである。

面　積　12.1m²　　**方　位**　N73°E

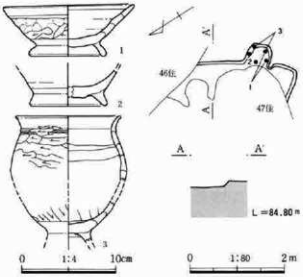
竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は狭いが住居の壁面を掘り込んで構築されている。

貯蔵穴　南東隅に位置する。円形で径32cm、深さ30cmを測る。

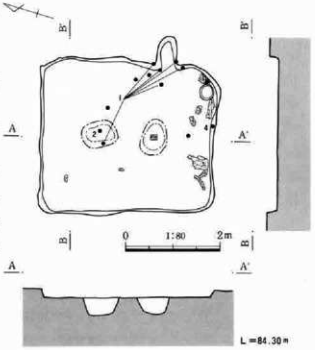
床　面　床面の中央に2基の床下土坑がある。いずれも楕円形で、南側は73×56cm、深さ36cm、底面から長軸15cmの円礫が2個が出土した。北側は78×56cm、深さ35cmである。底面から20cm離れて墨書の記された杯（2）が出土している。

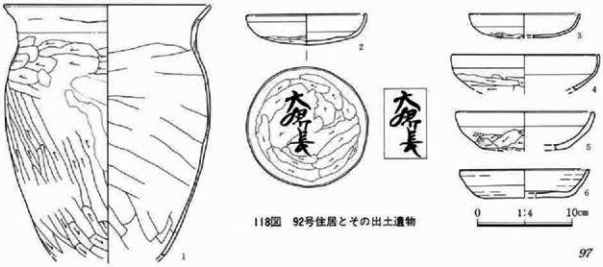
遺　物　竈焚口部周辺から甕（1）が出土した。（観P49　写PL38）

備　考　南壁際から炭化材が出土している。



117図　90号住居とその出土遺物





118図　92号住居とその出土遺物

91 号 住 居

位　置　J－11　　**写　真**　PL18

形　状　東西に長軸を呈する矩形であるが南壁に比較して北壁が長く台形状を呈する。規模は東西5.42m、南北4.68mを呈する。残存壁高は21～35cmである。

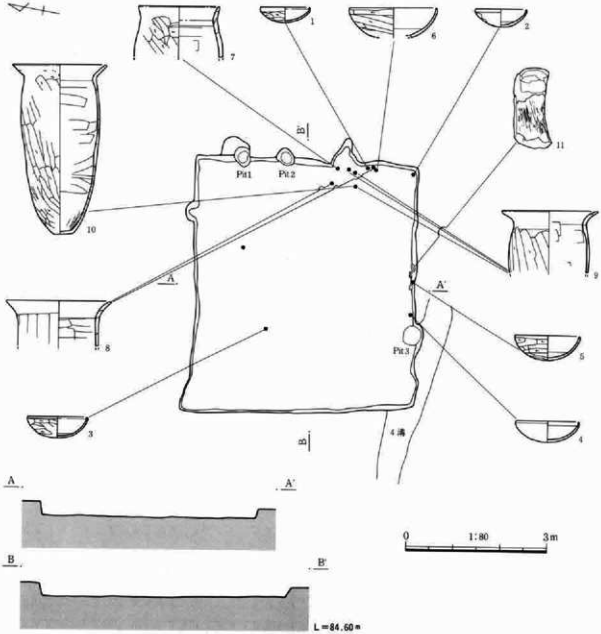
面　積　25.9m²　　**方　位**　N78°E

柱　穴　東壁に2箇所、南壁に1箇所ピットが重複している。それぞれの深さは、Pit 1 が14cm、Pit 2 が11cm、Pit 3 が10cmである。

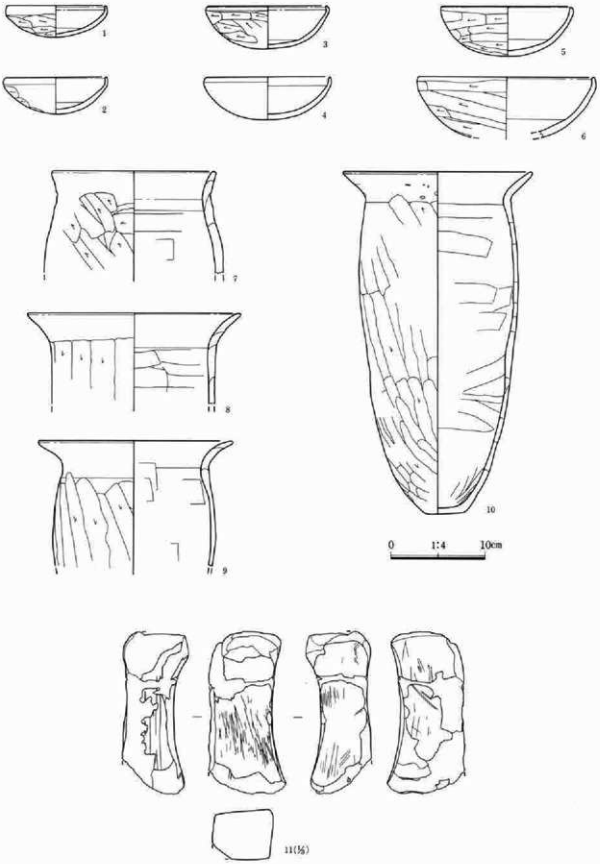
竈　東壁中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居壁際に構築され一部、住居壁面を掘り込んでいる。煙道部は燃焼部火床面と同じ高さで延びている。

遺　物　竈の周辺に集中した。竈の右側からは杯（1・6）が、焚口部前からは甕（10）をはじめ（7～9）の甕が出土した。南壁際からは杯（5）と砥石（11）が出土した。（観P50・51　写PL37）

備　考　南西隅は4号溝により削平を受けている。



119図　91号住居



120図　91号住居出土遺物

(2)　掘立柱建物

掘立柱建物は5棟を検出した。1～3号掘立柱建物が調査区の南東部分にあり、3号掘立柱建物の北側には1号柱穴列が近接している。1号と2号は共に総柱の建物で棟方向はほぼ一致している。4号掘立柱建物は調査区域の北西隅、他の遺構の分布が少ない地点に位置している。西側には2～4号柱穴列が近接する。5号掘立柱建物は北側の中央部分に単独で位置していた。以下、個別にその報告を行っておきたい。

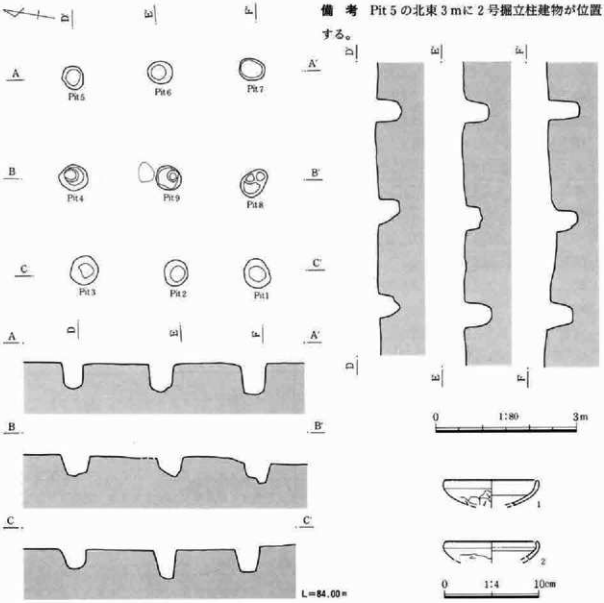
1号掘立柱建物

位　置　K－26　　**写　真**　PL19

形　状　棟方向は東西と考えられ、方位はN79°Eである。構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間は各小差を生じているが、特に梁行方向の歪みが顕著である。規模は桁行が南辺で4.24m、梁行が西辺で3.91mを測る。面積は16.5m²程である。柱穴の掘り方は円形で柱痕は確認できなかった。Pit 4と9は底面の一部がさらに下がっている。Pit 8は3本が重複している。

遺　物　Pit 4から杯（1）が、Pit 1から杯（2）が出土した。（図P52）

備　考　Pit 5の北東3mに2号掘立柱建物が位置する。



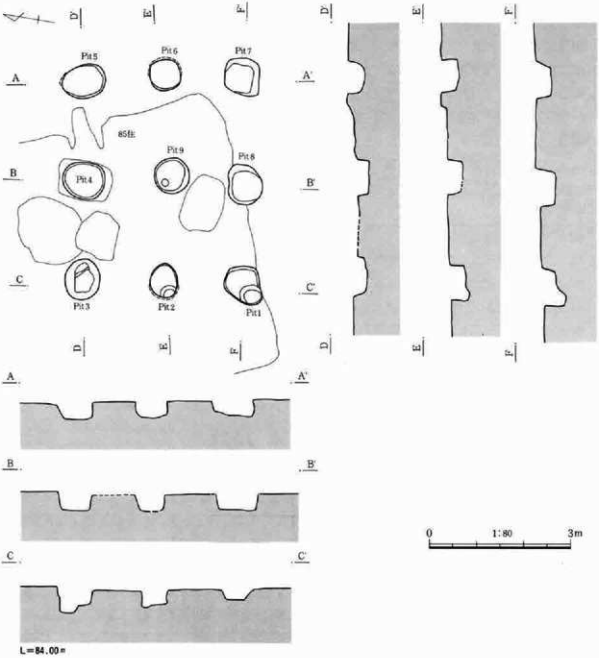
121図　1号掘立柱建物とその出土遺物

2号掘立柱建物

位　置　L−25　　**写　真**　PL19

形　状　棟方向は東西と思われる。方位はN81°Eである。構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱穴の掘り方は径66〜92cmと大型の円形で、柱痕は確認できなかった。規模は桁行4.38m、梁行の西辺で3.35mで、面積は15.9m²程であった。

備　考　出土遺物は全く無かった。古墳時代の住居、85号住居と重複関係にある。調査所見では本遺構は85号住居よりも後出と考えられたが調査の進行上、同時に精査を実施したため確認面を下げざるをえなかった。



122図　2号掘立柱建物

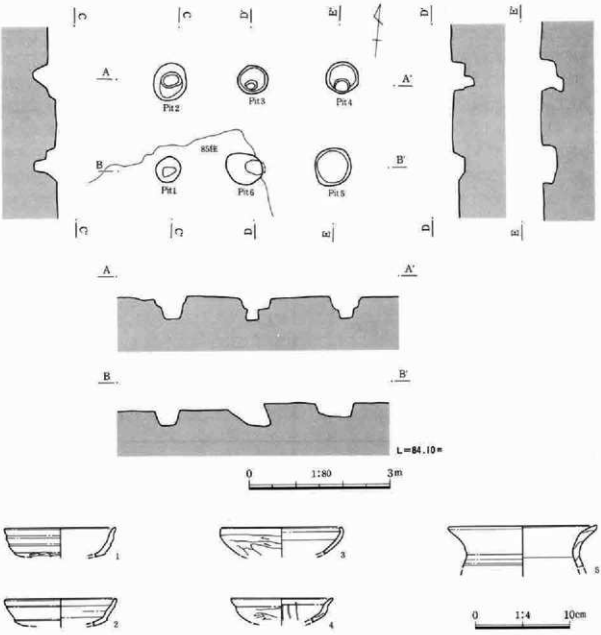
3号掘立柱建物

位　置　L−24　　**写　真**　PL19

形　状　棟方向は東西で、方位はN87°Eで2号掘立柱建物のそれとは6°程ずれている。構造は桁行2間、梁行1間である。規模は桁行3.45m、梁行は西側で1.89mを測った。東側とは12cmの差が生じている。面積は6.45m²程である。柱穴の掘り方は円形で、柱痕は確認できなかった。北辺のPit 2〜4は柱の据え方になるのか底面に一段深い掘り方を持っている。

遺　物　いずれも小破片である。Pit 2から杯(3)が、Pit 3から杯（2)、Pit 4から杯（1・4）が、Pit 5から甕(5)がそれぞれ出土している。(観P52)

備　考　Pit 1・6は85号住居と重複している。本遺構は85号住居よりも後出との所見を得ることができたが調査の進行上、精査を同時に実施した。



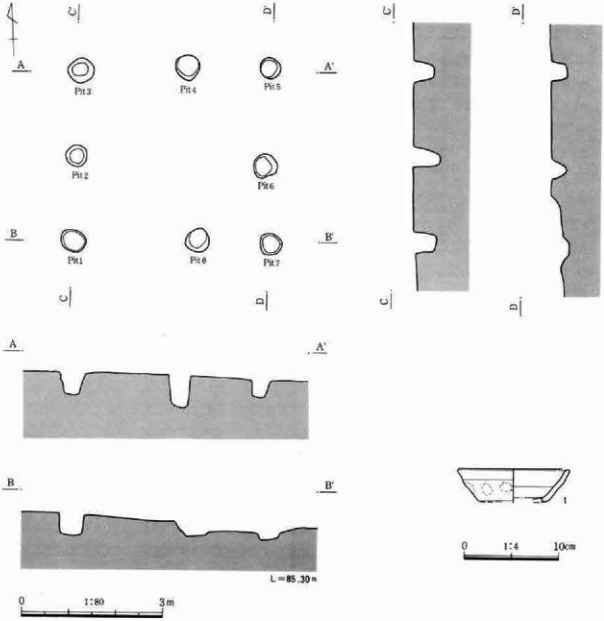
123図　3号掘立柱建物とその出土遺物

4号掘立柱建物

位　置　E－7　　**写　真**　PL19

形　状　棟方向は東西で、方位はN88°Wである。構造は桁行2間、梁行2間である。規模は桁行の南辺で4.12m、西辺で3.56mを測る。面積は14.7m程である。桁行方向中央のPit 4と8は東側に偏在している。また、東側の梁行方向に位置するPit 6も南側に片寄っている。柱穴は円形の掘り方を持ち、柱痕は確認できなかった。

遺　物　Pit 4から杯(1)が出土している。(観P52)



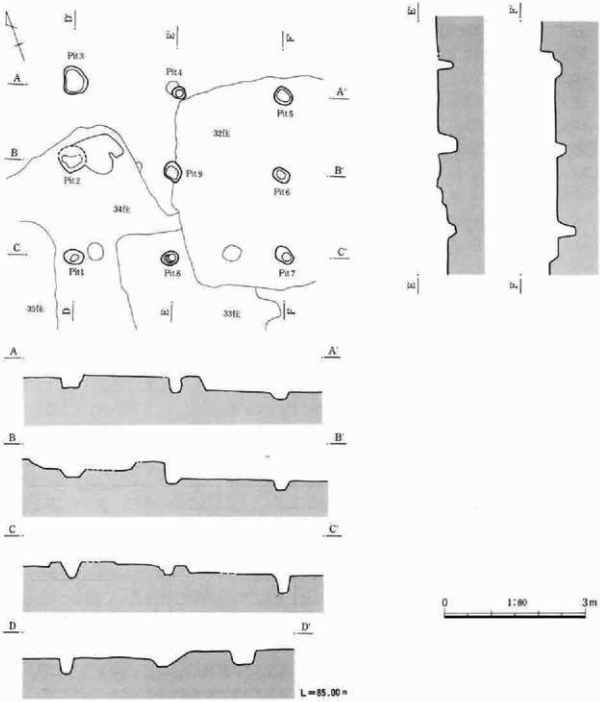
124図　4号掘立柱建物とその出土遺物

5号掘立柱建物

位　置　M－6　　**写　真**　PL19

形　状　棟方向は東西であろうか。方位はN70°Wである。構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物である。規模は桁行が南辺で4.45m、梁行が西辺で3.56mである。桁行、梁行ともやや歪んでいる。面積は15.7m²程である。柱穴は長軸径が40cm前後の長円形であるがPit 2・3はやや大きい。柱痕は確認できなかった。

備　考　32・33・34号住居と重複する。出土遺物は全く無かった。



125図　5号掘立柱建物

(3) 柱穴列

5基を検出することができた。分布状況をみると調査区域の北東部分、4号掘立柱建物の西側に2～5号が位置する。1号は調査区域の南東部分、2・3号掘立柱建物の北側に位置し、列の方向を2号掘立柱建物の棟方向と並べている。

これらの柱穴列の他に、調査区域内からは径30cm前後の小ピットを160余り検出した。遺構確認の精査に伴って確認されたものが多いのか竪穴住居などとの重複、あるいは近接例が大半である。特に掘立柱建物の周辺に集中する傾向が看取できた。中には3・4本が平面上で直線的に位置する部分もあるが今回は調査時に関連性を認識できたものだけを柱穴列として取り上げた。

1号柱穴列

位　置　K−23　　**写　真**　PL19

形　状　東西方向に4本の柱穴が直線的に検出された。方位はN74°Eである。規模は6.09mを測った。柱穴の掘り方は円形を基本としているが統一性に欠けるものである。

備　考　3号掘立柱建物の北側に位置し、2m程を隔てている。3号掘立柱建物の棟方向の方位とは7°ずれている。西端の Pit 1 は84号住居と重複している。

2号柱穴列

位　置　D−6　　**写　真**　PL19

形　状　南北方向に3本の柱穴が並ぶものである。方位はN 9°Eである。西側に3号柱穴列が並列する。規模は4.53mである。柱穴間の距離は不均等で70cmの差がある。

3号柱穴列

位　置　D−6　　**写　真**　PL19

形　状　南北方向に3本の柱穴が並んでいる。方位はN9°30′Eである。規模は4.69mである。中央の柱穴は2本が重複している。柱穴間の距離は中央の柱穴の南側を基準とするとほぼ等間隔である。

備　考　東側に2号柱穴列が並列する。

4号柱穴列

位　置　D−8　　**写　真**　PL19

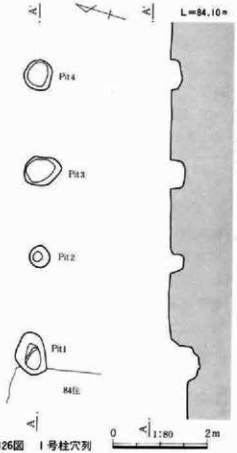
形　状　南北方向に3本の柱穴が並んでいる。方位はN11°Eである。規模は3.35mである。柱穴間の距離は33cmの差が生じている。

備　考　4号掘立柱建物の南西に位置する。方位は2・3号とほぼ同一方向である。

5号柱穴列

位　置　D−10　　**写　真**　PL19

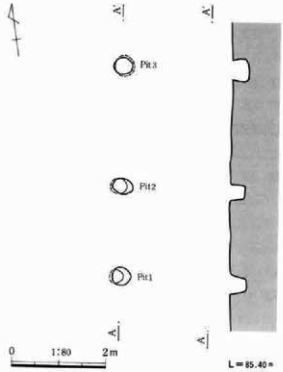
形　状　南北方向に3本の柱穴が並んでいる。方向はN 3°Eである。規模は2.81m、柱穴間の距離は1.40m前後と他の柱穴列に比較して小規模である。個々の柱穴の掘り方は確認面よりも底面の径が大き



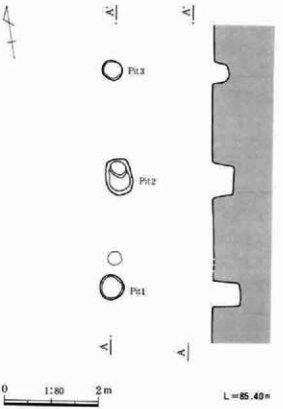
126図　1号柱穴列

い掘り込みである。

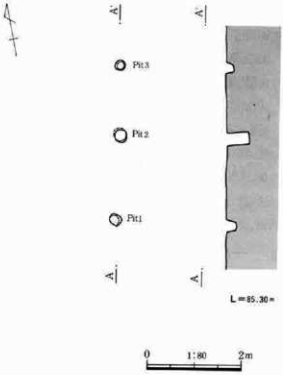
備　考　東側1.5mに3号井戸が位置している。



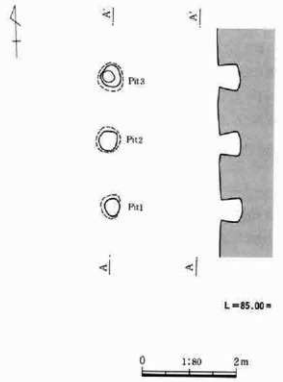
127図　2号柱穴列



128図　3号柱穴列



129図　4号柱穴列



130図　5号柱穴列

(4) 井　　戸

3基を検出した。1号井戸は調査区の南西部分で検出された。掘削深度に比して大規模の径を有している。2号井戸は南端の中央に位置している。出土遺物は中世の擂鉢と18世紀の美濃・瀬戸系の椀である。3号井戸は8世紀の遺物を出土している。同時期の遺物を出土している住居との距離は20m以上離れている。

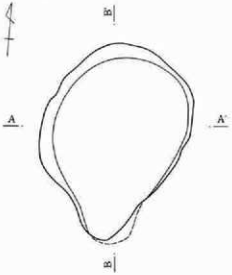
調査区域における住居等の遺構の分布状況からは、集落が調査区域外にまで及んでいることは確実である。荒砥洗橋遺跡の集落内における生活飲料水の供給については今回の調査資料からは判断できるまでに至らなかった。

1 号 井 戸

位　置　C−22　　**写　真**　PL21

形　状　南北に長軸を有する長円形で南側の一部が突出している。規模は長軸の南北方向で3.10m、短軸の東西方向で2.21mを測る。深さは1.59m、地山の青灰色砂質土層を掘り抜き、その下の砂礫層・砂層に達している。壁面は青灰色砂質土の部分が崩壊し、オーバーハングしている。

遺　物　埋没土中から杯（1）の破片が出土した。（観P52）



2 号 井 戸

位　置　G−26　　**写　真**　PL21

形　状　確認面における径は0.92m、深さは1.28mを測る。壁面は中位で崩壊しオーバーハングしている。最大径は1.18mである。

遺　物　埋没土中から椀（1）と擂鉢（2）が出土している。両者の年代に大きな隔たりがあるが擂鉢の年代がこの井戸の掘削時期に近いものと考えられる。（観P53　写PL38）

備　考　本井戸の他には本遺跡で中・近世と考えられる遺構は検出されていない。

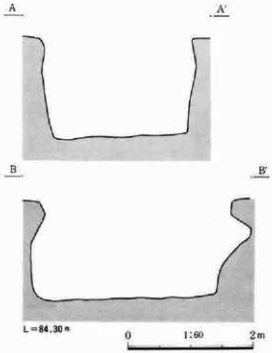
3 号 井 戸

位　置　E−10　　**写　真**　PL21

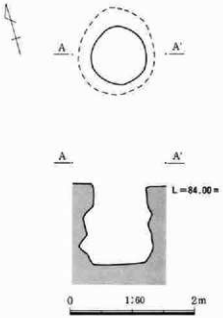
形　状　確認面での径は0.57×0.54m、深さは1.2mを測る。井筒は北側に傾斜して掘削されており底面まではほぼ直線的である。

遺　物　埋没土中から杯（1・3）、甕（6）などを出土した。（観P53　写PL38）

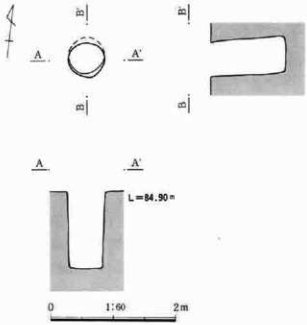
備　考　5号柱穴列の東側に位置する。近接する住居からは20m以上の間隔がある。



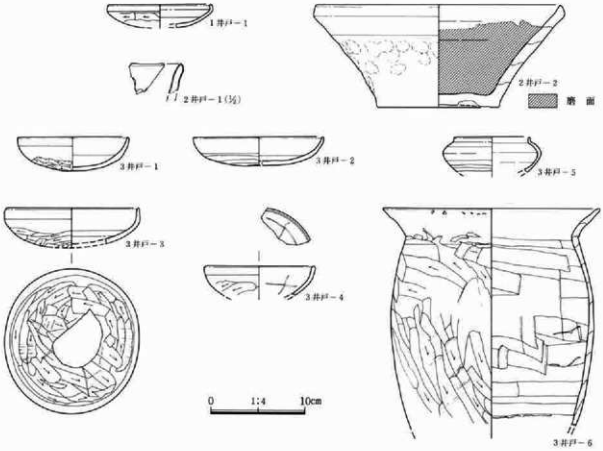
131図　1号井戸



132図　2号井戸



133図　3号井戸



134図　1～3号井戸出土遺物

(5)　浅間B水田

調査区域の東端は河川改修前の宮川の流路で区切られていたが、水田はこの流路と住居の立地する微高地の間の沖積地内に検出された。この沖積地は宮川の流下に伴って形成されたものと考えられる。

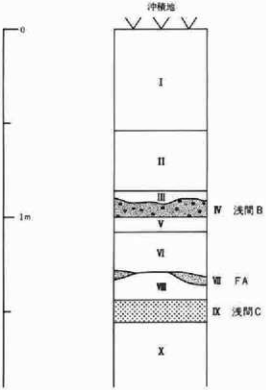
沖積地の現在の地目は水田と桑園であり、西側の微高地との比高差は50～120cmを測った。現地表下90cmのところに、浅間Bが5～10cmの厚さで堆積していた。

調査は浅間Bの下の水田の存在の有無を確認することを主眼に浅間Bの除去をおこなった。その結果、北側傾斜地の最下部に東西方向の畔状の高まりが認められ、地形に即して南折していたとの所見が得られたものの、その他、畦畔あるいは溝などの施設を確認することはできなかった。

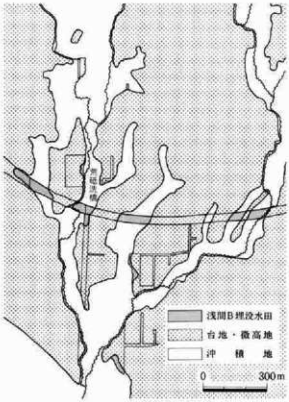
浅間Bの下の土層は黒色の泥炭質土で、検出面には一面、径10～20cm程の浅いくぼみが無数に検出された。調査面積は326m²であった。

本遺跡の立地する微高地西側の沖積地では浅間Bの下に水田遺土を検出した。また、この西側に広がる沖積地を調査した二之宮洗橋遺跡や二之宮谷地遺跡では浅間Bに埋没した水田が沖積地全体から検出された。また、宮川の流路を挟んで本遺跡と対峙する位置にある宮川遺跡でも浅間B下の水田が検出されている。その他、荒砥島原遺跡、荒砥天之宮遺跡、二之宮千足遺跡などでも同時期の水田が発見されており、浅間Bが降下した天仁元年（1108）の頃には本遺跡周辺の沖積地はその大半が水田化されていることが想定できる。

このような周辺遺跡の状況を考えた場合、本遺跡においても浅間Bに埋没した水田が存在していたと判断したい。検出面で発見できた無数のくぼみは人間の足跡、獣足跡、あるいは稲株痕の可能性があろうか。また、調査では検出できなかったが住居の存在と兼ね合わせると古墳時代から周辺の沖積地で水田耕作が開始、継続されていた可能性が極めて高いと考えられる。



135図　基本層序



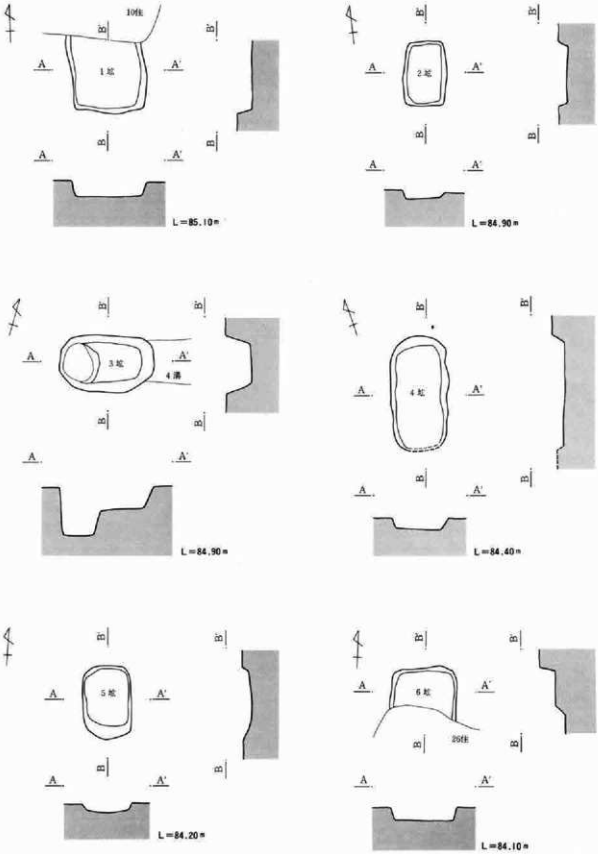
136図　周辺の浅間B埋没水田

(6) 土　　坑

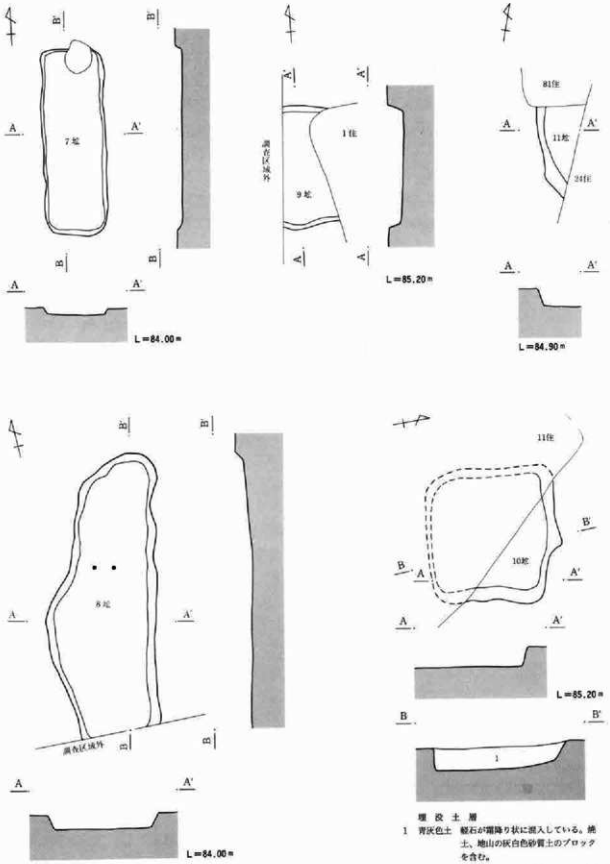
18基を検出、調査した。その分布は調査区域の全域にわたっており、特に顕著な傾向は見いだし得なかった。形状の知りえるものでは矩形あるいは隅丸矩形が多く、14・16号が楕円形であった。8号は南側が調査区域外に及んでおり、溝状を呈していた可能性が強い。遺物の出土は少なく、構築時期を決定できる資料を持ちえたものはほとんどなかった。他の遺構との重複関係についてみると2・4・5・7・8号を除いた12基が住居または溝と重複している。その大半が住居、溝よりも新しいと思われるが、24号住居と重複する11号は住居に先だって構築されている。8号は底面から11cm離れて杯が2個体出土している。土器の年代からは6世紀後半代が考えられる。14号は35号住居の貯蔵穴と重複しており、出土遺物は本来35号住居に所属していたものと思われる。

2表　荒砥洗橋遺跡土坑一覧（写真ＰＬ21・38　遺物観察表Ｐ50）　　（単位：m）

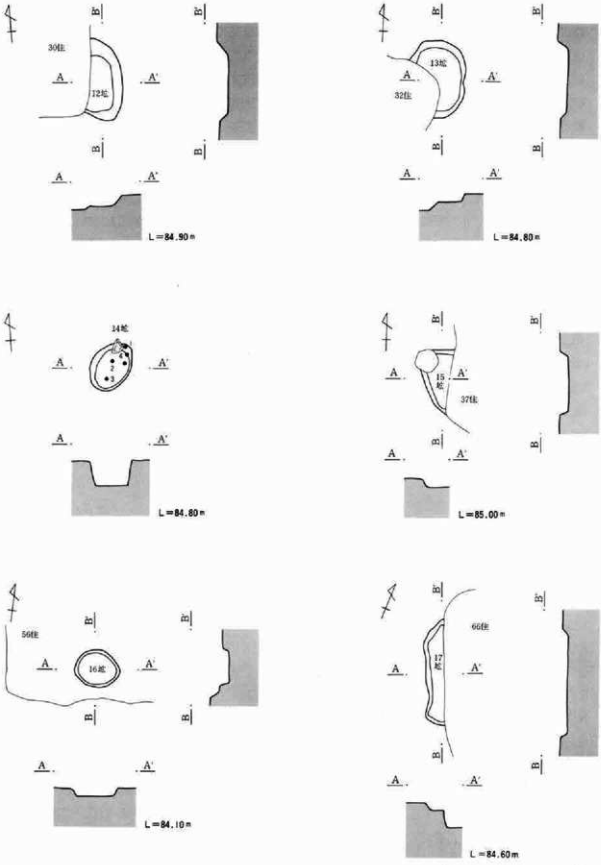
番号	位置	外形	規模 上端	規模 下端	残存壁高	備考
1	P−3	矩形	(1.35)×1.18	(1.23)×1.05	0.24	10号住居の南壁に重複するため全体の形状を把握できない。住居よりも新しい。
2	E−11	矩形	1.01×0.68	0.94×0.54	0.14	四隅は整然としている。
3	D−13	隅丸矩形	1.50×0.91	1.25×0.63	0.41	4号溝と重複する。底面は、西側に径64cm、深さ76cmのピットがある。
4	C−21	隅丸矩形	(1.84)×0.88	(1.62)×0.72	0.18	20号住居に近接する。
5	I−21	隅丸矩形	1.16×0.77	0.90×0.68	0.10	底面は中央がやや低くなり壁際に比較して5cmほど低い。
6	M−21	矩形	(0.87)×1.03	(0.75)×0.95	0.23	南北に長軸を有するか。58号住居と重複する。
7	L−22	矩形	2.91×1.01	2.82×0.90	0.12	四隅はやや丸い。北壁に径40cmのピットが重複する。
8	H−26	不明	(4.36)×1.16〜1.76	4.26×0.99〜1.50	0.24	南北に長く溝状を呈する。南端は調査区域外に延びている。北側は11cmと浅い。底面から11cm径ど離れて杯が2個体出土している。
9	D−4	矩形	1.98×(0.87)	1.81×(0.87)	0.24	1号住居と重複している。西壁は調査区域外に延びている。
10	P−1	矩形	2.11×2.07	1.75×1.87	0.35	11号住居と重複している。
11	P−4	不明	(1.48)×(0.79)	(1.24)×(0.63)	0.29	24・81号住居と重複する。全体形状を把握することができなかった。
12	N−4	矩形か	1.76×(0.50)	0.86×(0.37)	0.17	30号住居と重複する。
13	M−5	隅丸矩形	1.34×0.85	1.03×0.70	0.15	32号住居と重複する。
14	L−6	楕円形	0.83×0.64	0.67×0.47	0.40	35号住居と重複する。埋没土中から高台付杯、高台付椀、鉢が出土している。35号住居の遺物が混入したものか。
15	J−5	不明	(1.01)×(0.88)	(0.62)×(0.54)	0.12	37号住居と重複する。また、小ピットが重なっている。
16	M−11	楕円形	0.68×0.60	0.59×0.52	0.16	56号住居と重複、これを切っている。
17	G−17	不明	(1.69)×(0.29)	(1.53)×(0.20)	0.11	66号住居と重複する。
18	H−23	矩形か	0.94×(0.57)	0.90×(0.49)	0.31	79号住居と重複する。


10住
1 坑
2 坑
3 坑
4 溝
4 坑
5 坑
6 坑
26住
A
A'
B
B'
L＝85.10m
L＝84.90m
L＝84.90m
L＝84.40m
L＝84.20m
L＝84.10m
0
1:60
2m

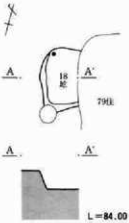
137図　1～6号土坑


7号
L=84.00m
調査区域外
1住
9号
L=85.20m
8住
11号
24住
L=84.90m
8号
調査区域外
L=84.00m
11住
10号
L=85.20m
1
埋　設　土　層
1　青灰色土　礫石が斑模り状に混入している。地土、地山の灰白色砂質土のブロックを含む。
0　1:60　2m

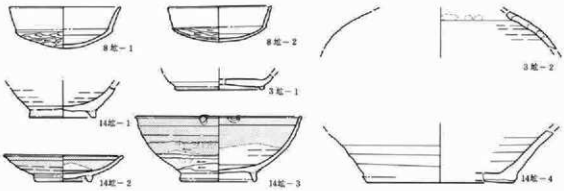
138図　7～11号土坑



139図　12～17号土坑



140図　18号土坑　0　1:60　2m



141図　3・8・14号土坑出土遺物　0　1:4　10cm

(7)　溝

微高地上の調査区域内から5条の溝が検出された。南北方向の溝は、1・2・5号である。東西方向の溝は、3・4号の各遺構であった。埋没土の観察や底面の勾配などから流水の痕跡が認められたものはなかった。各溝の底面は一方向に勾配をもつものもあるが、それは漸移的なものではなかった。出土遺物は、1号を除いて皆無に近く、掘削時期を判断できる資料は得られていない。1号溝からは、染付けの磁器や陶器が出土しており、明治時代には機能していたことが考えられる。また、2号溝は21号住居と、3号溝は68号住居と、4号溝は、51～53・91号住居と重複関係にあるが、いずれの場合も溝が住居を切っていることが調査の所見から判明している。すなわち、2・3・4号溝の掘削時期の上限は奈良時代以降とすることができる。

1　号　溝

位　置　M－1～N－6　　**写　真**　PL22

形　状　長さ26.6mを検出した。北側は調査区域外にまで及んでいる。南端は31号住居と重複する部分で途絶えており、先端の状態は不明確であった。走行は、N1°Eを直進、10m程で東側に52°30′振れ、30号住居との重複部分でまたN0°Eの方向にもどっている。幅は1.13～1.40m程、残存深度は20～33cmを

測った。両端の勾配は漸移的では無いが、比高差は34cmであった。30号住居の南側5.4m程は、底面の中央が幅54cm程にわたりさらに一段、6cm程深くなっていた。

遺　物　埋没土中から陶器、磁器が出土している。（観P54　写PL39）

2　号　溝

位　置　D－23～E－26　**写　真**　PL22

形　状　南北方向の溝である。検出長は13.9mを測る。北端は21号住居と重複しており、その始まりは不明瞭である。南端は調査区域外に及んでいる。21号住居から1.8m南側で東壁が拡幅している。幅は52～92cm、掘削深度は5～21cmを測った。南北両端の比高差は7cmである。

備　考　遺物は全く検出されなかった。南端から北へ2.9mのところに径75cm、深さ20cmのピットがある。

3　号　溝

位　置　C－19～L－19　**写　真**　PL22

形　状　東西方向の溝である。調査区域を横断しており、西端は調査区域外に及んでいる。走行はN89°Wである。規模は検出長39.65m、幅45～65cm、深さ17～26cmであった。底面は西側が高く、比高差は10cmを測った。

備　考　中程で68号住居の竈を壊している。

4　号　溝

位　置　C－13～L－12　**写　真**　PL22

形　状　北壁を外縁として緩やかな弧を描いて延びる東西方向の溝で、調査区域の中程を横断している。検出長は40m、西端は3号土坑と重複し更に西側に延びると思われる。東端は住居群と重複しておりその終焉が不明瞭である。幅38～85cm、深さ5～14cmを測った。西側での走行はN84°30′Eである。

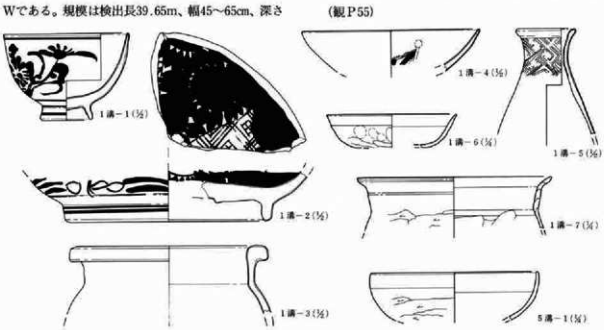
備　考　出土遺物は無かった。掘削時期は、東側で重複する住居群より新しいと思われる。

5　号　溝

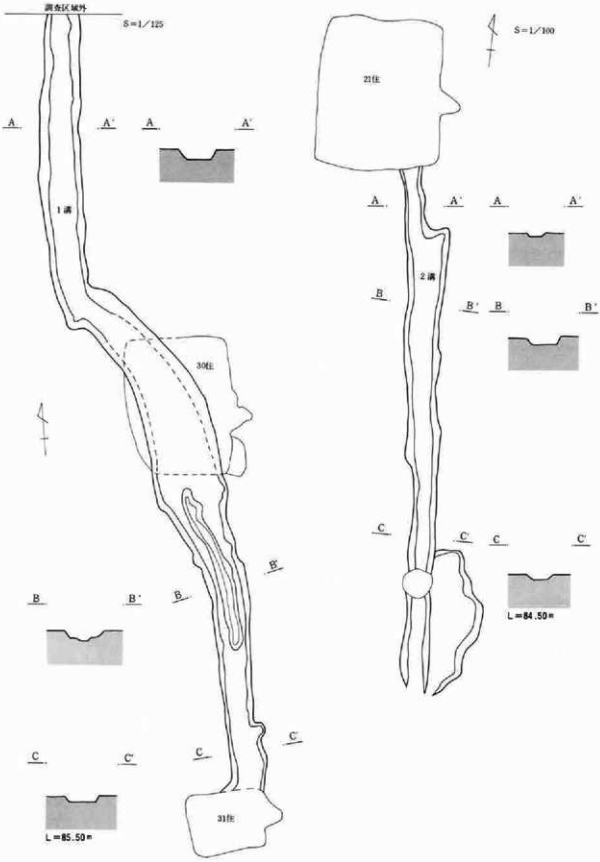
位　置　H－7～F－11　**写　真**　PL22

形　状　東壁を外縁として彎曲する南北溝である。走行はN31°Eである。全長24.74mを測り、両端とも段差をもって浅くなる。幅は北側が広く、56～161cmである。深さは25～42cmである。

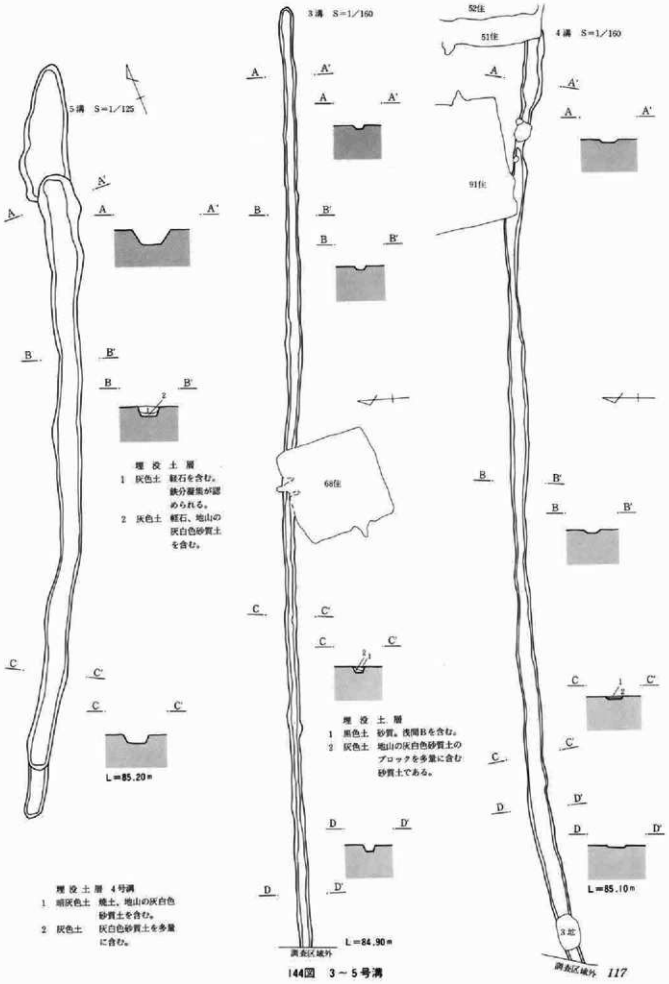
遺　物　埋没土中から杯（1）の破片が出土した。（観P55）



142図　1・5号溝出土遺物


調査区域外
S=1/125
A
A'
A
A'
1溝
30住
B
B'
B
B'
C
C'
C
C'
31住
L=85.50m
S=1/100
21住
A
A'
A
A'
2溝
B
B'
B
B'
C
C'
C
C'
L=84.50m

143図　1・2号溝


5溝 S=1/125
A
A'
B
B'
C
C'
L=85.20m
埋没土層
1 灰色土 軽石を含む。鉄分凝集が認められる。
2 灰色土 軽石、地山の灰白色砂質土を含む。
埋没土層 4号溝
1 暗灰色土 焼土、地山の灰白色砂質土を含む。
2 灰色土 灰白色砂質土を多量に含む。
3溝 S=1/160
68住
D
D'
L=84.90m
調査区域外
埋没土層
1 黒色土 砂質。洗閑Bを含む。
2 灰色土 地山の灰白色砂質土のブロックを多量に含む砂質土である。
52住
51住
91住
4溝 S=1/160
L=85.10m
32住
調査区域外

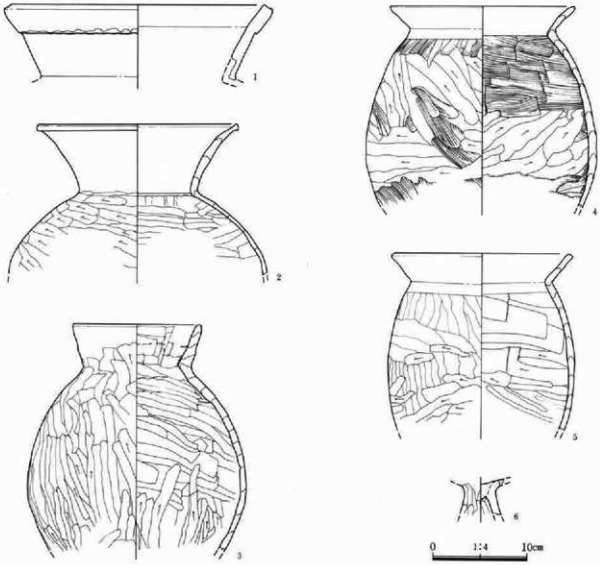
144図 3～5号溝

(8)　遺構外の出土遺物

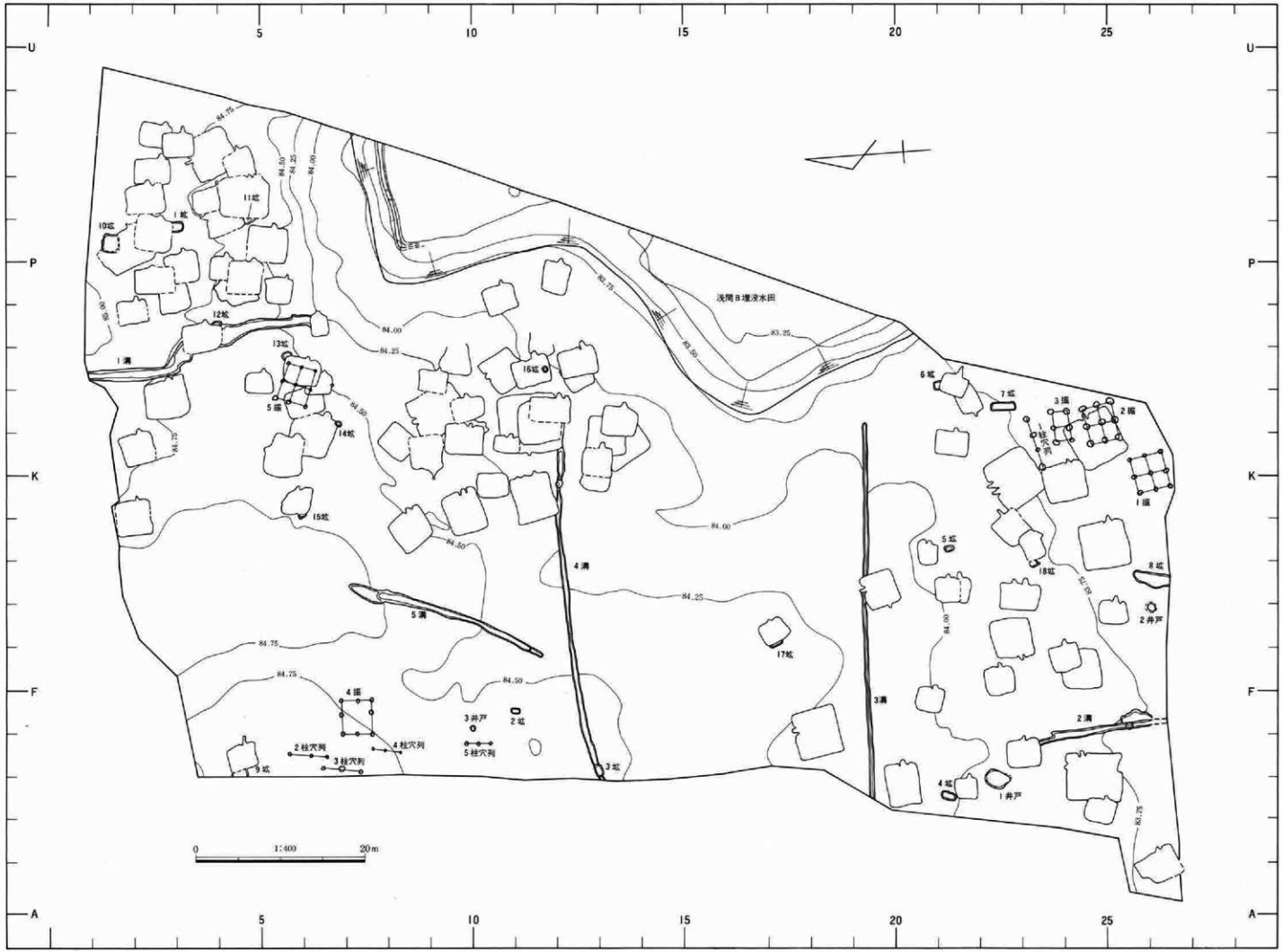
遺構外の出土遺物としては壺2個体、甕3個体、高杯1個体を資料化できた。これらの遺物はI－15グリッド付近から一括出土したものである。出土層序は奈良・平安時代の住居を確認した灰白色土層・FA層の下、浅間Cを多量に含む黒褐色土内である。

この地点では地山の灰白色土が東側に向かって徐々に傾斜している。調査の進行上、幅2m、長さ10mのトレンチ調査を余儀なくされたが、東西方向のトレンチの両端での比高差は1mである。

このことから遺跡東側の沖積地は浅間C降下以前には、西側に広がりを有しており、それが埋没してゆく過程でこれらの土器が投棄に近い状態で黒褐色土層中に入り込んだものと考えられる。これらの土器は古墳時代の前期の時期と思われるが、西側、微高地上の調査区域内には同時期の竪穴住居は検出されておらず、更に広範囲の中でこれらの土器の出土状況を考えて行かなければならない。



145図　遺構外の出土遺物



146図　荒砥洗橋遺跡の遺構

荒砥宮西遺跡

III　荒砥宮西遺跡の調査

1　調査の方法

本遺跡は周知の遺跡では無かったが、圃場整備事業に先立って実施した分布調査で、土器片の散布が確認され、遺構・遺跡の存在が想定された。そこで、南北方向に新設される支線429号道路の計画路線に沿って、大型掘削重機を使用した幅１m弱のトレンチによる試掘調査を実施した。結果、ほぼ全域にわたり住居と考えられる遺構を検出した。

試掘調査の成果から遺構確認面はローム層上面であり、確認面までの間には遺物包含層は存在しないことが確認できた。このため、調査は大型掘削重機を使用して遺構確認面までの現在の耕作土の除去し、その後、遺構の検出・精査を実施した。

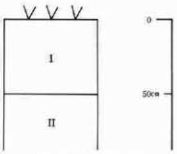
遺構の測量にあたり、個々の遺構の位置関係を把握するために、５×５mの方眼を調査区域全域に設定した。調査区域の南西端に基点A－１を設定し、東西軸にはアルファベッドをあて、西側からA・B・C・・・と付した。南北軸にはアラビア数字をあて、南側から１・２・３・・・と付した。グリッドの呼称は５m方眼の南西隅を以てそのグリッドの名称とした。

2　遺跡の基本層序

遺跡は宮川左岸、南北方向に延びるローム台地の西側縁辺に位置する。現在の地目は桑園で、耕作が下位にまで及んでいた。

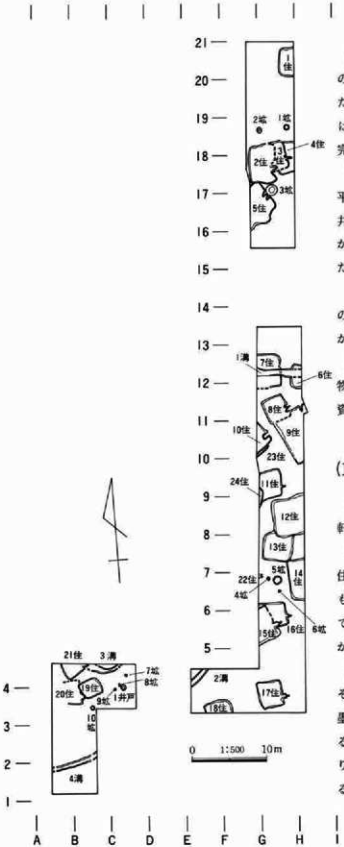
Ⅰ層　灰褐色土である。現在の耕作土で浅間A・Bを多く含んだ砂質土である。50cm程の厚さで堆積している。

Ⅱ層　ローム層である。部分的にはⅠ層との間に漸移層が認められる。この層の上面が遺構確認面である。



147図　遺跡の基本層序

148図　荒砥宮西遺跡の発掘調査範囲



149図　荒砥宮西遺跡の遺構

3　調査された遺構

本遺跡は新設の道路工事部分を対象地とし、850㎡の区域を調査した。調査範囲が極めて狭小であったため、遺跡の全体像を把握するに至らなかったことは記すまでも無く、遺構個々についてもその大半が完掘できなかった。

竪穴住居は24軒を検出した。古墳時代の後期から平安時代前半の時期である。その他の遺構としては井戸1基、土坑10基、溝4条を調査したが出土遺物が極めて少量で構築時期を確定するには至らなかった。

この他、遺構に直接伴わない遺物として縄文時代の打製石鏃が1点、弥生土器2点、中世瓦1点などが出土した。

本遺跡からの出土遺物の総量は60×37×15㎝の遺物収納箱の16箱分であった。この中で本報告に際し資料化し本文中に掲載したものは155個体である。

(1)　竪穴住居

検出した24軒を時期別に見ると古墳時代後期9軒、奈良時代7軒、平安時代4軒である。

調査区域の幅が6ｍと狭小なものであったため、住居の全体形状を把握できたものは一部に限られたものであったが、竈は大半が東側の壁面に構築されていた。北側に構築された例としては9・13号住居がある。

遺物としては土師器杯・甕がその大半を占めるがその他に須恵器・灰釉陶器も少量であるが出土した。墨書は2点確認できた。また、8号住居に代表されるように長軸10～20cm前後の自然円礫が出土しており、その中の数例には使用痕が確認できる。いわゆる弧編み石と呼称されるものであろうか。

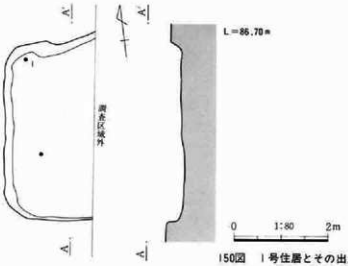
1 号 住 居

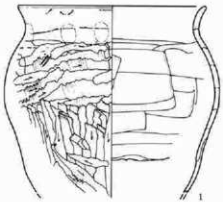
位　置　G−20　　**写　真**　PL43

形　状　南北4.0mを測る。東側は、調査区域外に及び、竈もそちら側に付設されていたと思われる。東西の残存長は、1.96mを測った。壁面の残存高は24〜30cmである。

床　面　ロームを床とする部分はやや踏み固められている。南西隅に土坑状の掘り込みがある。

遺　物　出土量は少ない。床面の中央、やや南側寄りから甕の破片が出土したほか、北西隅近くで床面から10cm離れて甕（1）の破片が出土している。（観P56　写PL48）





150図　1号住居とその出土遺物

2 号 住 居

位　置　F−17　　**写　真**　PL43

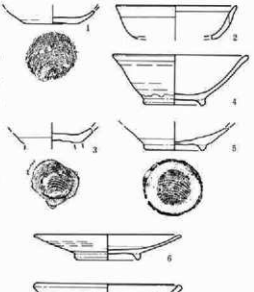
形　状　南北に長軸を有する矩形を呈しているが、東壁、竈の左側から北東隅にかけては、3号住居の埋没土を確認面としたため検出が困難であった。壁面は、残存の良好な西壁で20〜39cm、東壁で9cmほどであった。　**方　位**　N85°30′W

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。竈の左側を欠失したため全体形状に明確さを欠いている。燃焼部は住居壁際に位置し、左右の袖部がわずかに残存する。煙道部は、壁外に40cmほど延び、径15cmの煙出し孔が検出された。

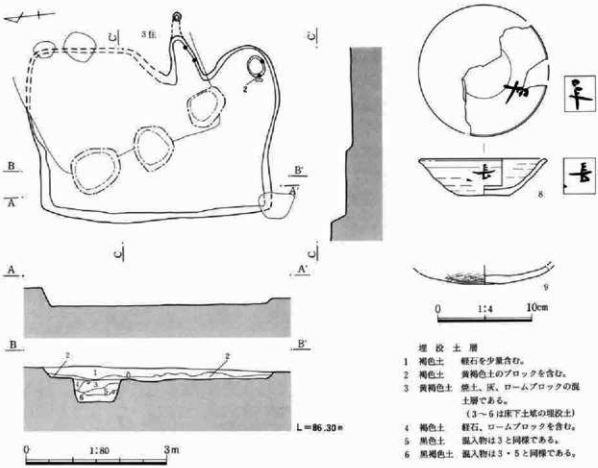
貯蔵穴　南東隅に径44×38cm、深さ15cmのピットがある。

遺　物　竈燃焼部内から杯（1）が、貯蔵穴から杯（2）が出土している。また、埋没土中出土の杯（8）には墨書で「長」が記されている。（観P56　写PL48）

備　考　3号住居と重複関係にあるが、2号住居が後出である。住居内に3基の床下土坑がある。



151図　2号住居出土遺物



152図　2号住居とその出土遺物

3　号　住　居

位　置　G－17　　**写　真**　PL43

形　状　規模は、南北3.83m、東西3.50mを測るが、南壁・西壁の削平が著しい。壁高の残存は、良好な北東隅で39cmを測った。

面　積　13.4m²　　**方　位**　N77°30′E

竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部の一部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。残存状態は不良であるが、左右の袖部が確認できた。火床面には、炭化物が散見された。

遺　物　竈燃焼部内から杯（2）と甕の破片が出土している。杯（3～5）は、床面からの出土である。埋没土内からは、弥生土器の甕の小破片（18）や縄文時代の石鏃（17）が出土した。（観P58・59　写PL48）

備　考　3基の土坑状のピットが重複している。2・4号住居と重複している。構築順序は4号、3号、2号の順である。

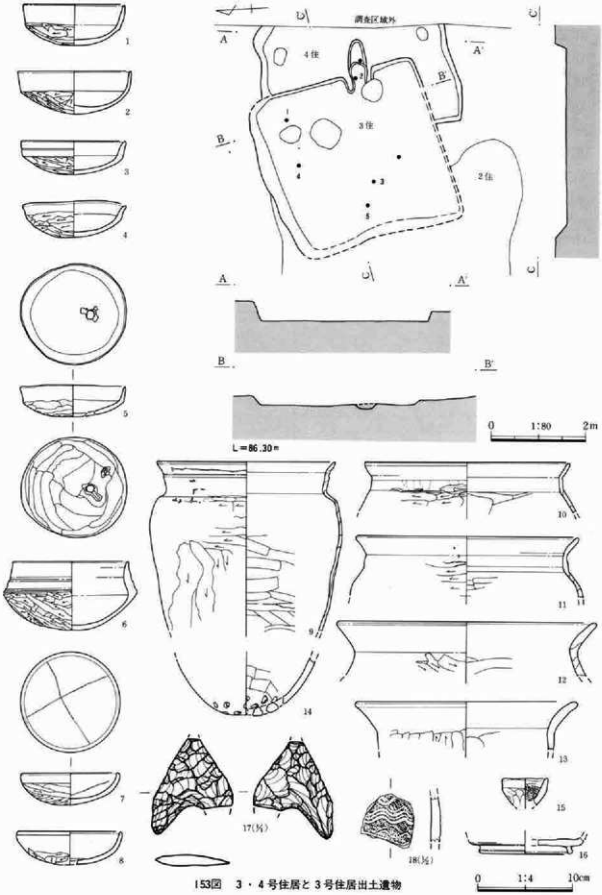
4　号　住　居

位　置　G－17　　**写　真**　PL43

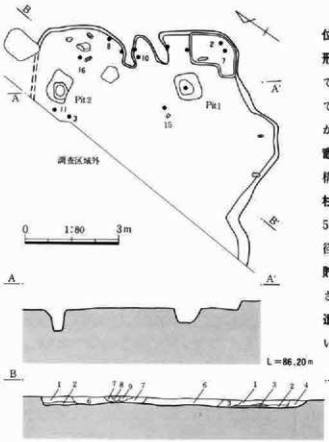
形　状　南北4.08mを測る。東側は、調査区域外に、西壁の大部分は3号住居により削平されており、部分的な検出に止まった。残存壁高は、東側で25cm前後である。

遺　物　全く出土しなかった。

備　考　南壁、北壁際に小ピットが1基ずつ掘り込まれている。



153図　3・4号住居と3号住居出土遺物



5 号 住 居

位 置 G−16 **写 真** PL43

形 状 西側が調査区域外に及び全体の形状を把握できなかった。南壁はその中央が台形状に張り出している。規模は、南北が竈寄りの場所で4.28m、東西が4.70m以上を測る。 **方 位** N52°30′E

竈 東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は住居内に構築され、左右の袖部が延びている。

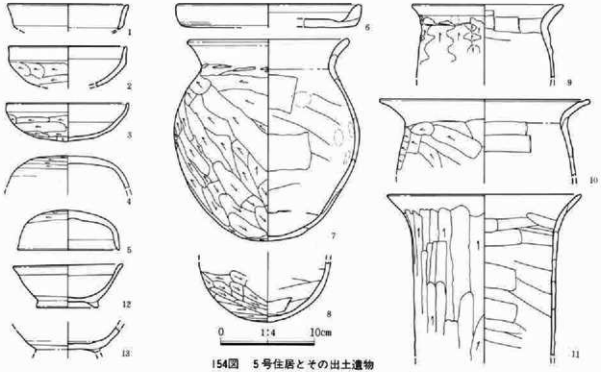
柱 穴 2本が検出された。竈の右側、Pit 1 は径59×55cm、深さ48cmを測る。北東隅寄りの Pit 2 は、径62×42cm、深さ48cmを測る。

貯蔵穴 南西隅の99×84cm程の不整形の範囲が、深さ3〜5cm程皿状に掘り込まれている。

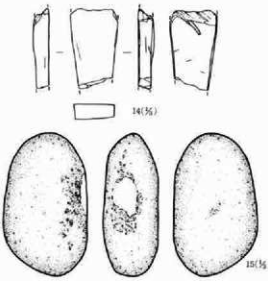
遺 物 竈燃焼部内から甕 (10) の破片が出土している。その他の杯、甕はいずれも床面から10cm程離れて出土している。埋没土中からは砥石(14)のほかに小円礫が8個出土した。

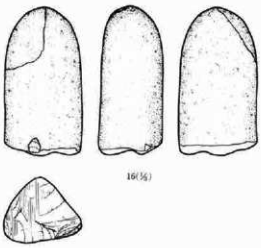
(観P60・61 写PL49)

備 考 北壁は2号住居と重複する。竈は3号土坑により削平を受けている。前には径30cm、深さ16cmのピットがある。



154図 5号住居とその出土遺物





155図　5号住居出土遺物

6　号　住　居

位　置　H−12　　**写　真**　PL43

形　状　東側は調査区域外に及び西側の半分程を検出したに止まった。規模は、南北3.26m、東西1.50m以上を測る。壁高の残存は、北西隅で32cm、南西隅で19cmを測る。

遺　物　全く出土しなかった。

備　考　3号溝により削平を受けている。また、住居内にピットが2基あるが住居との関係は把握できなかった。

7　号　住　居

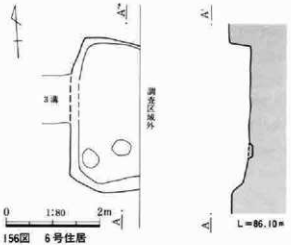
位　置　G−12　　**写　真**　PL43

形　状　西側は調査区域外に及ぶ。南北4.33m、東西3.06m以上を測る。残存壁高は、17〜26cmである。中央を3号溝が東西に横切り、壁、床面が削平を受けている。竈も削平されている可能性が高い。

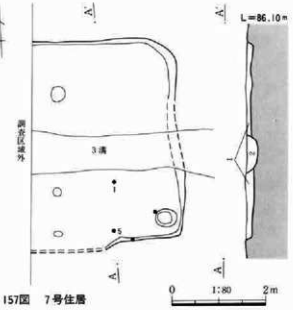
貯蔵穴　径45×38cm、深さ16cmを測る。

遺　物　床面から杯（1）が出土している。また、埋没土出土の高台付椀（2）には「真」の墨書が記されている。（観P59　写PL49）

備　考　住居の西側寄りに小ピットが3基認められる。北側の2基は、位置的に柱穴の可能性も考えられるが、深さがいずれも、5cm、12cmと浅いものである。



156図　6号住居

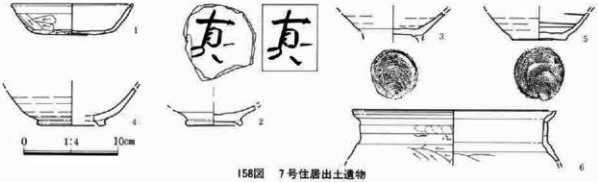


157図　7号住居

埋　没　土　層

1　褐色土　焼土、軽石を少量含む。

2　3号溝埋没土



158図 7号住居出土遺物

9 号 住 居

位 置 G—10 **写 真** PL44

形 状 西側の一部を検出した。南壁・東壁の大半は、調査区域外である。また、北壁は8号住居により削平されている。南北7.12m、東西5.10mを測り、本遺跡の中で最大規模である。南西隅の残存壁高は47cmである。 **方 位** N25°W

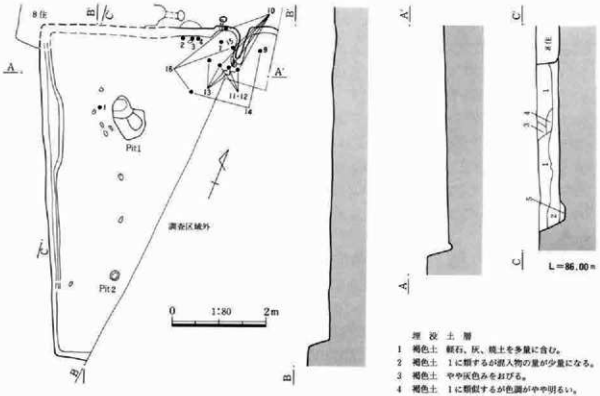
柱 穴 2本を検出した。住居の北西に位置するPit 1は径47×36cm、深さ87cmを測り、南東部分に径57cm、深さ17cmのピットが重複している。Pit 2は径20cm、深さ32cmを測る。

周 溝 西壁際に認められた。上幅12～30cm、深さ7～15cmである。

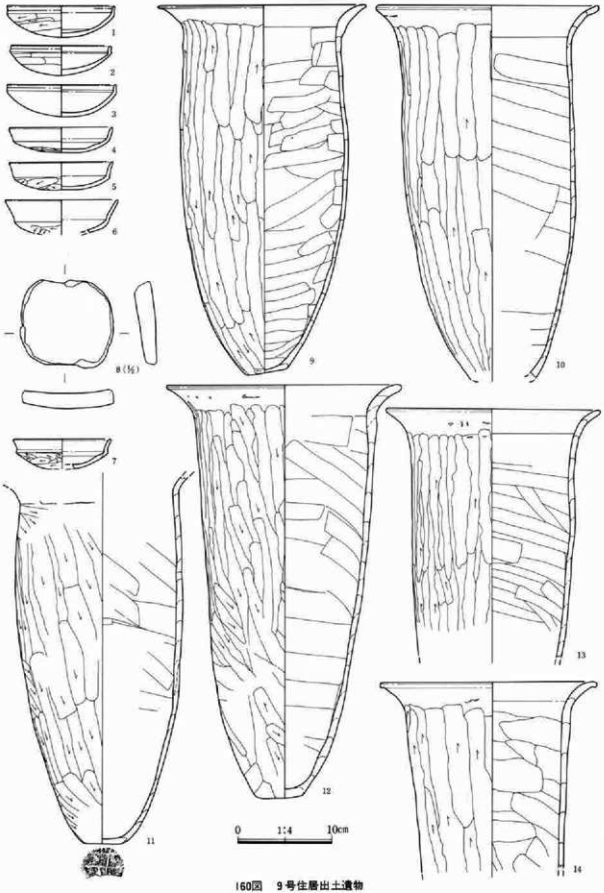
竈 北壁に位置する。崩壊が著しいものであったが、燃焼部は、住居内にあり、右側の袖部が残存していた。先端には円礫を据え、補強している。倒立して出土した甕（13）は、左側の袖部先端にあたり、甕（10～12・14～16）も焚口部の補強材と考えられる。

遺 物 竈燃焼部内から杯（7）、円形土版（8）が、竈の右側、床面から甕（9）が出土している。また、埋没土の中・上層から小円礫が出土している。

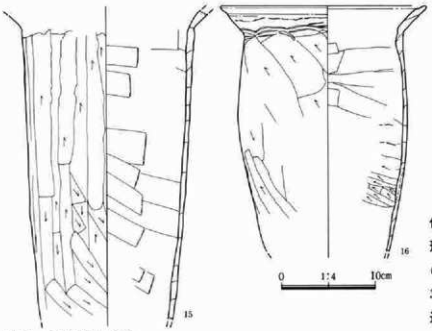
（観P62・63 写PL50）



159図 9号住居



160図　9号住居出土遺物



161図　9号住居出土遺物

10 号 住 居

位　置　G−10　　**写　真**　PL45

形　状　矩形を呈すると思われるが、西側半分は調査区域外に及び、東・南いずれの壁面も完掘していない。残存規模は、南北3.03m、東西2.28mである。残存壁高は南東隅で55cmを測る。

方　位　N53°30′E

竈　東壁に位置する。燃焼部は住居内にあり、奥壁は住居の壁面を斜めに掘り込んでいる。火床面には炭化物、焼土が散見される。袖部は右側のみ残存していたが崩壊が著しかった。

床　面　竈の前がやや踏み固められていた。

遺　物　南東隅、南壁寄りの床面から杯（1）が出土している。（観P61　写PL50）

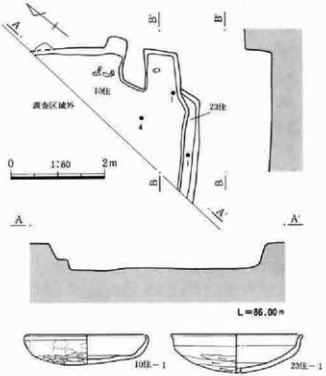
備　考　南壁は23号住居と重複している。燃焼部から4個、竈の右側から1個小円礫が出土している。

23 号 住 居

位　置　G−10

形　状　10号住居と重複、南壁の一部を検出した。残存壁高は32cmであった。

遺　物　床面から6cm離れて杯（1）が出土している。（観P68　写PL52）



162図　10・23号住居とその出土遺物

8 号 住 居

位　置　G−11　　**写　真**　PL44

形　状　9号住居との重複で竈の右側及び南壁の大部分は検出できなかった。南北3.36m、東西3.12mを測り、南北に長軸をもつがほぼ正方形に近い矩形である。四隅は整美な形状を呈していたと思われる。残存壁高は、37〜53cmで、北東隅が良好であった。

面　積　10.2㎡　　**方　位**　N77°E

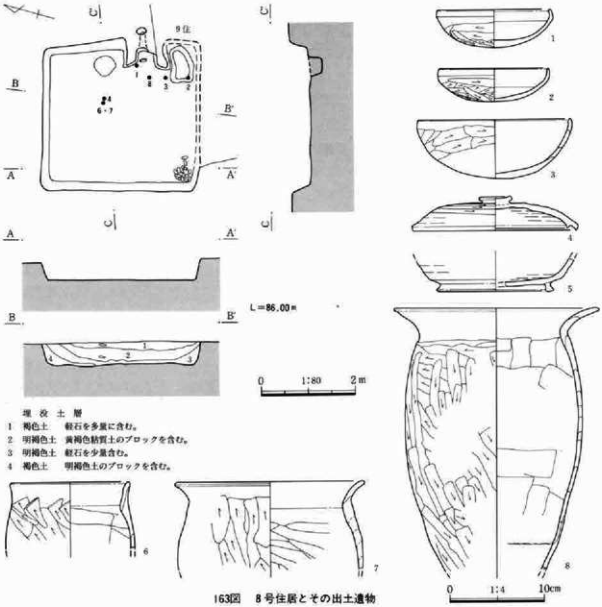
竈　東壁の中央から南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあり、左右の袖部分が残存していた。燃焼部奥には長さ40cmの煙道部が続き、径26×15cmの煙出し孔が残存していた。火床面には、灰、炭化物が散見された。

貯蔵穴　竈の右側に不整形の掘り込みがある。規模は、長軸81cm、短軸52cm、深さ13cmを測る。

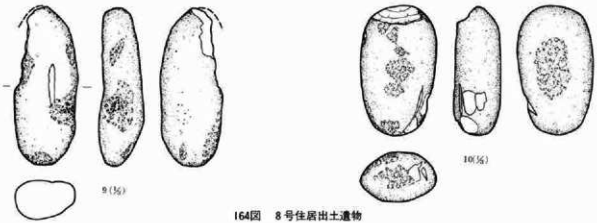
床　面　竈の前を中心にやや踏み固められていた。

遺　物　竈前を中心に出土している。左袖横から杯（1）が、竈前から杯（3）、甕（8）が出土している。貯蔵穴内からは杯（2）が出土している。南西隅の床面からは長軸12・13cm程の小円礫が16個まとまって出土している。（縦P57　写PL49）

備　考　9号住居と重複関係にあるが、本住居が新しいものと思われる。竈の左前には径44cmのピットがある。



163図　8号住居とその出土遺物



164図　8号住居出土遺物

11 号 住 居

位　置　G－9　　**写　真**　PL45

形　状　西側は調査区域外に及ぶ。南北3.61m、東西3.21m以上を測る。北東隅は鋭角で、全体の形状もやや乱れている。残存壁高は、28cmである。

柱　穴　北東隅で1本検出された。径38×35cm、深さ27cmを測る。　　**方　位**　N88°W

竈　東壁の中央からやや南側寄りに位置する。燃焼部は住居内にあったと考えられるが、袖部は両側とも残存していなかった。煙道部は壁面を62cm掘り込んで、径23cmの煙出し孔に続いていた。

貯蔵穴　竈の右側、住居の南東隅に位置する。円形を呈し、径40cm、深さ29cmを測った。上端の周囲は帯状に5cm程の高まりが認められた。

床　面　全体にやや踏み固められている。

遺　物　出土量は少量であった。竈前から杯が出土したがいずれも小破片で資料化できなかった。

（観P61　写PL51）

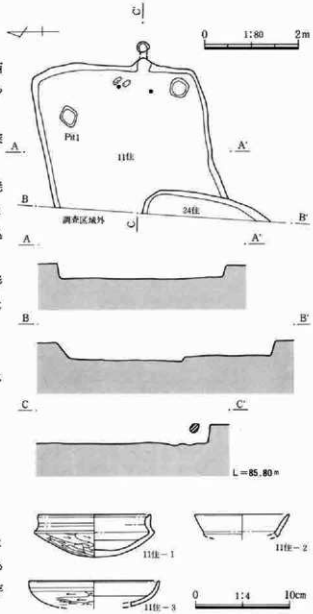
備　考　西側部分は、24号住居と重複している。

24 号 住 居

位　置　G－8

形　状　11号住居の西側に重複している。北東隅とその周辺を検出したが、主体は西側調査区域外にある。東壁は弧状に彎曲し、残存規模は2.60m程、残存壁高は30cmであった。

遺　物　全く出土しなかった。



165図　11・24号住居と11号住居出土遺物

14 号 住 居

位　置　G－6　　**写　真**　PL45

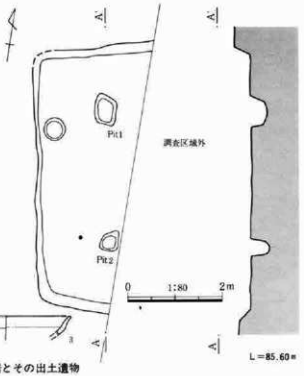
形　状　東側の大半が調査区域外に及び竈も検出されなかった。規模は、南北5.78m、東西2.60m以上を測る。残存壁高は、22～29cmであった。

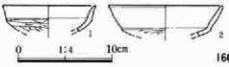
柱　穴　西側の2本を検出した。Pit 1は、径66×46cmの長円形を呈する。深さは40cmであった。Pit 2は、径38cm、深さ37cmである。

床　面　柱穴間がやや踏み固められていた。

遺　物　資料化したものはいずれも埋没土中からのもので床面からの出土は無かった。（観P64）

備　考　北西隅が13号住居と重複する。西壁際に径48cm、深さ33cmのピットがある。





166図　14号住居とその出土遺物

16 号 住 居

位　置　G－5　　**写　真**　PL46

形　状　東西に長軸を有する矩形を呈すると思われるが、西側は調査区域外に及んでいる。規模は、南北3.19m、東西3.74m以上を測る。残存壁高は、67～72cmと良好であった。**方　位**　N90°E

周　溝　北壁際にある。上幅は約10～14cm、深さ2・3cmを測る。

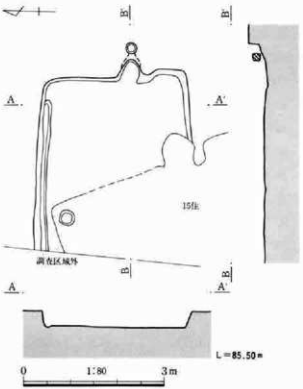
竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は、一部住居の壁面を掘り込んで構築されている。天井部は一部を残して崩落しているが、短い煙道を経て径23cmの煙出し孔に続いている。竈右側の状態からすると短い袖部が延びていた可能性がある。

床　面　全体に踏み固められていた。

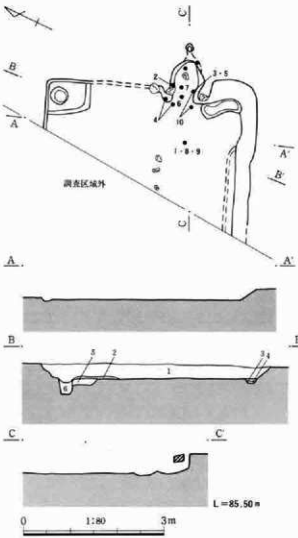
遺　物　床面からの出土は無かった。

（観P65　写PL51）

備　考　15号住居と重複している。



167図　16号住居とその出土遺物



埋 設 土 層
1 褐色土 軽石と焼土を含む。
2 褐色土 焼土粒を多量に含み硬い。貼床か。
3 明黄褐色土 (3・4は開溝埋設土)
4 褐色土 粘性が強い。
5 褐色土 床下土坑か。
6 褐色土 ピットの埋設土。

15 号 住 居

位 置 G－5 **写 真** PL46

形 状 西側は調査区域外に及んでいる。規模は、南北4.60cm、東西3.27m以上を測る。東壁は16号住居の埋没土を確認面にしたため検出に困難を極めた。南壁は崩落したのか、立ち上がりが斜めである。残存壁高は、良好な南東隅で26cmであった。

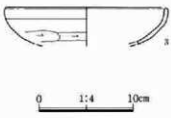
方 位 N68°30′W

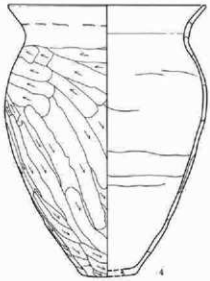
竈 東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は、住居の壁面を掘り込んで構築され、左右の袖部の先端には自然円礫が据えられている。火床面の中央には小円礫が支脚として置かれていた。煙道は短く、径12cmの煙出し孔に続いている。

貯蔵穴 竈の右側に径84×30cm、深さ23cmの掘り込みがあり、これが貯蔵穴の可能性がある。

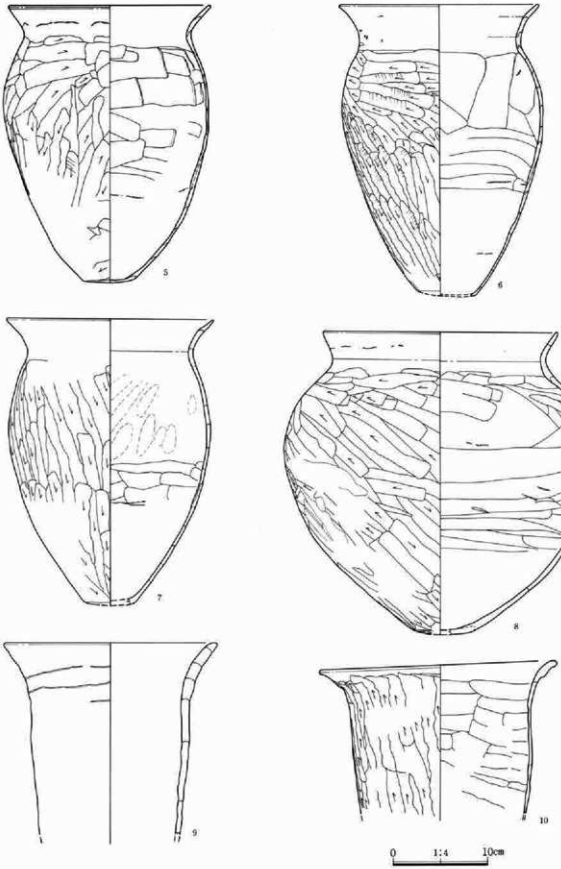
遺 物 竈とその手前に集中していた。竈燃焼部内からは杯（2・3）、甕（4～7・10）が出土している。焚口部に近い甕は焚口部の補強材に用いられていた可能性もある。甕（8・9）は竈前の100×50cm程の範囲に潰れて広がっていた。(図P64 写PL51)

備 考 北東隅に径35cm、深さ26cmのピットがあり、周辺も若干掘り込まれている。性格、所属も把握できなかった。





168図 15号住居とその出土遺物



169図　15号住居出土遺物

12 号 住 居

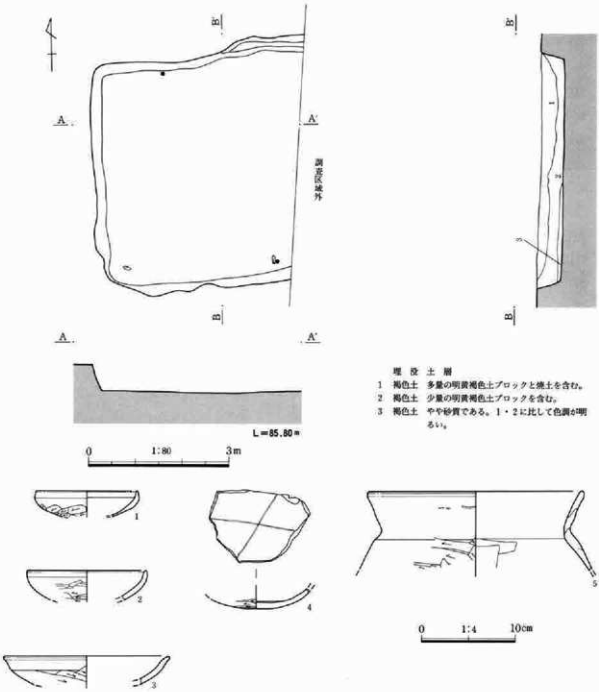
位 置　G－8　　**写 真**　PL45

形 状　規模は、南北4.96m、東西4.53m以上を測る。東側は調査区域外に及ぶが、南東隅に竈の構築材と考えられる粘土や焼土が広がっており、東壁までの距離は近いと思われる。また、北壁の東半は一部テラス状を呈している。

床 面　全体に踏み固められている。

遺 物　出土量は少量で床面出土のものは資料化できなかった。(縦P66　写PL51)

備 考　13号住居と重複関係にあるが、本住居が新しいと考えられる。北側に11号住居が近接し、事実上の重複関係にある。



170図　12号住居とその出土遺物

13 号 住 居

位　置　G－7　　**写　真**　PL45

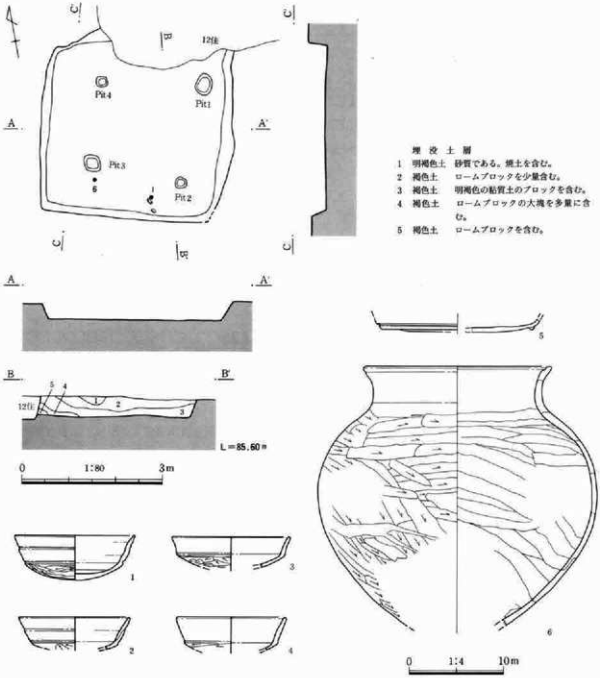
形　状　南北3.68m、東西4.08mを測る矩形を呈するが、北壁は、大半が12号住居により削平されている。竈も北壁に付設されていたものが削平されたと考えられ、焼土を含む粘土が厚く広がっていた。残存壁高は、31～41cmであった。

柱　穴　主柱穴と考えられる4本を検出した。Pit 1は、径45×35cm、深さ27cm。Pit 2は、径23cm、深さ21cm。Pit 3は、径36cm、深さ33cm。Pit 4は、径25×20cm、深さ29cmである。

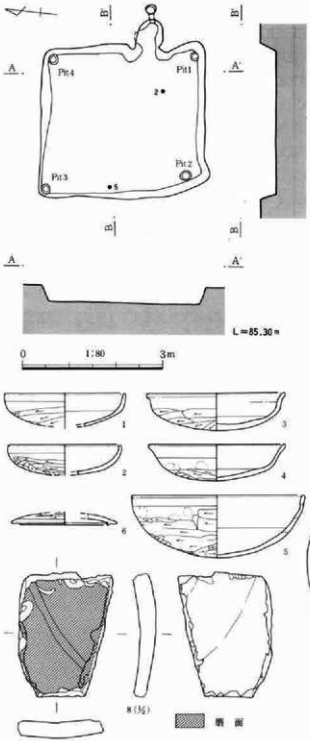
床　面　全体に踏み固められている。

遺　物　Pit 3の南側から甕（6）が、南壁の中央寄りから杯（1）が出土している。（観P63　写PL51）

備　考　12・14号住居と重複している。



171図　13号住居とその出土遺物



172図　17号住居とその出土遺物

17 号 住 居

位　置　G－3　　**写　真**　PL46

形　状　東西3.28m、南北3.53mを測る矩形を呈する。西壁の南側が弧状に入り込むが、全体に整美な形状を呈する。残存壁高は、29～36cmを測った。

面　積　11.3m²　　**方　位**　N84°30′E

柱　穴　住居の四隅に掘られている。掘削深度が浅く疑問な点も残る。以下、その規模を記す。Pit 1 は、径17cm、深さ 9 cm。Pit 2 は、径20cm、深さ 7 cm。Pit 3 は、径22cm、深さ 9 cm。Pit 4 は、径22cm、深さ 6 cm。

竈　東壁の中央からやや南側に位置する。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで構築される。左右の袖部は短く残存する。火床面には炭化物、焼土が多く、竈壁面の焼土化も進行していた。煙道部は天井部が残存していたが、18cmと短く、径20cmの煙出し孔に続いていた。

遺　物　竈の燃焼部内から甕が出土しているが資料化できなかった。(観P65　写PL51)

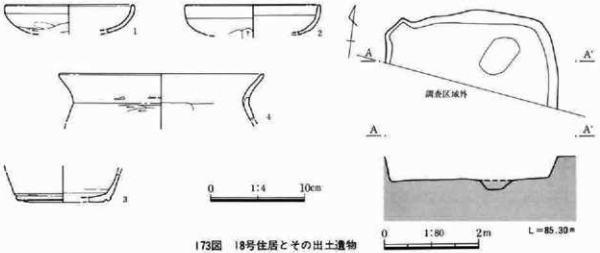
18 号 住 居

位　置　E－3

形　状　北壁を中心に検出したが、南側の大半は調査区域外に及んでいる。隅丸の矩形を呈していたと思われるが北西隅がやや乱れている。

遺　物　埋没土中から出土した。(観P66)

備　考　住居内に径93×59cm、深さ13cmの掘り込みがある。床下土坑の可能性もある。



173図　18号住居とその出土遺物

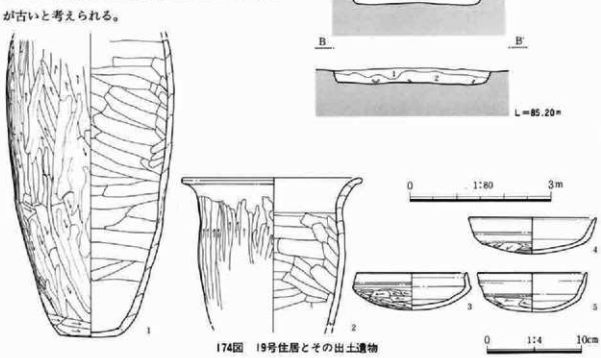
19 号 住 居

位 置　B－3　　**写 真**　PL47

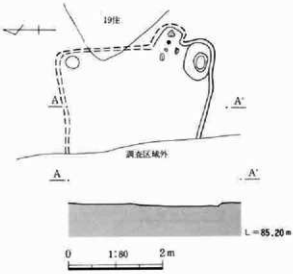
形 状　東西に長軸を有する矩形である。東西3.35m、南北2.44mを測る。残存壁高は、20～34cmを測る。竈の構築については不明瞭であったが南東隅に遺物が集中する箇所があり、この部分に可能性が考えられる。　　**面 積**　6.4m²

遺 物　杯（3・5）、甕（2）が出土しているがいずれも床面からやや離れている。（観P66・67　写PL52）

備 考　北東隅は20号住居と重複している。本住居が古いと考えられる。



174図　19号住居とその出土遺物



20 号 住 居

位　置　B－3　　**写　真**　PL47

形　状　残存状態が劣悪で、竈と南壁の一部が検出できたのみである。また、西側は調査区域外に及んでいる。床面の状態からは南北3.20m程が推定でき、東西は、2.2m以上を測る。

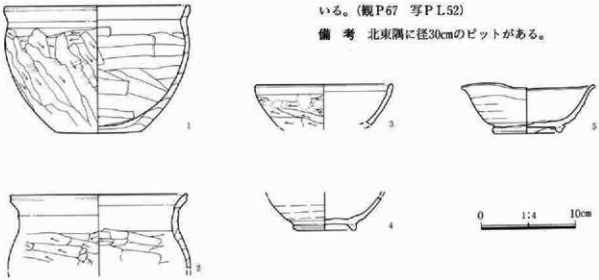
方　位　N86°30′E

竈　東壁に位置するが崩壊が著しく形状の復元は困難である。構築材の粘土の間に礫が3個認められる。北側のそれは左袖部の補強材、東側のものは支脚と考えられる。南側のそれも袖部の補強材の可能性があるが、位置的に近接しすぎている。

貯蔵穴　竈の右側に径95×70cm、深さ31cmのピットがあり、可能性が高い。

遺　物　竈部分から高台付椀（3・5）が出土している。（観P67　写PL52）

備　考　北東隅に径30cmのピットがある。



175図　20号住居とその出土遺物

21 号 住 居

位　置　B－4　　**写　真**　PL47

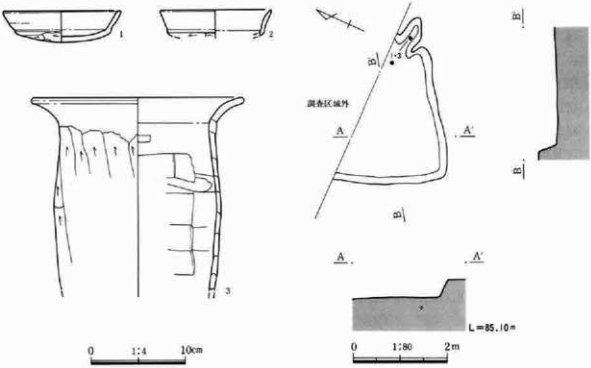
形　状　北側の半分が調査区域外に及び、全体形状は把握できなかった。

方　位　N62°E

竈　南東隅に位置し、軸線は住居の軸線の方向から45°振れている。燃焼部は、住居の壁面を掘り込んで構築されているが他の例に比べて狭く、漸次レベルをあげて煙道部へと続いている。竈前に構築材の粘土が流れ出していたが、両側の袖部が短く残存していることが確認できた。

遺　物　燃焼部から杯（1）、甕（3）が出土している。（観P68　写PL52）

備　考　20号住居とは事実上の近接関係にある。



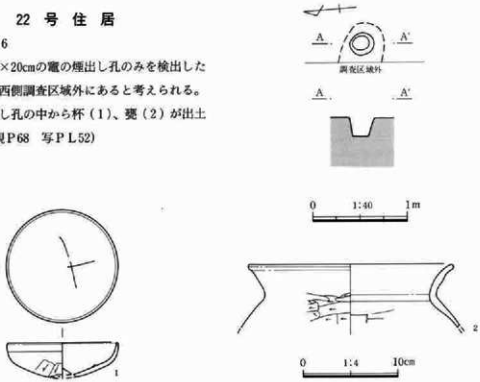
176図　21号住居とその出土遺物

22 号 住 居

位　置　G－6

形　状　径25×20cmの竈の煙出し孔のみを検出した住居の主体は西側調査区域外にあると考えられる。

遺　物　煙出し孔の中から杯（1）、甕（2）が出土している。（観P68　写PL52）



177図　22号住居とその出土遺物

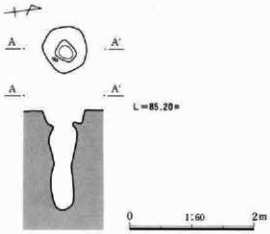
(2) 井　　戸

1 号 井 戸

位　置　C－3

形　状　19号住居の東方に位置する。確認面での平面形は、やや乱れた円形を呈する。径は約70cmを測った。深さは1.56mで、上端から20cmで径30cmと細くなる。その下はやや崩れているのか径44cmを測った。

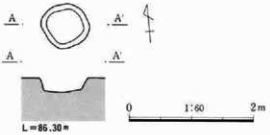
備　考　遺物は全く出土しなかった。



178図　1号井戸

(3) 土　　坑

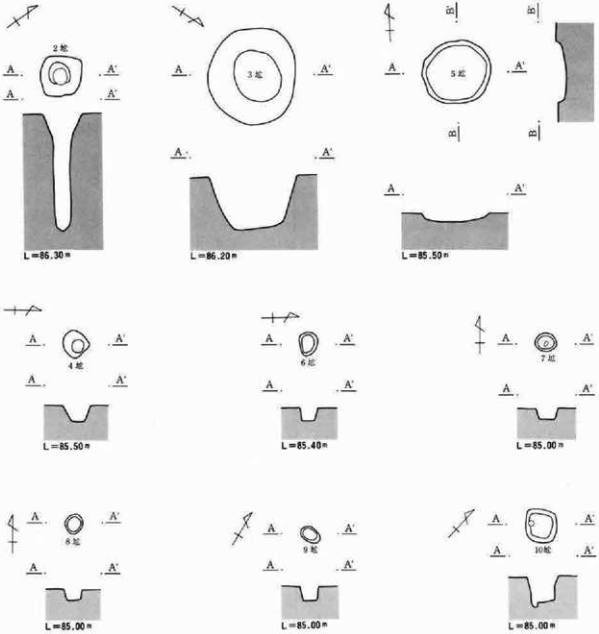
荒砥宮西遺跡からは10基の土坑が検出されている。調査区域が遺跡の一部分にすぎない中では、その分布についても特別な傾向を抽出するまでには至らなかった。出土遺物は1号から杯の破片が、2号から甕の破片が出土しただけで掘削時期を決定するにたる資料は得られなかった。



179図　1号土坑

3表　荒砥宮西遺跡土坑一覧（遺物観察表P69）　　（単位：m）

番号	位置	外形	規模 上端	規模 下端	残存壁高	備考
1	G－18	円形	0.71×0.69	0.53×0.51	0.24	
2	G－18	円形	0.66×0.65	0.27×0.22	1.86	井戸の可能性がある。
3	G－17	楕円形	1.54×1.41	0.80×0.76	0.83	5号住居の竈を切っている。
4	G－6	円形	0.40×0.38	0.20×0.18	0.25	4・5・6号は近接して位置する。
5	G－6	円形	1.09×0.99	0.96×0.87	0.14	
6	G－6	不整形	0.37×0.28	0.28×0.20	0.20	
7	C－4	円形	0.34×0.30	0.26×0.22	0.16	7・8・9号は近接して位置する。
8	C－4	円形	0.29×0.27	0.22×0.22	0.15	
9	C－3	長円形	0.34×0.23	0.23×0.16	0.23	
10	B－3	隅丸矩形	0.53×0.50	0.38×0.38	0.42	底面に径9cm、深さ8cmのピットがある。



180図　2～10号土紘

181図　1・2号土紘出土遺物

(4) 溝

4条の溝が検出されたが、調査範囲が狭く、部分的な検出に止まった。掘削時期についても出土遺物などから決定するまでには至らなかった。

1 号 溝

位 置 G・H−12 **写 真** PL43

形 状 東西方向に延びる溝である。走行の方向は、N88°Eである。6・7号住居と重複し、これを切っている。検出した長さは、6.08m、幅は、0.72〜1.12mを測った。残存壁高は、良好な地点で27cmであった。

遺 物 埋没土中から甕（1）の小破片が出土したのみである。(観P69)

2 号 溝

位 置 E−4 **写 真** PL47

形 状 東側を外縁として弱く彎曲している。走行はおよそN41°30′Eである。検出した長さは2.7mである。幅は0.70〜0.83m、残存壁高は15〜23cmを測った。

遺 物 埋没土中、底面から10cm離れて杯（2）が出土している。(観P69 写PL52)

3 号 溝

位 置 B・C−4 **写 真** PL47

形 状 南側を外縁として弧状に延びる溝である。幅は0.30〜0.72mを測り西側が広くなっている。深さ2〜8cmである。

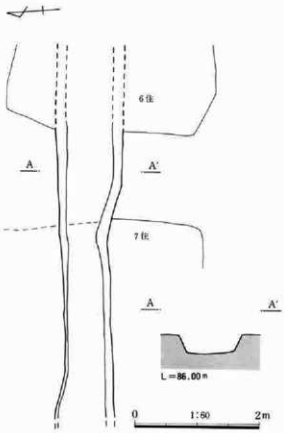
備 考 21号住居と重複して、これを切っている。出土遺物は皆無である。

4 号 溝

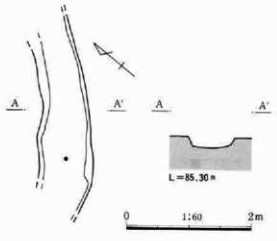
位 置 A・B−1・2 **写 真** PL47

形 状 東西方向に延びる溝である。走行の方向は、N71°Eである。検出した長さは5.02mである。幅は0.60〜0.74m、残存壁高は11〜15cmを測った。底面は、西側に向かって低くなる。比高差は8cmである。

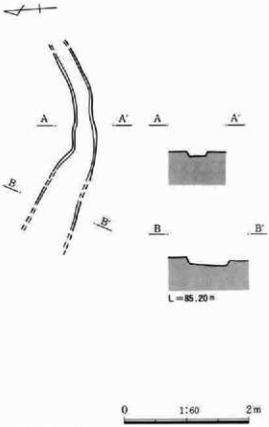
遺 物 埋没土の上層から瓶の口縁部が出土している。(観P69 写PL52)



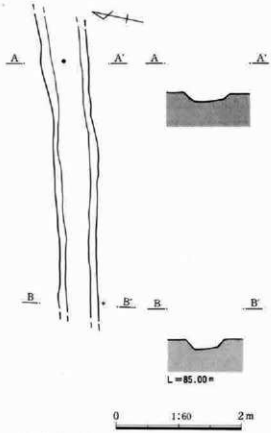
182図 1号溝



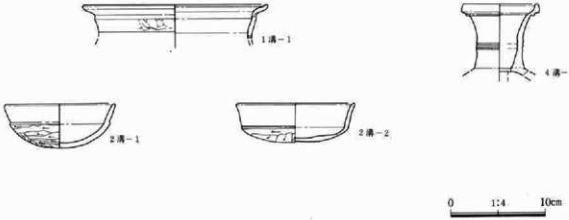
183図 2号溝



184図　3号溝



185図　4号溝

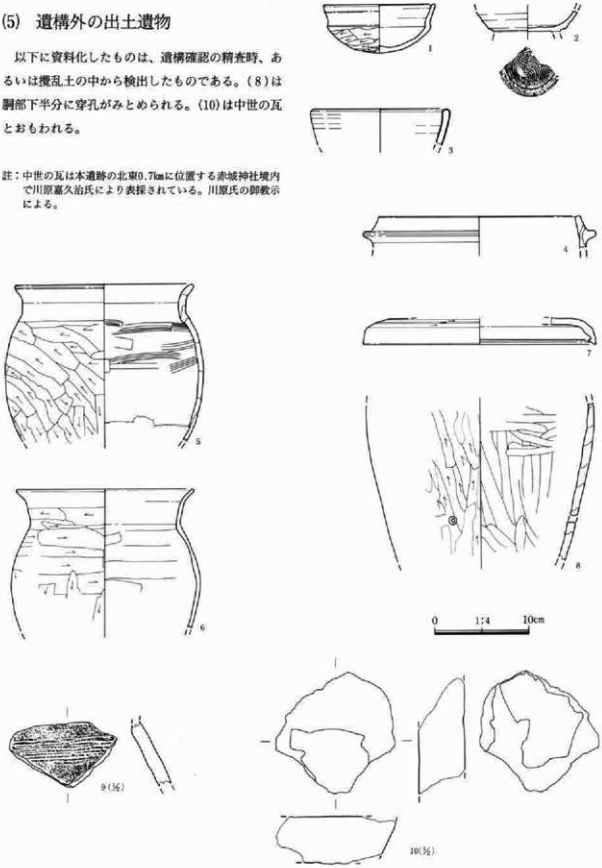


186図　1・2・4号溝出土遺物

(5)　遺構外の出土遺物

以下に資料化したものは、遺構確認の精査時、あるいは攪乱土の中から検出したものである。(8)は胴部下半分に穿孔がみとめられる。(10)は中世の瓦とおもわれる。

註：中世の瓦は本遺跡の北東0.7kmに位置する赤城神社境内で川原嘉久治氏により表採されている。川原氏の御教示による。



187図　遺構外の出土遺物

Ⅳ　成果と問題点

Ⅱ・Ⅲでは荒砥洗橋遺跡と荒砥宮西遺跡で検出した個々の遺構および遺物について報告した。各章の文頭にも記述したように、荒砥洗橋遺跡では竪穴住居90軒、掘立柱建物5棟をはじめ柱穴列、井戸、土坑、溝、水田を検出した。荒砥宮西遺跡では竪穴住居24軒をはじめ井戸、溝、土坑を検出した。伴出遺物も古墳時代から平安時代を中心に縄文時代、中・近世と多岐にわたっている。

ところで、荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡の両遺跡とも、赤城山南麓を流下する宮川流域に位置する。調査が遺跡全体におよんでいないため断定することは困難であるが、ともに古墳時代になって新たに形成された「第一次新開集落」の一例と考えられる。

ここでは出土土器の分類をおこない、それを基礎として荒砥洗橋遺跡の居住域の動向を整理しておきたいと考えた。また、比較的まとまった文字資料についても、一定のまとめをおこない、今後の資料の蓄積に備えたいと思う。

1　出土土器について

荒砥洗橋遺跡から90軒、荒砥宮西遺跡からは24軒の竪穴住居がそれぞれ検出された。これらの住居は、その出土遺物から概ね古墳時代後半から平安時代のものと思われる。ここでは両遺跡出土の土器を分類し、その変遷について多少の検討を加えてみたい。分類にあたっては、土器の器種[(1)]として、土師器杯[(2)]・甕を中心に、住居ごとの共伴関係を重視するとともに、須恵器蓋・杯、灰釉陶器などの年代観も考慮にいれた。

Ⅰ段階　洗橋58号・78号・87号の各住居の出土土器がこの段階と思われる。土師器の杯と甕が認められるがともに良好な資料とは言えない。その他の器種の存在も想定できる。

土師器杯　口縁部が外反して立ち上がる杯Aと外反する中位に稜を持つ杯Bの二種がある。胎土はこの段階以前の土器と大差無く、砂粒を多く含んでいる。色調は鈍い赤褐色をおびるものと炭素が吸着して黒みをおびるものがある。

Ⅱ段階　洗橋68号・83号住居出土の土器群に代表される。土師器杯・甕と須恵器蓋がある。

土師器杯　杯Aと杯Bが引き続き認められる。その他に口縁部が内折して立ち上がる杯Cがある。ともに口縁部と底部を画する稜を有している。前段階との相違点としては、口縁部の直径の縮小化や胎土が水漉しあるいは水ついたように非常に精選された状態にある点などを指摘することができる。

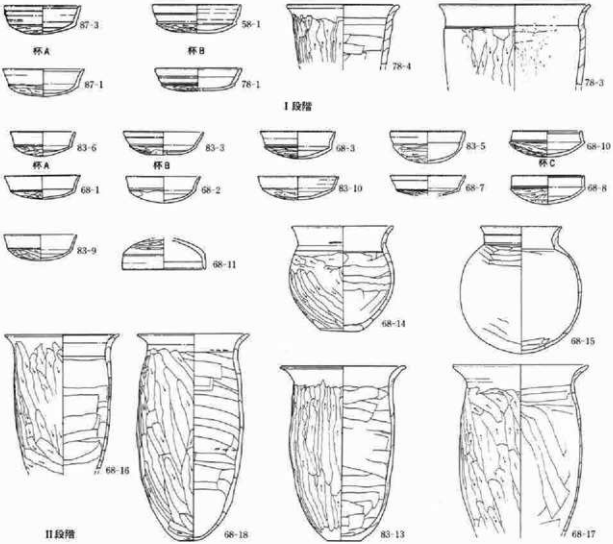
土師器甕　比較的良好な資料である。胴部は長胴のものと丸胴のものに大別できる。長胴のものは縦あるいは斜め縦方向に篦削りを施している。口縁部の形状により三種類ほどに細別の可能性がある。後段階へのつながりについては判然としない点があるが、胴部は中位に最大径を有し、まだ、丸みを残している。丸胴のものはやや小型である。

Ⅲ段階　洗橋18号・65号住居出土の土器に代表され、土師器杯・鉢・甕が認められる。

土師器杯　杯Aのほかに65号住居の埋没土中からは丸底から口縁部が内彎して立ち上がるものが認められる。これを杯Dとする。

土師器甕　長胴で、口縁部が弧状に外反するものと、弱く「く」の字状に屈曲してたちあがるものがある。胴部は膨らみが弱くなり、最大径は前段階に比較してやや上位に移行する。

Ⅳ段階　宮西3号・5号・9号住居出土の土器に代表される。土師器杯・甕のほかに須恵器蓋が認められ



188図　出土土器の変遷（1）

る。

土師器杯　杯A、杯Dがある。杯Aは胎土や色調などに共通性があるものの、形状は底部に丸みを持ち器高の高いもの、全体の器高の低いものなどバラエティーがある。杯Dは、口縁部が弱く内彎して立ち上がるものと、あまり内彎せず立ち上がるもの、口縁部の先端が屈曲して短く立ち上がるものの三種類がある。

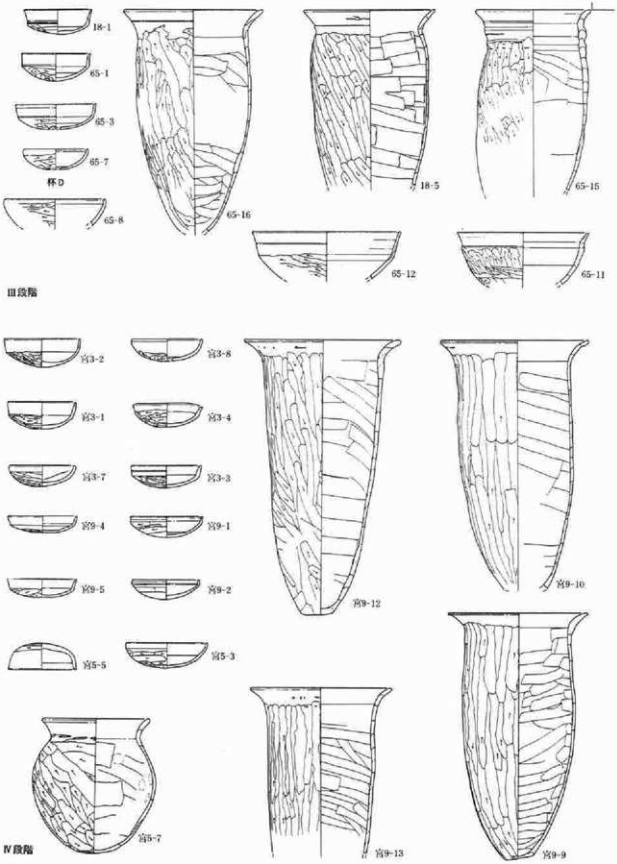
土師器甕　前段階の系譜を引くと思われる長胴のもののほかに丸胴のものがある。長胴のものの篦削りは縦方向が主であるが、宮西9号住一16は斜め方向の篦削りが施されている。

須恵器蓋　小径で天井部は回転を伴う篦削りが施されている。

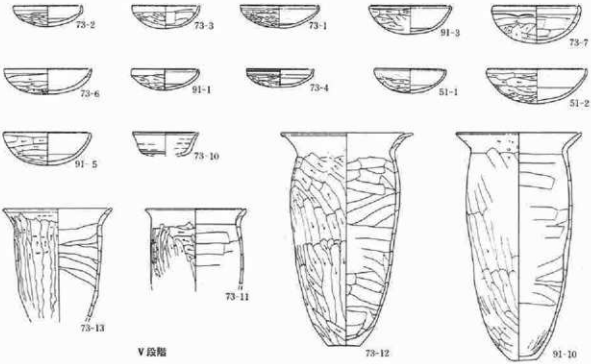
Ⅴ段階　洗橋51号・73号・91号住居出土の土器に代表されるもので、土師器杯・甕、須恵器杯が認められる。

土師器杯　杯Aと杯Dがあるが、量的には杯Dが圧倒的に多く、主体をしめている。杯Dは前段階と同様、口縁部に三種類の形状が認められる。整形の特徴としては、底部外面の全面をていねいに篦削りするものが多数である。

土師器甕　長胴のものと丸胴のものがある。長胴のものは、口縁部が「く」の字状に外反するもので、前



189図　出土土器の変遷（2）



190図　出土土器の変遷（3）

段階のものと比較して胴部上位の張りが目立つものである。小型のものは口縁部が弧状に外反している。

須恵器蓋　口縁部は弱く外傾して立ち上がり、先端が外反する。底部は手持ち篦削りである。

Ⅵ段階　洗橋38号・39号・75号・84号住居の出土土器群に代表される。土師器杯・甕、須恵器蓋・杯・高台付杯・脚付盤が出土している。須恵器の多様化が顕著になる。

土師器杯　杯A・杯Dのほかに皿状の杯Eが認められる。主体は杯Dである。口縁部の形状にはⅤ段階同様三種類の細別が可能である。器形は、Ⅴ段階の底部がやや尖りぎみであつたものと比較すると、丸みが有り、浅いものとなつている。

土師器甕　長胴のものと短胴のものがある。長胴のものには、口縁部が屈曲して立ち上がるもの、弧状に外反するものがある。いずれも前段階からの系譜を引くものであるが、甕は胴部の張りに丸みが出てくる。また、外面の調整に横方向の篦削りが認められる。

須恵器杯　小径で、口縁部は直線あるいはやや外反して立ち上がる。底部外面は手持ち篦削り調整である。

須恵器高台付杯　口縁部は短く、斜め方向に立ち上がる。高台部は形状・取り付け位置などに相違がある。洗橋84号住一11は、底部が丸底化して高台部が機能していない。

須恵器脚付盤　盤杯部の口縁は短く、外傾して立ち上がる。脚部は低く、大きく外反する。

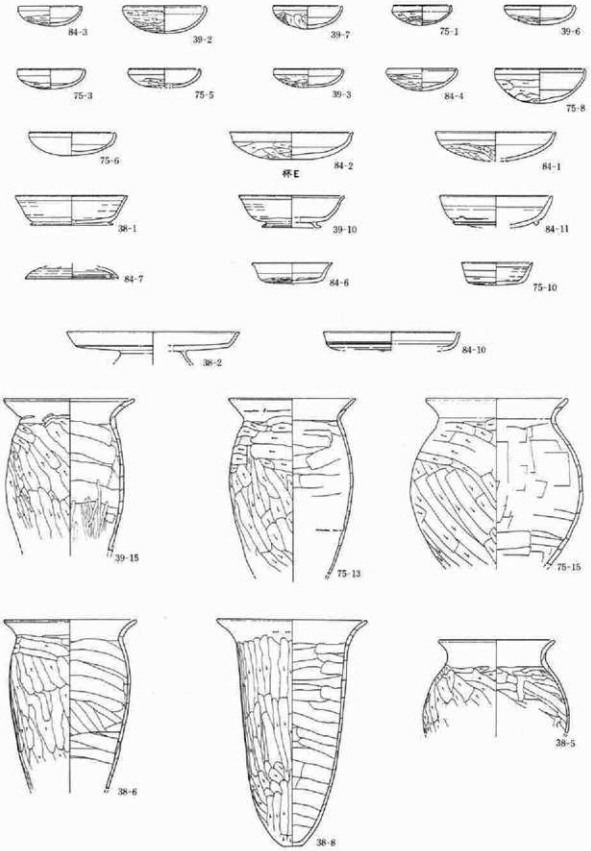
Ⅶ段階　洗橋21号・41号・66号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器蓋・高台付杯がある。

土師器杯　前段階の杯Dの系譜を引くものが三種類ある。

土師器甕　長胴のものと丸胴のものがある。長胴のものは前段階の二種類に、いずれも短胴化の傾向が現れてくる。丸胴のものには大小の大きさが認められる。

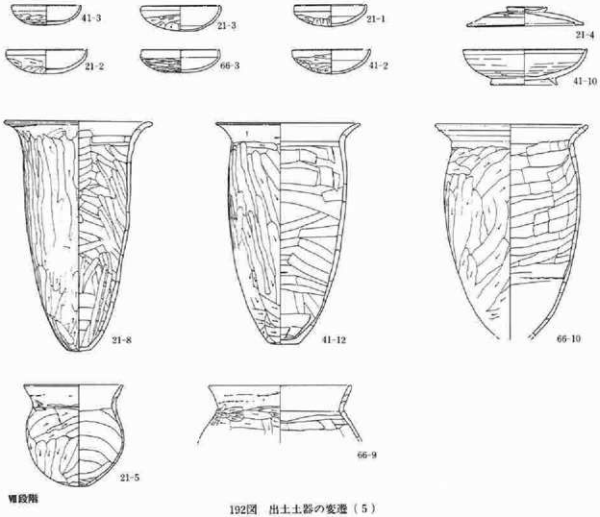
須恵器蓋　天井部の膨らみが薄く、内面の端部に形骸化したかえりが付く。つまみはリング状を呈している。

Ⅷ段階　洗橋17号・72号住居、宮西15号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器杯が認められる。



VI段階

191図　出土土器の変遷（4）



192図　出土土器の変遷（５）

土師器杯　杯Dと杯Eがある。杯Dは底部の丸みが増す。外面の篦削りは下位に限定される傾向にあり、口縁部の横撫でとの間に撫で調整のみの器面が残存している。杯Eは丸底の底部から口縁部が強く屈曲する。

土師器甕　長胴のもの二種類と丸胴のものがある。長胴のものは、口縁部が屈曲して立ち上がるものと弧状に外反するものがある。器形の別なく、器肉は薄くなり、胎土もそれまでの夾雑物が多く含まれるものと異なり、精選され、杯の胎土に類似したものになってくる。色調は茶みをおびてくる。

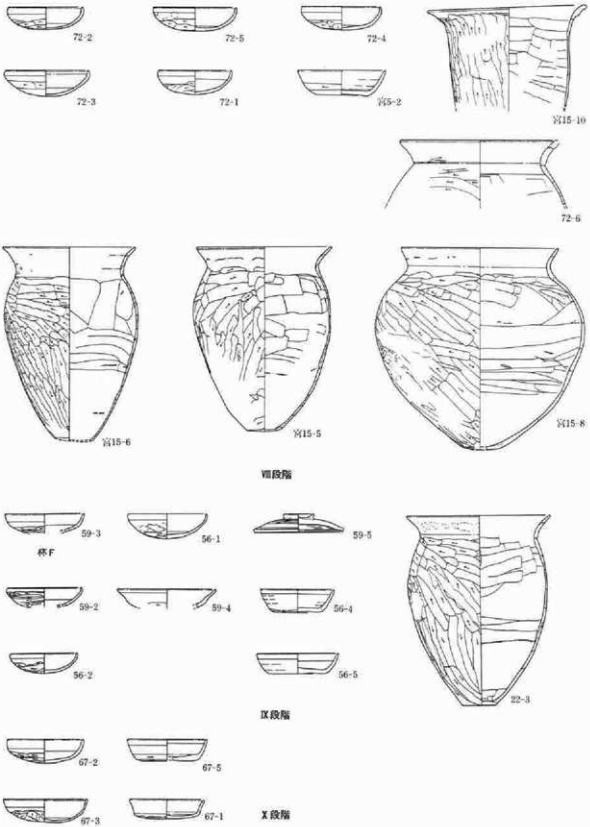
Ⅸ段階　洗橋56号・59号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器蓋・杯が認められる。

土師器杯　杯Dのほかにその系譜を引くものであろうか杯Fが出てくる。これは口縁部が斜め上方に立ち上がっている。

土師器甕　長胴のものが二種類と丸胴のものがある。長胴のものはいずれも前段階の系譜を引くものである。口縁部が屈曲して立ち上がるものは、一層短胴化の傾向にある。外面の調整も強い篦削りを、上位は横方向に、下位は斜め方向に施している。

須恵器蓋　天井部の張りが弱く、リング状のつまみが付く。端部は短く、垂直ぎみに折れ、内面のかえりは消滅する。

須恵器杯　底部の調整は56号住－5が回転を伴う篦切り離し、56号住－４は回転を伴う糸切り離し後周縁部分に篦削りを施している。



193図　出土土器の変遷（6）

Ⅹ段階　洗橋67号住居に代表される。土師器杯、須恵器蓋・杯が認められる。

土師器杯　二種類ある。ひとつは杯Ｆの系譜を引くものである。もうひとつは浅く、平底に近い底部から口縁部が外反して立ち上がるものである。

須恵器杯　底部は切り離し後回転を伴う篦削りである。

Ⅺ段階　洗橋19号・61号・92号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器杯が認められる。

土師器杯　杯Ｆの系譜を引くものは底部がより平底に近くなる。口縁部はやや外方に立ち上がる。

土師器甕　長胴のものと丸胴のものがある。口縁部の屈曲に鋭さが無く、下位は緩やかに立ち上がり、先端で外反している。Ⅸ段階のそれと比較すると立ち上がりが長くなる。

須恵器杯　底部の調整は回転を伴う篦削り調整である。

Ⅻ段階　洗橋46号・47号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器杯が認められる。

土師器杯　杯Ｆはより平底化の傾向にある。

土師器甕　長胴のものは、口縁部の先端の立ち上がりが短くなり、ＸＶ段階にみられるいわゆる「コ」の字状口縁を想起させる形状になる。

須恵器杯　底部の調整は、46号住－３が回転を伴う糸切り離し、46号住－４が手持ち篦削り、47号住－４は回転を伴う篦削りである。

ⅩⅢ段階　洗橋40号住居がこれにあたる。また、洗橋13号住居の中にもこの段階のものが含まれる。土師器甕、須恵器壺がある。

土師器甕　長胴のものがある。ⅩⅡ段階と同様の形状である。

須恵器壺　いわゆる平城宮土器分類によるところの「壺Ｇ」である。

ⅩⅣ段階　今回の調査ではこの段階に該当する住居の検出がない。

ⅩⅤ段階　洗橋13・69・70号住居、宮西７号住居に代表される。土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。

土師器杯　口縁部は平底の底部から斜め上方に立ち上がる。口縁部の調整は押圧と粗雑な削り・撫でである。これを杯Ｇとする。69号住居出土の杯は底部にやや丸みをもっている。

土師器甕　口縁部はいわゆる「コ」の字状口縁を呈している。

須恵器杯　酸化焔焼成である。口径に比較して底径が小さいもので口縁部の先端が外側につままれるように外反する。底部は回転を伴う糸切り離し痕が認められる。

須恵器壺　やや肩が張る形状で、還元焔焼成である。

ⅩⅥ段階　洗橋14・27号住居に代表される。土師器甕、須恵器杯、灰釉陶器高台付杯がある。

土師器甕　口縁部はいわゆる「コ」の字状を呈する。

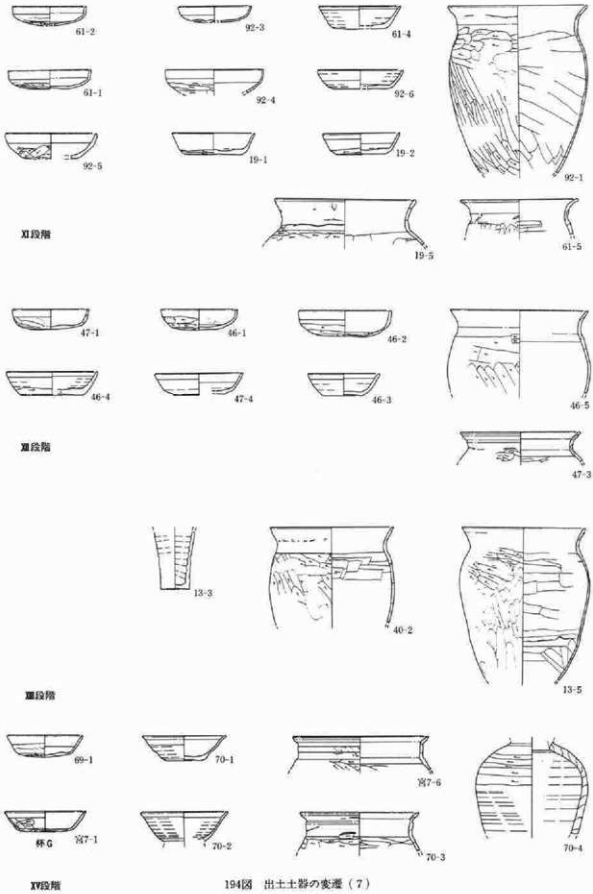
須恵器杯　酸化焔焼成、還元焔焼成の両者がある。

灰釉陶器高台付杯　口縁部は斜め上方に大きく開き、先端は外側につままれる。高台部は低く、外面が三日月状に弧をなす。施釉方法は漬け掛けである。

ⅩⅦ段階　洗橋９・10・29・88号住居に代表される。土師器杯・高台付椀・甕、須恵器杯・高台付椀、灰釉陶器高台付杯が認められる。

土師器杯　杯Ｇがみられる。前段階同様のものの他に、洗橋９号住－１・２のように底径が小さく口縁部が斜め上方に立ち上がる形状のものがある。内面の立ち上がりも弧状を呈している。系譜が異なるのであろうか。口縁部及び底部の外面には粗雑な篦削りが施されている。

土師器高台付椀　口縁部は下半にやや張りを持つもので、内面に研磨が施され黒色処理されているものも



194図　出土土器の変遷（7）

ある。

土師器甕　大型のものと小型で台部がつくものがある。前段階まで見られた口縁部の「コ」の字状の形状はやや崩れて、口縁部から胴上部の形状にバラエティーがみられる。

須恵器杯　器高が低く、口縁部は斜め上方に開く。焼成は酸化焔焼成である。

須恵器高台付椀　還元焔焼成のものと酸化焔焼成のものが混在している。洗橋29号住－1は、底部外面の一部に糸切り離し痕を残しているが、以後このような傾向が多くなる。還元焔焼成のものは深みのある形状で、器面にロクロ痕を良く残している。酸化焔焼成のものは器高の深いものと浅いものがある。

灰釉陶器高台付杯　口縁部は内彎ぎみに斜め上方に立ち上がる。高台の断面形状は三日月状を呈する。

XⅧ段階　洗橋6・37・44号住居に代表にされる。土師器杯・高台付椀・甕、須恵器杯・高台付椀が認められる。

土師器杯　杯Gがみられる。洗橋44号住－1は底部外面に砂粒が付着したままになっており、いわゆる「砂底」状態を呈している。

土師器高台付椀　底径が小さく、口縁部は直線的に外反する。内面の立ち上がりで底部に平坦面を持つものと、底面から弧を成して立ち上がるものに細分できる。器面の調整は杯G同様、粗雑な撫でと篦削りで前段階の椀の系譜を直接引くものとは考えられない。

土師器甕　全体の形状を把握できる資料は得られなかった。口縁部は弱く屈曲して外反するが、器肉が厚くなり、シャープさが無くなってくる。

須恵器杯　口径と比較して底径の大きな形状で、前後の段階には認められないものである。酸化焔焼成である。

須恵器高台付椀　口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がる。酸化焔焼成である。

XIX段階　洗橋74号住居に代表される。土師器杯、須恵器高台付椀・壺が認められる。

土師器杯　杯Gと思われる破片が出土している。

須恵器高台付椀　器高が高く深長なものと、浅いものの二種があるがいずれも酸化焔焼成である。高台部は低く、断面三角形を呈する。

須恵器壺　大・中・小の三つがある。小型のものは還元焔焼成、大・中型のものは酸化焔焼成である。中型のものは耳に機能的とは考えがたい取っ手が一箇所に付いている。

XX段階　洗橋24・35・90号住居に代表される。土師器杯・高台付椀・甕、須恵器杯・高台付椀・耳皿、灰釉陶器高台付椀が確認できる。

土師器杯　杯Gがみられるが、口縁部の立ち上がりは直線、あるいは内側に向けて弧を描くようになる。35号住－2はいわゆる「砂底」である。

土師器高台付椀　口縁部の形状は杯のそれに良く類似している。口縁部はハの字状に開くが須恵器高台付椀と比較するとやや高い。

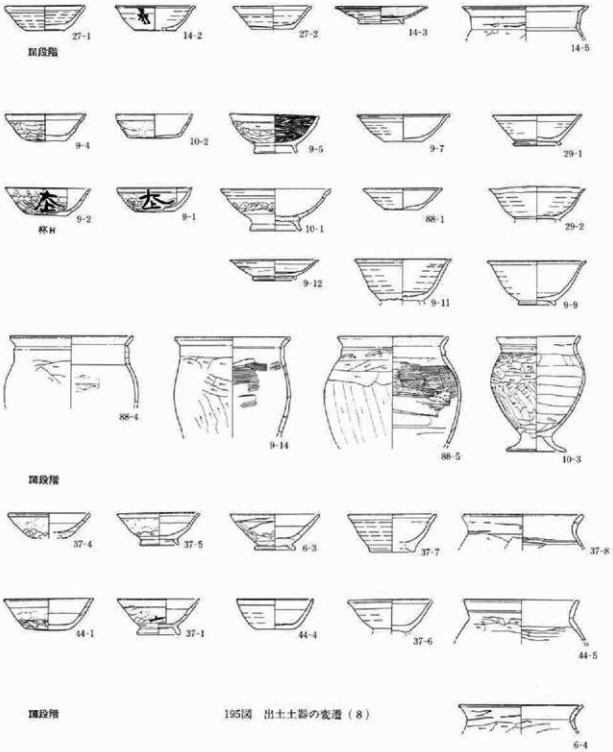
土師器甕　口縁部は短く、外反弱く立ち上がる。

須恵器杯　バラエティー豊かである。口縁部の形状が直線的なもの、先端が強く外反するもの、弧状に立ち上がるものなどがみられる。全体に小径になるか。酸化焔焼成である。

須恵器高台付椀　口縁部が弧状に立ち上がるものと直線的なものの二種類がある。酸化焔焼成である。

灰釉陶器高台付椀　口縁部は弧状を呈し、斜め上方に立ち上がる。

XXⅠ段階　洗橋25号住居に代表される。須恵器杯・高台付杯が確認できる。その他に土師器甕、灰釉陶



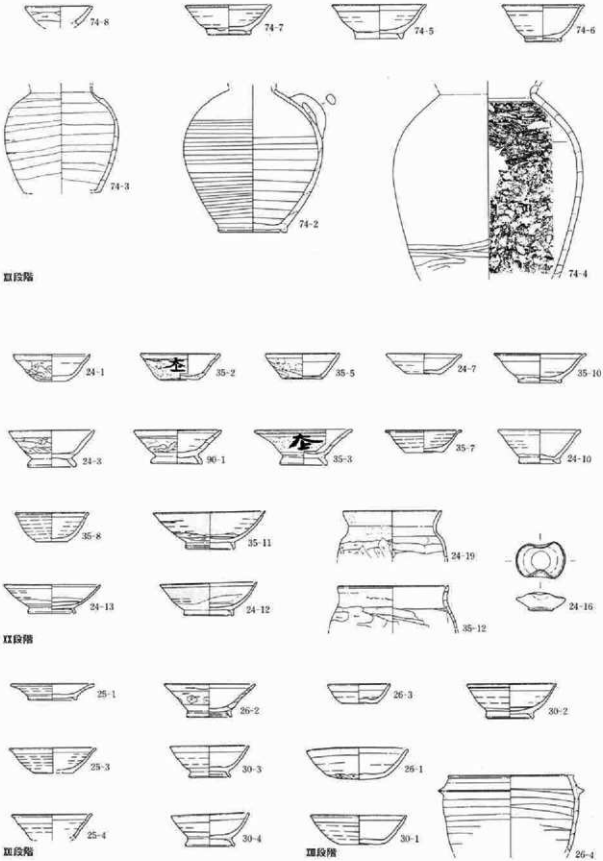
195図　出土土器の変遷（8）

器杯・椀も伴うか。

須恵器高台付杯　器高が低く、外反して立ち上がる。

XXII段階　洗橋26・30号住居がこの段階にあたる。土師器高台付椀、須恵器杯・高台付椀・羽釜、灰釉陶器高台付椀が認められる。

土師器高台付椀　ＸＸ段階と同様の形状を呈する。口縁部は外傾著しく、深みは無い。先端と高台の接合部分周辺のほかは粗雑な篦削りが施されている。



196図　出土土器の変遷（９）

須恵器杯　口径に大小がある。大型のものは、底部を回転糸切離しのものと篦切りのものがある。小径のものは、口径に比較して底径が大きい形状である。

須恵器高台付椀　口径に比較して底径・高台径が大きい。口縁部は深みが弱い。

羽釜　口縁部は内彎して立ち上がる。鍔は形骸化している。胴部は回転を伴う篦撫で調整である。

灰釉陶器高台付椀　口縁部の先端は外側が肥厚し、いわゆる「玉縁口縁」を呈する。底部外面には糸切痕を残す。

ま　と　め

以上のように、古墳時代後半から平安時代にいたると思われる住居出土の土器群を22の段階に分けて、その特徴をみたわけであるが、改めて各器種ごとの消長について簡単にふれてみたい。

まず、土師器甕についてであるがⅠ段階からＸＸ段階まで認められる。Ⅱ段階からⅧ段階までは長胴と丸胴の二者が、その後は長胴のものが継続している。長胴のものは口縁部、胴部の形状、胴部外面の整形に変化の特徴が認められる。Ⅱ段階のものはその形状をほぼ三者に分類できる。Ⅲ・Ⅳ段階と長胴化の傾向にあり、その後は短胴化に転じる。口縁部に最大径をもち、弧状に外反形状をなすものはⅧ段階まで継続している。Ⅷ段階以降のものは口縁部の屈曲が緩やかになり、胴上位に最大径をもっている。器肉は薄くなり、胴部の整形もⅠからⅢ段階あたりまでが縦あるいは斜め縦方向の篦削りであるのに対し、胴上位に横あるいは斜め横方向に、中位・下位を斜め縦方向の篦削りを施すよう変化している。このような整形の変化はⅥ・Ⅶ段階のものにもみられる。

口縁部の形状はＸＶ・ＸⅥ段階でいわゆる「コ」の字状口縁になる。その後、ＸⅧ・ＸＸ段階では、また強く屈曲して立ち上がる形状になるが、ＸＶ段階以前ものと比較すると器肉は厚く、ぼってりしたものとなり、その識別は容易である。

羽釜はＸＸ段階にのみ認められ、土釜と思われるものは各段階を通じて認められない。

土師器杯であるが、Ⅰ段階にみられる口縁部と底部を画する稜を有する杯Ａは、その後全体の中に占める割合を減少させながらＶ・ⅥⅠ段階まで残る。形状は、口径が縮小し、器高も偏平になってくる。胎土はⅠ段階とⅡ段階で異なり、Ⅱ段階以降は、水簸ししたように非常に精選されている。口縁部の立ち上がりの途中に弱い稜をもつ杯Ｂは、Ⅰ・Ⅱ段階で杯Ａと共伴している。これに対し、丸底の底部から内彎して立ち上がる口縁部をもつ杯Ｄは、Ⅳ段階に確認され、Ⅸ段階まで継続している。

杯Ｆは杯Ｄの系譜上にあると思われるが、ⅩⅡ段階にみられる平底化の傾向は須恵器の形状に影響を受けたものである可能性がある。ＸＶ段階の杯Ｇ、ＸⅦ段階以降継続する杯Ｈにも同様なことが考えられる。ところで、杯Ｆは、底部内面が平坦で、角度をもって口縁部に変換するものと、みこみが丸みをもち、弧をなして立ち上がるものの二者がある。同様のことはＸⅧ段階の椀にも認められる。

杯Ｇは、成・整形ともに粗雑なものである。底部外面には、「砂底」、「型肌」[3]などが認められる。

以上のように土師器甕の形状・整形の変化が漸移的なものであったのに対し、土師器杯は、須恵器の形状の影響を受けて、数段階の幅で変遷していることが確認できる。

土師器椀では、ＸⅦ段階に内面黒色処理を施すものが認められる。この後、系譜的にはこれと異なると思われるものが、ＸⅧからＸＸⅡ段階まで続く。杯Ｇ同様、成・整形が粗雑なものである。

須恵器の、還元焔焼成の蓋であるが、Ⅱ段階で天井部に手持ち篦削りを施していたものが、Ⅳ段階では天井部に回転篦削りを施したもの（杯の可能性もある）になる。ⅦⅠ段階のものはリング状の大きなつまみが付くもので、内面に形骸化したかえりがある。Ⅸ段階のものはかえりが消失している。その他に、Ⅴ・ⅥⅠ段階

には、小径の杯が、Ⅵ段階には高台付杯がみられる。ⅩⅢ段階には平城宮分類の「壺G」が出土している。

酸化焔焼成の須恵器では、杯がⅩⅤ段階から、椀がⅩⅦ段階から認められる。ⅩⅩⅠ・ⅩⅩⅡ段階を除くとほぼ併存状態にある。口縁部の形状、口径と底径の比率などにバラエティーがあり、数種の系譜の存在が想起できる。ⅩⅩⅡ段階には小径の杯がある。この段階以降出土頻度が高くなる器種である。

灰釉陶器はⅩⅦ段階以降にみられる。ⅩⅥ・ⅩⅦ段階では光ヶ丘1号窯式に比定できる高台付杯が、ⅩⅩ段階では虎渓山1号窯式に比定できる高台付椀が、ⅩⅩⅡ段階では丸石2号窯式に比定でき、玉縁状の口縁を模した高台付椀がそれぞれみられる。

実年代であるが須恵器・灰釉陶器の年代観、土師器杯・甕に対する先学の研究を参考にするならば、Ⅰ・Ⅱ段階を6世紀の後半段階に、ⅢからⅤ段階を7世紀に、Ⅶから㈪段階を8世紀に、ⅩⅢからⅩⅥ段階を9世紀に、ⅩⅦからⅩⅩⅠ段階を10世紀の範疇で考えたい。ⅩⅩⅡ段階は11世紀前半にあたると思われる。

本文を記述するにあたり、板口一（当事業団主任調査研究員）、三浦京子（当事業団嘱託員）の両氏から、土器の年代観について、多くの御教示を得た。感謝いたします。

註

1　器種について、杯・椀・皿は、明確な基準をもって区分するには困難な点がある。本報告中の呼称は便宜的なものであることを付記しておきたい。

2　本報告中の土師器とはロクロ非使用の土器を、須恵器とはロクロ使用の土器をさす。現実的にはロクロ使用の土器の中には酸化焔焼成のものも存在しており、「土師質土器」「ロクロ土師器」の名称で議論がなされている。この点についてもなんらかの考え方の提示が必要と思われるがここでは紙面の都合もあり、ふれることはできなかった。

3　「型瓦」は当事業団主任調査研究員の木津博明氏による造語である。氏は、古墳時代後半以降の土師器杯などの成形に「型」が使用されたと考え、器面に残存する「ヒビ割れ」状の痕跡を「型」作り時の成形痕ととらえている。筆者自身は、氏の考え方について充分理解したと言いがたいが、今回はこの用語を使用した。

2　荒砥洗橋遺跡の居住域の変遷

荒砥洗橋遺跡では、古墳時代後期から平安時代にいたる竪穴住居が90軒検出された。また、宮川をはさんで東側に位置する荒砥宮西遺跡でも同時期の竪穴住居が24軒検出されている。周辺にはこの二遺跡の他に、荒砥島原・荒砥天之宮・宮川・宮原の各遺跡が点在する。これらの遺跡は農業発達史的視点により各遺跡相互の関連性を追及する調査が実施され、遺跡群の動態については『信濃』[1]誌上や『荒砥島原遺跡』[2]の報文中であきらかにされてきた。また、『荒砥天之宮遺跡』[3]では二之宮千足遺跡をはじめとした上武道路建設に伴う遺跡群の調査成果も付け加えて、再度整理されている。

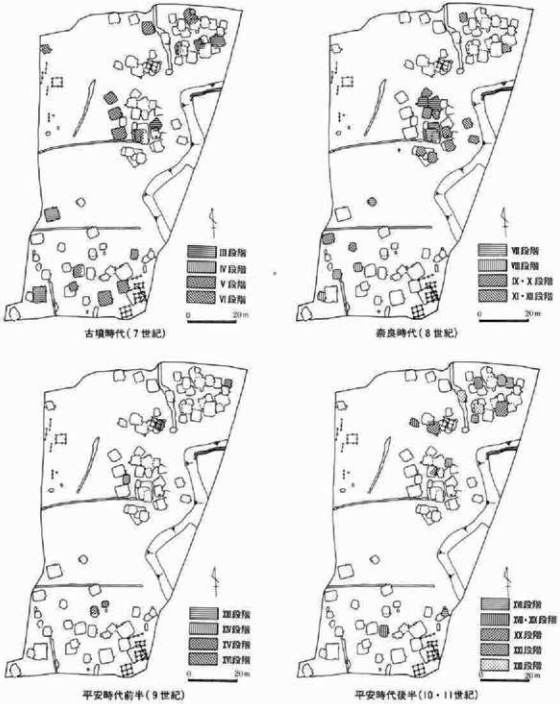
ここでは、Ⅳ－1でおこなった土器の分類作業をもとに、荒砥洗橋遺跡で検出された竪穴住居について、各段階ごとの在り方を整理し、今後、周辺遺跡の、より微細な集落動向の検討がなされる時に備えたい。

ただし、今回の調査が遺跡の範囲全体におよんでいないことや、竪穴住居の時間的位置付けが出土土器の段階に沿って進められたもので、必ずしも均等の時間幅内での変遷を表しているものではない。今回の分析は竪穴住居の変遷のみで、本遺跡が黒井峯遺跡や中筋遺跡と同様に平地式住居などを含む居住形態を取って

197図　居住域の変遷（1）

いたとすれば、遺構検出の時点で資料が限定されたものとなっているなど、いくつもの限界があることも確認しておきたい。

本遺跡の竪穴住居は、遺跡西側の状況が確認できないため断定できないが、東側に広がる沖積地寄りに立地する傾向にあった。そしてその中でも、住居の分布状態の粗密差が顕著に認められ、3箇所ほどに分布が集中する傾向にあった。ここでは、文章の記述の都合上、検出した住居を便宜的にAからDの4群にわけて、時間の推移とともにみていきたいと思う。A群とB群の境界は35号住居と41号住居の間に、B群とC群の境界については60～64号住居の一群と66号住居の間に置く。D群は調査区域北東隅で検出した1号住居である。



198図　居住域の変遷（2）

Ⅳ　成果と問題点

(1)　古墳時代（Ⅰから Ⅵ段階）　Ⅰ段階（Ⅳ－1で分類した出土土器の変遷段階と一致する。以下の各段階も同様）の中でもやや古相の土器をもつ58号住居はB群に、78号住居はC群の中に出現する。それにやや遅れて87号住居が造られる。そして、Ⅲ段階になるとA群にも15・81号住居が造られ、AからCの各群に2・3軒が分布している。この段階の住居は、規模が大型で、竈を北壁に付設した例が多数あり、その内の3例は竈の移設が行われている。その後、ⅣからⅥ段階では、形状は正方形に近く、前段階を踏襲している感があるが、大多数が東壁に竈を付設し、規模もやや縮小している。

(2)　奈良時代（Ⅶから Ⅻ段階）　調査区域中央のB群は、Ⅴ・Ⅵ段階から、築造軒数が増加しはじめ、この時代では、Ⅷ段階を除いては4軒ほどが同時期築造となっている。重複関係にあるものを考慮しても2・3軒が同時存在していた可能性が強い。C群は、各時期1・2軒となり、それらの立地も東側から西側に中心が移動して、分布している。規模は、中型がその中心となり、形状は後半には横長の矩形を呈するようになる。

(3)　平安時代（ⅩⅢからⅩⅩⅡ段階）　ⅩⅢからⅩⅥ段階までを前半とするとこの間に該当する住居は6軒と少なく前後の段階との継続性は希薄である。例えば、A群の13号住居はⅩⅤ段階で後段階には継続するものの、前段階のものはⅪ段階の8号住居である。B群の45号住居も後出の44号住居とは4段階の時間差がある。

後半、ⅩⅦ段階以降になると、A群の中に長期間の継続性を想起させる立地傾向がみられる。ひとつはⅩⅤ段階にあたる13号住居から始まるもので、13号→14号→9号または10号→6号→5号→30号へとの変遷が想定できようか。また、その南側には29号→24号→25号→26号の変遷が認められる。B群の90号住居の周囲、C群の74号住居の周囲もこれに近い傾向にあるといえようか。

掘立柱建物の構築時期については確定するにはいたらないが、竪穴住居との重複関係、4号掘立柱建物の柱穴内からの出土土器、1号掘立柱建物の掘り方の形状・規模、近接する二之宮洗橋遺跡の掘立柱建物の構築年代（8世紀代）を勘案すると8世紀後半から9世紀前半を想定できようか。もしそうであるならば、4棟の掘立柱建物の存在は、竪穴住居の変遷を考える上で留意しなければならない重要点となろう。

以上、各時代、段階の特徴について簡単に記してきたところである。遺跡の推移の大筋は、『信濃』『荒砥天之宮遺跡』での報告内容とほぼ同様の見解となった。ただし、洗橋遺跡の浅間B埋没水田を検出した沖積地ではそれ以前から水田耕作がなされていた可能性がある。

最後に、細かい部分でのいくつかの点を指摘し、まとめとしておきたい。本遺跡では、約8,000㎡の調査区域内から90軒の竪穴住居を検出したわけであるが、これらの住居群の分布には極端な粗密差があった。これは、東側に広がる沖積地の形成の影響で、住居群の占地する微高地に微細な起伏が残存していたため、居住適地が制約を受けていたためと考えられる。しかし、これらの激しい重複関係も出土土器の変遷観に基づいて、各段階ごとの様相を検討していくと、一時期の分布は散漫な状況を呈していたことが明らかになった。また、住居群を便宜的に4グループに分けて検討したわけであるが、各グループごとに各時代を通じて住居の築造が継続しているが、占地の中心が、古墳時代には、南側のC群にあったものが、奈良時代には中央のB群に、さらに平安時代には北側のA群に移動していることがわかった。数量上の面でみると、Ⅲ段階、ⅤからⅦ段階、ⅨからⅪ段階の築造数が多く、平安時代前半のⅩⅡからⅩⅥの各段階はその数が減少している。また、平安時代後半にみられた分布の継続状況からは、その時期、住居を築造するにあたり、各戸の占地が固定化されていた可能性が見いだせなかろうか。いずれにしても以上のような、占地の中心の移動や各段階での築造数の増減については、出土土器の年代観の検討を徹底し、本遺跡の居住域の変遷を同一時間幅の中

でとらえられるように努めるとともに、周辺遺跡の状況を総合化する中で結論づけられるものと考えられる。

3　荒砥洗橋遺跡出土の文字資料の様相

II・IIIで記述してきたように、荒砥洗橋遺跡では16軒の竪穴住居から墨書土器24点が出土した。墨書土器の釈文、器種、部位、出土遺構、時期については4表に整理したとおりである。土器の器種はすべて杯と高台付椀である。墨書の内容は「大上」「大郷長」「蓮吉」「元ヵ水ヵ」「丈部」などがあるが半数の12点が「大上」である。また、荒砥宮西遺跡では「□長」「真」の墨書が出土した。ここでは荒砥洗橋遺跡の墨書文字の中の「大郷長」「丈部」「大上」について考えてみたい。

(1)　「大郷長」の墨書について

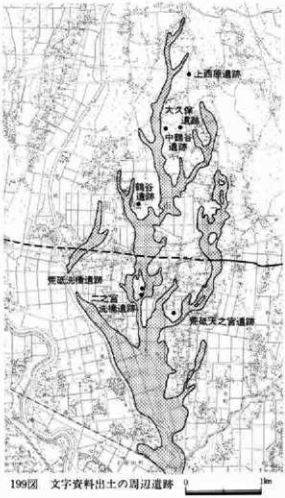
この墨書は土師器の杯の底部外面に記されている。この土器は、竪穴住居の92号住居から出土したもので、住居内に掘削された床下土坑の埋没土中から検出された。IV－1の土器分類のIX・X段階、8世紀の第III四半期の範疇に入ると考えられる。

記載された文字「大郷長」についての解釈であるが「郷長」は律令下に施行された郡郷制における「郷」の長と考えられる。「大」については次の三つの想定ができる。①地名、とりわけ律令制下の郷名で、「大□郷」を省略したもの。②人名を省略したもの。③役職に対する美称である。

郷名を想定した場合、郷名を省略して頭の一文字のみを記載する例としては千葉県佐原市馬場遺跡[1]例に「香取郷（鹿取郷）」を「鹿郷」とするものがみられる。また、本遺跡に南接する二之宮洗橋遺跡[2]出土の墨書例に「芳郷」がある。「芳郷」は『倭名類聚抄』勢多郡の項目にある「芳賀郷」[3]と考えられている。本遺跡の場合も、律令下、勢多郡に属していたと思われるが、『倭名類聚抄』の勢多郡[4]の項には「大」のつく郷名は無い。「大」のつく郷名を他郡からひろうと吾妻郡大田郷、多胡郡大家郷、緑野郡大前郷、山田郡大野郷がある。遺跡の近接地の現、地名としては大屋、大室[5]、大胡[6]などに「大」がついている。

人名を想定するについては吉井町矢田遺跡から出土した石製紡錘車に線刻による「物部郷長[7]」が参考例としてある。

「大郷長」については現時点では郷名、人名のいずれにしてもその確定に具体性を欠くわけであるが、ここでは周辺遺跡出土の文字資料について概観し、検討の一助としておきたい。「大」にかかわるものとして、本遺跡の土器とほぼ同時期の墨書は、中鶴谷遺跡[8]の「大田」、鶴谷遺跡[9]の「大」、二之宮洗橋遺跡[10]の「大井」がある。やや時代の下るものとしては本遺跡の「大上」、上西原遺跡[11]の「大」「○大」「大守」、鶴谷遺跡の「大上」がある。大久保遺跡[12]からは線刻のある紡錘車が出土し、「大田部□岳子」と記されて



199図　文字資料出土の周辺遺跡

いる。上西原遺跡は9世紀の末から10世紀の末まで存続した基壇建物を有する区画が検出され、勢多郡衙跡と推定されている。[13] 下大屋町に位置することから、出土した墨書の「大」も「大屋」にあることから「大家」「大宅」との関連が考えられている。

中鶴谷遺跡では「大田」のほかに「田部」[14]など「田」に関連する墨書が多く出土している。上西原遺跡と近接し、同遺跡との関連性が考えられる。

前述の二之宮洗橋遺跡は本遺跡と同一微高地上にあり、その距離も100mあまりである。自然流路内から「大井」のほかに「芳郷」「郷」「中」などの墨書が出土している。

(2)　「丈部」の墨書について

「丈部」は下野、常陸、武蔵など東国に比較的多く見られる資料である。県内での墨書資料は看取できないが文献資料中では承和7（840）[15]年と承和10（843）[16]年の記事の2例がある。詳細な検討はできないが、荒砥地域で特定の集団の存在を示す資料の確認ができたことは特記に値すると思われる。[17]

(3)　「大上」の墨書について

「大上」を記載した土器は12点を数え、資料数は17点になる。土器は土師器杯及び高台付椀でⅢ－1の土器分類のⅩⅤからⅩⅩ段階、すなわち9世紀の後半から10世紀の中端とやや時間幅が考えられる。墨書土器を出土した竪穴住居はその時期の一般的な形態をなす住居である。9号住居では焔印と共伴している。

解釈については想定が困難である。「オオカ（ガ）ミ」とするのか「大」・「上」とするのか。分離して考えるのであれば「大」については「大郷長」と同様の予測が、「上」については地域を区分する上下の「上」になろうか。

類例をみると、近接する遺跡の例では鶴谷遺跡に同時期の杯[18]に類例がある。その他に赤堀町川上遺跡[19]出土の「至」と釈文されているものと太田市清水田遺跡[20]出土の杯にその可能性がある。

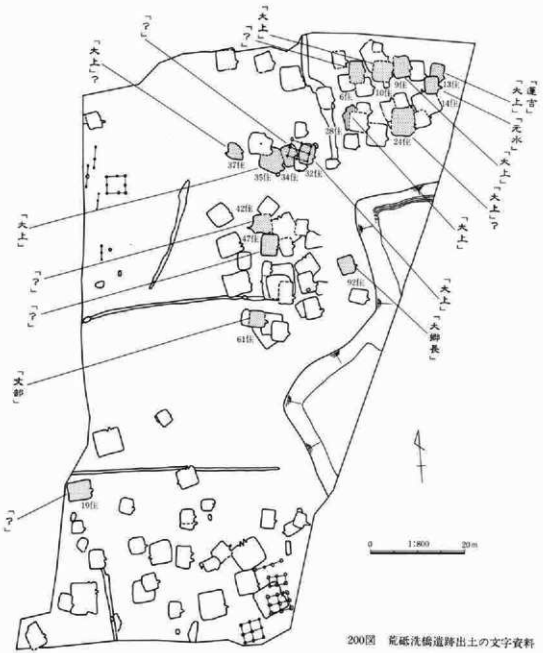
(4)　9号住居出土の焔印について

焔印は竪穴住居の西壁際から出土した。この住居は共伴した土器の年代観からⅣ－1の土器分類のⅩⅦ段階、10世紀の第Ⅰ四半期が考えられる。印面の文字は肉眼からも、X線投射の所見からも「太」と判読できる。形状について記すると、印面は一部欠損していたが、縦58mm（1寸9分）、横52mm（1寸7分）と推定できる。厚さは8から14mm程である。柄は末端が欠損しており残存長は216mmであった。柄は「大」の交差する点と「、」の部分で印面と接合された2本の板あるいは柱状鉄をひとつにし、やや撓れながら延びている。1本の材を柄の末端で折り曲げていると思われる。材質は鉄製で、つくりは鍛造[21]である。

古代の焔印についてはその調査・研究例が少なく、群馬県においても銅製の印は7点[22]出土しているが鉄製は本遺跡例が初出であろう。押印の行為は公私のいずれにしろ所有にかかわる問題を含んでおり、印面の規模、用途、年代等の把握、出土遺跡の性格の解明が古代社会の変遷を知るうえでの一手掛かりを提供してくれると思われる。

用途については牛馬等に押す畜産印あるいは木製品に押す印のふたつが考えられる。畜産印については養老厩牧令[23]に官牧で飼育される子馬・子牛に「官」の字を焔印することが記されている。また、『一遍上人絵伝』[24]四条京極の釈迦堂の部分に後肢に「有」と表現された馬が描かれており、焔印による可能性がある。木製品に押された例としては高崎市日高遺跡[25]出土の曲物の底部に「信」と焔印されたものがある。

印文の「太」の表現については地名及び人名の二つが考えられる。地名としては『和名類聚抄』に邑楽郡「疋太郷」がある。また、音通の点から「大」のつく郷名や勢多郡『田邑郷』[26]などがある。人名では「太（多）氏」が考えられるが県内関係の文献資料には見られない。



200図　荒砥洗橋遺跡出土の文字資料

4表　荒砥洗橋遺跡出土の墨書土器一覧

番号	出土遺物	器種	部位	文字
1	6住－1	杯?	外面－口縁	不明
2	9住－1	杯	外面－口縁	大上
			内面－底部	大上
3	9住－2	杯	外面－口縁	大上
4	10住－1	杯	内面－底部	大上
5	13住－1	杯	外面－口縁	大上
			内面－底部	大上
6	13住－2	杯	外面－底部	運吉
			内面－底部	運吉
7	14住－2	杯	外面－口縁	元ヵ水ヵ
			内面－口縁	元ヵ水ヵ
8	19住－3	杯	外面－底部	不明
9	24住－11	高台付椀	外面－口縁	大ヵ上ヵ
10	28住－5	杯	内面－口縁	大ヵ上
11	32住－2	杯	内面－口縁	大上カ
12	34住－1	杯	外面－口縁	不明
13	35住－1	杯	外面－口縁	大上
			内面－口縁	大上
14	35住－2	杯	外面－口縁	大上
15	35住－3	高台付椀	外面－口縁	大上
			内面－口縁	大上
16	35住－4	杯	外面－口縁	大上
17	37住－1	高台付椀	外面－口縁	上ヵ
18	37住－2	杯	外面－口縁	上ヵ
19	42住－4	杯	内面－底部	不明
20	47住－1	杯	外面－底部	不明
21	47住－2	杯	外面－底部	不明
22	61住－3	杯	外面－底部	丈部
23	92住－2	杯	外面－底部	大卿長

Ⅳ　成果と問題点

印面は銅製のものと比較して大きいものである。古代の記録に、延暦15（796）年の太政官符[27]がある。ここには、牛馬に押す私印の大きさを縦２寸、横1.5寸以下とすることが定められている。本遺跡の印は横の大きさがこの規格を上回っている。共伴の土器からその製作年代は10世紀代が考えられ、太政官符との間に100年以上の隔たりがあるが、律令制社会の変遷を考える上での重要な資料となろう。

以上、荒砥洗橋遺跡から出土した墨書文字及び烙印についての若干のまとめをおこなった。本遺跡は古代、律令制下には勢多郡域にあり、古墳時代には上毛野氏の本貫地の一部と考えられてきた地域内にある。さらに、墨書文字資料からは本遺跡が「大□郷」か「芳郷（芳賀郷）」に属していた可能性が極めて高いと考えられる。また、これも推定の域をでないが、199図の遺跡分布からは宮川流域の遺跡から「大」に関係する文字資料が多く出土していることも「大□郷」との関係でとらえられないであろうか。

烙印の資料からは、この地域に牛馬あるいは木製品などに押す印章を私印として所有する階層があったことがわかった。その使用目途を確定することはできないが、近接地を通過していたと思われる東山道駅路を背景にした牛馬の成育、集散にかかわる施設などの存在も推定できようか。

「大上」と「大□郷長」、および烙印の「太」の相互の関連性については今後の検討課題として資料の蓄積を待ちたい。

なお、これらのまとめをおこなうにあたっては、平川南氏（国立歴史民族博物館）、前沢和之氏（群馬県教育委員会）、大江正行氏（当事業団専門員）から多くの御教示をいただきました。記して感謝いたします。

註

1　文献40　馬場遺跡004号住居出土の杯に「廬郷長廬成里人□」と記されている。このことは国立歴史民俗博物館平川南助教授の御教示によるもので他にも同様の例が認められるとのことである。また、郷長の墨書例では静岡県坂尻遺跡「玉郷長」、茨城県大塚新地遺跡「郷長」、福井県丹生遺跡「丹生郷長」がある。
2　文献33に写真が掲載されている。
3　文献53
4　文献53によると勢多郡には深田・邑田（田邑）・芳賀・桂萱・黄壁・深渠・深澤・藤澤の９郷の存在が記されている。
5　文献資料では、文永３（1266）年の鎌倉幕府下知状に「大室庄東神沢」がみえる。
6　文献資料では、『吾妻鏡』文治５（1189）年7月17日の条にみられる。
7　内木真琴・中沢　悟・亀形芳夫「吉井町矢田遺跡出土の文字資料について」『群馬文化』209あるいは文献34「物部郷長」は物部郷（地名）を表現するものとの考えかたもある。
8　文献32　中鶴谷遺跡からは時代幅が有るものの56点の墨書土器が検出されている。うち、「田部」と記されたものが13点ある。その他「田」のつくものが８点を数える。
9　文献24
10　未整理資料で、調査担当者の御教示による。
11　文献18
12　文献35に写真掲載　文献34に図示されているが釈文は平川南氏の説に従った。
13　文献29をはじめいくつかの文章で同様な考えかたが提示されている。
14　関口功一氏は文献39のなかで墨書土器の年代を企源におきながらも「田部」「大田」の墨書と「ミヤケ」との関連を指摘している。
15　文献８に掲載されている。続日本後紀に承和七年三月庚辰、陸奥国・磐城大領外正八位上鮎八等丈部人磐戸一領、陽桓上毛野陸奥公、
16　文献８に掲載されている。続日本後紀に承和十年三月丁酉、上野国新田郡人鮎七等犬養小羊・弟眞虎等二人賜姓丈部臣、
17　前沢氏の御教授によると丈部は「はせつかう」が「丈部」になったと考えられる。また、安倍氏への改姓が認められ、大和王権が全国的に設定した職業部民とは異なり、安倍氏に隷属するものであったと考えられるとのことである。上野国の安倍氏の動向については前沢氏による文献44に詳しい。
18　文献24
19　文献26
20　文献38
21　構造については群馬県工業試験場、国立歴史民族博物館におけるＸ線透過試験の結果による。
22　文献45で前沢氏により詳しく論じられている。
23　駒懐校印条に凡在牧駒懐、至二歳者、毎年九月、国司共牧長対、以官字印、印在左髀上、檀印右髀上、……
24　文献52
25　文献51にその報告がある。烙印の輪郭は5.0×4.9㎝（１寸６分・７分）の大きさである。大江正行氏は印の性格について文献資料をまじえ論じている。
26　文献53では高山寺本による。古活字本では邑田となっている。

27　文献8に記載されている。類聚三代格の延暦15年の太政官符に

定百姓私馬牛印事長二寸、廣一寸五分以下、

右、得上野國解…、部内百姓等私馬牛印、過官印大、造之徒盜取官馬、焼・其印油亡明験、若不加厳制、……剛断者、右大臣宣、奉勅、所申隨理、宜下符七道諸国、令依法作、

延暦十五年二月廿五日

5表　烙印一覧

番号	遺跡名	県名	遺構	印面	印面の規模 厳×横mm	厳×横㎠	材質	年代	備考
1	向原	神奈川	竪穴住居	兀	37×32	1.1×1.0	鉄製	9C後半	柄を含めた全長は187mm。
2	中原上宿	神奈川	不明	井	33×22	1.0×0.7	鉄製	不明	柄を含めた全長は230mm。井の字の墨書が出土。
3	北坂	埼玉	竪穴住居	中	51×34	1.5×1.0	鉄製	9C後半	柄の末端は欠損している。残存長は97mm。印面は整にる打ち抜き。鍛造。中の字の墨書。
4	諸川	東京	土坑	土	57×81	1.7×2.5	鉄製か	不明	土の字の墨書。
5	上村田小中	茨城	竪穴住居	丈	77×82	2.3×2.5	鉄製	9C以降	全長330mm、柄は袋状を呈する。六万、万合など墨書多数出土。丈部との関連。
6	荒砥洗橋	群馬	竪穴住居	太	58×52	1.9×1.7	鉄製	10C前半	柄の末端は欠損している。残存長216mm。大上の墨書。

引用及び参考文献

1　能登　健・石坂　茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓地域における遺跡群研究――農耕集落の変遷と須井瀧窟の出現」『信濃』第35巻4号　1983

2　能登　健・小島敦子「弥生～平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会　1984

3　小島敦子・岩崎泰一ほか「下触牛伏遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

4　『上毛古墳綜覧』群馬県　1938

5　山崎　一『群馬県古城塁址の研究』上　1971

6　群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3　1981

7　群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編2　1986

8　群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編4　1985

9　『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』群馬県教育委員会　1972

10　井川達雄『三ッ寺Ⅱ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985

11　坂口　一「古墳時代後期の土器の編年――三ッ寺遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係――」『群馬文化』208号　1986

12　坂口　一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年――住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討――」『群馬県史研究』第24号　1986

13　橋本博文・加部二生ほか『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会　1984

14　田辺昭三『須恵器大成』　1981

15　田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211　1982

16　斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の発展」『考古学ジャーナル』211　1982

17　前川　要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相―瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』瀬戸市歴史民俗資料館　1984

18　松田　猛ほか『上西原・向原・谷津』群馬県教育委員会　1986

19　飯田陽一ほか『荒砥上川久保遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982

20　前原照子ほか『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教育委員会　1982

21　松田　猛ほか『昭和58年度　荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教育委員会　1984

22　江部和彦ほか『西大室遺跡群』前橋市教育委員会　1983

23　松田　猛ほか『堤東遺跡』群馬県教育委員会　1985
24　木部日出雄ほか『鶴谷遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会　1982
25　千田幸生ほか『梅木遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986
26　松村一昭　『川上遺跡・女堀遺構発掘調査概報』赤堀村教育委員会　1980
27　石坂　茂・小島敦子ほか『荒砥島原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
28　石坂　茂ほか『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
29　松田　猛「群馬県における文字瓦と墨書土器―前橋市上西原遺跡の文字資料―」『信濃』38巻11号　1986
30　徳江秀夫・小島敦子ほか『荒砥天之宮遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
31　前原圓子ほか『柳久保遺跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1985
32　千田幸生ほか『柳久保遺跡Ⅵ』前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988
33　『昭和62年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要』
　　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
34　井上唯雄「線刻をもつ鈴鏡事―――群馬県における事例を中心として―――」『古代学研究』115　古代学研究会　1987
35　平田貴正ほか『昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教育委員会　1985
36　飯田陽一ほか『荒砥東原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1979
37　松村一昭『下触向井遺跡発掘調査概報』赤堀村教育委員会　1980
38　石塚久則『太田東部遺跡群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
39　関口功一「群馬県における地方史研究の動向（２）―――古代―――」『群馬文化』216　群馬県地域文化研究協議会　1988
40　栗田則久ほか『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告表Ⅳ―佐原地区（１）』千葉県文化財センター　1988
41　福井新聞1988.５.19づけ報道『月刊文化財発掘出土情報』88.７号　1988
42　同　上
43　茨城県立歴史館『茨城県関係古代金石文資料集成―墨書・荒書―』1985
44　前沢和之「貞観13年安倍朝臣小水麿経をめぐって」『慈光寺』1986
45　関　晴彦・前沢和之ほか『藪田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
46　市川正史ほか『向原遺跡』神奈川県教育委員会　1982
47　鈴木保彦ほか『昭和60年度日野市落川遺跡調査略報』日野市落川遺跡調査会　1987
48　明石　新ほか『中原上宿』中原上宿遺跡調査団　1981
49　増田逸郎ほか『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅻ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1981
50　瓦吹　堅・横倉要次「茨城県北部の発掘遺跡」『常総の歴史』３　1989
51　大江正行ほか『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
52　小松茂美『一遍上人絵伝―日本の絵巻20―』中央公論社　1988
53　池邊　彌『和名類聚抄郷名考證』1966

写　真　図　版

1.遺跡の遠景

2.遺跡の
調査状況▶

3.土層の状況▼

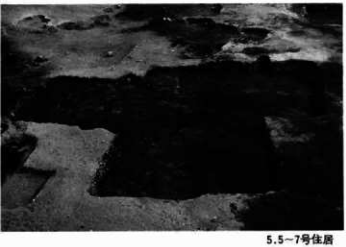
4.調査風景▲

1.1号住居

2.2号住居

3.3号住居

4.4号住居



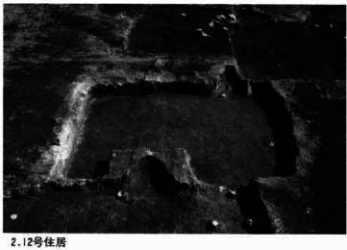
5.5～7号住居

6.8号住居

7.9号住居

8.10号住居

1.11号住居



2.12号住居

3.13号住居

4.14号住居

5.15号住居

6.16号住居

7.17・18号住居

8.18号住居竈

1.19号住居

2.20号住居

3.21号住居

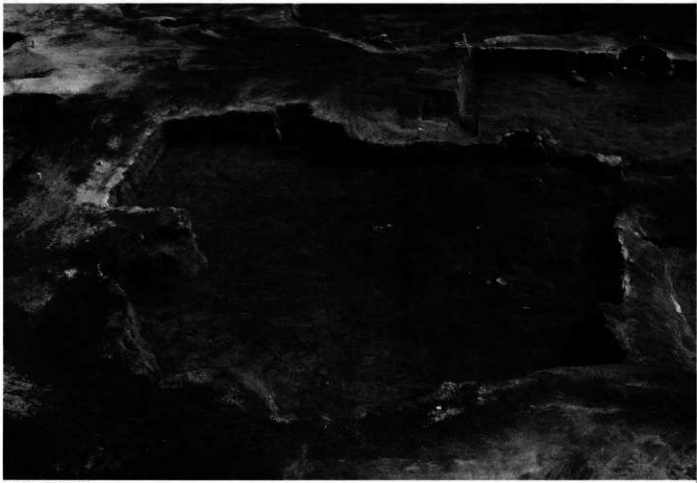
4.21号住居遺物出土状況(5・7－11)

5.22号住居

6.24号住居

7.23・81号住居

8.25号住居



1.25～28号住居

2.26号住居竈

3.27号住居竈

4.29号住居

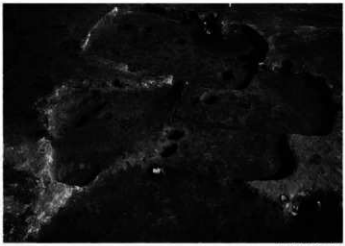
5.30号住居

1.31～37号住居

2.31号住居

3.32号住居

4.33号住居



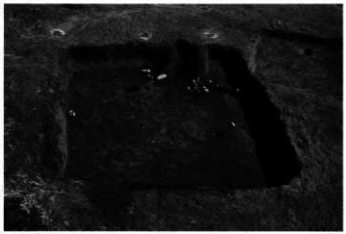
5.34号住居

1.35号住居

2.36号住居

3.38号住居

4.38号住居竈



5.39号住居

6.39号住居竈

7.39号住居遺物出土状況(2・16)

8.39号住居遺物出土状況(1・3・15)

1.40号住居

2.40号住居竈

3.41号住居

4.41号住居竈

5.41号住居遺物出土状況(1・3・4・10)

6.42号住居

7.43号住居

8.43号住居竈

1.43－47・90号住居

2.44号住居

3.44号住居竈

4.46号住居

5.46号住居竈

1.48号住居

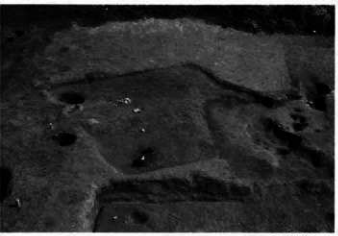
2.49号住居

3.50号住居

4.51号住居

5.52号住居

6.53号住居



7.55号住居

8.56・57号住居

1.58・59号住居

2.58号住居遺物出土状況(1)

3.63・64号住居

4.64号住居竈

5.60・61号住居

6.62号住居

7.65号住居

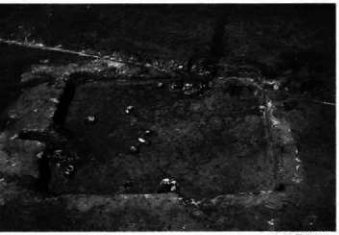
8.65号住居竈

1.66号住居

2.66号住居竈

3.67号住居

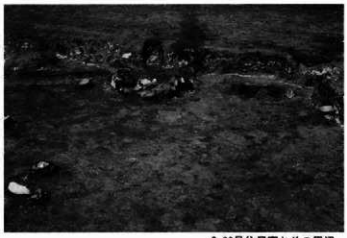
4.67号住居遺物出土状況(1・3)



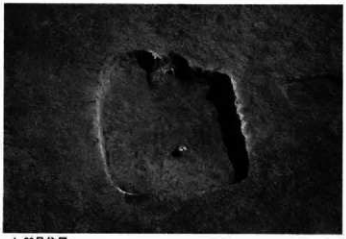
5.68号住居

6.68号住居竈遺物出土状況(14・16～18)

7.68号住居竈とその周辺



8.68号住居竈とその周辺



1.69号住居

2.70・71号住居

3.70号住居竈

4.71号住居竈

5.72号住居

6.72号住居遺物出土状況(1～4)

7.73号住居

8.73号住居竈

1.74号住居

2.74号住居跡

3.74号住居炭化材出土状況

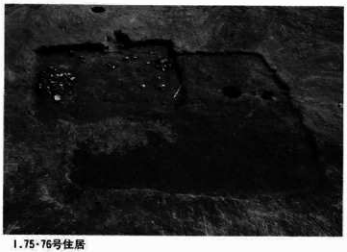
4.74号住居遺物出土状況(2)

5.74号住居遺物出土状況(12)

6.74号住居遺物出土状況(1)

7.74号住居遺物出土状況(8·11)

8.74号住居遺物出土状況(13)



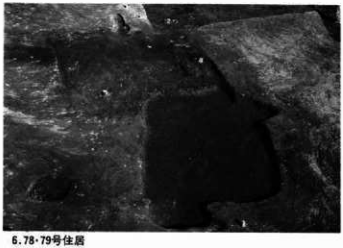
1.75・76号住居

2.75号住居竈

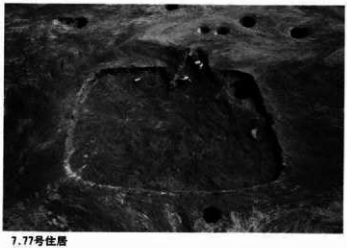
3.75号住居遺物出土状況(8・9・12・13・15)

4.75号住居遺物出土状況(11)

5.75号住居埋没土状況

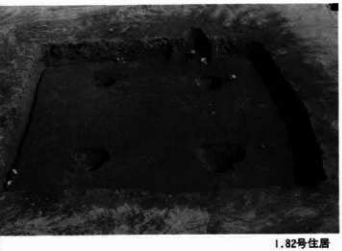


6.78・79号住居



7.77号住居

8.77号住居竈



1.82号住居

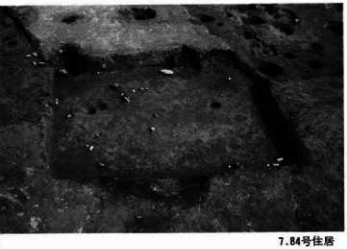
2.82号住居竈

3.83号住居

4.83号住居竈

5.83号住居遺物出土状況(3・7)

6.83号住居遺物出土状況(2・5・6)



7.84号住居

8.84号住居遺物出土状況(3・13)

1.86号住居

2.86号住居遺物出土状況(2)

3.85号住居

6.87・88号住居

4.85号住居竈

7.87号住居遺物出土状況(1・3)

5.85号住居遺物出土状況(13)

8.88号住居竈

1.91号住居

2.91号住居遺物出土状況(10)

3.92号住居

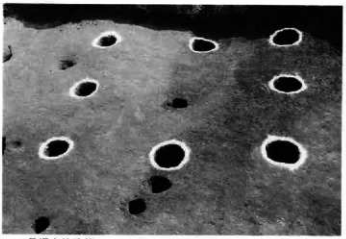
6.93号住居

4.92号住居炭化材出土状況

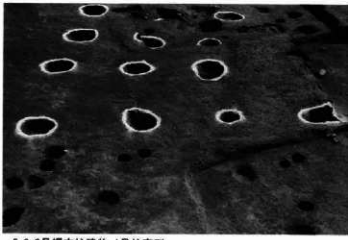
7.93号住居遺物出土状況(3·5)

5.92号住居床下土壙遺物出土状況(2)

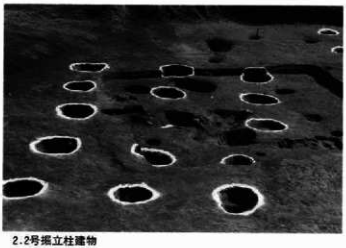
8.93号住居遺物出土状況(1)



1.1号掘立柱建物



5.2・3号掘立柱建物、1号柱穴列

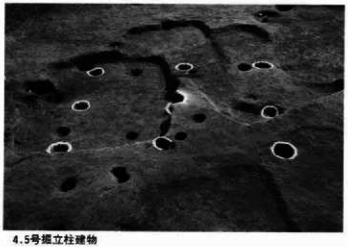


2.2号掘立柱建物

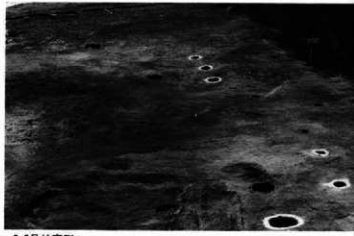
6.2号柱穴列

3.4号掘立柱建物、4号柱穴列

7.3・4号柱穴列



4.5号掘立柱建物



8.5号柱穴列

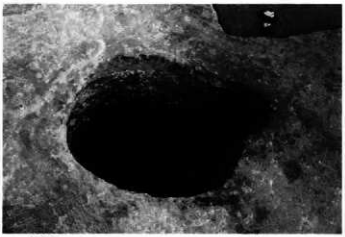
1.水田

2.水田

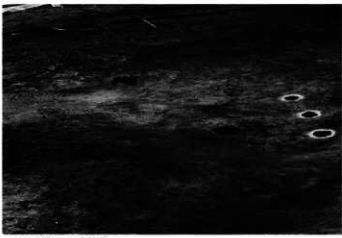
3.水田

4.遺構外の出土遺物

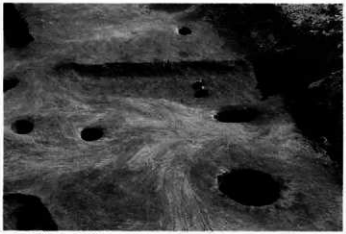
5.遺構外の出土遺物(1·3~5)



1.1号井戸



2.3号井戸、2号土坑



3.2号井戸、8号土坑

4.8号土坑遺物出土状況(1・2)

5.1号土坑

6.4号土坑

7.13号土坑

8.16号土坑

1.3号溝とその周辺

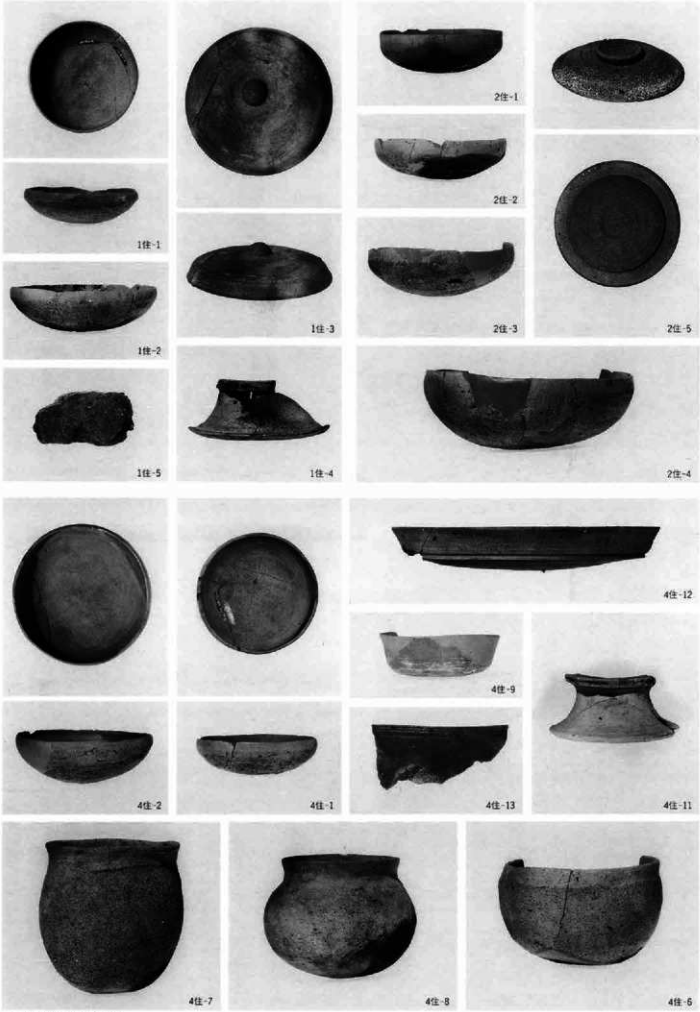
2.1号溝

3.2号溝

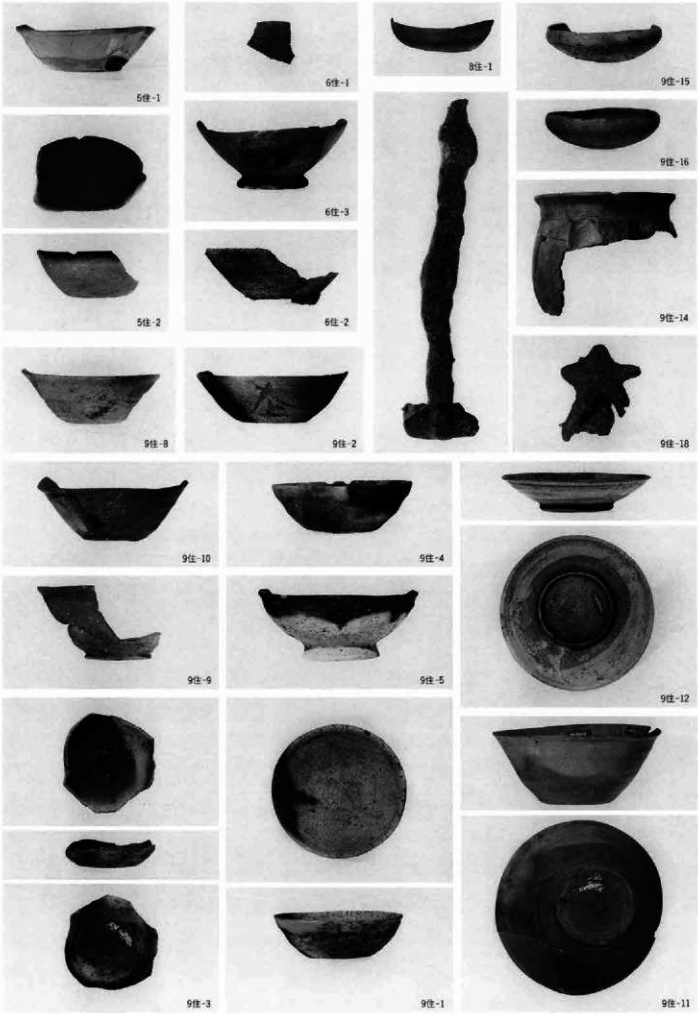
4.5号溝

5.3号溝

6.4号溝


1住-1
1住-2
1住-5
1住-3
1住-4
2住-1
2住-2
2住-3
2住-5
2住-4
4住-12
4住-9
4住-2
4住-1
4住-13
4住-11
4住-7
4住-8
4住-6

1・2・4号住居出土遺物



5・6・8・9号住居出土遺物

10住-1

10住-2

10住-3

13住-1

13住-3

13住-2

13住-4

13住-5

11住-2

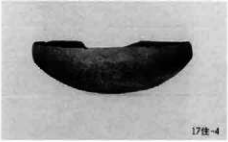
16住-1

14住-2

17住-2

16住-2

14住-3


17住-4

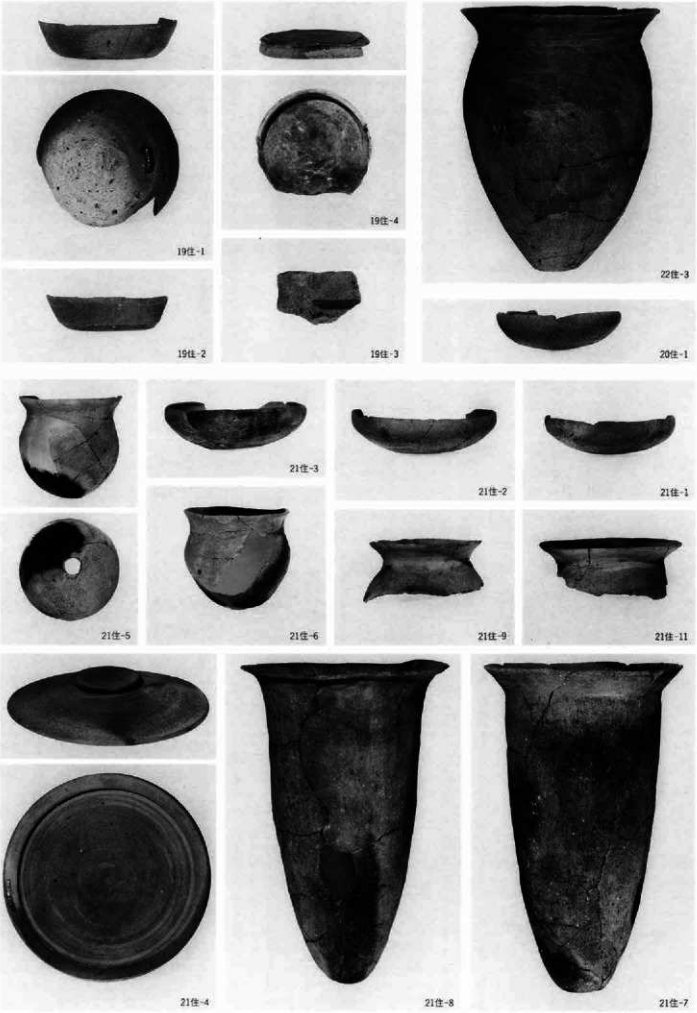
17住-3

18住-1

18住-3

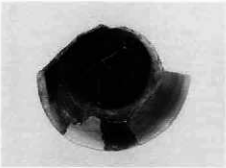
18住-5

10・11・13・14・16～18号住居出土遺物



19～22号住居出土遺物

24住-1



24住-10

24住-16

24住-2

24住-7

24住-12

24住-13

24住-3

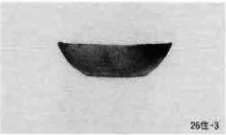
24住-15

24住-21

25住-6

27住-1

27住-2



26住-3

26住-4

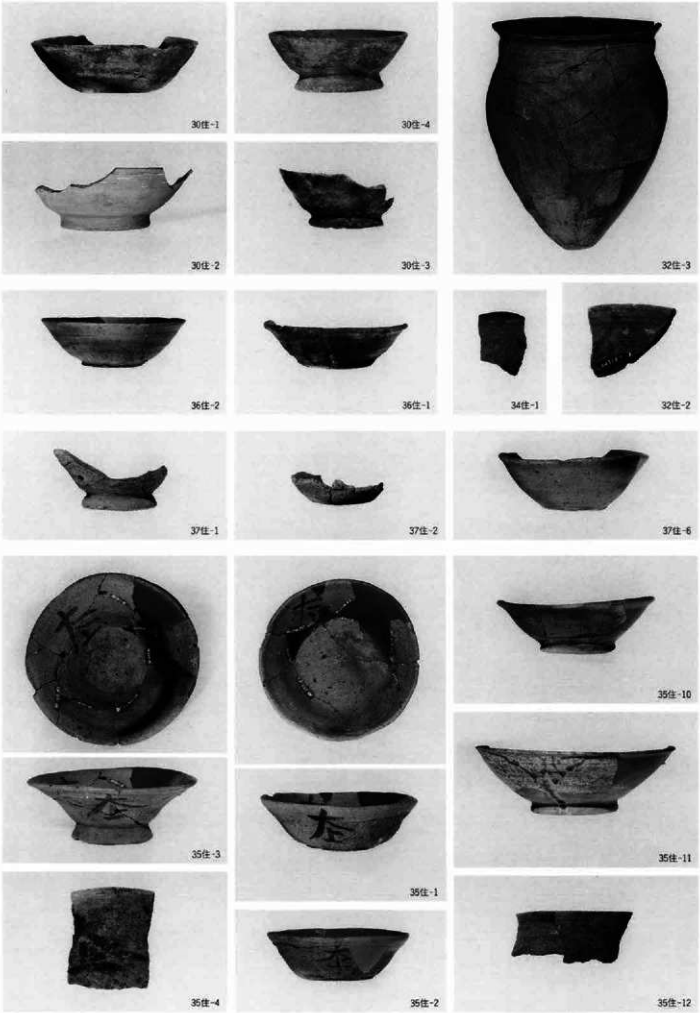
26住-1

28住-1

29住-1

29住-2

24－29号住居出土遺物



30・32・34～37号住居出土遺物

38住-1

38住-2

38住-8

38住-6

38住-7

38住-5

40住-2

39住-4

39住-6

39住-16

39住-1

39住-3

39住-2

39住-7

39住-15

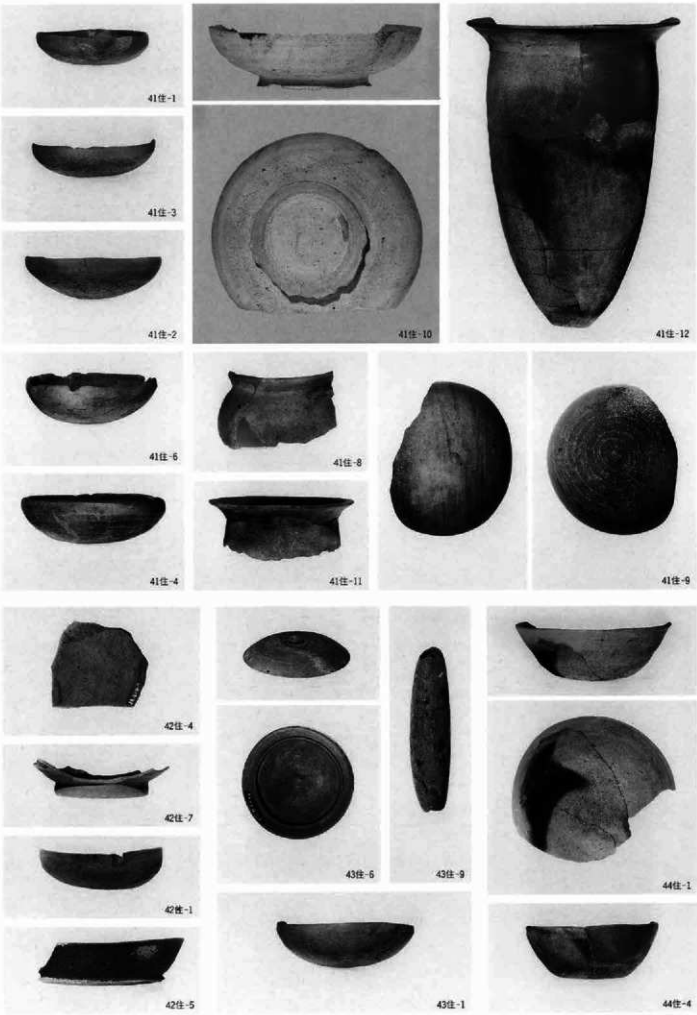
39住-5

39住-14

39住-10

39住-8

38－40号住居出土遺物



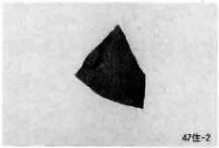
41－44号住居出土遺物

46住-1

46住-2

46住-3

46住-4


47住-2

47住-1

47住-5

51住-1

51住-2

51住-5

48住-1

50住-1

50住-4

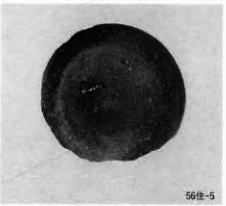
55住-3

52住-4

56住-2

56住-1

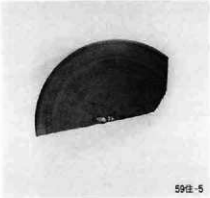
56住-4


56住-5

56住-6

46～48・50～52・55・56号住居出土遺物

58住-1


59住-5

65住-1

65住-15

65住-11

65住-6

65住-14

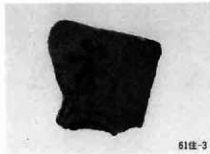
65住-16

64住-4

64住-5

61住-1

61住-4


61住-3

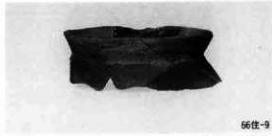
66住-3

66住-6

66住-2

66住-1

66住-10


66住-9

58・59・61・64－66号住居出土遺物

68住-17

68住-10

67住-2

68住-4

67住-3

68住-6

67住-1

68住-8

67住-5

68住-3

70住-1

68住-5

70住-3

68住-14

68住-2

69住-1

68住-1

69住-5

68住-16

68住-15

68住-13

69住-6

67～70号住居出土遺物

72住-1

72住-2

72住-3

72住-4

72住-5

72住-6

73住-4

73住-2

73住-3

73住-13

73住-1

73住-12

73住-11

73住-16

75住-1

75住-4

75住-10

75住-8

75住-13

75住-6

75住-11

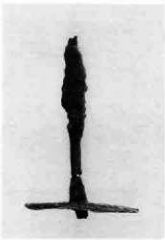
75住-15

72・73・75号住居出土遺物

77住-1

74住-5

74住-13



77住-2

74住-6

74住-7

74住-12

74住-11

74住-3

74住-2

74住-4

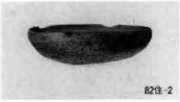
74住-1

74・77号住居出土遺物

82住-1

82住-4

81住-5

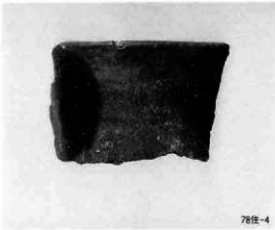

82住-2

82住-12

78住-1

82住-3

82住-10


78住-4

82住-9

82住-14

83住-3

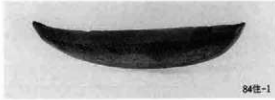
83住-13

84住-3

83住-2

84住-4

83住-6


84住-1

83住-8

83住-14

84住-6

84住-11

83住-5

83住-18

84住-13

78・81－84号住居出土遺物

85住-1

85住-2

87住-3

85住-5

85住-7

87住-1

85住-10

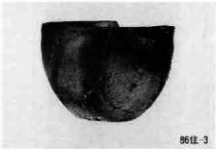
85住-8

85住-11

90住-1

85住-12

85住-13


86住-3

88住-1

88住-2

88住-5

91住-9

91住-10

91住-11

91住-3

91住-1

91住-5

91住-2

85～88・90・91号住居出土遺物

92住-2

92住-6

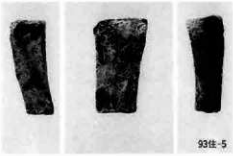
92住-1

93住-4

93住-1

93住-2

93住-3

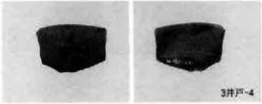

93住-5

3井戸-3

3井戸-1

3井戸-5

2井戸-2


3井戸-4

3井戸-6

8坑-1

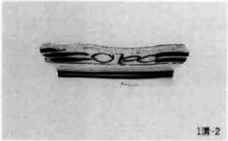
8坑-2

14坑-2

14坑-3

92・93号住居、2・3号井戸、8・14号土坑出土遺物

1溝-1


1溝-2

1溝-5

1溝-3

遺構外-3

遺構外-5

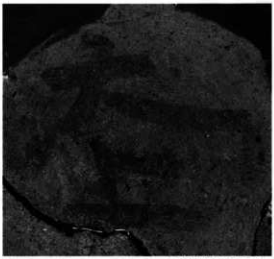
遺構外-2

遺構外-1

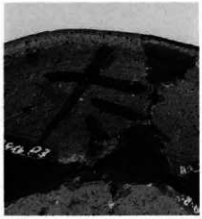
1号溝、遺構外の出土遺物

1.9号住居2(外面)

2.35号住居2(外面)


3.10号住居1(内面)

4.13号住居1(外面)


5.35号住居2(内面)

6.35号住居3(外面)

7.35号住居3(内面)

8.35号住居1(外面)

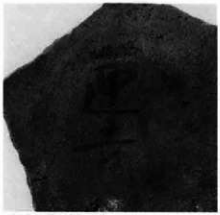
9.9号住居1(外面)

10.13号住居1(内面)

11.35号住居4(外面)

12.9号住居1(内面)

1.92号住居2(外面)


2.13号住居2(外面)

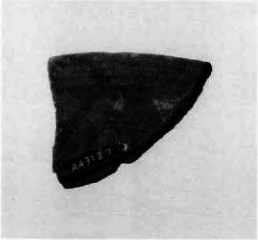
3.13号住居2(内面)

4.14号住居2(外面)

5.14号住居2(内面)

6.24号住居11(外面)

7.37号住居1(外面)


8.32号住居2(内面)

9.6号住居1(外面)

10.61号住居3(外面)

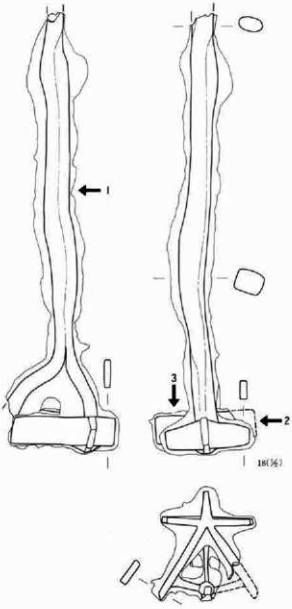
11.42号住居4(内面)

12.34号住居1(外面)

13.47号住居1(外面)

14.47号住居2(外面)

15.19号住居3(外面)



◀1．柄

▶2．印面～柄

▼3．印面(裏側から)

1.1号住居

2.2～4号住居

3.2号住居竈

4.3号住居竈

5.5号住居

6.5号住居竈

7.6号住居、3号溝

8.7号住居、3号溝

1.調査の状況

2.8号住居

3.8号住居竈

5.9号住居

4.8号住居自然円礫出土状況

6.9号住居竈

7.9号住居竈

1.10·23号住居

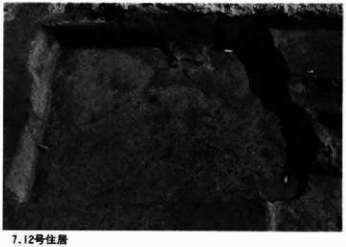
2.10号住居竈

3.11·24号住居

4.11号住居竈

5.13号住居

6.13号住居遺物出土状況(6)



7.12号住居

8.14号住居

1.15・16号住居

2.15号住居竈

3.16号住居竈

4.17号住居

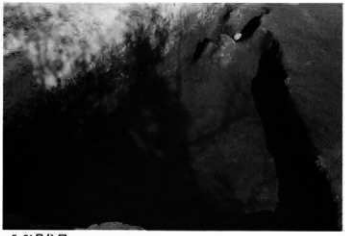
5.17号住居竈

1.19号住居

2.19号住居

3.20号住居竈

4.19～21号住居とその周辺



5.21号住居

6.21号住居竈

7.4号溝

8.6号溝

1住-1

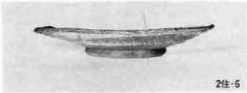
2住-4

3住-5

2住-5

2住-8

3住-8

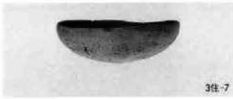

2住-6

3住-3

3住-4

3住-2

3住-1

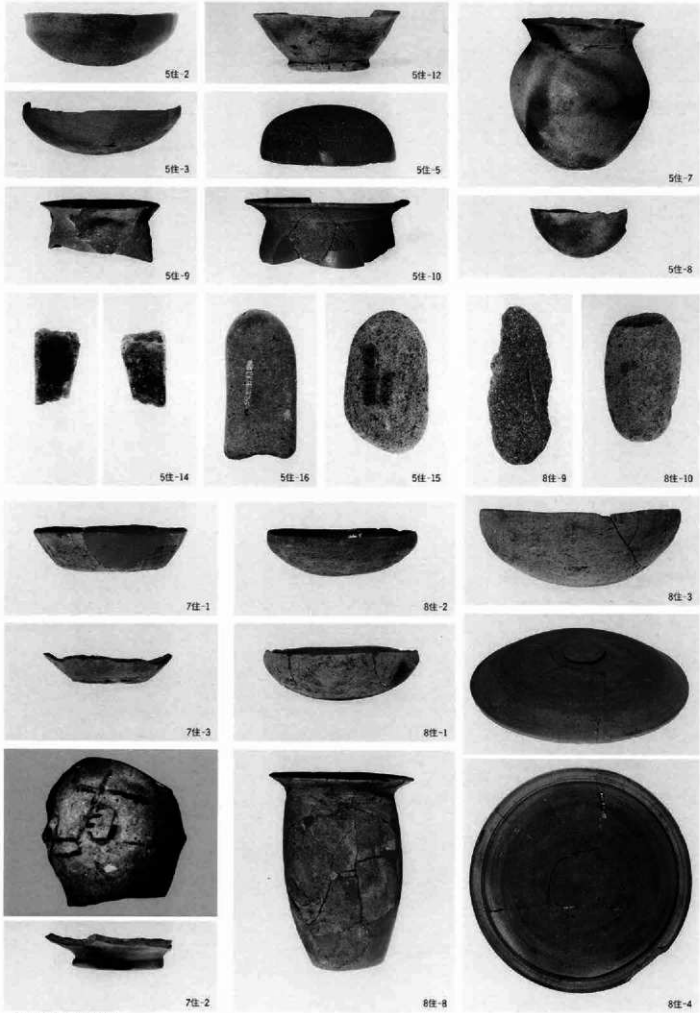

3住-7

3住-18

3住-17

3住-6

1～3号住居出土遺物


5住-2
5住-12
5住-7
5住-3
5住-5
5住-9
5住-10
5住-8
5住-14
5住-16
5住-15
8住-9
8住-10
7住-1
8住-2
8住-3
7住-3
8住-1
7住-2
8住-8
8住-4

5･7･8号住居出土遺物

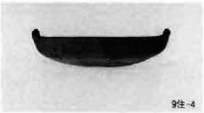
9住-7

9住-2

9住-1

9住-10

9住-11


9住-4

9住-14

9住-9

9住-12

9住-13

9住-16

10住-1

10住-4

9・10号住居出土遺物

11住-1

12住-4

16住-1

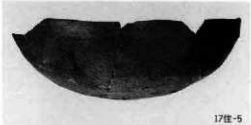
16住-3

13住-1

13住-6

17住-4

17住-3


17住-5

15住-3

15住-2

15住-10

15住-8

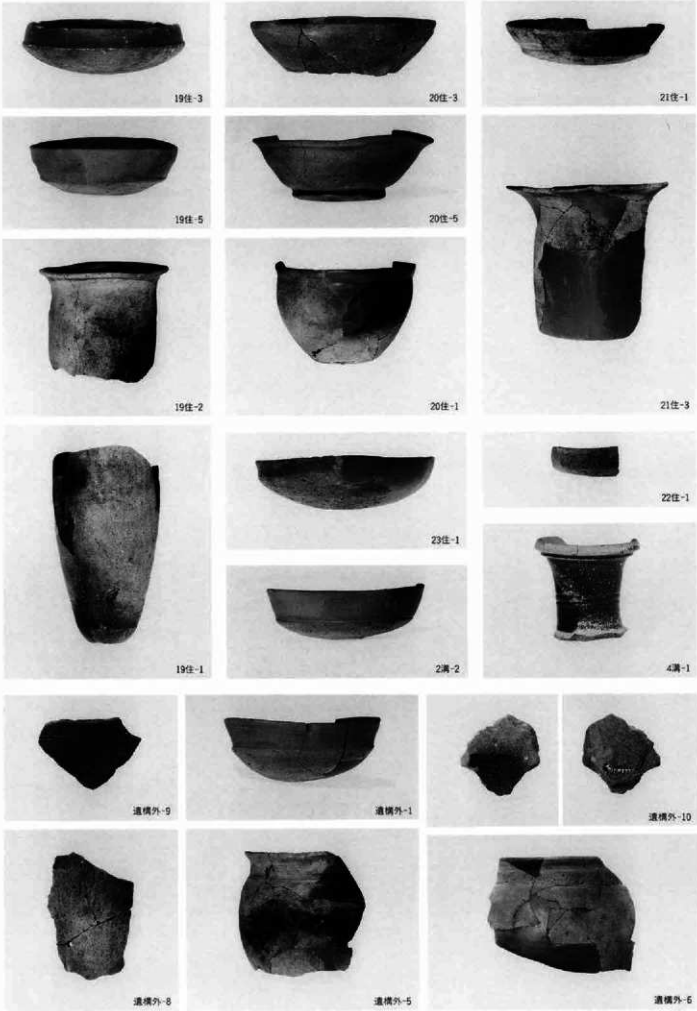
15住-4

15住-5

15住-6

15住-7

11～13・15～17号住居出土遺物



19～23号住居、2・4号溝、遺構外の出土遺物

荒砥洗橋遺跡
荒砥宮西遺跡
昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月26日　印刷
平成元年3月31日　発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371　前橋市大手町1丁目1番1号
電話（0272）23－1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

©1989